

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第82集

山梨県中巨摩郡碓形町

長田口遺跡

OSADAGUCHI SITE

富士川西部広域農道建設に伴う発掘調査報告



1993. 3

山梨県教育委員会
山梨県農務部

山梨県中巨摩郡櫛形町

長田口遺跡

OSADAGUCHI SITE

富士川西部広域農道建設に伴う発掘調査報告



1993. 3

山梨県教育委員会
山梨県農務部

序

本報告書は、富士川西部広域農道建設に先立ち、1988年度から1991年度まで4次にわたり発掘調査された山梨県中巨摩郡御形町平岡字長田口に所在する長田口遺跡について、その結果をまとめたものであります。

本遺跡の位置する甲府盆地西縁の御形山東麓に形成された市之瀬台地には、旧石器時代以来の遺跡が数多く分布しております。なかでも、本遺跡から南東へ500mの台地先端部に位置する六科丘遺跡は弥生時代末期～古墳時代初頭の集落を主体としており、本遺跡との関わりの深さが感じられます。本遺跡もまた台地北縁部に近い深沢川と漆川に挟まれた標高440mの緩斜面に位置し、眺望は非常に良好であり、台地先端部の六科丘を隔てて、甲府盆地が遠望できる遺跡の立地としては絶好な地域であります。

調査面積はおよそ5,000㎡であり、調査の結果は遺構として縄文時代中期の住居址4軒、弥生時代終末から古墳時代初頭の住居址25軒、縄文時代の埋設土器2基および竪穴状遺構2基、中世の地下式墳13基、縄文時代から中世にかけての土坑94基および集石遺構4基、さらに時期不明の溝状遺構42条、掘立柱建物址2軒、柱穴列2条などが検出されました。また、これらの遺構およびその周辺からは各時期の遺物が多量に出土いたしました。旧石器時代では遺構等は確認されませんがナイフ形石器などが確認され、周辺の六科丘遺跡からも検出されていることより、当時期の市之瀬台地における遺跡の広がりがうかがわれます。縄文時代では中期前葉から晩期の貴重な資料が検出されております。また弥生時代終末から古墳時代初頭では大量の土器とともに県内でははじめての舶載銅鏡片が検出されており注目されます。

以上のとおり、長田口遺跡は縄文時代中期前半および弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての大規模な集落になるものと考えられます。とくに弥生時代終末から古墳時代初頭では長径12mを越える大型住居址8軒が確認されており、遺跡内における占有率は非常に高く、鏡片の出土と考え合わせ大変興味深いところであります。

本報告書が多くの方々へ研究資料としてご活用いただければ幸甚であります。

末筆ながら、ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1993年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝 正義

例 言

1. 本書は山梨県中巨摩郡撫形町平岡字長田口に所在する長田口（おさだぐち）遺跡の第1次から第4次にわたる発掘調査報告書である。第1次調査については概要の報告を行い、改めて詳細を報告する。
2. 本調査は富士川西部広域農道建設に先立ち、山梨県農務部の負担金と文化庁の国庫補助金を受けて山梨県教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は昭和63年度から平成3年度の4カ年にわたって実施し、発掘調査にあたっては出月洋文（昭和63年度）、浅利司・保坂和博（平成元年～平成3年度）が担当した。
4. 写真撮影は発掘作業中の遺構等は出月洋文・浅利司・保坂和博が行い、遺物は澤登正仁、保坂和博が行った。
5. 本報告書の編集及び執筆は浅利司・保坂和博・松土一志文化財主事があたり、執筆分担は以下の通りである。

第1章 第1節・第2章・第3章・第4章・第5章・付編1……………保坂和博

第1章 第2節……………松土一志

なお、付編2の分析および執筆は平尾良光氏（東京国立文化財研究所）、付編3の分析および執筆は河西学氏（帝京大学山梨文化財研究所）をお願いした。また、縄文土器の観察表は今福利恵による。

6. 石器の材質は帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏の鑑定による。また、舶載鏡片については実践女子大学の西田守夫氏、明治大学の小林三郎氏に御教授いただいた。
7. 本報告書にかかわる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8. 発掘調査および報告書作成にいたる過程で、次の方々より多大なご協力をいただいた。記して謝意を表します。（敬称略）

西田守夫（実践女子大学）、小林三郎（明治大学）、平尾良光（東京国立文化財研究所）、河西学（帝京大学山梨文化財研究所）、清水博（撫形町教育委員会）、豊場善文、横田達夫（峡中土地改良事務所）

（順不同）

凡 例

1. 本書の挿図の掲示は次の通りである。

(1) 挿図縮尺は原則として下記に統一した。

遺構 全体図：1/2000 遺構配置図：1/500

竪穴住居址：1/60、1/80 掘立柱建物址・柱穴列：1/80 土坑・地下式墳：
1/40 竪穴状遺構：1/60 集石：1/20 埋設土器：1/20 溝状遺構（平面）：
1/50、1/100 同（断面）：1/50、1/100

遺物 土器：1/3、1/4、1/6（実測図）1/3（拓影図） 石器：2/3、1/3、1/4
土製品・石製品：1/3 金属器：2/3 古銭：2/3

(2) 遺構No・遺物Noおよび遺構名は新番号・名（整理段階）を付したが、旧番号・名（調査段階）を併記した場合もある。

例：1号地下式墳（旧71号土坑）

なお、69号土坑は整理段階において25号住居址の柱穴と断定したため欠番とした。

(3) 遺構の挿図の表記は下記の通りに統一した。

- 遺構挿図は原則として右を北方向とし、方位を統一した。
- 微細図については [] を用いて1/20のスケールで図示した。
- 遺構挿図中では凡例図版（遺構）のようにスクリーントーンを使用した。
- 遺物分布図中では以下のドットマークを使用した。

●……………土器	▲……………土製品
▲……………石鏃	★……………金属器
○……………石鏃以外の石器	■……………古銭
□……………黒曜石剥片	

(4) 遺物の挿図の表記は下記の通りに統一した。

土器実測図のドットスクリーントーンは赤色塗彩を示す。

石器実測図のドットスクリーントーンは磨面を示す。

2. 出土土器の観察表の表記は下記に統一した（縄文土器の観察表は除く）。

a. 残存率 細片は一辺5cm未満、破片は一辺5cm以上～全体の1/5未満、この他は分数で示した。

b. 法量 単位はcmである。復元（回転）実測による推定径には（ ）を付した。

①は口径、②は底径、③は器高である。

c. 特徴 整形痕については

ミガキ……………ヘラ以外の工具によるミガキ

ヘラミガキ……………ヘラによるもの

ヘラケズリ……………ヘラによるもの

ヘラナデ……………ヘラによるもの

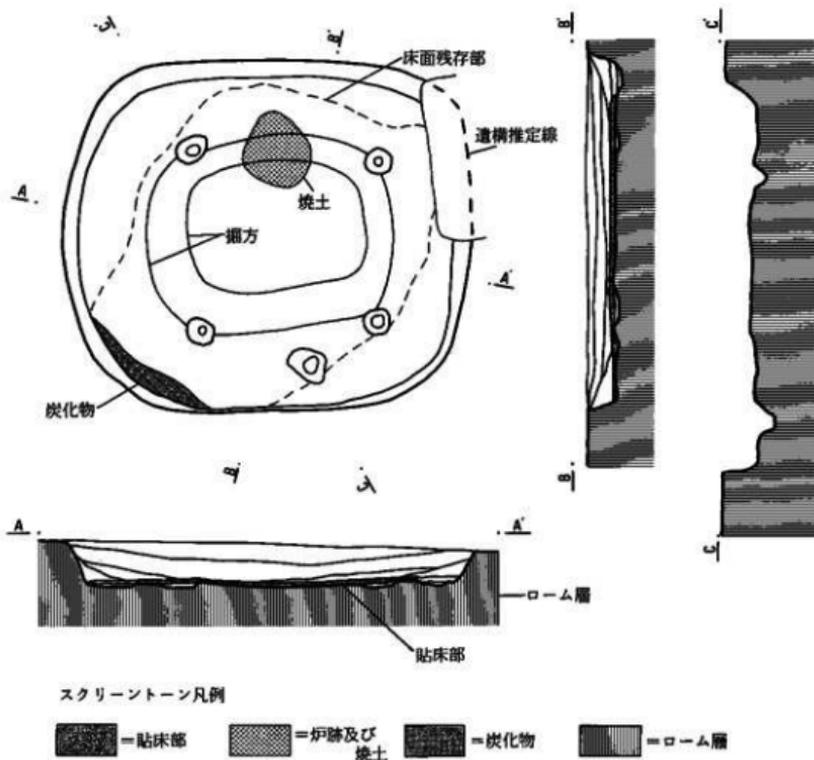
ナ デ……………指、布等によるナデ

ハ ケ……………ハケ状工具によるケズりに分類した。

d. 観察 ①は色調であり、内面と外面の色調の差が著しい場合のみ両面を記した。

②は胎土である。

なお、観察表には、拓影資料については掲載していない。



凡例 図版 (遺構)

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 序 説	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査組織	2
3 調査の方法	2
4 基本層序	3
第2節 遺跡の概観	12
1 地理的環境	12
2 歴史的環境	13
第2章 第2次調査の成果	17
第1節 遺構および遺構内出土遺物	17
1 検出状況	17
2 旧石器時代	17
3 縄文時代	18
(1) 住居址	18
(2) 土坑	29
(3) 集石遺構	42
(4) 竪穴状遺構	45
(5) 埋設土器	46
4 弥生時代～古墳時代	47
(1) 住居址	47
(2) 土坑	64
5 時期不明の遺構	64
(1) 土坑	64
(2) 溝状遺構	69
第2節 遺構外出土遺物	76
第3章 第3・4次調査の成果	79
第1節 遺構および遺構内出土遺物	79
1 検出状況	79

2	縄文時代	79
(1)	土坑	79
3	弥生時代～古墳時代	79
(1)	住居址	80
(2)	土坑	115
4	中世	120
(1)	土坑	120
(2)	地下式竈	139
5	時期不明	153
(1)	土坑	153
(2)	溝状遺構	165
(3)	集石遺構	197
(4)	掘立柱建物址	197
(5)	柱穴列	201
	第2節 遺構外出土遺物	202
第4章	調査のまとめ	206
第1節	旧石器時代	206
第2節	縄文時代	206
第3節	弥生時代～古墳時代	208
第4節	中世	212
第5節	近世・近代	213
付 篇		214
1	長田口遺跡第1次調査概要報告	214
2	山梨県長田口遺跡から出土した銅製品の自然科学的調査	219
3	獅形町長田口遺跡のテフラ分析	224
別 表		230
1	土器分類表	230
2	遺物観察表	230
3	遺構一覧表	246

挿 図 目 次

第1図	長田口遺跡全体図	5・6	第44図	16号住居址	出土遺物	60		
第2図	第2次調査 遺構配置図	7・8	第45図	17号住居址	平面・土層・断面・遺物分布	62		
第3図	第3・4次調査 遺構配置図	9・10	第46図	17号住居址	出土遺物	63		
第4図	基本層序	11	第47図	18号住居址	平面・断面・遺物分布	出土遺物 63		
第5図	長田口遺跡周辺遺跡分布図	14	第48図	11号土坑	平面・土層・断面・遺物分布	出土遺物 (1) 65		
第6図	出土遺物 (旧石器時代)	17	第49図	11号土坑	出土遺物 (2)	66		
第7図	旧石器時代調査発掘区設定図	18	第50図	21号土坑	平面・断面・遺物分布	67		
第8図	7号住居址	平面・土層・遺物分布	19	第51図	4・5・6・14・18・20号土坑	平面・土層・断面	68	
第9図	7号住居址	出土遺物	20	第52図	3・4号溝状遺構	平面・土層・遺物分布	70	
第10図	8号住居址	平面・土層・断面・微細 炉址平面・土層	22	第53図	5・6号溝状遺構	平面・土層・遺物分布	71	
第11図	8号住居址	遺物分布	23	第54図	5号溝状遺構	出土遺物 (1)	72	
第12図	8号住居址	出土遺物 (1)	24	第55図	5号溝状遺構	出土遺物 (2)	73	
第13図	8号住居址	出土遺物 (2)	25	第56図	5号溝状遺構	出土遺物 (3)	74	
第14図	9号住居址	平面・土層・断面・遺物分布・微細	26	第57図	6号溝状遺構	出土遺物 (1)	75	
第15図	9号住居址	出土遺物	27	第58図	6号溝状遺構	出土遺物 (2)	76	
第16図	14号住居址	平面・土層・断面・遺物分布	出土遺物	第59図	第2次調査	遺構外出土	縄文時代 土器・ 土製品・石器	77
第17図	3号土坑	平面・断面・遺物分布	出土遺物	第60図	第2次調査	遺構外出土	弥生時代～古墳時代 土器・石製品	78
第18図	7号土坑	平面・断面・遺物分布	出土遺物	第61図	第2次調査	遺構外出土	中世 土器	78
第19図	8号土坑	平面・断面・遺物分布	出土遺物	第62図	第2次調査	遺構外出土	金属品	78
第20図	9・10号土坑	平面・断面・遺物分布	出土遺物	第63図	34・35号土坑	平面・土層・断面・遺物分布	出土遺物	80
第21図	12号土坑	平面・断面・遺物分布	出土遺物	第64図	19号住居址	平面・土層・断面・遺物分布	81	
第22図	13号土坑	平面・断面・遺物分布	出土遺物	第65図	19号住居址	出土遺物	82	
第23図	15・16・17号土坑	平面・断面・遺物分布 出土遺物 (1)	36	第66図	20号住居址	平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物	83	
第24図	17号土坑	出土遺物 (2)	37	第67図	21号住居址	平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物	85	
第25図	19号土坑	平面・断面・遺物分布	出土遺物	第68図	22号住居址	平面・土層・断面・遺物分布	87	
第26図	22・23号土坑	平面・断面・遺物分布	出土遺物	第69図	22号住居址	出土遺物	88	
第27図	24・25・26・27号土坑	平面・土層・断面・ 遺物分布	出土遺物	第70図	23号住居址	平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物	89	
第28図	1号集石	平面・断面・遺物分布	43	第71図	24号住居址	平面・土層・断面・遺物分布	91	
第29図	1号集石	出土遺物	44	第72図	24号住居址	遺物出土状況	93・94	
第30図	2・3号集石	平面・断面	出土遺物	第73図	24号住居址	出土遺物 (1)	95	
第31図	2号竪穴状遺構	平面・土層・遺物分布	出土遺物	第74図	24号住居址	出土遺物 (2)	96	
第32図	2号埋設土器	平面・断面	出土遺物	第75図	24号住居址	出土遺物 (3)	97	
第33図	10号住居址	平面・土層・断面・遺物分布・微細	48	第76図	24号住居址	出土遺物 (4)	98	
第34図	10号住居址	出土遺物	49	第77図	24号住居址	出土遺物 (5)	99	
第35図	11号住居址	平面・土層・断面・遺物分布	50	第78図	25号住居址	平面・土層・断面・遺物分布	100	
第36図	11号住居址	出土遺物 (1)	51	第79図	25号住居址	出土遺物	101	
第37図	11号住居址	出土遺物 (2)	52	第80図	26号住居址	平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物	103・104	
第38図	12号住居址	平面・土層・断面・遺物分布	54	第81図	27号住居址	平面・土層・遺物分布	105・106	
第39図	12号住居址	出土遺物	55	第82図	27号住居址	遺物出土状況	107・108	
第40図	13号住居址	平面・土層・断面・遺物分布	56	第83図	27号住居址	出土遺物 (1)	109	
第41図	13号住居址	出土遺物	57	第84図	27号住居址	出土遺物 (2)	110	
第42図	15号住居址	平面・断面・遺物分布	出土遺物	第85図	27号住居址	出土遺物 (3)	111	
第43図	16号住居址	平面・土層・遺物分布	59					

第86區	28号住居址	平面、土層、遺物分布	112	第114區	53、55、58、59、61、66、67号土坑	平面、土層、断面	161
第87區	29号住居址	平面、土層、断面、遺物分布	113	第115區	70号土坑	平面、土層	162
第88區	29号住居址	出土遺物	114	第116區	93、96、97、99、107、108号土坑	平面、土層、断面	164
第89區	28、30、31号土坑	平面、土層、断面、遺物分布	116	出土遺物			
第90區	32、62、65、68号土坑	平面、土層、断面、遺物分布	118	第117區	7、8号溝狀遺構	平面、土層、断面	166
第91區	104、106号土坑	平面、断面、遺物分布	120	出土遺物			
第92區	39、41、42、44号土坑	平面、土層、断面、遺物分布	122	第118區	7号溝狀遺構	出土遺物 (1)	167
第93區	45、46、47、48、49、54号土坑	平面、土層、断面、遺物分布	125	第119區	7号溝狀遺構	出土遺物 (2)	168
第94區	56、57号土坑	平面、土層、断面、遺物分布	127	第120區	8号溝狀遺構	出土遺物	169
第95區	60、63号土坑	平面、土層、断面、遺物分布	128	第121區	9、10、11、20、21号溝狀遺構	平面、断面、土層、遺物分布	171
第96區	64、71号土坑	平面、土層、断面、遺物分布	130	第122區	10号溝狀遺構	出土遺物	172
第97區	82、84号土坑	平面、断面	131	第123區	12、14、15、16、18号溝狀遺構	平面、断面、遺物分布	173
第98區	86、87、88、89、90号土坑	平面、断面、遺物分布	133	第124區	13号溝狀遺構	平面、断面、遺物分布	175
第99區	86号土坑	出土遺物	134	出土遺物			
第100區	90号土坑	出土遺物	134	第125區	19、22、23号溝狀遺構	平面、断面、遺物分布	177
第101區	92、94、95、98、100号土坑	平面、土層、断面、遺物分布	136	第126區	24号溝狀遺構	平面、土層、断面、遺物分布	179
第102區	101、102、103、106号土坑	平面、断面、遺物分布	136	第127區	24号溝狀遺構	出土遺物	180
第103區	1、2号地下式墳	平面、土層、断面、遺物分布	141	第128區	25号溝狀遺構	平面、土層、断面、遺物分布	183、184
第104區	3、4号地下式墳	平面、土層、遺物分布	143	第129區	26、27号溝狀遺構	平面、土層、断面、遺物分布	185
第105區	5、6号地下式墳	平面、土層、断面、遺物分布	145	第130區	28、29号溝狀遺構	平面、断面、遺物分布	187
第106區	7、8号地下式墳	平面、土層、断面	147	出土遺物			
第107區	9、10号地下式墳	平面、断面、遺物分布	148	第131區	30、31、32号溝狀遺構	平面、土層、断面、遺物分布	189
第108區	11号地下式墳	平面、土層、断面、遺物分布	150	第132區	33、34、35号溝狀遺構	平面、土層、断面、遺物分布	191
第109區	12号地下式墳	平面、土層、遺物分布	151	出土遺物			
第110區	13号地下式墳	平面、土層、断面、遺物分布	152	第133區	36、37号溝狀遺構	平面、土層、断面、遺物分布	193
第111區	29、33、36号土坑	平面、土層、断面、遺物分布	154	第134區	37号溝狀遺構	出土遺物	194
第112區	37号土坑	平面、断面	155	第135區	38、39、40、41、42号溝狀遺構	平面、土層、断面、遺物分布	196
第113區	38、40、43、50、51、52号土坑	平面、土層、断面、遺物分布	158	第136區	4号集石	平面、土層、遺物分布、出土遺物	198
				第137區	1、2号掘立柱遺物址、1-2号柱穴列	平面、断面、遺物分布	199、200
				出土遺物			
				第138區	第3、4次調査	遺構外出土	縄文時代 土器 203
				第139區	第3、4次調査	遺構外出土	縄文時代 石器 203
				第140區	第3、4次調査	遺構外出土	弥生時代-古墳時代 土器 204
				第141區	第3、4次調査	遺構外出土	中世 土器 205
				第142區	第3、4次調査	遺構外出土	金屬品 205
				第143區	第3、4次調査	遺構外出土	古銭 205

④ 金属品 (中・近世)		
第84表 35号溝状遺構出土 金属品観察表	243	
第85表 第2次調査 遺構外出土 金属品観察表	243	
第86表 第3・4次調査 遺構外出土		金属品観察表 243
⑤ 古銭 (中・近世)		
第87表 86号土坑出土 古銭観察表	243	
第88表 90号土坑出土 古銭観察表	244	
第89表 3号地下式墳 (旧74号土坑) 出土		古銭観察表 244

第90表 13号地下式墳 (旧91号土坑) 出土		古銭観察表 244
第91表 5号溝状遺構出土 古銭観察表	244	
第92表 6号溝状遺構出土 古銭観察表	244-245	
第93表 37号溝状遺構出土 古銭観察表	245	
第94表 第3・4次調査 遺構外出土 古銭観察表	245	
3 遺構一覧表	246	

写真図版目次

図版1 長田口遺跡より富士山を望む 長田口遺跡遺望 7号住居址 8号住居址 8号住居址埋燬炉 8号住居址遺物出土状況
図版2 9号住居址 9号住居址埋燬炉 9号住居址遺物 出土状況 10号住居址 10号住居址遺物出土状況 (1) 10号住居址遺物出土状況 (2) 11・17号住居址 12・13号住居址
図版3 13号住居址 14号住居址 15号住居址 16号住居址 18号住居址 19号住居址 20号住居址 21号住居址
図版4 22号住居址 23号住居址 24号住居址 24号住居址 遺物出土状況 (1) 24号住居址遺物出土状況 (2) 24号住居址貯蔵穴内遺物出土状況 25号住居址 26号住居址
図版5 27号住居址 27号住居址遺物出土状況 28号住居址 29号住居址 11号土坑 13号土坑 17号土坑 19号土坑
図版6 21号土坑 30号土坑 31号土坑 54号土坑 57号土坑 60号土坑 71号土坑 102号土坑 5号溝状遺構 6号溝状遺構
図版7 8号溝状遺構 13号溝状遺構 25・26・27号溝状遺構 32号溝状遺構 37号溝状遺構 1号地下式墳 3号地下式墳 5号地下式墳 5号地下式墳炭化物 出土状況

図版8 6号地下式墳 7号地下式墳 8号地下式墳 10号地下式墳 11号地下式墳 11号地下式墳断面 12号地下式墳 13号地下式墳
図版9 1号集石遺構 2号集石遺構 3号集石遺構 4号集石遺構 2号埋燬土器 2号壑穴状遺構 1・2号掘立柱建物址
図版10 ナイフ形石器 7号住居址 8号住居址 (1) 8号住居址 (2) 9号住居址 (1) 9号住居址 (2)
図版11 3号土坑 10号土坑 12号土坑 (1) 12号土坑 (2) 13号土坑 15号土坑 17号土坑 19号土坑
図版12 1号集石遺構 第2次調査遺構外出土 第3・4次調査遺構外出土
図版13 土製・石製品 (土製円盤・石製紡錘車) 石鏃 石製品 (凹石・石匙・打製石斧 他) 10号住居址 11号住居址
図版14 12号住居址 21号住居址 24号住居址 (1)
図版15 24号住居址 (2) 27号住居址
図版16 S字状口縁台付壺 (口縁部) 北陸横紋土器 (口縁部) 糸織文系土器 (胴部) 鏡片
図版17 かわらけ 掘り鉢 内耳土器 石臼 金属品 古銭
図版18 壺 縄文土器 (1) 縄文土器 (2) 打製石斧・石鏃 石皿 パレス式土器 (口縁部) 北陸系横紋土器 小型土器

第1章 序 説

第1節 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

本調査は富士川西部広域農道建設に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が山梨県農務部の負担金と文化庁の国庫補助金を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施したものである。調査は昭和63年度から平成3年度の4カ年（4次）にわたって行われ、調査面積は5,000㎡である。調査費用は、文化庁と農林水産省との覚え書きに基づいて算出し、各年度の当初予算に計上した。本遺跡の各年度における調査経過は下記の通りである。

<第1次調査-昭和63年度>

- ・昭和63年10月31日 県文化課に発掘通知を提出
- ・昭和63年11月7日～同年12月23日 発掘調査
- ・平成元年1月～3月末 整理作業
- ・平成元年3月12日 小笠原警察署に埋蔵文化財発見通知を提出

<第2次調査-平成元年度>

- ・平成元年10月19日 県文化課に発掘調査通知を提出
- ・平成元年10月23日～同年12月27日 発掘調査
- ・平成2年1月17日 小笠原警察署に埋蔵文化財発見通知を提出
- ・平成2年1月～3月末 整理作業

<第3次調査-平成2年度>

- ・平成2年9月12日 県文化課に発掘調査通知を提出
- ・平成2年9月17日～同年12月28日 発掘調査
- ・平成3年1月14日 小笠原警察署に埋蔵文化財発見通知を提出
- ・平成3年1月～3月末 整理作業

<第4次調査-平成3年度>

- ・平成3年10月5日 県文化課に発掘調査通知を提出
- ・平成3年9月26日～同年12月13日 発掘調査
- ・平成4年1月6日 小笠原警察署に埋蔵文化財発見通知を提出
- ・平成4年1月～3月末 整理作業

<整理作業-平成4年度>

- ・報告書作成のため平成4年4月～平成5年3月末まで整理作業

2. 調査組織

(1) 発掘調査

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	山梨県埋蔵文化財センター文化財主事 出月洋文（昭和63年度） 山梨県埋蔵文化財センター文化財主事 浅利 司（平成元年～平成3年度） 山梨県埋蔵文化財センター文化財主事 保坂和博（平成元年～平成3年度）
調査作業員	妻場滋子、秋山富子、池田静江、伊藤よ志恵、今井靖子、岩崎登加、川崎しげみ、川崎すず子、川崎尊光、川崎トキミ、川崎夏生、川崎久美、川崎八重子、川崎雷江、河野昭子、河野和子、河野きみ江、河野定子、河野徳志、河野やす江、河野義雄、桜田和子、桜田定子、桜田寅次郎、桜田みさ江、塩島博夫、清水静、杉山敏子、高石梅野、中込かやの、中込敬子、中込千加恵、長沼豊子、野田うし代、深沢道子、古矢なみ、古矢まさ江、向山光江、山本うしの、矢崎米子、若林初美 (五十音順)

(2) 整理作業参加者

秋山とみ、石川武、石原はつ子、市川弘子、伊藤順子、長田恵美、長田くみ子、長田純子、長田久江、折居きく、金井京子、小林健二、小泉香、小林美紀、後藤達雄、斉藤利男、斉藤直江、斉藤春美、斉藤律子、坂本しのぶ、桜林豊、佐野靖子、鈴木福子、平重蔵、竜沢まさじ、内藤由紀子、仲澤桂子、中村与志子、名取洋子、西川真人、西名博恵、野沢友彦、野中はるみ、広瀬千江美、望月和佳子、矢房さつき、渡辺征子、渡辺礼子
(五十音順)

3. 調査の方法

(1) 調査方法と発掘区の設定

本調査は富士川西部広域農道建設に伴う事前調査のため、市之瀬台地上の北を深沢川、南を漆川に挟まれた地域を長さ（南北方向）480m・幅（東西方向）10mの範囲で横切る形の調査区となった。調査面積は約5,000㎡である。調査は4カ年（4次）にわたり、各年度ごとに発掘区の設定を行っているため、以下各年度ごとの調査方法および発掘区の設定について記していくこととする。

第1次調査（昭和63年度）は本遺跡の最南端、市之瀬台地奥部（平岡地内）の緩斜面から漆川に向かってやや急な南傾斜面に変換する地点から最も南側に位置している。調査区南端は比高20m余りの漆川の急崖となっている。調査は長さ80m、幅約10mの範囲（約800㎡）において実施した。調査はまず、試掘坑を設定し、人力により遺構確認面までの深さの確認を行った。次に重機により表土剥ぎを行った後、遺構確認面直上から人力による掘り下げを行い遺構確認に努めた。その後遺構内の精査を進めた。

第2次調査(平成元年度)は第1次調査地点の北側にあたる、台地奥部の緩斜面からやや急な南傾斜面に変換する地点より南側に位置している。調査は長さ170m、幅約12mの範囲(約1,700㎡)において実施した。第1次調査同様、まず5箇所に試掘坑を設定し、人力による遺構確認面の調査を行い、その後重機による表土剥ぎ、人力による遺構確認面直上での遺構検出、遺構内の精査の順で調査を進めた。さらに、本年度の調査では遺構外において旧石器時代のナイフ形石器が検出されたため、これらの調査の終了後関東ローム層内の文化層の有無を調べる目的で1m四方で23箇所の試掘坑を設定し、調査を行った。グリットは工事用センター杭を基準にして4m×4mのメッシュを設定し、東西方向を西からA・B・C・D、南北方向を南から0から40までの記号を付けた。

第3次調査は第2次調査地点の北側にあたり、台地奥部の緩斜面に位置している。調査は当初、長さ200m、幅約12mの範囲(約2,500㎡)において実施する予定であったが、調査区北端部側で遺構の集中区が確認されたため、一部の調査範囲(調査区北端部の長さ120m、幅6m)を次年度に持ち越すこととなった。本年度の調査面積は約1,300㎡である。調査は1m四方で15箇所の試掘坑を設定し、人力による遺構確認面の検出を行い、以下昨年度同様の方法により調査を進めた。グリットは昨年度同様工事用のセンター杭を基準にして設定したが、昨年度の調査地点から本年度の調査地点にかけてやや建設道路がカーブを描いており、昨年度とはセンター杭の方向がずれるために、新たに本年度のセンター杭を基準として4m×4mのメッシュを設定した。東西方向を東からA・B・C・D、南北方向を南から0から52までの記号を付けた。

第4次調査は第3次調査で持ち越された地点であり、本遺跡の北端部にあたる。調査は長さ120m、幅6mの範囲(約720㎡)で実施された。本年度の調査区は上記したように昨年度調査を行った地点の北部側の東半分であり、遺構の検出状況は予想されたため試掘調査は行わなかった。調査はこれまでと同様な方法で進め、グリットは昨年度設定したものに新たに東西方向のAの東側へZを付け加えた。

遺物の記録、取り上げについては各年度によりやや異なるので、ここでは年度ごとにまとめることとする。

第1次調査では遺構確認面に到達するまではグリットごと一括して取り上げ、遺構内出土の遺物に関しては原則としてレベリングおよび平面図に記録後に取り上げた。

第2次調査では光波測量器・コンピュータを導入して全点について3次的に登録して、取り上げた。

第3次調査および第4次調査では遺構確認面に達するまでは各グリットごと一括して取り上げ、遺構内出土の遺物に関しては光波測量器・コンピュータを用いて3次的に登録して取り上げた。

4. 基本層序

本遺跡は市之瀬台地の北端部やや南側にあたる深沢川と漆川に挟まれた舌状台地に位置し、標高は426~448mとなり北側から南側にかけて標高が徐々に減っていく。調査対象地域はこの舌状台地奥部の南北に細長い範囲であり、北側は南緩斜面を呈した後に急崖をもって深沢川に接し、また南側はやや急な南緩斜面を呈した後に急崖をもって漆川に接している。ここでは原則として各年度

(第2次調査から第4次調査)の発掘区の西側(第2図、第5地点のみ東側)の断面の観察による基本層序についてみていくこととする。合計8ヶ所について観察を行った。

第Ⅰ層 暗褐色土。しまりあり、粘性にかける。表土(耕作土)層であり、かなり攪乱を受けている。第2次調査地点(台地奥部の緩斜面からやや急な南傾斜面に変換する地点)より南側においては約50cmの堆積を呈し、これより北側の第3・4次調査地点の南傾斜面では約80cmとなり、台地頂部において厚く堆積しているようである。

第Ⅰ'層 暗褐色土(第層より茶系が強い)。しまり・粘性ともにある。第2次調査地点の南側(A-2グリットより南側)において確認されている。

第Ⅱ層 暗褐色土。しまり強く、粘性にかける。第2次調査区南側(A-14グリットより南側)において確認されている。

第Ⅱ'層 暗褐色土。しまりあり、粘性ややある。第2次調査区南側(A-5グリットより南側)において確認されている。

第Ⅲ層 黒褐色土。しまり強く、粘性にかける。第2次調査区北端部より南側(A-40グリットより南側)において確認されている。

第Ⅳ層 黒褐色土。しまりあり、粘性にかける。黒色土粒(φ2~5mm)を多量に含んでいる。第3次調査区南側(A-18グリット)から第2次調査区南端部にかけて確認されている。

第Ⅴ層 黄褐色土。しまり弱く、粘性強い。ローム粒子を多量に含んでいる。第Ⅳ層と下層のローム層の間に薄く存在しており、調査区全体において確認されている。

以上述べた基本層序における文化層について説明すると以下のようになる。

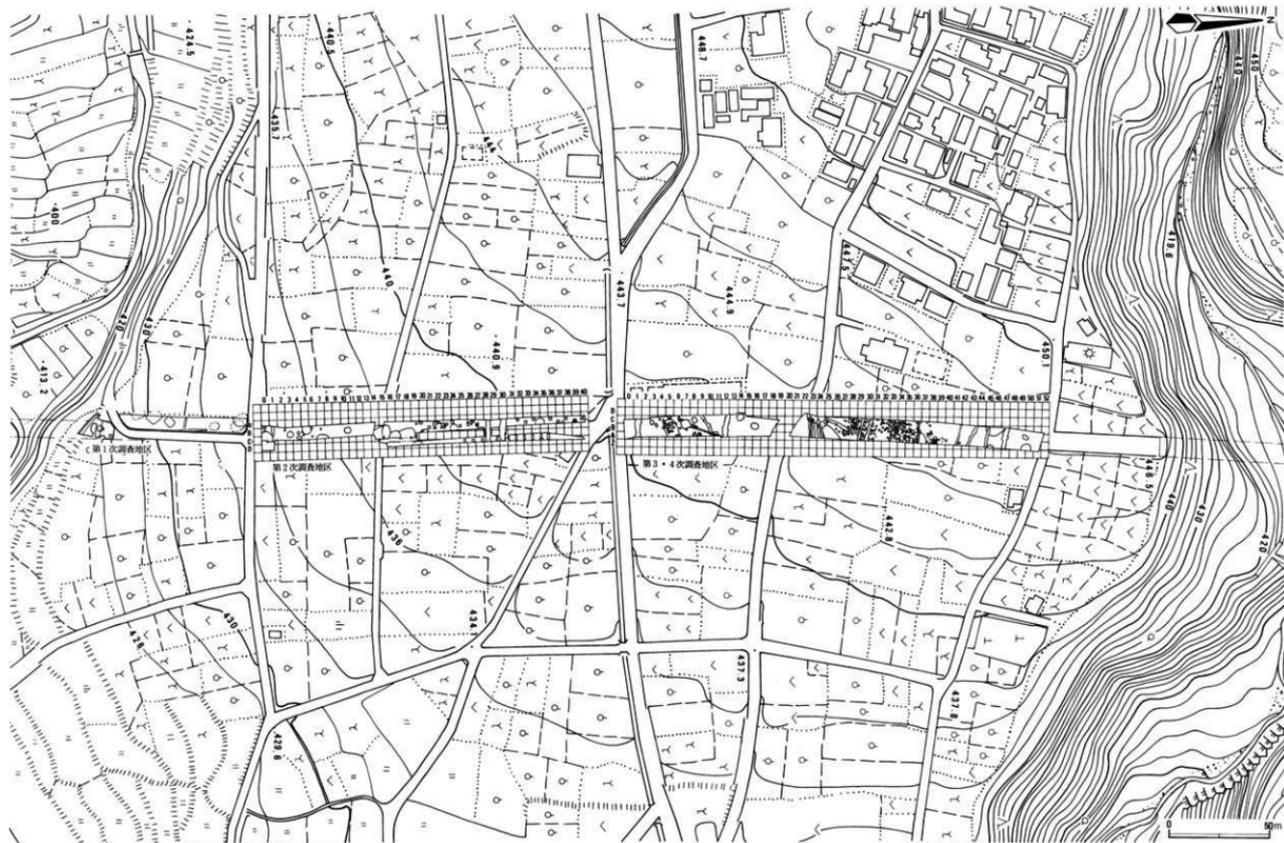
1. 遺物は第Ⅲ層～第Ⅳ層中に集中して分布している。
2. 縄文時代、弥生時代末葉～古墳時代前期の遺構は第Ⅴ層上面において確認されたが、遺構の本来的な掘り込み面は、更に上位に存在したと思われる。
3. 第Ⅴ層上面よりナイフ形石器が出土しており、第Ⅴ層下位に旧石器時代文化層の存在が想定される。なお第Ⅴ層上面(ローム層最上部)により近い層準にAT(始良Tn火山灰)₁の降灰層準が確認されている。また、本遺跡におけるローム層内に含有するカンラン石は富士火山からのテフラによってもたらされたと推定されている₂。

註1 AT(始良Tn火山灰): ガラス質に富むテフラである。本遺跡断面では顕著なテフラ層は肉眼では認められない。噴出年代は約2.1~2.2万年前である(町田・新居、1976)。ATの起源は鹿児島県の錦江湾の外形を造っている始良カルデラである。

註2 本報告の付篇2「櫛形町長田口遺跡テフラ分析」により確認されている。

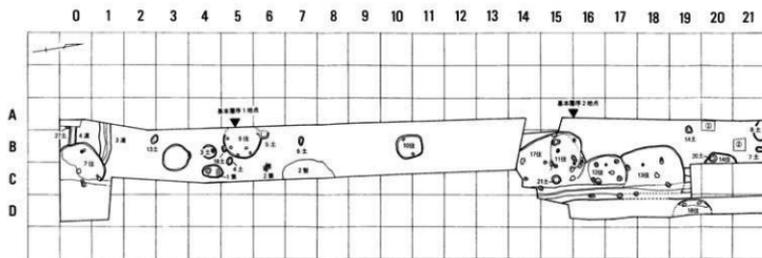
<参考文献・引用文献>

町田洋・新井房夫『科学46』「広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義-」1976年



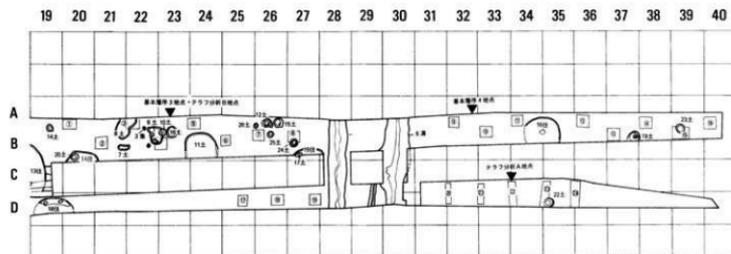
第1図 長田口遺跡 全体図

第1図 長田口遺跡 全体図

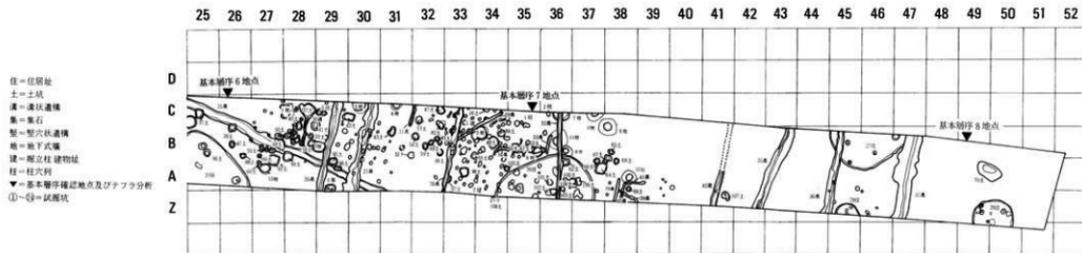
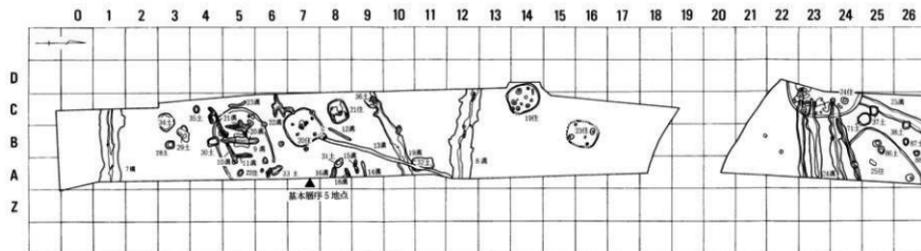


- 住=住居址
- 土=土坑
- 溝=溝状遺構
- 集=集石
- 壑=壑状遺構
- 地=地下式構
- 礎=礎立柱遺物址
- 柱=柱穴列
- ▼=基本調査確認地点及びテフラ分析
- ①-⑤=試掘坑

第2図 第2次調査 遺構配置図



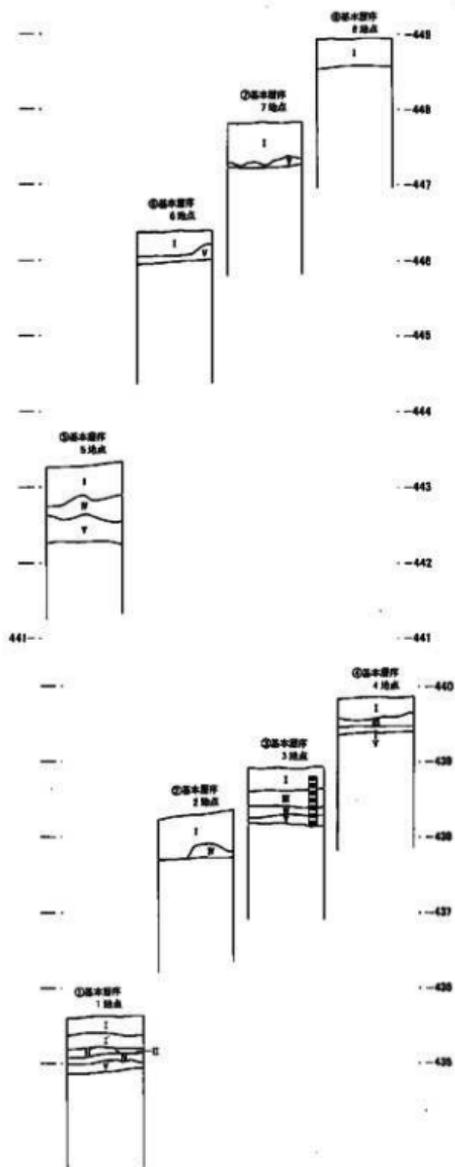
第2図 第2次調査 遺構配置図



0 10 m

第3回 第3・4次調査 遺構配置図

第3回 第3・4次調査 遺構配置図



第4圖 基本層序

第2節 遺跡の概観

1. 地理的環境

長田口遺跡は中巨摩郡御形町の市之瀬台地上、字平岡に立地する。標高は440m前後であり、東西約200m、南北約500mにおよぶ遺跡である。

甲府盆地は日本を東日本と西日本に二分する大地溝帯（フォッサ・マグナ）にある構造盆地である。大地溝帯の西縁は、新潟県の糸魚川、長野県の塩尻、そして山梨県に入って、白州町の中山、芦安村の夜叉神峠、早川町の春木川を経て静岡に達する糸魚川-静岡地質構造線が通っている。盆地は韭崎と鯉沢を底辺とし、勝沼を頂点とするほぼ二等辺三角形をしていて、周辺は断層で区切られている。盆地は、西部は南アルプスとその前衛の巨摩山地が、北部は、八ヶ岳や茅ヶ岳と間東山地の山々が、東部から南部は御坂山地の山脈が続いていて、これらの山地から流れる釜無川、御動使川、塩川、荒川、笛吹川、重川、日川、金川など、多くの河川によって運搬された土砂礫の堆積によって形成されている。

甲府盆地の西部に位置する山地を「西山」といい、盆地から西方に望むことのできる山地であり、巨摩山地や南アルプスを含めていっている。

日本の屋根といわれている日本アルプスは、飛騨山脈の北アルプス、木曾山脈の中央アルプス、白根北岳や赤石岳を含む南アルプスの三アルプスを指している。このうち南アルプスは、北は長野県諏訪の南方守屋山から南は大井川の高塚山に達する約100km、東は富士川、西は天竜川に挟まれた約50kmにわたり、3,000m級の高峰が13座、2,500m級までになると36座を数える広大な山地で、昭和41年4月1日に国立公園に指定された山域である。

南アルプスは、昔は赤石山系などと呼ばれていたが、主峰の赤石岳は3,120mで、白根北岳（3,192m）よりわずかに低いため、現在では「赤石山系」の名称は一般に用いられていない。南アルプスは、駒ヶ岳山地、白根山地、赤石山地、伊那山地に大別され、駒ヶ岳山地は甲斐駒ヶ岳（2,965.6m）から南に栗沢山、アサヨ峰、鳳凰三山（地藏ヶ岳＝2,780m、観音岳＝2,840m、薬師岳＝2,762m）、辻山と続き、花崗岩体からなる駒・鳳凰山地を指す。

白根山地は、カール地形で有名な仙丈岳（3,032.7m）、白根山々と呼ばれる主峰の北岳、間ノ岳（3,189m）、農鳥岳（3,056m）を経て広河内岳（2,237m）と連なり、安倍山地に続いている。

赤石山地は、塩見岳（3,047m）、赤石岳、聖岳（3,011m）、光岳（2,591m）と続き、西側は伊那山地と並列するように南下している。これらの山地に源をもつ河川は、東側から富士山水系の釜無川、早川、春木川などが、身延山地と安倍山地の間には安倍川が、白根山地と赤石山地の間には大井川が、そして山地の西側には、諏訪湖に発し、三峰川や遠山川を合わせての天竜川がいずれも南下して太平洋に注いでいる。この南アルプスの地域は、地帯構造上は「赤石三角状地」とか、「赤石楔状地」と呼ばれる地域である。

南アルプスの前衛の巨摩山地は、糸魚川-静岡構造線の東側にあり北から甘利山（1,671m）、御形山（2,051.7m）、富士見山（1,640m）と続き、早川の谷を隔てて身延山地に連なっていて2,000

m級の山々の山頂は、準平原状の平らな山頂となっている。さらに、前衛には北伊奈ヶ湖、南伊奈ヶ湖とを結ぶ断層線の東側の城山などの1,000m以下の山地が連なり、甲府盆地に向かって急傾斜をなし、断層線をもって接している。

櫛形山は南アルプスの前山で、巨摩山地のはほぼ中央部にあり、新第三紀櫛形山層層（約2500万年前）からなり、その大部分は温帯に属し、主として落葉広葉樹でおおわれているが、上部は亜寒帯に属し、コツメガを主とした針葉樹林からなり、頂上付近はそれにダケカンバを交えた林となっている。

櫛形町は、甲府盆地の西部に、巨摩山地と扇状地を跨がるように位置し、西半部を町名の由来とする櫛形山やその東麓に形成された市之瀬台地が占めており、東半部は平地で盆地床縁部の扇状地となっている。平地部では滝沢川、市之瀬川などの扇状地で地下水位の低い乾燥地となり、地下にしみこんだ水が国道52号線の東側、隣接の甲西町江原や田島、下宮地等で湧き出し、湧水列を形成している。

遺跡の存在する市之瀬台地は第四紀洪積世からなり、上市之瀬付近を中心として北方の北新居、南条あたりから南へ滝坂、下市之瀬さらには甲西町塚原及び天白などを結ぶ線をほぼ東の辺縁とする扇形に近い輪郭をもつ。その幅は大きい部分で東西に約2.5km、南北に約4kmで面積は700ha未満と小規模ではあるが、櫛形山の東麓に生じた古い扇状地の残片である。やや西高東低であり、その東縁部は高さ60~100mほどで東方へ凸面を向ける孤状の低い崖をもって沖積地に接している。この崖は局所的に元の形状が、畑作や水田経営によっていくらか変えられたと思われる部分もあるが、とにかくこの低急崖の姿がいつ頃どのような作用によってできたのであろうかという疑問を投げかけている。

2. 歴史的環境

櫛形山の東麓には台地上をはじめとして数多くの遺跡が存在する。櫛形町周辺の環境は、生活の歴史や遺跡の立地に大きな影響を与えているが、ここで長田口遺跡及び周辺の遺跡を時代の流れに沿って概観したい。(第5図)

まず旧石器時代のものとしては、長田口遺跡の東南東約600m、台地前端の円頂部に所在し、櫛形町教育委員会と六科山遺跡調査団によって昭和58年に発掘調査が行われた「六科丘遺跡」(14)から、ナイフ形石器が出土しており(長田口遺跡でも出土)、長田口遺跡らと共に、この周辺では最古のものとしてあげられている(清水、1985)。

縄文時代以降の遺跡としては市之瀬台地上、長田口遺跡の所在する平岡に「東原遺跡」(11)(12)、「中畑遺跡」(15)などが集中している(清水、1990)。また、御物使川扇状地の扇地端部、櫛形町下市之瀬に所在する「メ木遺跡」(41)からも縄文時代の遺構・遺物が発見されており(清水、1986・1987)、この頃から台地より下った平地部でも多くの集落が形成されはじめたことがわかる。



第5図 長田口遺跡 周辺遺跡分布図 (1/50000)

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡としては甲西町古市場の「住吉遺跡」(新津、1981)(39)、南巨摩郡増穂町最勝寺の山地傾斜面に所在する「平野遺跡」(81)などが代表的なものとしてあげられる。平野遺跡は山梨県教育委員会が主体となって平成3年度に発掘調査が行われた。炭化米や石包丁、紡錘車などが出土しており、また、住居はすべてが火災住居であることがわかった。住吉遺跡は甲西町江原の「久保沢遺跡」(35)、岡町鮎沢の「鮎沢遺跡」(36)、岡町清水の「清水遺跡」(38)らと共に扇端部の湧水列上に並ぶ遺跡の一つである。

湧水列上に所在する遺跡としては、これらの他に若草町十日市場、御勤使川扇状地の扇端部の微高地に位置する「新居道下遺跡」(19)、扇端部からの氾濫源に位置する「二本柳遺跡」(20)などがあげられる。新居道下遺跡では奈良・平安時代からの遺構・遺物が出土しており、二本柳遺跡では、中世から近世にかけての水田址が発見されている。これらの遺跡は甲西バイパスの建設に伴い山梨県教育委員会によって発掘調査が行われ、現在整理作業が進められている。

<参考文献・引用文献>

- ・『全国遺跡地図 山梨県』文化庁文化財保護部 1981年
- ・『山梨県地質誌 山梨県・山梨県地質図編纂委員会 1970年
- ・『櫛形町誌』櫛形町役場・櫛形町誌編纂委員会 1966年
- ・『若草町誌』若草町役場・若草町誌編纂委員会 1990年
- ・『遺跡をたずねて』櫛形町教育委員会 1988年
- ・『櫛形山の自然』山梨県立巨摩高等学校 1976年
- ・新津 健ほか 『郷土史読本第1集』「住吉遺跡」甲西町教育委員会 1981年
- ・関根孝夫ほか 『六科丘遺跡確認調査』櫛形町教育委員会 1983年
- ・松浦宥一郎ほか 『物見塚』櫛形町教育委員会・物見塚古墳環境整備調査委員会 1983年
- ・清水 博ほか 『櫛形町文化財調査報告No.1』「曾根遺跡」櫛形町教育委員会 1984年
- ・清水 博ほか 『櫛形町文化財調査報告No.3』「六科丘遺跡」
櫛形町教育委員会・六科山遺跡調査団 1985年
- ・清水 博ほか 『櫛形町文化財調査報告No.4』「ノ木遺跡」櫛形町教育委員会 1986年
- ・清水 博ほか 『櫛形町文化財調査報告No.5』「ノ木遺跡」櫛形町教育委員会 1987年
- ・清水 博ほか 『櫛形町文化財調査報告No.8』「町内遺跡詳細分布調査報告書」
櫛形町教育委員会 1990年
- ・山梨県埋蔵文化財センター『年報7』山梨県教育委員会 1991年
- ・山梨県埋蔵文化財センター『年報8』山梨県教育委員会 1992年
- ・山梨県埋蔵文化財センター『年報9』山梨県教育委員会 1993年

No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名
1	長田口遺跡	44	塚原上村古墳
2	曲輪田遺跡	45	昼喰場遺跡
3	高尾遺跡	46	後田遺跡
4	伊奈ヶ湖遺跡	47	坂上遺跡
5	北新居遺跡	48	丸池古墳、刃塚古墳
6	神明遺跡	49	上ノ平遺跡
7	御坂B遺跡	50	住村2号墳
8	御坂A遺跡	51	住村1号墳
9	曾根遺跡	52	御前山遺跡
10	伝嗣院原遺跡	53	古屋敷遺跡
11	東原A遺跡	54	上ノ原遺跡
12	東原B遺跡	55	土居平遺跡
13	六科丘古墳	56	中野（雨鳴）城跡
14	六科丘遺跡	57	向林遺跡
15	中畑遺跡	58	大平遺跡
16	平岡遺跡	59	丸山塚古墳
17	十五所遺跡	60	北沢遺跡
18	新田遺跡	61	熊野神社遺跡
19	新居道下遺跡	62	秋山経塚
20	二本柳遺跡	63	角屋敷遺跡
21	小笠原長清遺跡（伝）	64	山居遺跡
22	上杉林遺跡	65	大明神塚古墳
23	原田遺跡	66	小林竹重遺跡
24	椿城跡（伝）	67	北原遺跡
25	上の山遺跡	68	法華塚古墳
26	下河原遺跡	69	上平遺跡
27	上ノ東古墳	70	狐塚古墳
28	上ノ東遺跡	71	藤塚古墳
29	物見塚古墳	72	塚穴古墳
30	大畑遺跡	73	二十三夜塚古墳
31	狐塚1遺跡、狐塚2遺跡、河原遺跡	74	安清の池遺跡
32	富士塚古墳	75	平池遺跡
33	御崎北1号墳・2号墳・3号墳・4号墳	76	長池遺跡
34	下宮地遺跡	77	大門遺跡
35	久保沢遺跡	78	青柳遺跡
36	鮎沢遺跡	79	中尾田遺跡
37	条里遺跡	80	広見遺跡
38	清水遺跡	81	平野遺跡
39	住吉遺跡	82	西の八遺跡
40	御崎前古墳	83	大堀田遺跡
41	ノ木遺跡	84	鎌塚古墳、塚穴古墳、大塚古墳
42	鎗物師屋古墳	85	馬門古墳
43	川上道上遺跡		

長田口遺跡 周辺遺跡一覧

第2章 第2次調査の成果

第1節 遺構および遺構内出土遺物

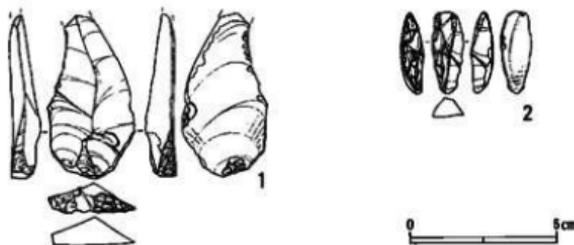
1. 検出状況

本年次において検出された遺構は、縄文時代の住居址が4軒・土坑が17基・集石が3基・堅穴状遺構が1基・埋設土器が1基、弥生時代～古墳時代の住居址が8軒・土坑が2基、時期不明の土坑が6基・溝状遺構が4条である。

2. 旧石器時代（第6図、図版10-1）

旧石器時代の遺物として第2次調査でナイフ形石器が2点検出されたが、文化層中から確認されたものではなく、いずれも遺構の覆土や遺構確認作業の際に偶然発見されたものである。本遺跡内で発見される多くの縄文期の石器とは明らかに異なり、旧石器時代の産物として特徴づけられるものである。年代については、No1が基本層序第V層上面から出土し、同層序直下層に近い層準にAT降灰層準が存在する事は一つの指標となろう。以下にこれらの石器の概要を記すこととする。

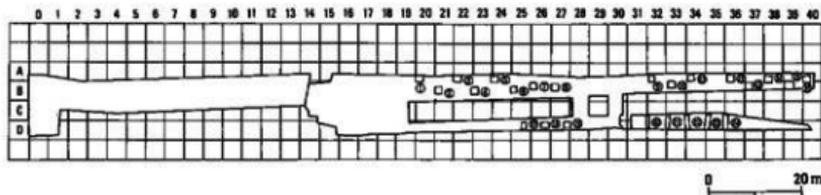
No1はA-36グリットから出土。石材に黒曜石を用いる。刃部の先端部および右側縁部を欠損する。素材は縦長剥片である。打面の方向を基部とし、調整剥離は右側辺部に表面からの刃潰加工が施される。刃部は左位にあり、刃こぼれがみられる。器長5.8cm、器幅2.9cm、器厚1cmである。基部の形状は急斜な刃潰加工により円形に認められる。重量は10.73gを計測する。



第6図 出土遺物（旧石器時代）

No.2は5号溝状遺構の底部付近の覆土(砂礫層)から出土。やや厚みのある小形剥片で、石材に黒曜石を用いる。全長2.8cm、幅1cm、厚さ0.7cmである。二側加工で整形される。刃部は左位にとり、急斜な調整剥離を裏面より施し、さらに微調整を施している。重量は1.83gを計測する。

なお、第2次調査では試掘坑24箇所(1~19は長さ1m、幅1m、深さ0.7m、No.20~24は長さ2.5m、幅1m、深さ1m、)を設定し(第7図)、旧石器時代文化層の調査を実施したが、遺物等は検出することはできなかった。



第7図 旧石器時代調査発掘区設定図

3. 縄文時代

検出した遺構は住居址が4軒、土坑が17基、集石が3基、埋設土器が1基である。

(1) 住居址

7号住居址(第8・9図、第2表、図版1-3、10-2)

<位置> B・C-0・1グリッドに位置する。北壁および西壁の一部が3・4号溝状遺構と重複している。新旧関係は3・4号溝状遺構が7号住居址を切っている。

<形状・規模> 平面形態は既存の道路および旧道により攪乱を受けているため、南壁と東壁の立ち上がりの確認が困難であるが、主軸方位をN-60°-Eにとる楕円形と推定される。

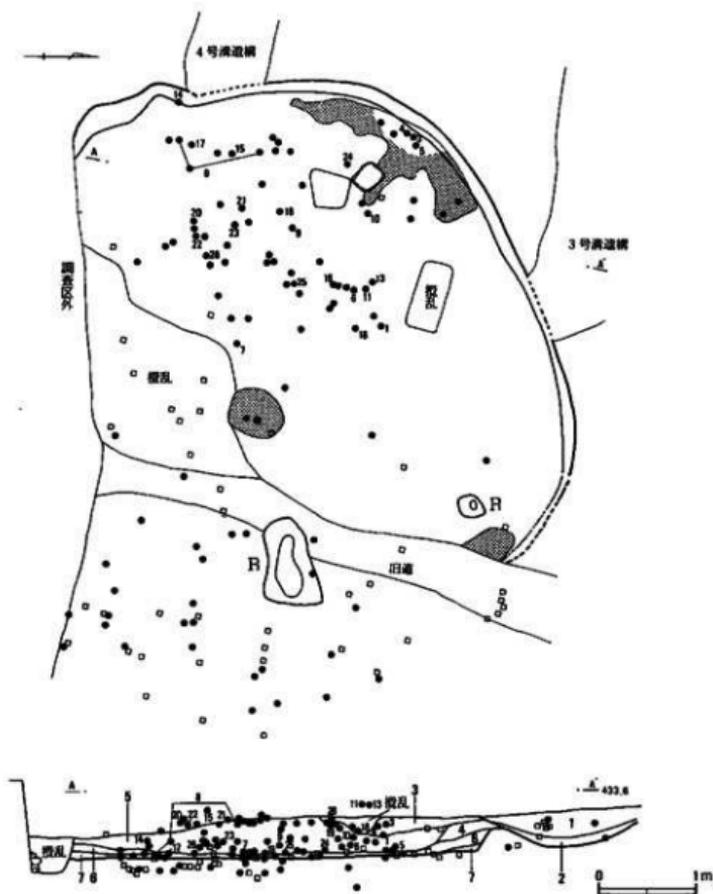
住居規模は推定長軸5.7m・推定短軸5mである。

<覆土> 覆土は5層に分けられ、レンズ状に自然堆積を呈している。また床直上の6層においては多量の焼土が検出された。

<床面・壁> 本住居址の床面は攪乱を受けている部分を除いては比較的残存状況が良く平坦で堅硬である。床面からは中央部および北西部に、また既述したように覆土内(6層)においても多量の焼土が確認されたことより本住居址は焼失住居と思われる。

壁については比較的残りの良い北壁で壁高5cmを計り、緩やかに立ち上がる。

<炉> 中央部やや南よりに焼土が見られるが、一部攪乱により削平されており、全様はつかめないが本住居址の炉址と思われる。

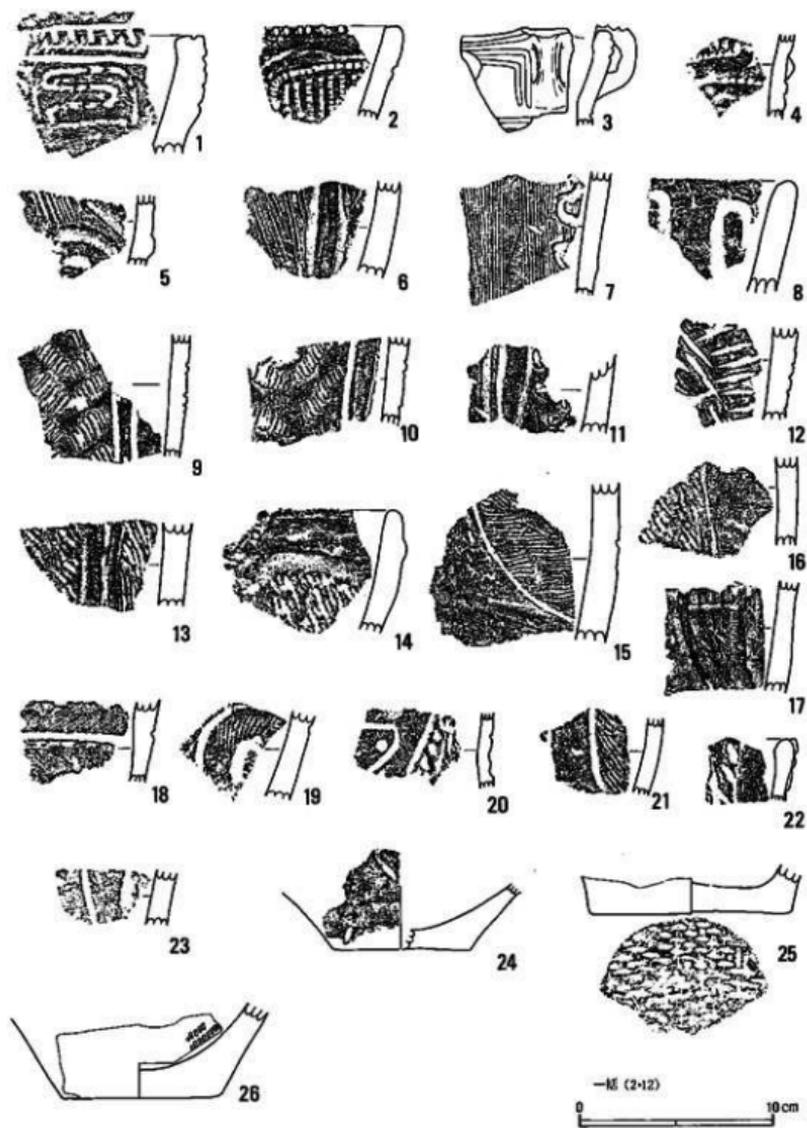


7号住居址土層説明

層	色調	特 徴
1	黒色	顆粒状。しまりに欠ける。
2	褐色	1層に黄色土が混入している層。しまり強。
3	褐色	黄色粒子を少量含む。しまり弱。
4	褐色	黄色土を多量に含む。しまり有。
5	黄褐色	黄色土をブロック状に、黒色土をまだらに含む。
6	黄褐色	焼土。床面上で上3cmが焼土、下は黄褐色土。
7	黄色	黄色細粒子を多量に含む。しまりに欠ける。

※ 1, 2層は、3号溝状遺構覆土。

第8図 7号住居址 平面・土層・遺物分布



第9图 7号住居址 出土遺物

<その他の施設>本住居の南東部分は攪乱を受けているためピットの確認は困難であったが、確実に本住居に伴うと思われるピットは2個あり、位置的にそれぞれ支柱穴になり、残りの支柱穴は攪乱部にあると思われる。P1は30cm×25cm・深さ10cm、P2は90cm×45cm・深さ20cmである。

周溝および埋壺は確認されていない。

<出土遺物>遺物はほとんどのものが縄文時代中期後半に属するものであり、僅かに中期初頭および後期前半に属するの土器片が出土している。出土状況は垂直分布図を見ると縄文時代中期後半とそれ以外の遺物との層位的な差は明確には把握できなかったが、やや中期後半の遺物が下層から多く検出されているようである。また、覆土中層に土製紡錘車(第60図3)が混入している。

8号住居址(第10～13図、第3・71表、図版1-4～6、10-3・4、13-19・20)

<位置>B-3グリットに位置する。7.5m南側に7号住居址、4.5m北側に9号住居址、1.5m南側に13号土坑、1.5m北側に3号土坑、2m北東に1号集石が存在する。

<形状・規模>平面形態は東壁が削平されているが、ほぼ円形を呈すと考えられる。

住居規模は推定長軸3.3m・短軸3.2mである。主軸方位はN-85°-Wである。

<覆土>覆土は3層に分けられ、レンズ状に自然堆積を呈している。

<床面・壁>床面は平坦で堅緻である。

壁は東壁が削平されている他は残存状況は良好であり、壁高は北壁30cm・南壁20cm・西壁30cmである。

<炉>住居址中央部に埋壺炉が検出され、この埋壺炉の際には30cm大の礫とピットが見られる。

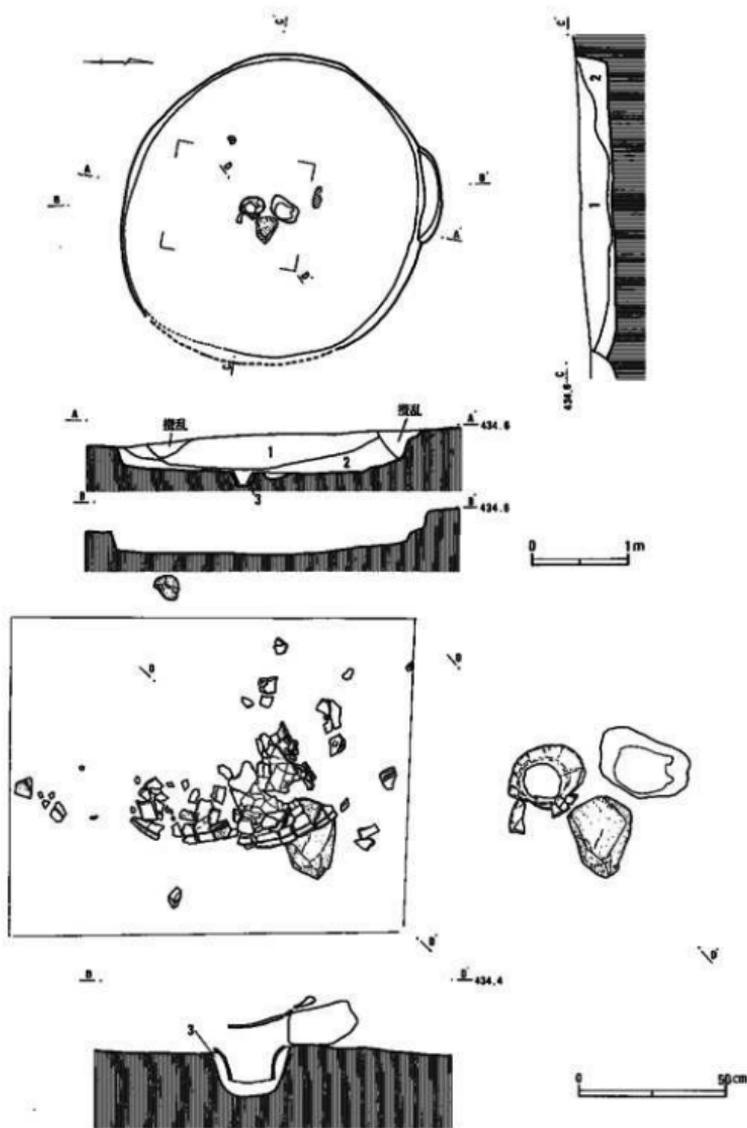
<その他の施設>本住居址の北壁中央部には幅1m・奥行き20cmのテラス状遺構が付設しており、入り口部とも考えられる。

ピットおよび周溝は検出されていない。

<出土遺物>遺物は縄文時代中期初頭の土器片が主体を占めている。住居址中央部にはNo1のR L縄文の地文に円形および逆U字形の貼付文が4単位施されている土器が埋壺炉として検出している。また、この埋壺炉上部には胴部のR L縄文の地文に2単位の懸垂文を有するNo2の深鉢形土器が横倒しになって潰れた状態で出土している。さらに覆土上層からは多量の黒曜石の剥片および石鏃3点が出土しており、他の住居址とは異なる埋設過程が想定される。

9号住居址(第14・15図、第4表、図版2-7～9、10-5・6)

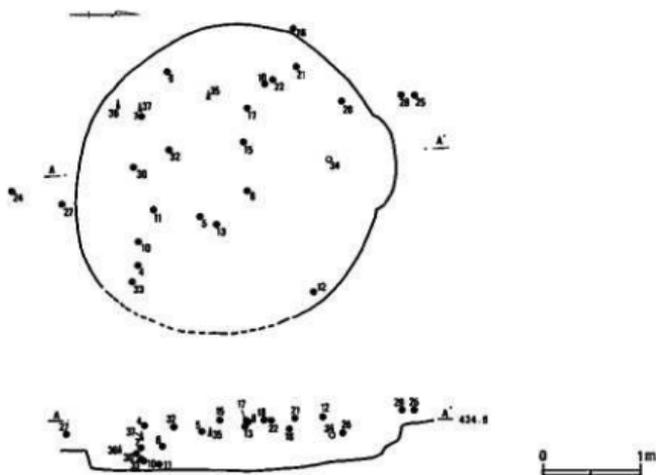
<位置>B-5グリットに位置する。北壁中央部を5号土坑、西壁を18号土坑と重複している。新旧関係は5・18号土坑が9号住居址を切っている。4.5m南側に8号住居址、30cm東に4号土坑が存在する。



8号住居址土層説明

層	色 調	特 徴
1	黒 色	黄色粒子を少量含む。焼土粒子・炭化物を少量含む。しまり有。
2	黄褐色	黒色土・黄色土が混在する。粘性有。
3	黒褐色	小石を含む。

第10図 8号住居址 平面・土層・断面・微細 炉址平面・土層



第11図 8号住居址 遺物分布

<形状・規模>平面形態は西壁側1/3が調査区外へ延びており、未調査であるがほぼ円形を呈し、主軸方位はN-13°-Wをとるとされる。

住居規模は推定長軸4.5m・推定短軸4.4mである。

<覆土>覆土は2層に分けられ、ほぼ自然堆積を呈しているが、下層の覆土内にロームブロックが斑状に、また住居址中央部の覆土に多量のロームブロックの混入がみられ、後世の攪乱を受けた可能性が考えられる。

<床面・壁>床面はほぼ平坦で堅緻である。

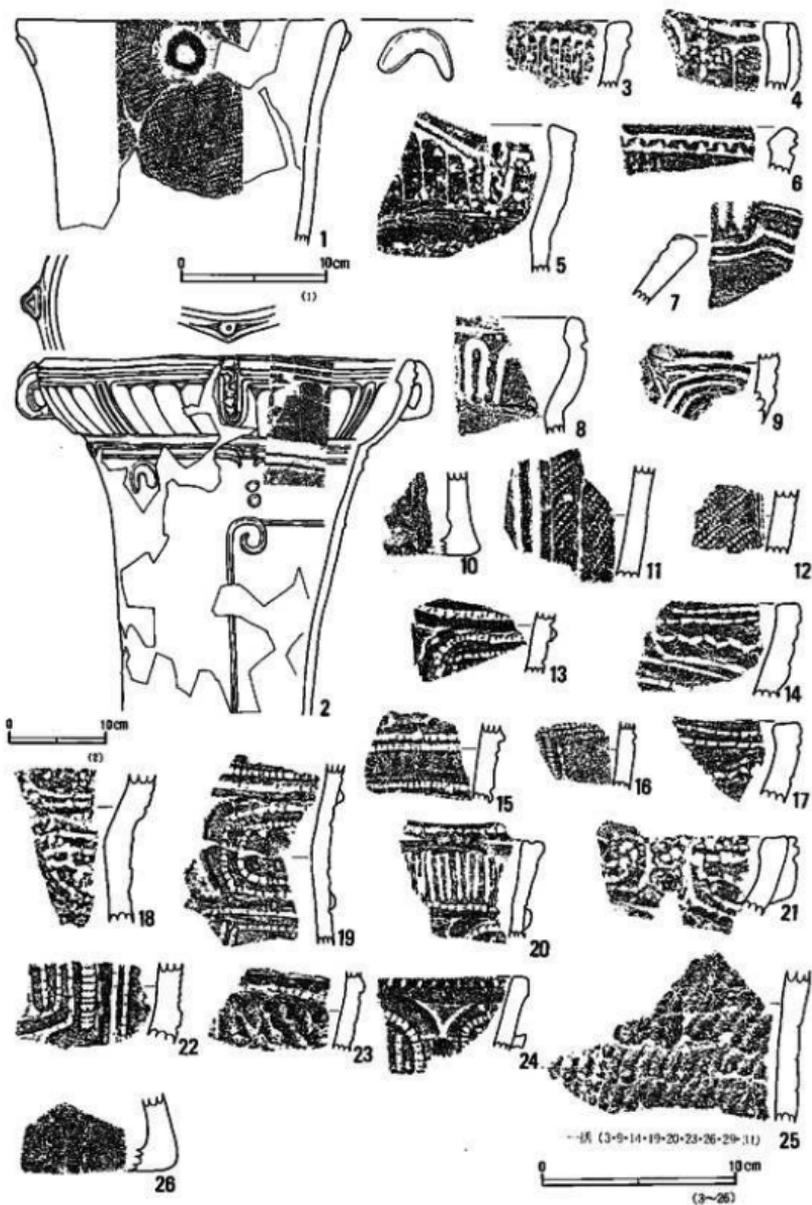
壁については遺存状況は悪く、比較的残りの良い東壁の壁高が12cmを測る。

<炉>住居址中央部やや北東から埋燬炉が検出され、床面を10cm程掘り込んでいる。この埋燬炉の東側40cmからは30cm四方の石が確認されている。

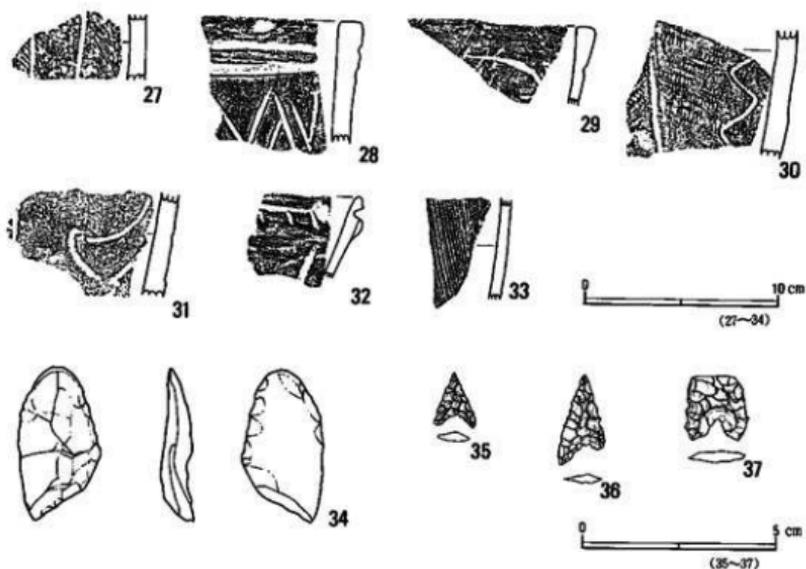
<その他の施設>本住居址に伴うと思われるピットは4個あり、それぞれ壁際に見られ、P1・P2・P3・P4は支柱穴になるとされる。また、P1・P2・P3・P4はほぼ同様の規模であり40cm×30cm・深さ20cmを測る。

周溝は検出されていない。

<出土遺物>遺物はほとんどのものが縄文時代中期前半に属するものであり、僅かに後期前半の遺物が混入している。No2は住居址中央部に位置する埋燬炉であり、ほぼ完形に近い形で検出されている。また、この埋燬炉の西側50cmからはNo1の小型鉢形土器が横になった状態で出土している。



第12图 8号住居址 出土遗物(1)



第13図 8号住居址 出土遺物 (2)

14号住居址 (第16図、第5表)

<位置> B-20グリットに位置する。南西コーナー部分で20号土坑と重複している。新旧関係は出土遺物より20号土坑が14号住居址を切っていると思われる。20号土坑の2.7m 南側に、13号住居址が存在する。

<形状・規模> 本住居址は東側2/3が調査区外へ延びており未調査のため、明確な平面形態をつかむことができない。

住居規模は西壁3mのみが測れる。主軸方向についても不明である。

<覆土> 覆土は単一層であり、自然堆積を呈している。

<床面・壁> 床面は残存部に関してはほぼ平坦で堅緻である。

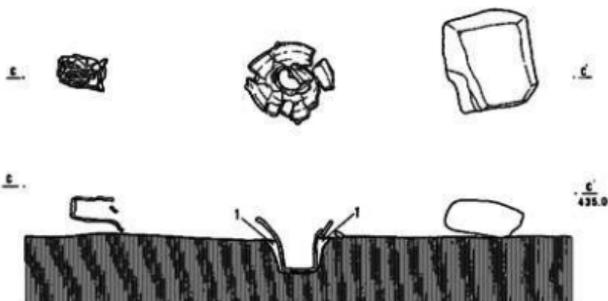
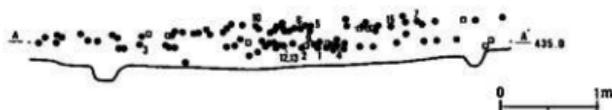
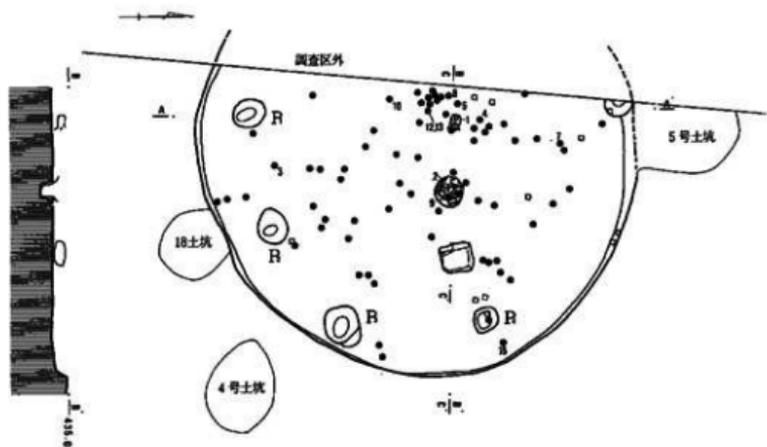
残存状況の良い北壁および西壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高はそれぞれ20cmを測る。

<炉> 炉についても調査箇所からは検出されず、不明である。

<その他の施設> 柱穴になると考えられるピットは検出されていない。

周溝も残存部では確認されていない。

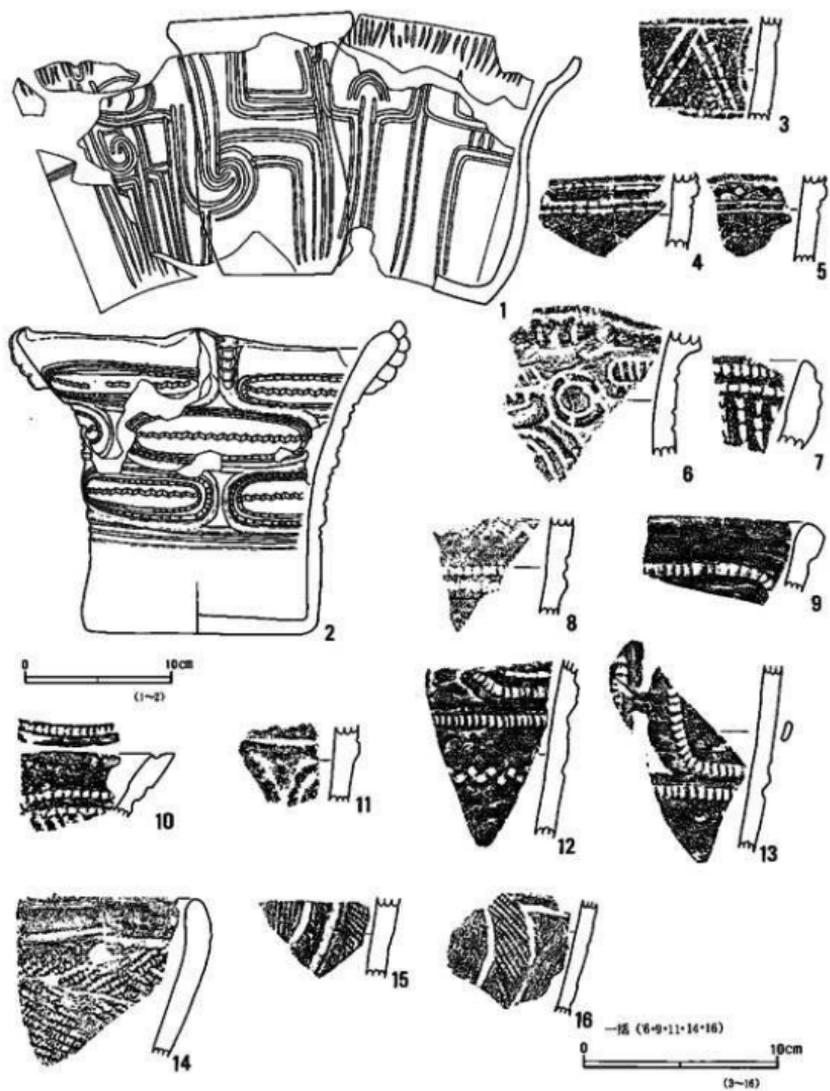
<出土遺物> 遺物は覆土内より少量出土しており、縄文時代中期後半の土器片が主体的に出土している。また本住居址の覆土上層に尖頭器(第59図19)が混入している。石質は頁岩であり、表面はかなり摩耗しており、剥離面は明確に把握できない状態である。



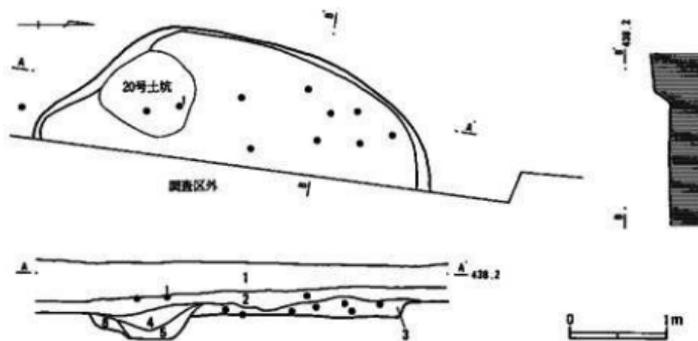
9号住居址土層説明

層	色	調	特	説
1	黄褐色		やや黒味がかっている。小石を含む。	

第14図 9号住居址 平面・土層・断面・遺物分布・微細



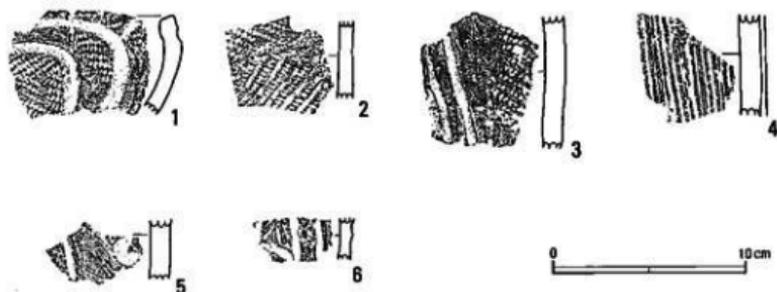
第15图 9号住居址 出土遺物



14号住居址土層説明

層	色調	特 徴
1	灰黒色	餅作土。(基本層序 I層)
2	黒色	顆粒状。(基本層序 IV層)
3	褐色	均質の土。しまり有。
4	褐色	3層より黒色土が混入している。
5	黄褐色	地山の黄褐色土に黒色土が混入している。しまり有。
6	黄褐色	5層より黄褐色土を少量含む。

※ 4、5、6層は、20号土坑覆土。



第16図 14号住居址 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

(2) 土坑

3号土坑 (第17図、第6・68表、図版11-7、13-18)

<位置> B-4グリットに位置しており、南側に8号住居址、北側に9号住居址、東側に1号集石が存在している。

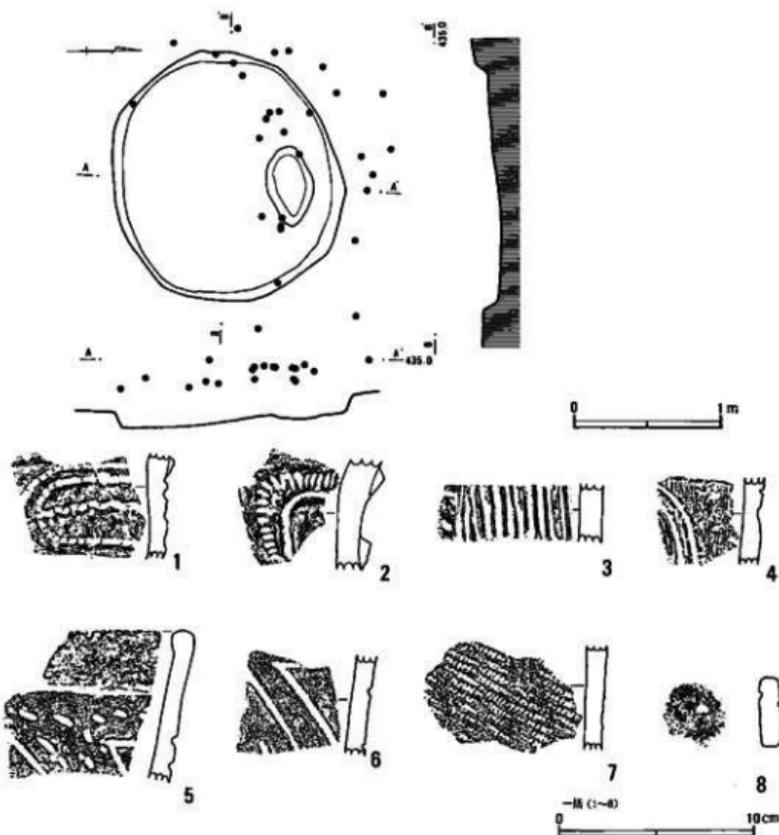
<形状・規模> 楕円形を呈しており、長軸1.75m・短軸1.55m・底面までの深さ23cmを測る。

<底・壁> 底は緩傾斜し、南壁際に不正楕円形のピットがあり、55×32cm・深さ3cmである。

壁はほぼ直立気味に立ち上がる。

<覆土> 黒褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は縄文時代中期前半から後期前半にかけての土器片が少量出土している。また、隣接する9号住居址ともほぼ同時期と考えられ、9号住居址の関連施設の可能性を有する。



第17図 3号土坑 平面・断面・遺物分布 出土遺物

7号土坑（第18図、第7表）

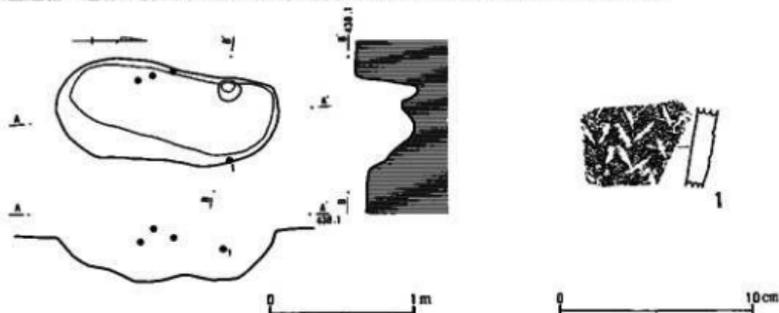
〈位置〉B-21・22グリットに位置する。南側に14号住居址、西側に8号土坑、北側に9・10号土坑が存在する。

〈形状・規模〉長楕円形を呈しており、長軸1.55m・短軸65cm・底面までの最深部35cmを測る。

〈底・壁〉底は凹凸がみられ、西壁北よりに径15cm・深さ10cmの円形ピットがある。壁は緩やかに立ち上がる。

〈覆土〉覆土は2層に分かれ、上層が黒褐色土、下層が黄褐色土である。

〈出土遺物〉遺物は覆土内上部より縄文時代中期後半の土器片が少量出土している。



第18図 7号土坑 平面・断面・遺物分布 出土遺物

8号土坑（第19図、第8表）

〈位置〉A・B-21・22グリットに位置する。東側に7号土坑、北側に9・10号土坑が存在する。

〈形状・規模〉西側が調査区外へ延びているため形状・規模は不明確であるが、不整楕円形を呈すと思われる。最深部は21cmを測る。

〈底・壁〉底は平坦であり、安定している。壁は緩やかに立ち上がる。

〈覆土〉黒褐色土の単一層である。

〈出土遺物〉遺物は縄文時代中期前半から後半にかけての土器片が僅かに出土している。また、弥生時代前期に属すると思われる条痕文系の土器片が1点混入している。

9号土坑（第20図）

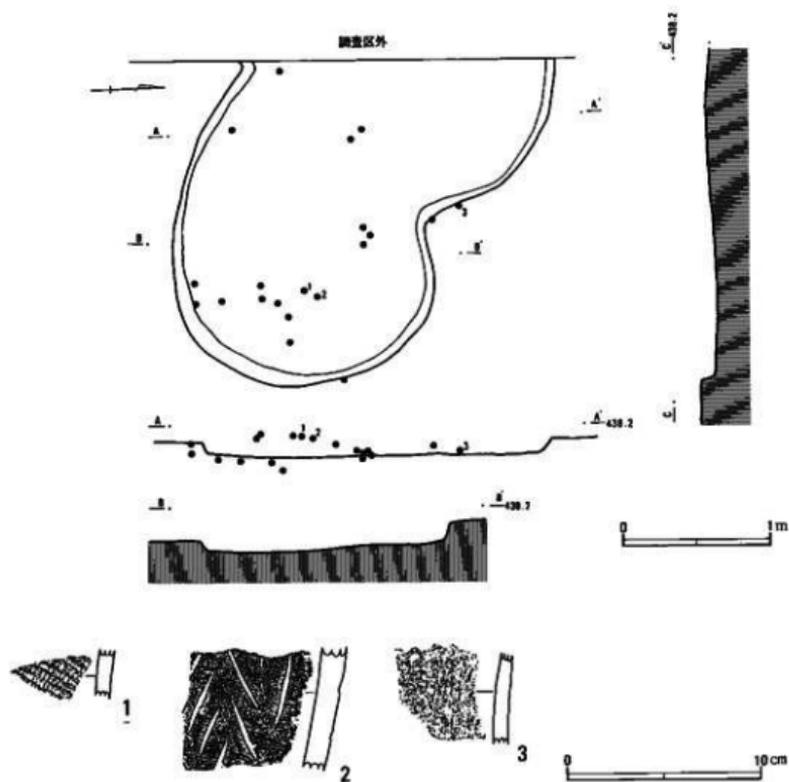
〈位置〉B-22・23グリットに位置する。北側に隣接して16号土坑があり、北東のコーナー部分は10号土坑と重複している。新旧関係は9号土坑が10号土坑に切られている。

〈形状・規模〉形状は不整長方形を呈しており、長軸2.1m・短軸1.5m・底面までの最深部28cmを測る。

〈底・壁〉底は平坦であるが2個の不整円形のピットがあり、これらの一画はさらに一段低く掘り込まれている。壁は垂直に立ち上がる。

〈覆土〉覆土は2層に分かれ、上層は黒褐色土、下層は黄褐色土である。

〈出土遺物〉遺物は縄文時代中期の土器片が少量出土しているが図示し得るものはなかった。



第19図 8号土坑 平面・断面・遺物分布 出土遺物

10号土坑（第20図、第9表、図版11-8）

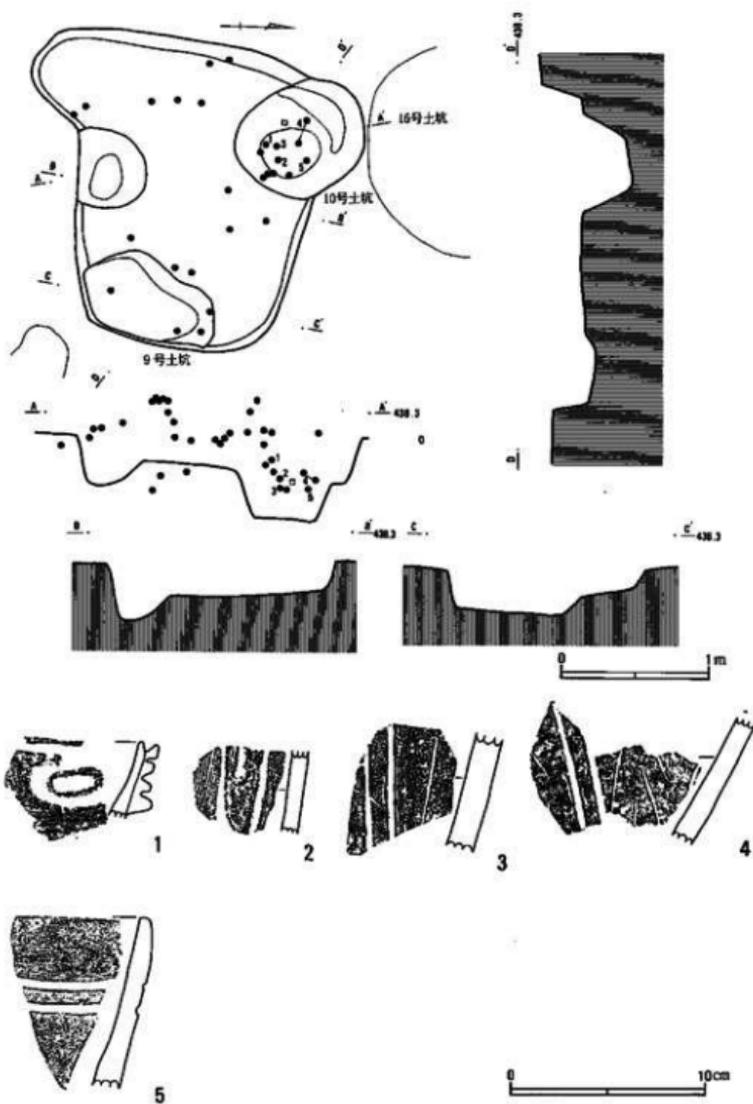
<位置> B-23グリットに位置する。9号土坑と重複している。新旧関係は10号土坑が9号土坑を切っている。

<形状・規模> 形状は楕円形を呈し、長軸90cm・短軸75cm・最深度62cmを測る。

<底・壁> 底は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土> 黒褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は覆土内上層に比較的まとまって縄文時代中期後半に属する土器片が少量出土している。



第20图 9·10土坑 平面·断面·遗物分布 出土遗物

12号土坑（第21図、第10表、図版11-9・10）

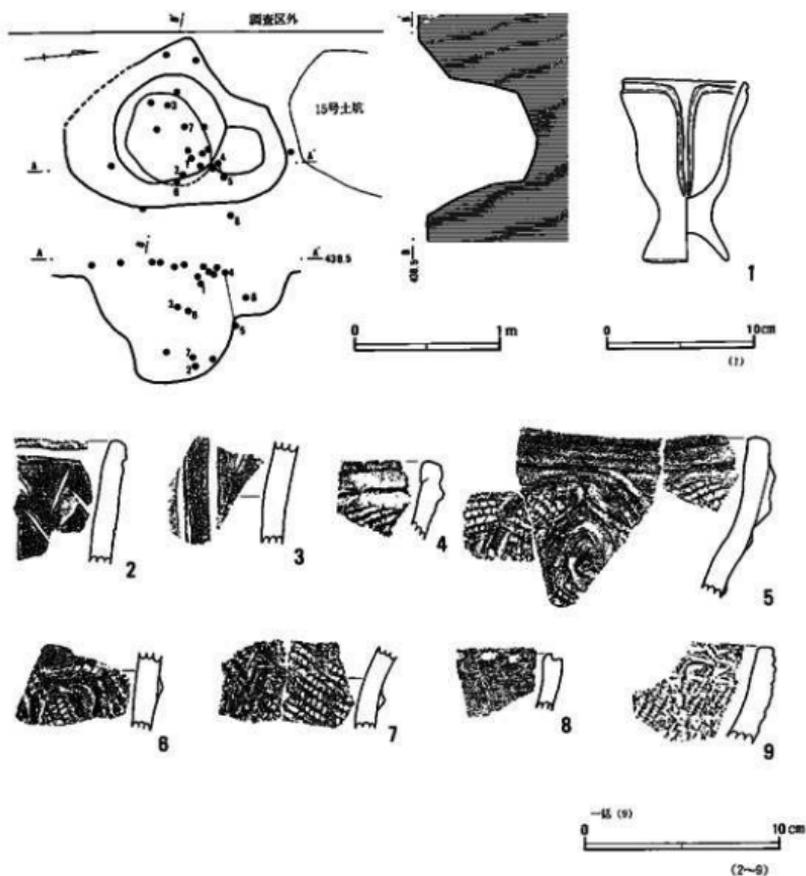
<位置> A-26グリットに位置する。北側に近接して15号土坑、南側に26号土坑、東側に25号土坑が存在する。

<形状・規模> 形状は不整形円形を呈し、長軸1.5m・短軸1.15m・最深部73cmを測る。

<底・壁> 底は中央部が窪み、壁は急傾斜で立ち上がり、北壁側の一部に小テラスを有している。

<覆土> 黒褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は縄文時代中期後半の土器片が比較的多く出土している。出土状態は覆土内下層部から上層部にかけて広い範囲で検出されている。また、覆土上層部からは完形に近い形で



第21図 12号土坑 平面・断面・遺物分布 出土遺物

胴部が縦位に4単位のコ字区画が施された小型ワイングラス形土器（No1）が検出されている。
この土器は脚部は非常に脆く、また変色しており2次焼成を受けていると考えられる。

13号土坑（第22図、第11・72表、図版5-36、11-11、13-20）

- ＜位 置＞B-2・3グリットに位置する。北東に8号住居址が存在する。
- ＜形状・規模＞形状は不整楕円形を呈している。長軸1m・短軸75cm・最深部20cmを測る。
- ＜底・壁＞底は南傾斜している。壁は南側が緩やかに、北側が急傾斜に立ち上がる。
- ＜覆 土＞黒褐色土の単一層である。
- ＜出土遺物＞遺物は覆土内より、縄文時代中期前半の土器片がまとまって出土している。また、磨石も覆土上面より検出された。

15号土坑（第23図、第12表、図版11-12）

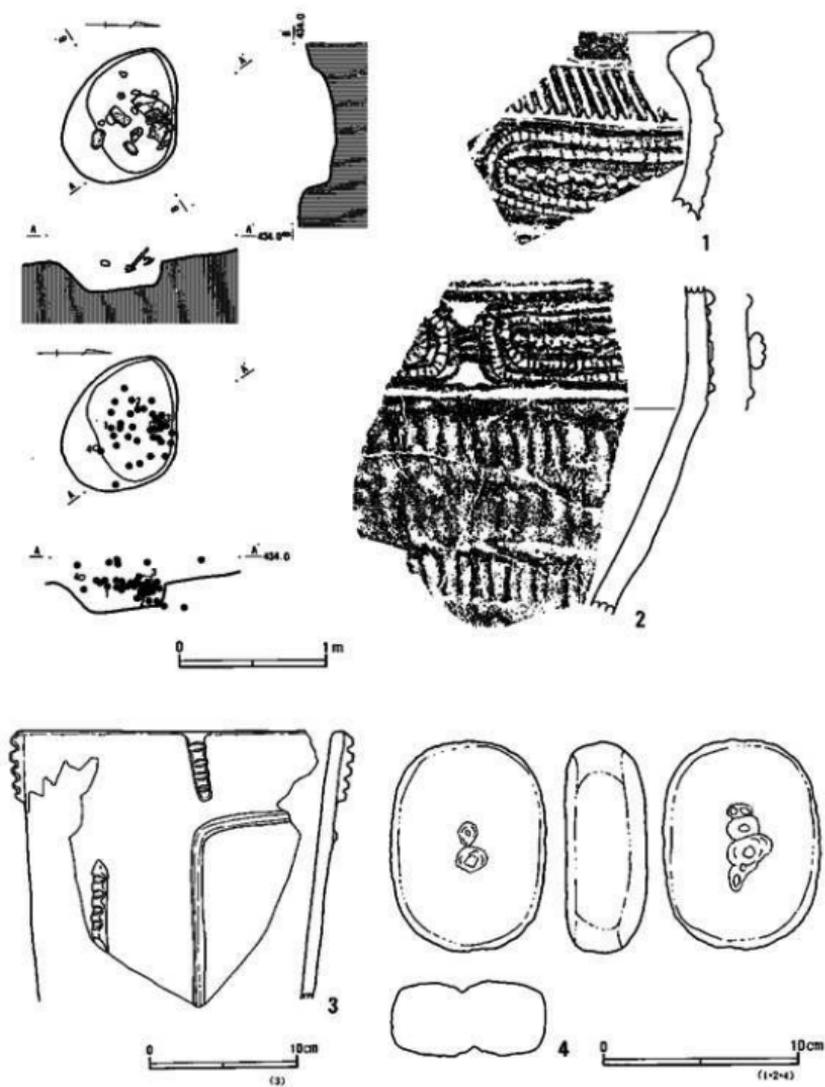
- ＜位 置＞A-26グリットに位置する。南側に近接して12号土坑が存在する。
- ＜形状・規模＞形状は不整楕円形を呈している。長軸1.32m・短軸95cm・最深部46cmを測る。
- ＜底・壁＞底は平坦である。壁はやや急傾斜で立ち上がる。
- ＜覆 土＞黒褐色土の単一層である。
- ＜出土遺物＞遺物は覆土内より、縄文時代中期後半の土器片が少量出土している。No2は胴部に歯状工具によるハの字の文様を施している。

16号土坑（第23図、第13表）

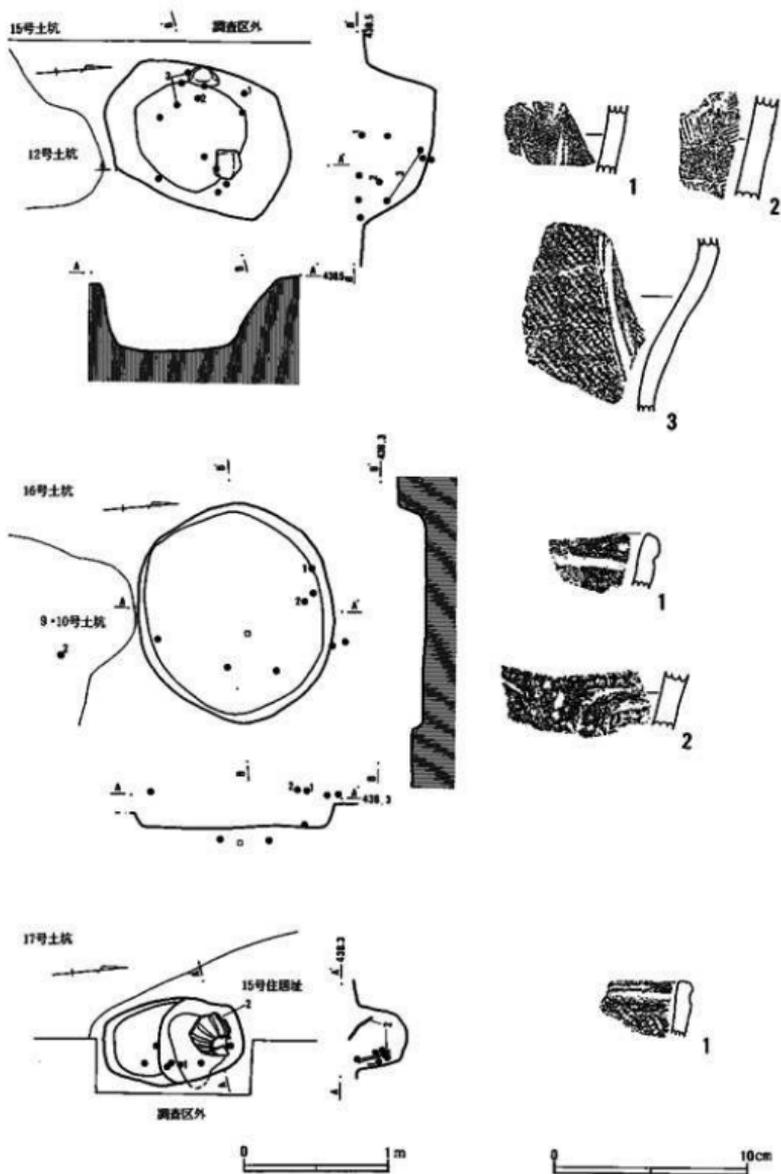
- ＜位 置＞B-23グリットに位置する。南側に隣接して9・10号土坑が存在する。
- ＜形状・規模＞形状は円形を呈している。長軸1.5m・短軸1.38m・最深部15cmを測る。
- ＜底・壁＞底は平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。
- ＜覆 土＞黒褐色土の単一層である。
- ＜出土遺物＞遺物は縄文時代中期前半の土器片が僅かに出土している。図示し得たのは2点のみであるがいずれも摩滅が著しく、施文方法は明確に判断できなかった。

17号土坑（第23・24図、第14表、図版5-37、11-13）

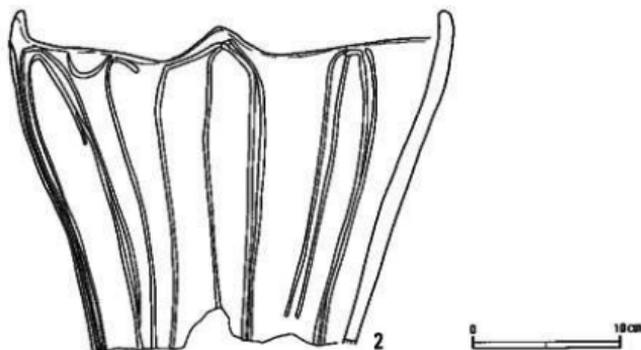
- ＜位 置＞B-27グリットに位置する。本土坑は遺物の出土状況より、屋内あるいは屋外埋塞に伴うものと思われる。重複する状況で確認された15号住居址は、弥生時代末葉～古墳時代初頭としたが本土坑を付設する縄文時代中期の住居址の可能性も考えられる。
- ＜形状・規模＞形状は不整長方形を呈している。長軸96cm・短軸60cm・最深部34cmを測る。
- ＜底・壁＞底は皿状に窪んでおり、壁は急傾斜で立ち上がる。
- ＜覆 土＞黒褐色土の単一層である。
- ＜出土遺物＞遺物は縄文時代中期後半の土器片が僅かに検出されている。曾利V式に比定されるNo2は逆さに伏せてある状態で検出され、胴部下半から底部にかけては存在しておらず、意識的にカットされているかのように胴下半端部は水平に遺存している。また、覆土内より縄文時代晩期の水式の土器片も出土している。



第22图 13土坑 平面·断面·遗物分布 出土遗物



第23图 15·16·17号土坑 平面·断面·遗物分布 出土遗物 (1)



第24図 17号土坑 出土遺物 (2)

19号土坑 (第25図、第15表、図版5-38、11-14)

<位 置> B-37グリットに位置する。南側に16号住居址が存在している。

<形状・規模> 形状は東側が調査区外へ延びているため、正確なプランは不明である。底面までの最深部は38cmを測る。

<底・壁> 底は平坦であるが中央部に不整形のピットがある。壁は北壁が階段状のテラスを呈し、他の壁は緩やかに立ち上がる。

<覆土> 黒褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は縄文時代中期後半の土器片が底部付近よりまとまって出土している。

22号土坑 (第26図、第16・73表、図版13-19)

<位 置> D-35グリットに位置する。

<形状・規模> 本土坑は試掘坑No23の北側断面により確認されたため、北側半分しか残存しておらず、正確なプランは不明である。最深部は1mを測る。

<底・壁> 底は平坦である。壁は南壁以外の残存部は急激な立ち上がりを見せている。

<覆土> 黒褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は覆土上層から縄文時代中期中葉の土器片が少量出土しており、周辺部からもまとまって縄文時代中期中葉の土器片が検出されている。

23号土坑（第26図、第17・69・74表、図版13-18・19）

<位 置> A・B-39グリットに位置する。南側に19号土坑が存在する。

<形状・規模> 本土坑は試掘坑№15の掘り下げ中確認されたため、東側の上部は削平されている。
推定長軸1.15m、短軸1.05m、最深部82cmを測る。

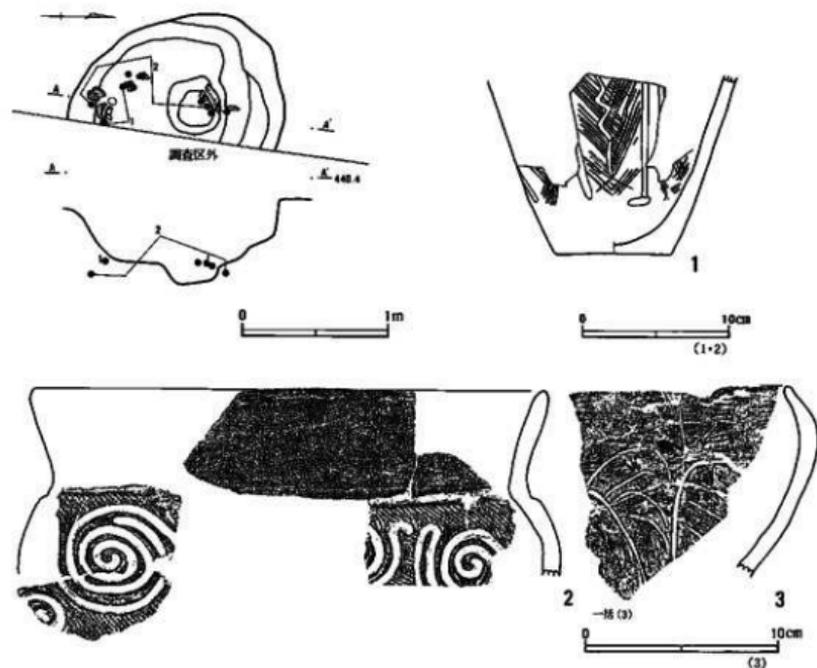
<底・壁> 底は平坦である。壁は下部が袋状に内湾し、上部はやや外反しながら急傾斜で立ち上がる。

<覆 土> 黒褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は縄文時代中期後半の土器片が底部付近にまとまって出土している。また土器片と共に黒曜石剥片および土製品（№3）が検出されている。

24号土坑（第27図、第18表）

<位 置> B-27グリットに位置する。東側に15号住居址、南側に25号土坑が存在する。



第25図 19号土坑 平面・断面・遺物分布 出土遺物

- <形状・規模>本土坑は試掘坑№ 8 の掘り下げ中確認されたため、西側の上部は削平されている。
推定長軸1.05m・短軸95cm・最深部50cmを測る。
- <底・壁>底は平坦である。壁は下部がやや緩やかに立ち上がり、上部は急傾斜で立ち上がる。
- <覆 土>黒褐色土の単一層である。
- <出土遺物>遺物は覆土内より縄文時代中期後半の土器片が出土している。

25号土坑（第27図、第19表）

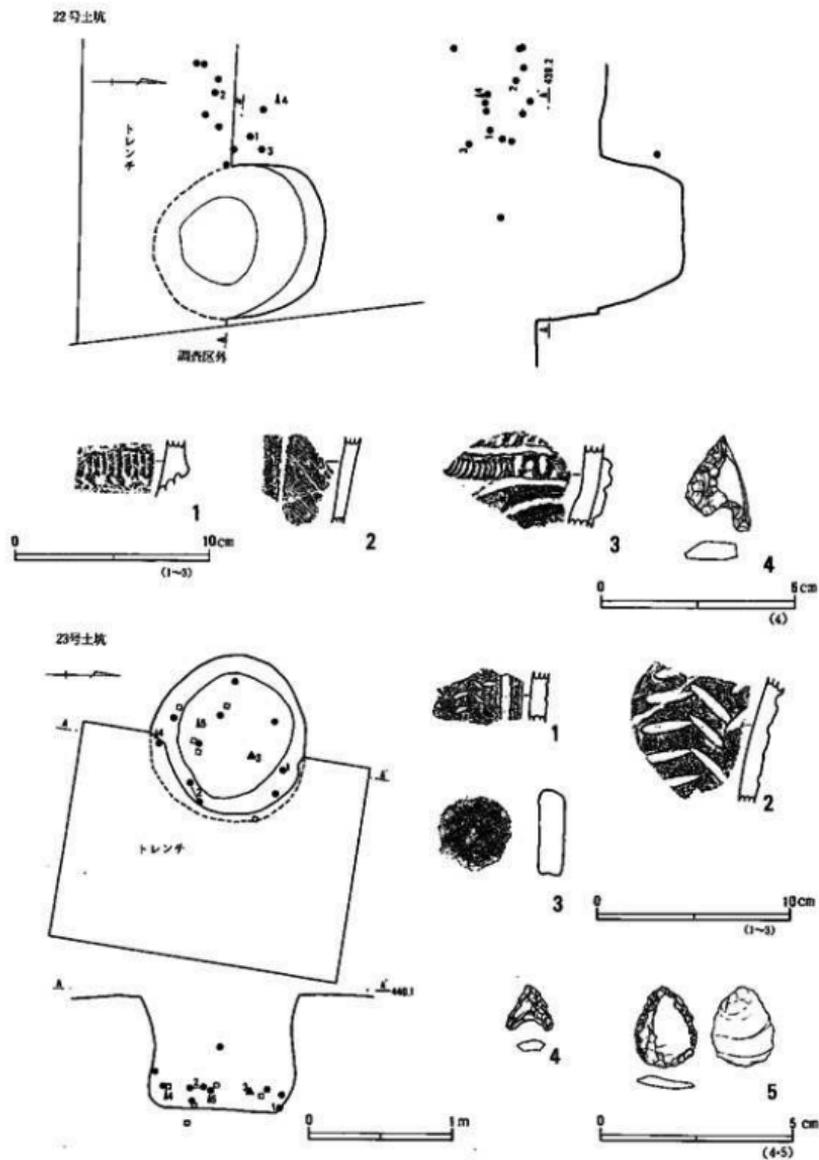
- <位 置>B-26グリットに位置する。北側に24号土坑、西側に12・15号土坑が存在する。
- <形状・規模>形状は円形を呈している。長軸80cm・短軸76cm・最深部80cmを測る。
- <底・壁>底は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆 土>黒褐色土の単一層である。
- <出土遺物>遺物は縄文時代中期後半の土器片が覆土上層より出土している。№ 2の底部片には網代痕がみられる。

26号土坑（第27図）

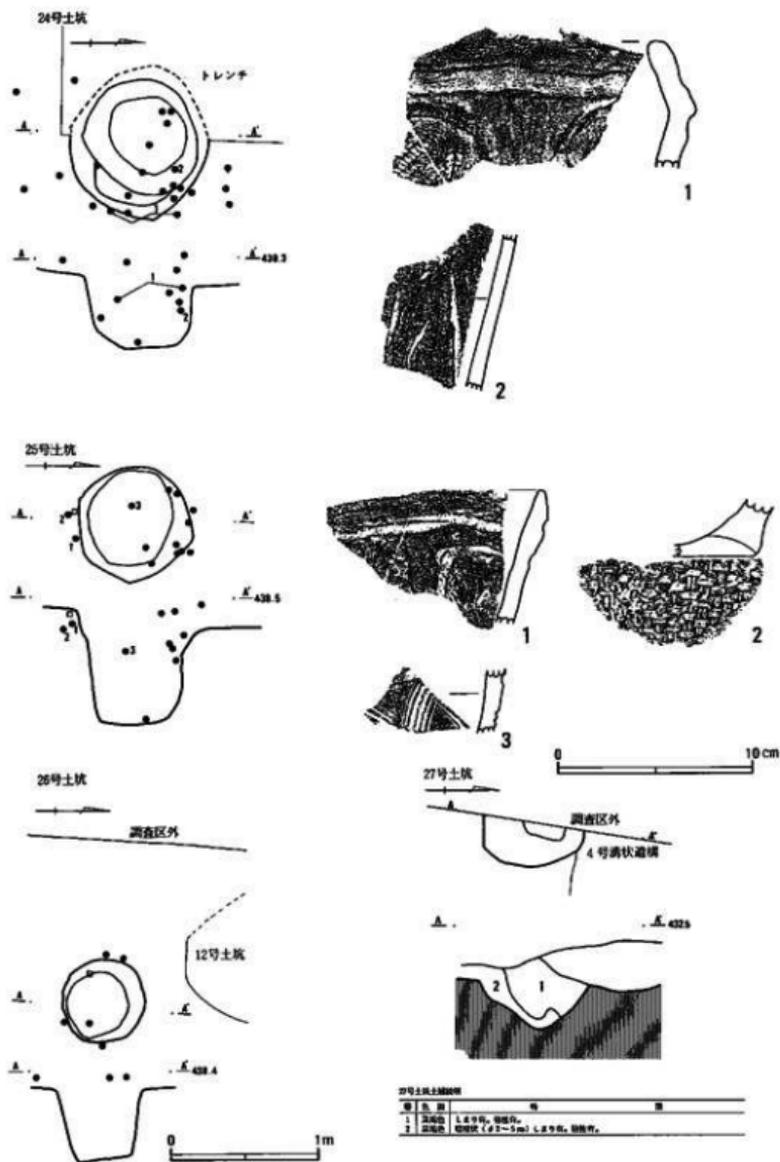
- <位 置>B-26グリットに位置する。北側に25号土坑、北西側に12・15号土坑が存在する。
- <形状・規模>形状は円形を呈している。長軸57cm・短軸56cm・最深部52cmを測る。
- <底・壁>底は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆 土>黒褐色土の単一層である。
- <出土遺物>遺物は本土坑内からは検出されなかったが、周辺より縄文時代中期後半の土器片が出土している。

27号土坑（第27図）

- <位 置>A-0グリットに位置する。東側に7号住居址、北側に3号溝状遺構が存在し、北側部分は4号溝状遺構と重複し、新旧関係は3号溝状遺構が7号住居址を切っている。
- <形状・規模>本土坑は西側が調査区外へ延びているため、正確な平面プランは不明である。最深部は34cmを測る。
- <底・壁>底は中央部が窪んでおり、壁が底部より緩やかに立ち上がる。
- <覆 土>覆土は2層に分けられる。
- <出土遺物>遺物は縄文時代の土器片が僅かに出土しているが、いずれも細片のため時期は不明である。



第26図 22・23号土坑 平面・断面・遺物分布 出土遺物



第27図 24・25・26・27号土坑 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

(3) 集石遺構

1号集石（第28・29図、第21表、図版9-66、12-15）

〈位 置〉C-4グリットに位置する。南側に8号住居址、北側に9号住居址・4号土坑、西側に3号土坑が存在している。

〈形状・規模〉本集石は平面プラン等がはっきり捉えられなかったためトレンチを設定し調査を行い、2つのピットを伴う集石土坑であることが確認された。形状は不整形円形を呈し、北側と南側の2箇所にピットがあり、南側のピット内に4個の礫が検出された。礫は土坑内の中央底部付近にそれぞれの礫を立てかけた状態で検出された。規模は長軸1.27m・短軸83cm・底面までの深さ35cmである。ピットは北側が長軸41cm・短軸31cm・深さ10cm、南側が長軸36cm・短軸35cm・深さ6cmである。

〈底・壁〉底は2つのピット部分で一段低くなるが、この他はほぼ平坦である。壁は急傾斜に立ち上がる。

〈覆 土〉覆土は2層に分層され、上層の明暗茶褐色土は2つのピット以外にみられ、下層の暗茶褐色土はピット内のみみられる。

〈出土遺物〉遺物は礫周辺部の覆土上層に集中して出土しており、いくつかの接合資料（No1・2・3・4など）がある。No1は浅鉢形土器であり、口唇部にLR縄文が横位に施され、刻みおよび沈線が巡る。No2・3・4は同一個体と考えられ、地文にそれぞれRLの縄文を施している。これらの土器片は故意に破砕され、その上部に礫が置かれたものと考えられる。いずれも縄文時代中期初頭の土器片である。

2号集石（第30図、図版9-67）

〈位 置〉C-6グリットに位置する。西側に9号住居址、南側に1号集石が存在する。

〈形状・規模〉本集石は土坑を伴うものかはっきりしなかったため、集石を半載する形でトレンチを設定した。この結果浅い掘り込みが確認され、土坑を伴うことが明らかとなった。土坑の形状は円形を呈し、規模は径45cm・底面までの最深部9cmを測る。

礫は人拳大の大きさを中心にして14個みられ、土坑の底面近くに集中している。

〈底・壁〉底は皿状を呈している。壁は底部より緩やかに立ち上がる。

〈覆 土〉黒褐色土の単一層である。

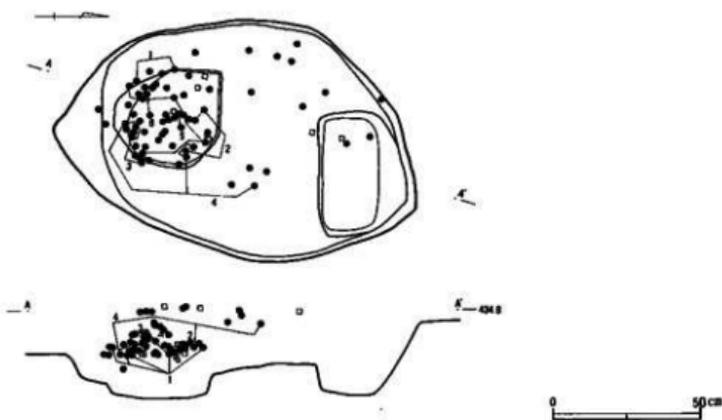
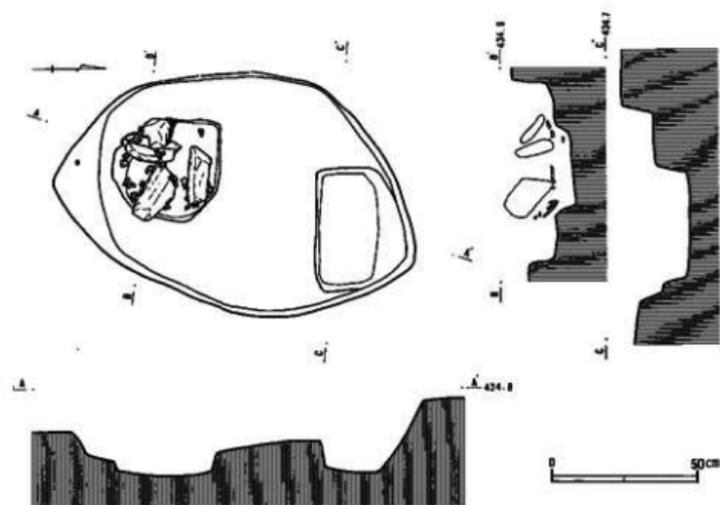
〈出土遺物〉遺物は縄文時代の土器片が1点出土しているが細片のため時期は不明である。

3号集石（第30図、第75表、図版9-68、13-20）

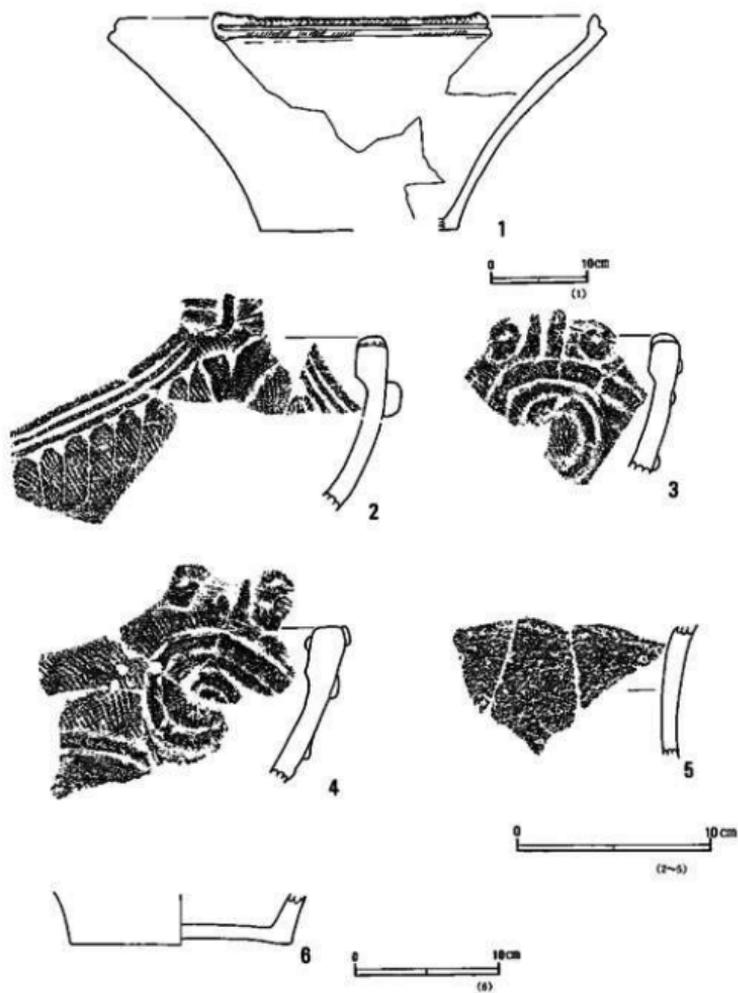
〈位 置〉B-22グリットに位置する。北側に近接して9号土坑、南側に近接して8号土坑が存在する。

〈形状・規模〉本集石は土坑を伴わず、基本層序層（遺物包含層）中に径20cmの範囲にまとまって確認された。礫は径5cm大の大きさを中心にして14個みられた。

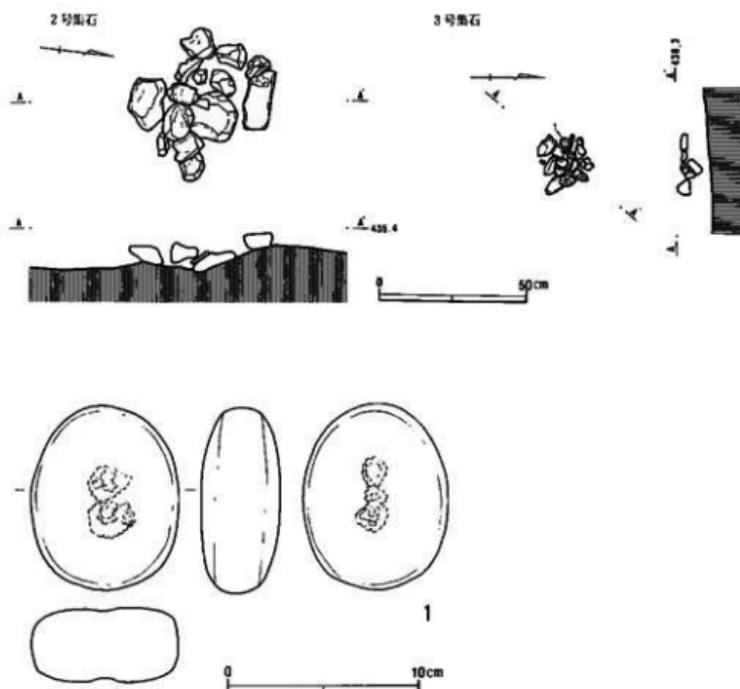
〈出土遺物〉遺物は礫に混じって凹石が1点出土しており、2面に凹部がみられる。



第28图 1号集石 平面・断面・遺物分布



第29图 1号集石 出土遺物



第30図 2・3号集石 平面・断面 出土遺物

(4) 竪穴状遺構

2号竪穴状遺構 (黒色落ち込み部) (第31図、第22・76表、図版9-70、13-19)

<位置> C-7・8グリットに位置する。北側に10号住居址、南側に2号集石、西側に6号土坑が存在する。東側約1/2は調査区外へ延び未調査であり、北側は一部攪乱により破壊されている。

<形状・規模> 平面形態は遺存部より不整楕円形を呈するものと思われる。規模は長軸5.9m・推定短軸4mである。

<覆土> 覆土は2層に分けられ、3層内において黄色砂粒子が混入している。

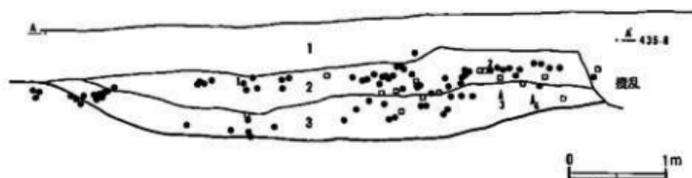
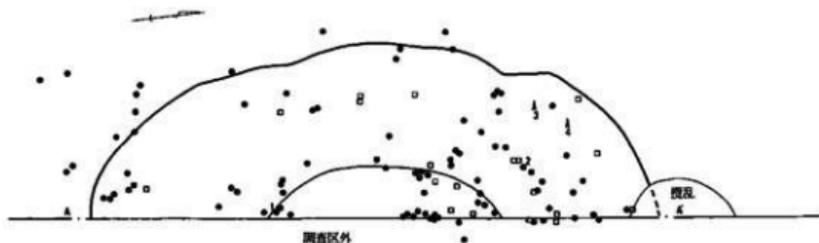
<床面・壁> 底面は中央部に向けて皿状に窪んでいる。

壁は残存部では緩やかに立ち上がり、壁高は最深部で80cmを測る。

<その他の施設> ビット等の掘り込みは確認されていない。

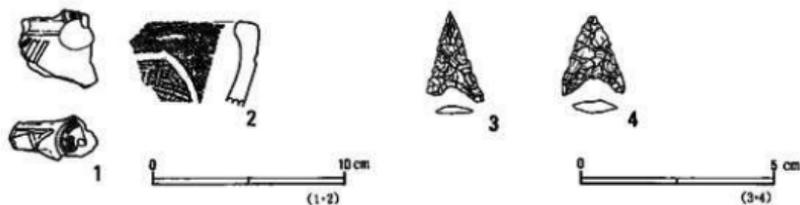
<出土遺物> ほとんどの遺物が2層内から出土しており、また細片が多いために図示し得るものは僅かである。

(5) 埋設土器



2号壘穴状遺構土層説明

層	色	調	特	備
1	灰褐色		耕作土。(基本層序 1層) 粘性有。	
2	黒色		きめが細かく、やや砂質。	
3	褐色		黄砂粒子を含む。しまり有。粘性強。	



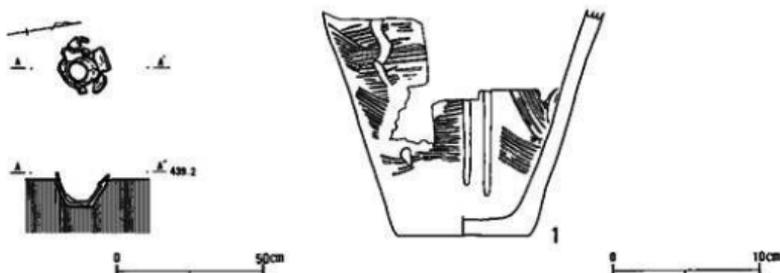
第31図 2号壘穴状遺構 平面・土層・遺物分布 出土遺物

2号埋設土器 (第32図、第23表、図版9-71)

<埋設状態> A-32グリットより南側1mに存在している。検出された当初は住居址内の埋設土器かと思われたため、周囲を精査し炉址および柱穴の検出につとめたが、それらの痕跡は全く確認できず、単独の埋設土器と判断した。土器は正置の状態で埋設されており、上部は既に破壊されていた。掘り込みは径16cmの円形を呈しており、確認面からの深さは8cmと浅い。

<出土土器>

埋設された土器は沈線縦位区画内を御歯状工具による条線を施している。曾利Ⅳ式に比定される。底部径9.2cm、現存高15.6cmを測る。



第32図 2号埋設土器 平面・断面 出土遺物

4. 弥生時代～古墳時代

検出した遺構は住居址8軒、土坑2基である。

(1) 住居址

10号住居址（第33・34図、第31表、図版2-10～12、13-21）

<位置>B-10・11グリットに位置する。北側12mに17号住居址、16mに11号住居址が存在する。

<形状・規模>平面形態は小型の隅丸長方形を呈している。主軸方位はほぼ真北にとる。

住居規模は長軸3.2m・短軸2.7mである。

<覆土>覆土は4層に分けられ、ほぼ自然堆積を呈しているが、2層から1層が堆積する過程で、1層が壁断のみに堆積している様子が窺われた。

<床面・壁>床面は遺存状況が比較的良好で平坦で堅緻である。貼床は確認作業を行っていないため施されたかどうかは不明である。

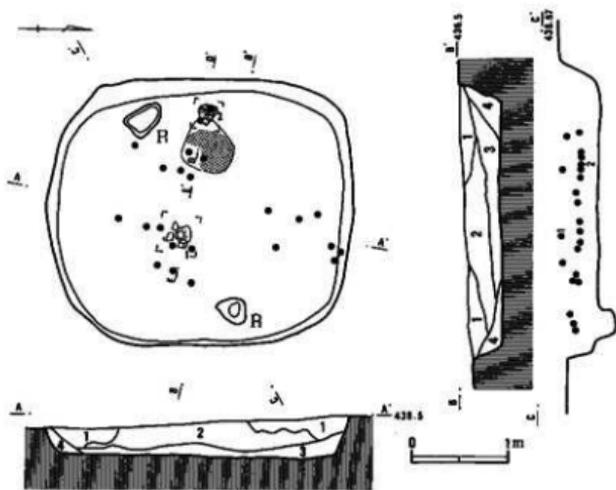
壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東壁30cm・西壁41cm・南壁26cm・北壁40cmを測る。

<炉>住居址中央部や西よりに焼土が見られ、また住居址の規模が小型であることなどからこれは炉としての構築ではなく、床面上で火を焚いた跡と思われる。

<その他の施設>本住居址に伴うと思われるピットは2ヶ所あり、位置的にそれぞれ柱穴と考えられる。また他の柱穴は確認されなかった。P1は40cm×24cm・深さ10cm、P2は32cm×25cm・深さ20cmである。

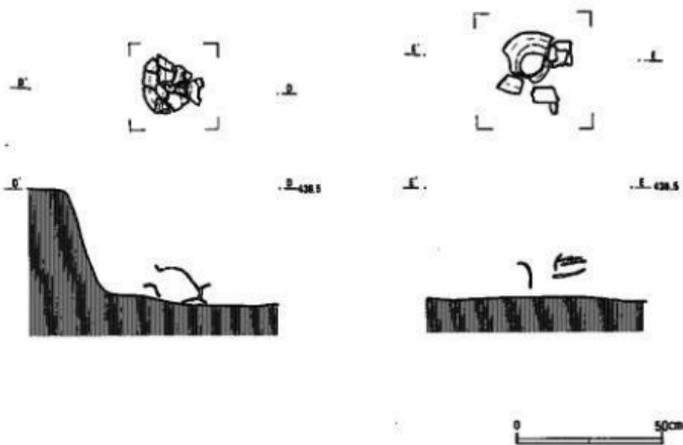
掘り方は確認を行っていないため不明であるが他の住居址と同様と思われる。

周溝は確認されていない。

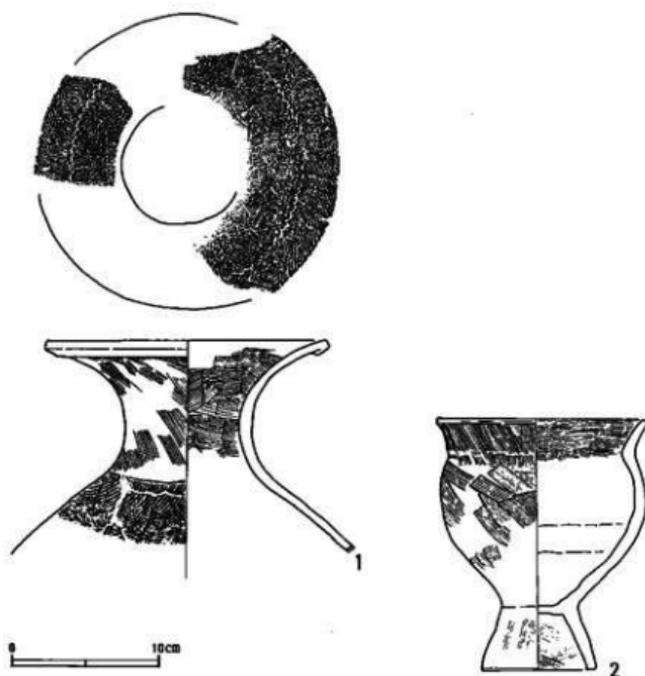


10号住居址土層説明

層	色調	特	徴
1	褐色	黄色土細粒子を含む。	
2	黄褐色	黄色土をブロック状に多量に含む。しまり有。	
3	黒色	黄色土細粒子・焼土粒子を含む。しまりに欠ける。	
4	褐色	黄色土細粒子を少量含む。	



第33図 10号住居址 平面・土層・断面・遺物分布・微細



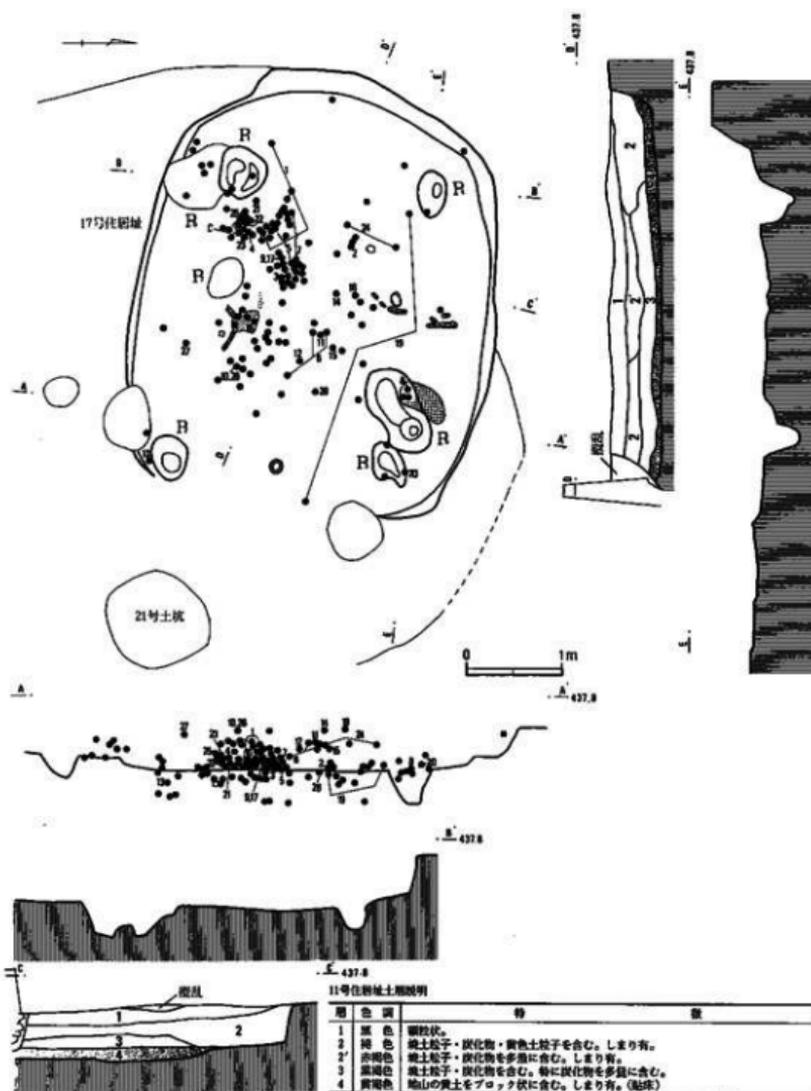
第34図 10号住居址 出土遺物

<出土遺物> 覆土下層からの出土が多く比較的良好な資料があり、住居址中央部に壺形土器（No 1）が、西壁際の床面直上に横たわった状態で台付寛（No 2）が出土している。

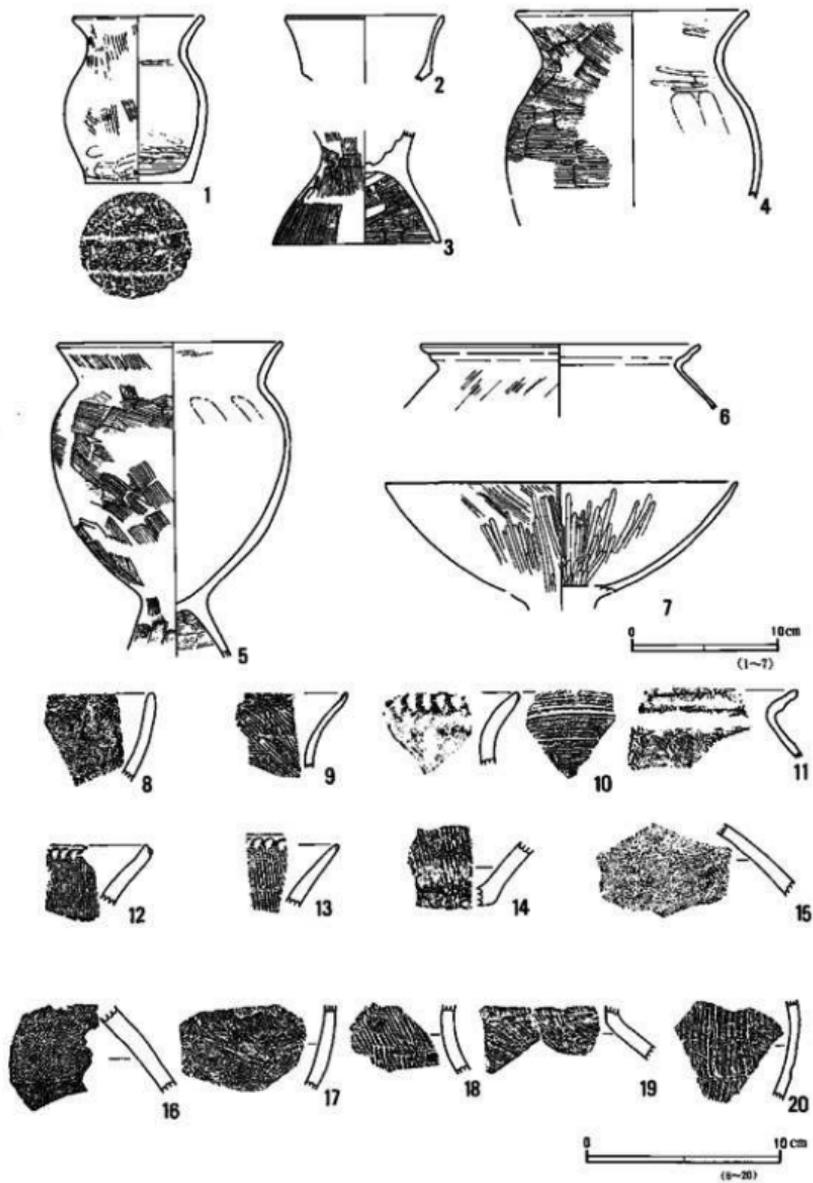
また、覆土内（第3層）に石匙（第59図18）が混入している。

11号住居址（第35～37図、第32表、図版2-13、13-22、16-28）

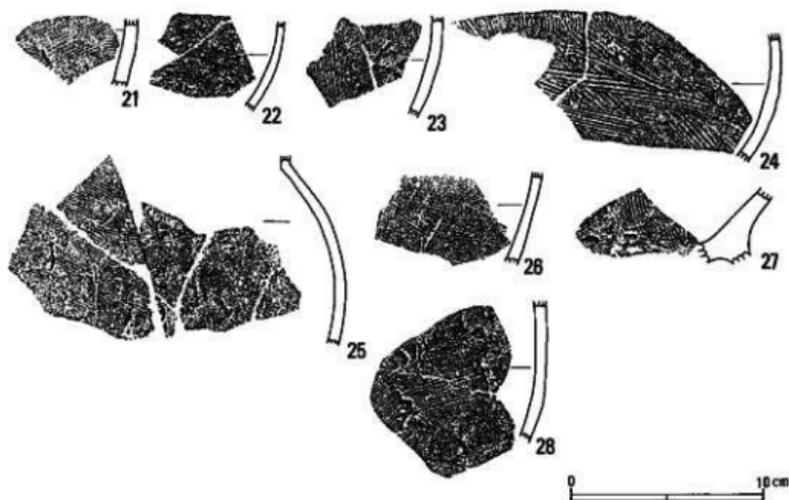
<位 置> B-15グリッドに位置する。本住居址は17号住居址と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から本住居址の方が新しいと考えられる。北側に近接して12・13号住居址が存在する。西壁および北壁の一部を除く大部分は17号住居址に、また東側は調査開始直前まで使われていた農道および旧道（農道のアスファルトを剥ぎ取り、検出された遺構）により破壊されている。



第35図 11号住居址 平面・土層・断面・遺物分布



第36图 11号住居址 出土遗物 (1)



第37図 11号住居址 出土遺物 (2)

<形状・規模>平面形態は西壁および床面の遺存状況等からやや胴の張る隅丸長方形を呈していると思われる。主軸方位はN-80°-Wである。

住居規模は推定長軸4.6m・短軸3.8mである。

<覆土>覆土は4層に分けられ、2層から3層にかけては多量の焼土および炭化物が含まれており、焼失住居の可能性が窺われる。

<床面・壁>床面はほぼ平坦であるが軟弱であり、住居址中央部は遺存状態が悪く、荒れていた。床の構造は地山を掘り窪めた後、地山のロームブロックが混入している黄褐色土を埋め戻し、貼床(第4層)を構築している。貼床の厚さは約10cmで、住居址の全体に貼られていた。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存している西壁および北壁で40cmを面る。

<炉>本住居址の炉址は検出されなかったが、住居址中央部の遺存状況の悪かった部分に存在した可能性がある。

<その他の施設>住居址内においてピットが7ヶ所検出されたが、このうちP5・P6は17号住居址の柱穴と考えられ、本住居址に伴うピットはP1・P2・P3・P4・P7であり、このうちP1・P2・P3・P4は主柱穴と考えられるが、掘り方の底面で確認されたものである。P1は48cm×46cm・掘り方の底面からの深さ30cm、P2は46cm×38cm・掘り方の底面から深さ20cm、P3は40cm×30cm・掘り方の底面からの深さ40cm、P4は50cm×30cm・掘り方の底面からの深さ34cmを測る。またP7も掘り方の底面より確認されたものであり、貯蔵穴の可能性を持ち、46cm×33cmの不整楕円形を呈し、掘り方の底面からの深さ10cmを測る。

掘り方は床下全面におよんでおり、底面は凹凸が激しく荒れており、中でも中央部は一段高く、他は深く掘り込まれている。

周溝は検出されていない。

<出土遺物>住居中央部の床面の遺存状況の悪い部分での出土量が多く、また軟弱な貼床部内及び覆土下層においても遺物が多く検出された。

12号住居址（第38・39図、第33表、図版2-14、14-23、16-29）

<位置>B・C-16・17グリットに位置する。本住居址は13号住居址と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から本住居址の方が新しいと考えられる。南側に近接して11・17号住居址が存在する。東壁および南壁は調査開始直前まで使われていた農道および旧道（農道のアスファルトを剥ぎ取り、検出された遺構）により破壊されている。

<形状・規模>平面形態は西壁・北壁および柱穴の遺存状況等からやや胴の張る隅丸長方形を呈していると思われる。主軸方位はN-2°-Wである。

住居規模は推定長軸5m・推定短軸4mである。

<覆土>覆土は、5層に分けられ、レンズ状に自然堆積を呈している。

<床面・壁>床面は堅緻な貼床でほぼ平坦である。貼床の厚さは約10cmで、地山のロームブロックが混入している黄褐色土を埋め戻し、住居址の全体に貼られている。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存している西壁および北壁で50cmを測る。

<炉>炉址は住居中央部やや北寄りに上下に重複して2基検出された。下方の炉をb炉、上方の炉をa炉として記述する。掘り方は66cm×46cmの南北に長い不整形円形を呈し、皿状に若干掘り窪めている。aおよびb炉は白色粘土が貼られた粘土板炉である。

<その他の施設>住居址内においてピットが6ヶ所検出された。このうちP1・P2・P3・P4は貼床検出時に確認され、対角線上に配置しており支柱穴と考えられる。P1は56cm×50cm・深さ90cm、P2は53cm×48cm・深さ49cm、P3は64cm×52cm・深さ44cm、P4は76cm×54cm・深さ88cmを測る。P5は50cm×43cm・深さ40cmの楕円形を呈し、南壁際に存在しており、この配置より貯蔵穴の可能性がある。P6は37cm×20cm・深さ10cmを測り、住居中央部西寄りに位置している。

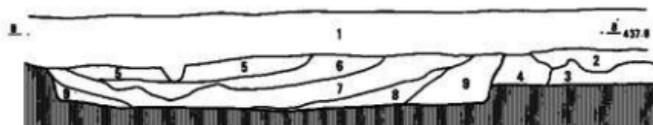
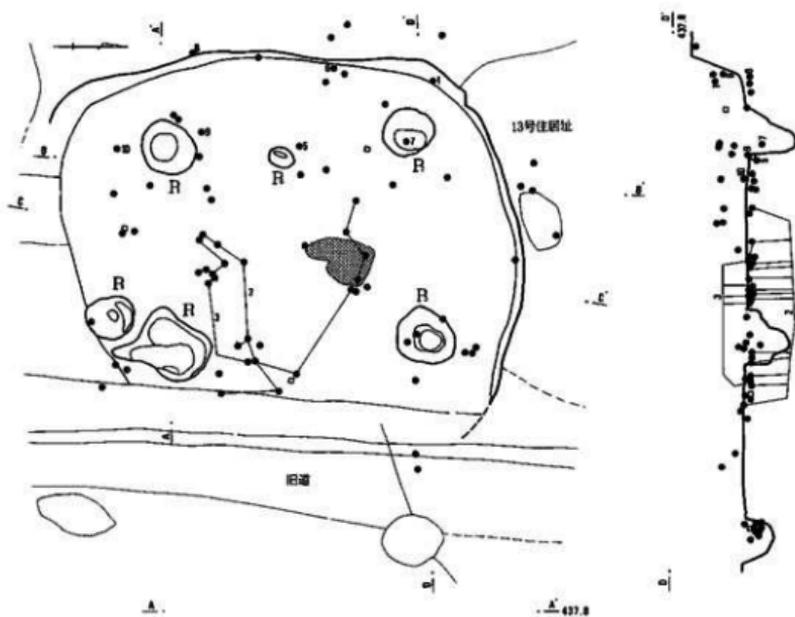
掘り方の確認は行っておらず、はっきりしたことは言えないが、他の住居址同様床下全面におよび、住居中央部を除く部分が一段深く掘り込まれていると考えられる。

周溝は検出されていない。

<出土遺物>遺物は床面直上からのものが主体を占め、中でもNo.2の小型甕およびNo.3の台付甕は床面に散在して検出された。

13号住居址（第40・41図、第34表、図版2-14、3-15）

<位置>B・C-17・18・19グリットに位置する。本住居址は12号住居址と重複している。新旧関係は覆土の層位等から本住居址の方が古いと考えられる。西側に近接して18号住居址、

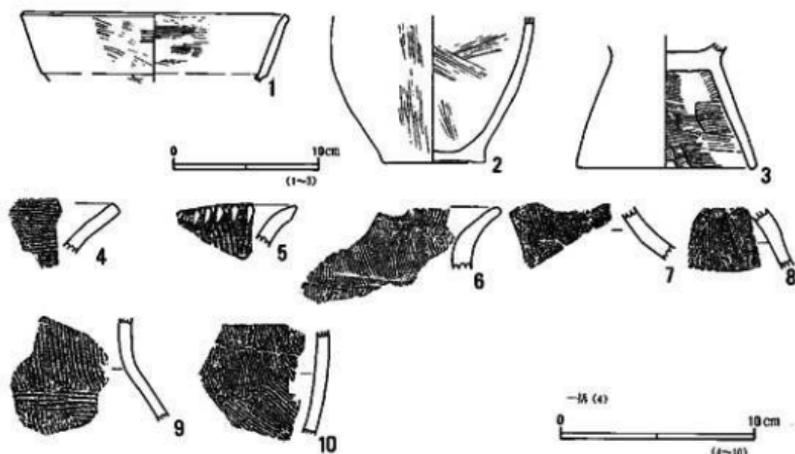


12号住居址土層説明

層	色調	特 徴
1	灰褐色	耕作土。(基本層序 [耕])
2	褐色	黄色土粒子を少量含む。φ2~3cmの小石を含む。
3	黄褐色	地山のブロックを多量に含む。しまり石。
4	褐色	礫層。しまり石。
5	褐色	黄色土粒子。(φ1~2cm)を含む。
6	灰褐色	黄色土粒子(φ3~5cm)・炭化物を少量含む。
7	黄褐色	地山の黄色土をブロック状に含む。やや層状。
8	黄褐色	黄色土粒子・粘土粒子を少量含む。
9	褐色	礫層。炭化物を少量含む。しまり石。

m 2, 3, 4層は、13号住居址層土。

第38図 12号住居址 平面・土層・断面・遺物分布



第39図 12号住居址 出土遺物

3 m北側に14号住居址、5 m南側に11・17号住居址が存在する。南壁・東壁はそれぞれ12号住居址および旧道により破壊されている。

<形状・規模>平面形態は東壁および南壁が不明であるが、西壁・北壁あるいは床面の遺存状況、柱穴の配置等からやや胴の張る隅丸長方形を呈す大型住居址になると考えられる。主軸方位はN-3°-Wである。

住居規模は推定長軸8.5m・推定短軸7 mである。

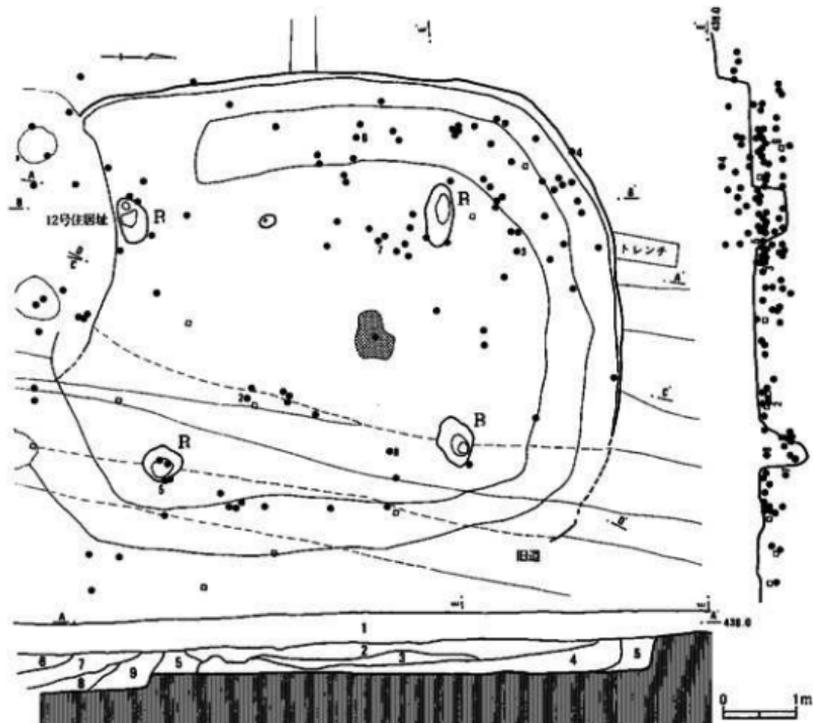
<覆土>覆土は4層に分けられ、自然堆積を呈しているが、南壁側は12号住居址の覆土に切られている。

<床面・壁>床面は遺存部分ではほぼ平坦であり堅緻な貼床が施されており、住居址東側の旧道により攪乱された部分も貼床が施されていたと思われる。貼床は地山を掘り溜めた後、地山のロームブロックが混入している黄褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約10cmである。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存している西壁および北壁で45cmを測る。

<炉>炉址は住居址中央部やや北寄りに位置する地床炉である。平面形態は不整形円形を呈し、規模は64cm×40cmを測り、断面は約10cm浅く皿状に掘りくぼめられている。

<その他の施設>住居址内においてピットが4ヶ所検出された。これらは対角線上に配置されており、主柱穴と考えられる。P 1は63cm×40cm・深さ60cm、P 2は88cm×40cm・深さ40cm、P 3は70cm×50cm・深さ68cm、P 4は55cm×46cm・深さ50cmを測る。P 1およびP 2は東西に長い楕円形を呈しており、幅の広い板材が柱として使われていたと考えられる。

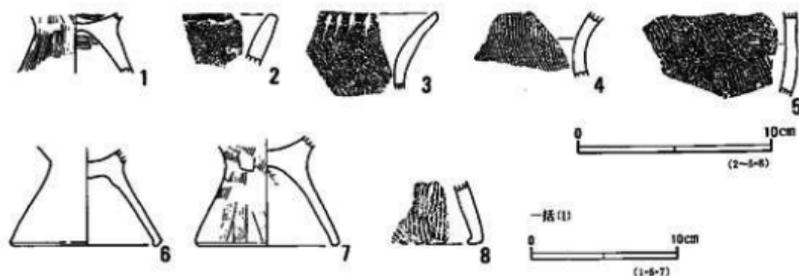


13号住居址土層説明

層 色 調	特 徴
1 灰褐色	耕作土。(基本層厚 1層)
2 褐色	黄土粒子を少量含む。φ2~3cmの小石を含む。
3 灰褐色	(φ2~3cm) 顆粒状。しまり硬。
4 黄褐色	地山のブロックを多量に含む。しまり硬。
5 褐色	硬質。しまり硬。
6 灰褐色	黄土粒子(φ3~5mm)。炭化物を少量含む。
7 黄褐色	地山の炭化をブロック状に含む。やや顆粒状している。
8 灰褐色	黄土粒子・炭土粒子を少量含む。
9 褐色	硬質。炭化物を少量含む。しまり硬。

※ 6~9層は、12号住居址層土。

第40図 13号住居址 平面・土層・断面・遺物分布



第41図 13号住居址 出土遺物

掘り方は住居址中央部が浅く、壁際が深く掘り込まれているが、南西コーナー部分は12号住居址により一部破壊されているためはっきりしないが、掘り込みは確認されていない。

周溝は検出されていない。

<出土遺物> 遺物は床面直上から黒曜石剥片を含め多く出土しているが、土器破片が主体を占めており、図示し得るものは僅かである。また本住居址の出土遺物の特徴としては台付甕の脚部(No.4・5・8)が多くみられる点があげられる。

15号住居址(第42図、第35表、図版3-17)

<位置> B-27グリッドに位置する。本住居址は17号土坑と重複している。新旧関係は出土遺物等から本住居址の方が新しいと考えられるが、屋内埋甕と推定される17号土坑に伴う住居址として、縄文時代中期の可能性もある。西側に近接して24号土坑、北側に近接して5号溝状遺構が存在する。本住居址は西壁側約1/3のみが残存しており、他の部分は農道の下部にあたり破壊されている。

<形状・規模> 平面形態は西壁の遺存状況等から楕円形を呈すると考えられる。主軸方位は不明である。

住居規模は推定長軸5m・推定短軸4mである。

<覆土> 覆土は茶褐色土の単一層である。

<床面・壁> 床面は遺存部分ではほぼ平坦であり堅緻な貼床が施されており、住居址東側の農道により破壊された部分も貼床が貼られ、住居址全体に施されていたと思われる。

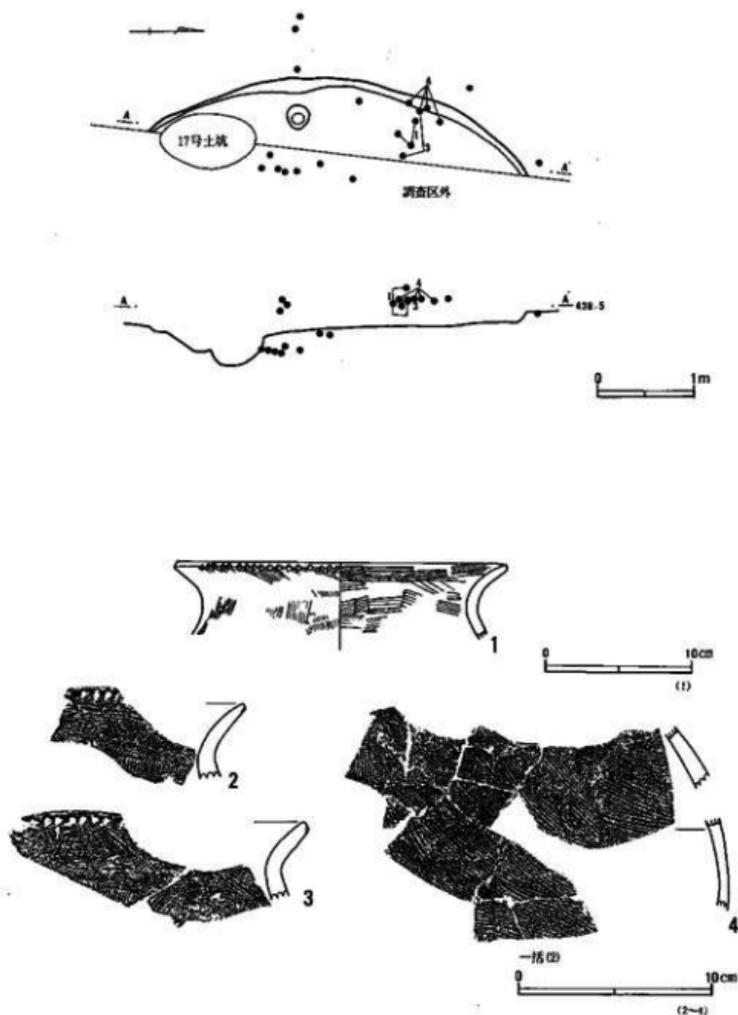
壁は緩やかに立ち上がり、残存している西壁で10cmを測り、浅い。

<炉> 炉址は住居址中央部にあると考えられ、未検出である。

<その他の施設> 住居址内においてピットが1ヶ所検出された。規模は径20cm・深さ約30cmの円形を呈しており、西壁中央やや南寄りで確認され、その配置から考えて貯蔵穴と考えられる。

掘り方は確認を行っていないため不明である。

周溝は検出されていない。



第42図 15号住居址 平面・断面・遺物分布 出土遺物

<出土遺物>遺物は同一個体と考えられる甕の破片 (No.1~4) が覆土上層からまとめて出土している。No.1の甕の口唇部はヨコナデ後ハケ状工具による刻みが施されている。

16号住居址 (第43・44図、第36表、図版3-18)

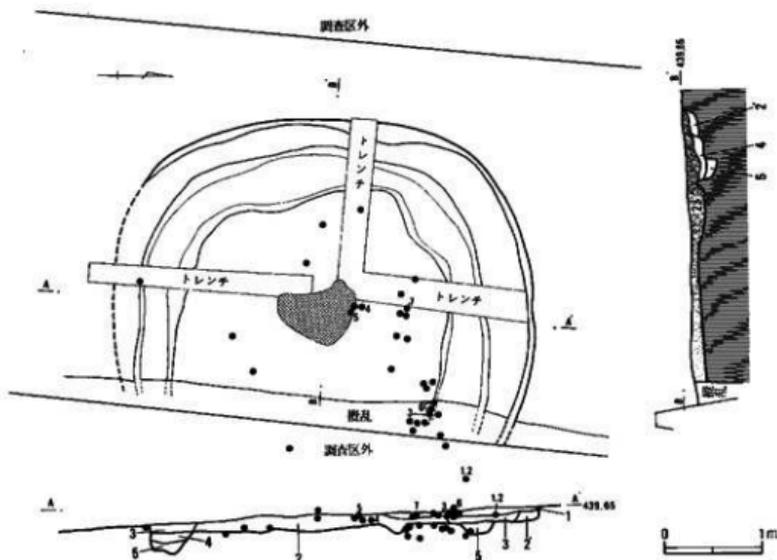
<位置> A・B-34・35グリッドに位置する。東壁側の1/4は農道の下部にあたり破壊されている。また覆土および全壁が耕作により削平されていたため、南北と東西方向にトレンチを設定し、床面および掘り方等の確認を行った。

<形状・規模> 平面形態は床面および掘り方の遺存状況等からコーナーの屈曲がゆるやかな楕円形を呈していると考えられる。主軸方位はN-1°-Wである。

住居規模は推定長軸4.5m・推定短軸4mである。

<覆土> 覆土は住居址北壁寄りに僅かに暗褐色土層が1層検出されている。

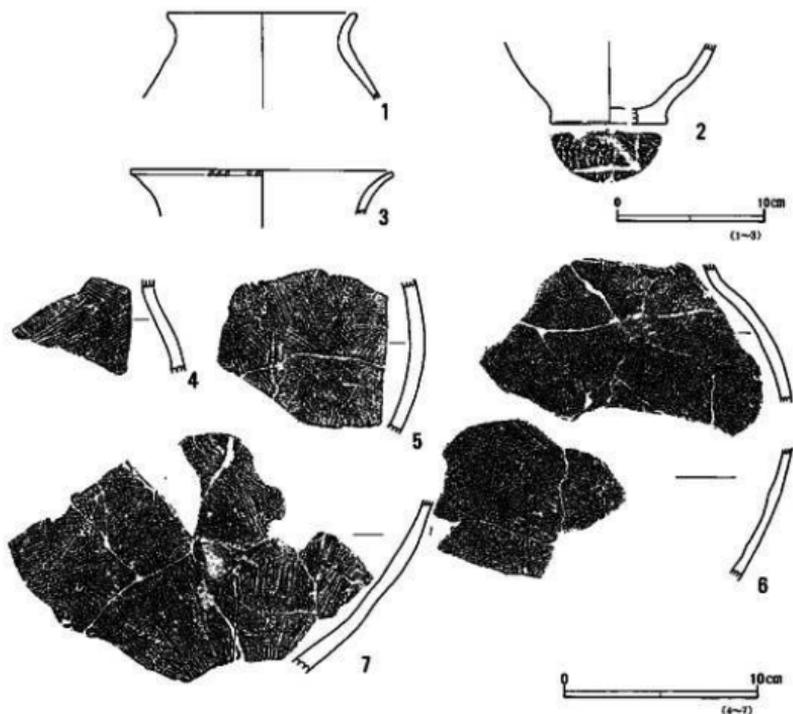
<床面・壁> 床面も耕作による削平のため遺存状況は悪いが、遺存部では貼床(第2層)が検



16号住居址土層説明

層	色調	特 徴
1	暗褐色	しまり有。粘性やや弱。
2	茶褐色	しまり有。粘性有。(貼床)
3	茶褐色	しまり有。粘性有。黄褐色土を多量に含む。(崩落土か)。
4	暗褐色	しまり有。粘性やや弱。黄褐色土(φ1cm大)少量含む。
5	茶褐色	しまり有。粘性やや弱。
6	暗褐色	しまり有。粘性に欠ける。黄褐色土ブロック(φ1cm大)を多量に含む。

第43図 16号住居址 平面・土層・遺物分布



第44図 16号住居址 出土遺物

出され堅緻である。貼床は地山を掘り窪めた後ロームブロックが混入している暗茶褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約15cmである。

壁は削平されており、まったく存在しない。

＜ 炉 ＞ 炉址は住居址中央部に位置する地床炉である。平面形態は不整形円形を呈し、規模は80cm×70cmを測り、断面は約10cm浅く皿状に掘りくぼめられている。

＜その他の施設＞住居址内におけるピットは検出されなかった。

掘り方は床下全面におよび中央部が浅く、壁際が一段深く掘り込まれている。

周溝は検出されていない。

＜出土遺物＞ほとんどの遺物は床面直上から出土しており、北壁東寄りにみられる遺物は床下から検出されているが、これは農道側壁取付工事の際の攪乱による影響と考えられる。№1の小型壺型土器は石英および小石が多量に含まれており、胎土は荒い。

17号住居址（第45・46図、図版2-13）

＜位 置＞B・C-14・15・16グリットに位置する。本住居址は北側で11号住居址、西側で

21号土坑と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から17号住居址→11号住居址、17号住居址→21号土坑の順で新しい。ただし、21号土坑との新旧関係は農道などの攪乱により明確ではなく、21号土坑が本住居址に伴う可能性もある。北側に近接して12号住居址および13号住居址が存在する。南壁は農道、東壁は農道および旧道、北壁側の一部は11号住居址により破壊されている。

＜形状・規模＞平面形態は東壁および南壁が不明であるが、西壁・北壁あるいは床面の遺存状況、柱穴の配置等から隅丸長方形を呈す大型住居址になると考えられる。主軸方位はN-21°Wである。

住居規模は推定長軸8.5m・推定短軸7mである。

＜覆土＞覆土は2層に分けられ、西壁側は自然堆積を呈しているが、東側は農道・旧道による攪乱を受けている。

＜床面・壁＞床面は遺存部分ではほぼ平坦であり堅緻な貼床（第4層）が検出され、住居址東側の農道・旧道により攪乱された部分も貼床が施されていたと思われる。貼床は地山を掘り穿めた後、地山のロームブロックが混入している暗茶褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約4cmである。また、北壁側床残存部には焼土が検出されており、焼失住居址の可能性が考えられる。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存している西壁および北壁で30cmを測る。

＜炉＞炉址は検出されなかったが、11号住居址と重複している部分におそらく存在したと思われる。

＜その他の施設＞住居址内においてピットが8ヶ所検出された。これらの内P1・P2・P3・P4は対角線上に配置されており、主柱穴と考えられる。P1は64cm×58cm・深さ床面より50cm、P2は60cm×50cm・深さは重複している11号住居址の掘り方底面から40cm、P3は60cm×58cm・深さは重複している11号住居址の掘り方底面から56cm、P4は70cm×42cm・深さ20cmを測る。P5・P6は床面から検出され、深さ15cmを測る。

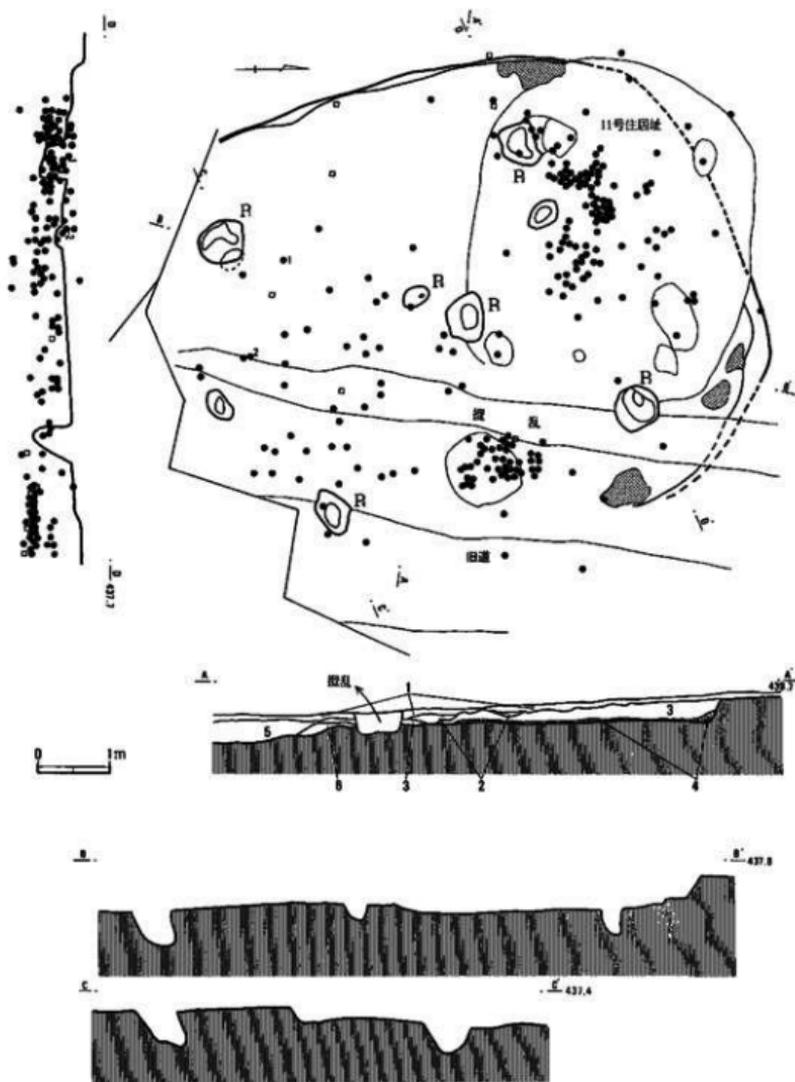
掘り方の確認は行っておらず、はっきりしたことは言えないが他の住居址同様、床下全面におよび、住居址中央部を除く部分が一段深く掘り込まれていると考えられる。

周溝は検出されていない。

＜出土遺物＞遺物は床面直上から土器破片が出土しているが、図示し得るものは僅かであり、重複している11号住居址に属する可能性が考えられる遺物もある。また縄文時代晩期に属する土器片も混入している。

18号住居址（第47図、図版3-19）

＜位置＞D-19・20グリッドに位置する。北側に近接して13号住居址が存在する。本住居址は西壁側約1/3のみが残存しており、他の部分は発掘調査区外に延びており未調査である。また、覆土および壁が耕作等により削平され遺存状況が悪かったため、南北に2本のトレンチを設定し、床面および掘り方等の確認を行った。



17号住居址土層説明

層	色調	特 徴
1	黒褐色	小石(φ5cm大)を多量に含む。しまり強。粘性に欠ける。(基本層序 V層)
2	暗褐色	黄褐色土(φ1~5mm大)多量に含む。しまり強。粘性や中弱。
3	茶褐色	黄褐色土ブロック(φ5~50mm大)・黒褐色土(φ5mm大)を斑状に多量に含む。しまり有。粘性有。
4	暗茶褐色	2層と同様。しまり有。粘性強。(貼床)
5	褐色	小石を含む。しまり有。
6	黄褐色	ローム層の浮いたもの。しまり有。粘性有。

※ 5、6層は、段乱部。

第45図 17号住居址 平面・土層・断面・遺物分布



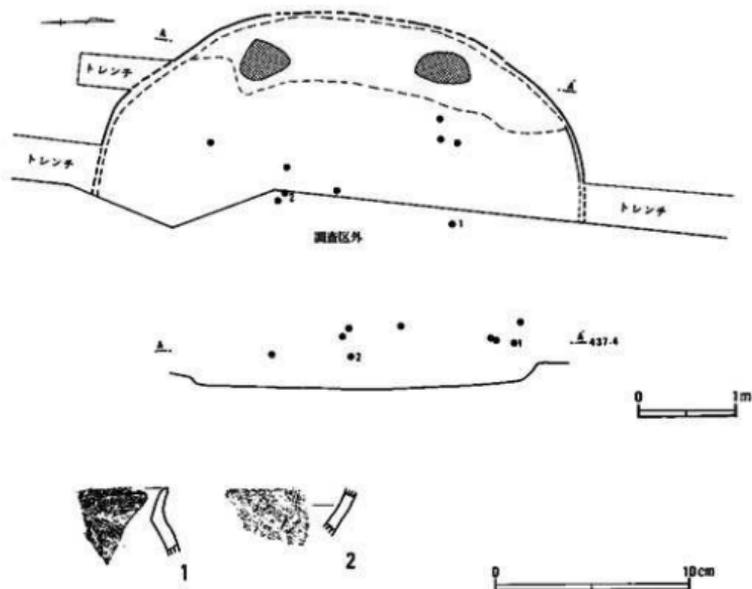
第46図 17号住居址 出土遺物

<形状・規模>楕円形平面形態は西壁を除く各壁が明確ではないが、西壁あるいは床面の遺存状況等から楕円形を呈すると思われる。主軸方位はN-6°-Eである。

住居規模は推定長軸5m・推定短軸4mである。

<覆土>覆土は擾乱を受けており、明確な分層は行えなかった。

<床面・壁>床面は西壁際で僅かに残存しており貼床が検出され堅緻である。貼床は他の住居址同様、地山を掘り窪めた後ルームブロックが混入している暗茶褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約10cmである。また、床面においては焼土が確認されており、焼失住居の可能性もある。



第47図 18号住居址 平面・断面・遺物分布 出土遺物

壁はほとんど削平されており、残存している北壁で約20cmを測る。

< 炉 > 炉址は検出されておらず、調査区外に存在すると思われる。

< その他の施設 > 住居址内においてピットおよび溝は検出されていない。

掘り方は確認を行っていないため不明である。

< 出土遺物 > 遺物は覆土上層に土師器の細片が少量出土しており、図示し得るものはごく僅かである。

(2) 土坑

11号土坑 (第48・49図、第44表、図版5-35)

< 位 置 > B-23・24グリットに位置する。南側に16号土坑が存在している。東側は農道により破壊されている。

< 形状・規模 > 本土坑は長軸3.7m・推定短軸3.5m・深さ18cmの浅い掘り込み(テラス)内の中央部が長軸1.6m・短軸1.45m・上部テラスの底面より深さ32cmの長方形を呈し、一段深く掘り込まれている。また、東側が農道により破壊されているため正確な平面プランは不明であるが、残存している壁より長楕円形を呈すると思われる。

< 底・壁 > 底はやや中央部が盛り上がる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、一度テラス部分でほぼ平坦な面がみられ、さらに外側で垂直に立ち上がる。

< 覆 土 > 覆土は3層に分かれ、レンズ状に自然堆積を呈している。また覆土内からは10cm～30cm大の大きさの礫が19点ほど確認されており、集石土坑としての可能性も考えられる。

< 出土遺物 > 遺物は弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の所産であり、壺形土器(№1・6・7)および台付壺形土器(№2・8～10)の破片が覆土内より出土している。

21号土坑 (第50図、第45表、図版6-39)

< 位 置 > C-15グリットに位置する。17号住居址と重複しており、また西側に隣接して11号住居址が存在している。17号住居址との新旧関係は17号住居址→21号土坑の順で新しい。ただし、17号住居址との新旧関係は農道などの攪乱により明確ではなく、本土坑が17号住居址に伴う可能性もある。

< 形状・規模 > 形状は不整形円形を呈しており、長軸1.1m・短軸1m・最深部43cmを測る。

< 底・壁 > 底は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

< 覆 土 > 覆土は茶褐色土の単一層である。

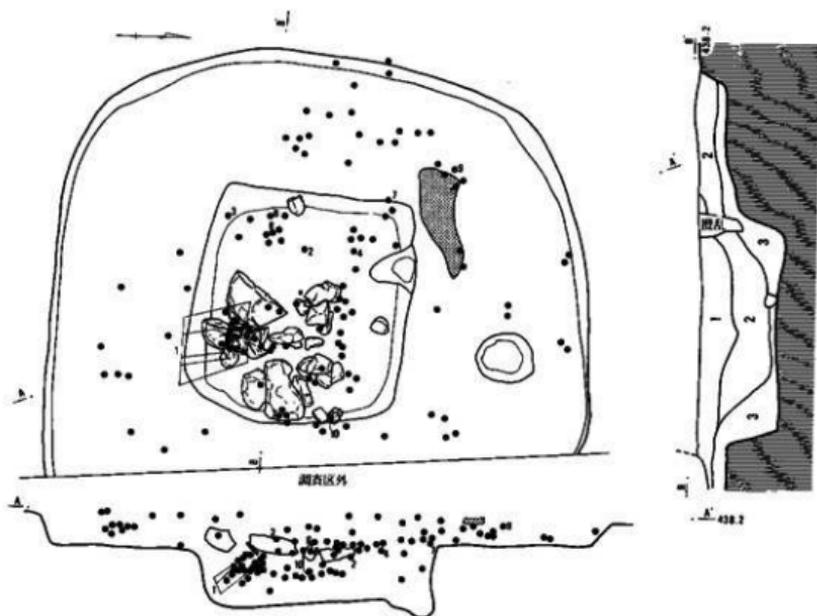
< 出土遺物 > 遺物は弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の所産であり、台付壺形土器の破片が主体を占めている。

5. 時期不明の遺構

検出した遺構は土坑6基、溝状遺構4条である。

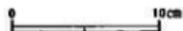
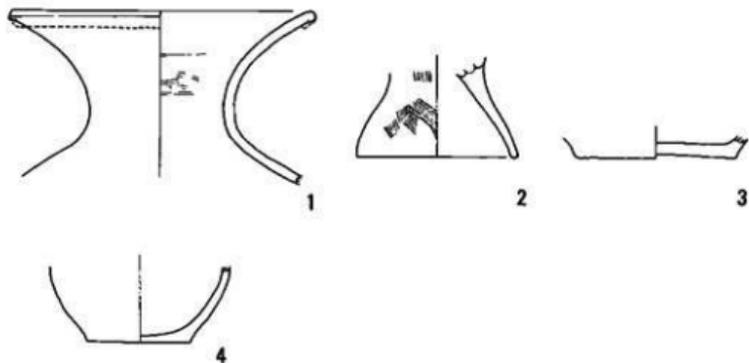
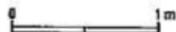
(1) 土坑

4号土坑 (第51図)

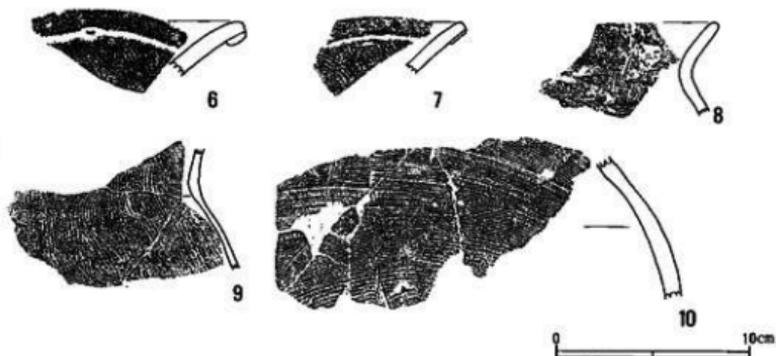


11号土坑土層説明

層	色	調	特	徴
1	黒	色	顆粒状。しまり有。	
2	黒	色	ローム粒子・焼土粒子を含む。1層よりしまり弱。	
3	褐	色	ローム粒子を多量に含む。	



第48図 11号土坑 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物 (1)



第49図 11号土坑 出土遺物 (2)

<位 置>C-5グリットに位置する。西側に隣接して9号住居址があり、南東側に1号集石が存在している。

<形状・規模>形状は楕円形を呈しており、長軸95cm・短軸67cm・最深部20cmを測る。

<底・壁>底は緩やかに北東方向へ傾いている。壁は緩傾斜で立ち上がる。

<覆 土>覆土は黒褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は出土していない。

5号土坑 (第51図)

<位 置>B-6グリットに位置する。南側は9号住居址と重複している。新旧関係は9号住居址が5号土坑に切られている。また、西側は調査区外に伸びているために未調査である。

<形状・規模>明確なプランは不明であるが遺存部の形状より円形を呈すると思われる。推定長軸1.1m・推定短軸1m・最深部10cmを測る。

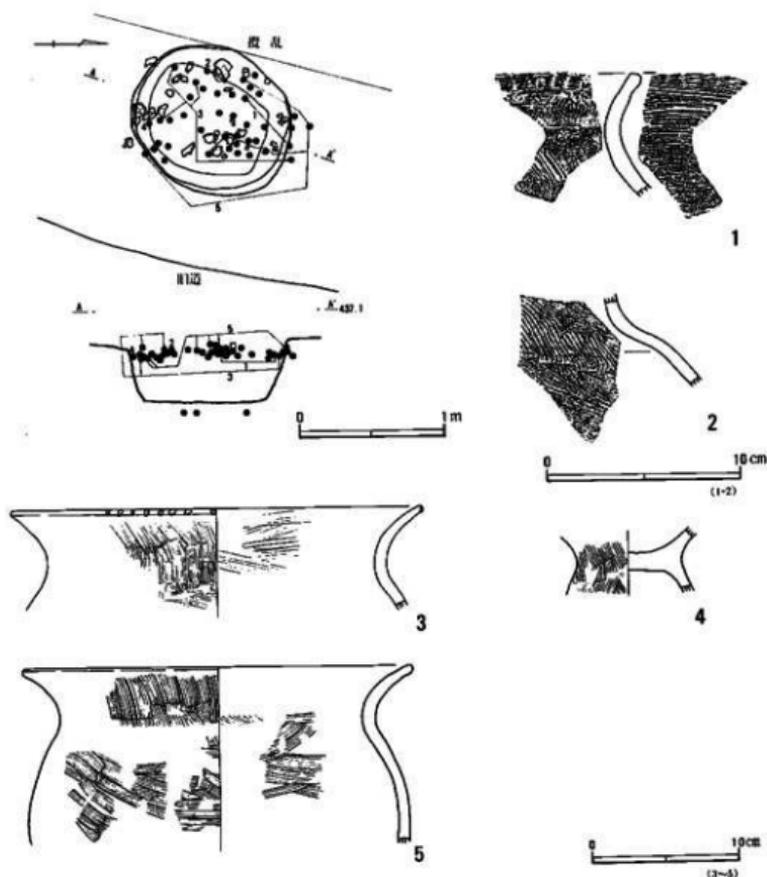
<底・壁>底は平坦であり、壁はやや急傾斜で立ち上がる。

<覆 土>覆土は黒褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は出土していない。

6号土坑 (第51図)

<位 置>B-7グリットに位置する。南側に9号住居址、5号土坑、2号集石が存在する。



第50図 21号土坑 平面・断面・遺物分布

<形状・規模>形状は長楕円形を呈しており、長軸1.05m・短軸63cm・最深部10cmを測る。

<底・壁>底は南に傾斜しており、壁は西壁側が緩傾斜で立ち上がり、他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。

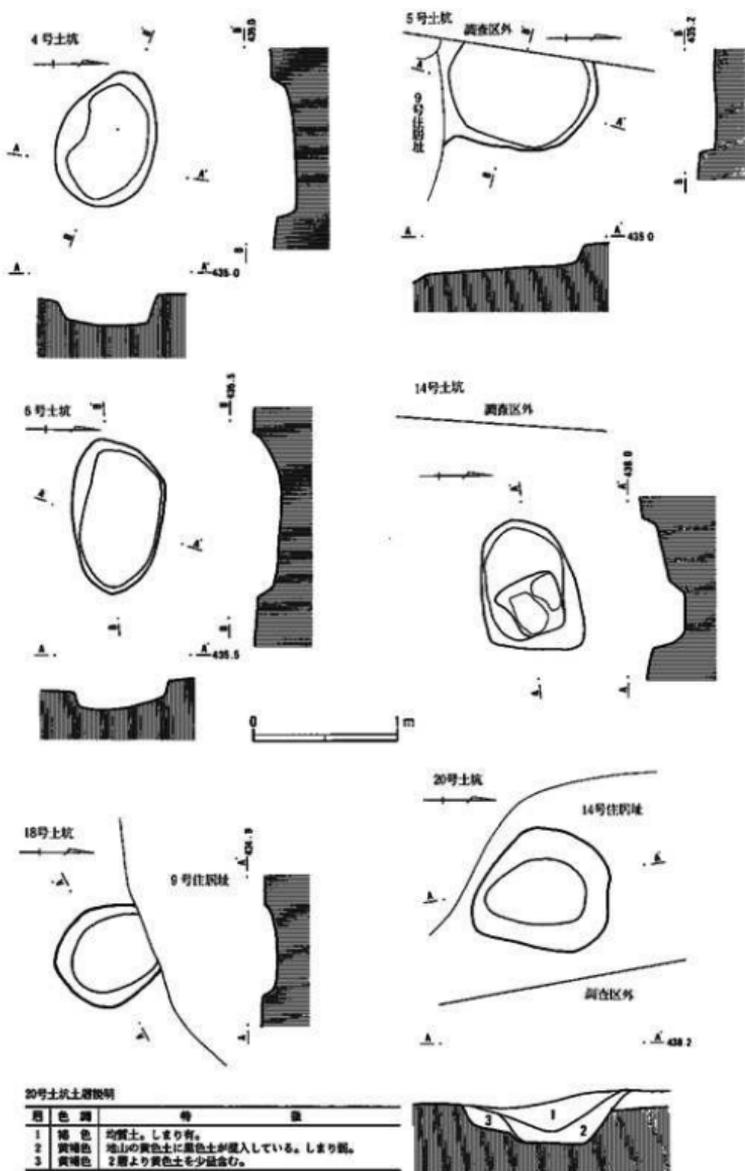
<覆土>覆土は黒褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は出土していない。

14号土坑 (第51図)

<位置>A・B-19グリットに位置する。東側に13・14号住居址が存在する。

<形状・規模>形状は不整長方形を呈しており、長軸90cm・短軸65cm・最深部30cmを測る。



第51図 4・5・6・14・18・20号土坑 平面・土層・断面

<底・壁>底は平坦である。壁は西壁は中位に小テラスを有し緩傾斜で立ち上がり、他の壁は緩傾斜で立ち上がる。

<覆土>覆土は黒褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は出土していない。

18号土坑（第51図）

<位置>B-5グリットに位置する。南側に3号土坑、東側に4号土坑・1号集石が存在する。北壁側は9号住居址と重複している。新旧関係は9号住居址が18号土坑に切られている。

<形状・規模>形状は北壁側が9号住居址と重複しているために不明であるが、遺存部より不整円形を呈すると思われる。推定長軸80cm・短軸66cm・最深部10cmを測る。

<底・壁>底は皿状に窪んでおり、壁は緩やかに立ち上がる。

<覆土>覆土は黒褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は出土していない。

20号土坑（第51図）

<位置>B-20グリットに位置する。14号住居址と重複しており、新旧関係は14号住居址が20号土坑に切られている。南側に13号住居址が存在する。

<形状・規模>形状は不整形を呈しており、長軸94cm・短軸82cm・最深部22cmを測る。

<底・壁>底は平坦である。壁は緩傾斜で立ち上がる。

<覆土>覆土は2層に分かれ、自然堆積を呈している。

<出土遺物>遺物は出土していない。

(2) 溝状遺構

3号溝状遺構（第52図）

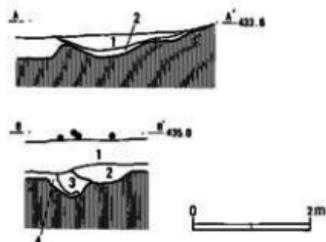
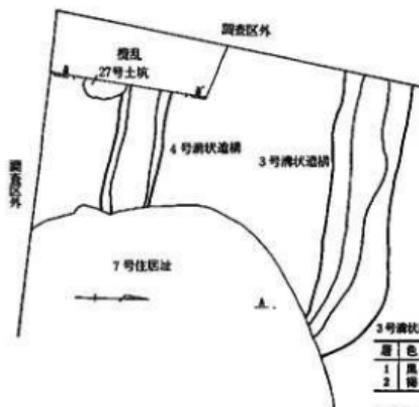
<位置>A・B-1グリットに位置する。調査区内を東-西方向に走る。西側は調査区外に延び未調査である。東側は7号住居址と重複する付近においてやや南に向きを変えるが、農道により削平され途切れている。7号住居址と重複しており、新旧関係は7号住居址が3号溝状遺構に切られている。南側に平行して4号溝状遺構が存在する。

<形状・規模>調査区外へ延び、また擾乱を受けているために明確な形状は不明であるが、現長4.5m・幅60~120cm・底幅20~60cm・最深部40cmを測り、断面形が皿状を呈している。

<底・壁>底は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。東-西方向の溝底比高差は約10cmであり、東側に傾斜している。

<覆土>覆土は2層に分けられ、覆土内における土砂の流れ込みは確認されなかった。

<出土遺物>遺物は出土していない。



3号溝状遺構土層説明

層	色 調	特 徴
1	黒色	塊粒状。しまりに欠ける。
2	褐色	1層に黄色土が混入している。しまり強。

4号溝状遺構土層説明

層	色 調	物 質	備 考
1	暗褐色	耕作土。(基本層呼 1層)黄褐色土をブロック状(φ2cm大)に少量含む。しまり有。粘性に欠ける。	
2	暗褐色	1層より基層が強い。黄褐色土をブロック状(φ1cm大)に少量含む。しまり有。粘性有。	
3	黒褐色	しまり有。粘性有。	
4	黒褐色	塊粒状(φ2~5mm大)。しまり有。粘性に欠ける。	

※ 3、4層は、27号土坑遺土。

第52図 3・4号溝状遺構 平面・土層・遺物分布

4号溝状遺構(第52図)

<位 置> A・B-0グリットに位置する。調査区内を東-西方向に直線的に走る。西側は攪乱を受け破壊されているが、さらに調査区外へ延びているものと思われる。東側は農道により削平され途切れている。東側で7号住居址、西側で27号土坑と重複している。新旧関係は7号住居址→4号溝状遺構、27号土坑→4号溝状遺構の順で新しい。北側に平行して3号溝状遺構が存在する。

<形状・規模> 攪乱を受けているために明確な形状は不明であるが、現長2.2m・幅約80cm・底幅50~60cm・最深部20cmを測り、断面形が風状を呈している。

<底・壁> 底は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。東-西方向の溝底比高差はほとんどなく、水平である。

<覆 土> 覆土は暗褐色土の単一層である。覆土内における砂礫の流れ込みは確認されなかった。

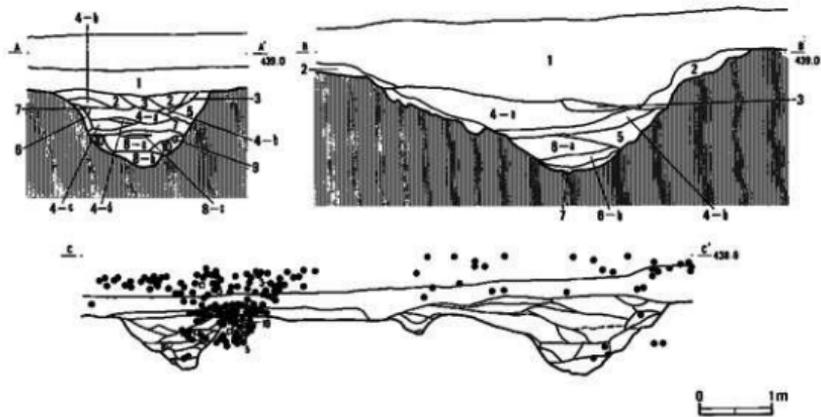
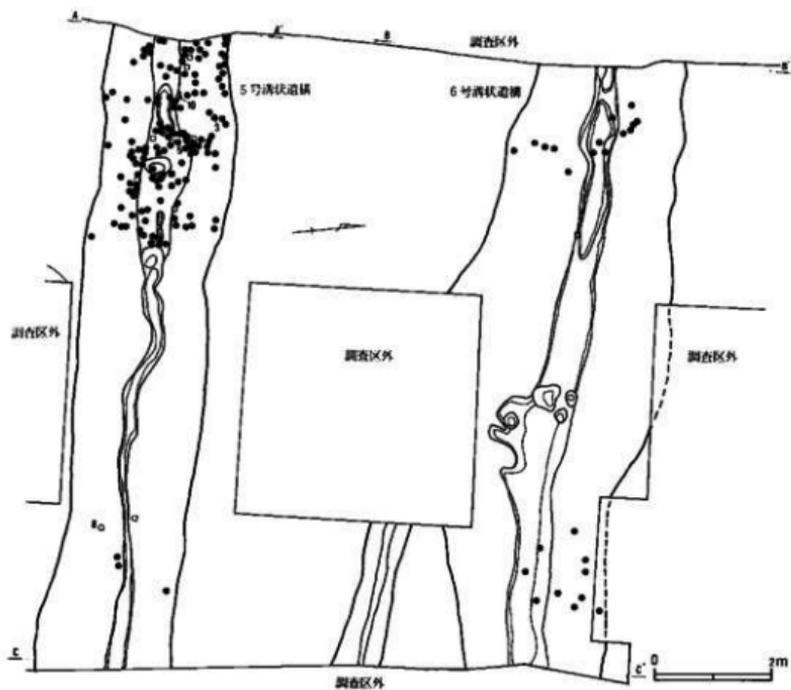
<出土遺物> 遺物は出土していない。

5号溝状遺構(第53~56図、第24・77・91表、図版6-47、13-19・20、16-31、17-37)

<位 置> A・B・C・D-28グリットに位置する。調査区内を東-西方向に直線的に走る。東側および西側は共に調査区外に延びているために未調査である。北側に平行して6号溝状遺構、北側に15号住居址が存在する。

<形状・規模> 調査区外へ延びているために明確な形状は不明であるが、現長約11m・幅2~2.3m・底幅10~80cm・最深部1.2mを測り、断面形が底幅の狭い逆台形を呈している。

<底・壁> 底は凹凸が激しく多数のピットが検出された。また、中央部や西側および東側



第53图 5・6号冢状遺構 平面・土層・遺物分布

5号溝状遺構（西壁）土層説明

層 色 調	特 徴
1 黒 色	やや粘性強。しまり有。
2 黒 色	中粒土層。1層と4層が混在したもの。φ2~3cmの小石を含む。
3 黄褐色	砂質。φ2~50mm程度の砂礫の層。5~7層が埋没した後に5~7層を削り込んで堆積。a層とb層は不整合。c層はやや粘土質の砂礫層。d層は細かい砂層。
4	
5 黒 色	顆粒状。しまり有。
6 褐色	7層の土質を基本とし、ローム粒子を含む。
7 褐色	砂質。しまりに欠ける。
8	
9 黒 色	φ3~50mm程度の砂礫の層。a層とb層の間に不整合あり。c層は細かい砂層。
10 褐色	砂質。ローム粒子を含む。

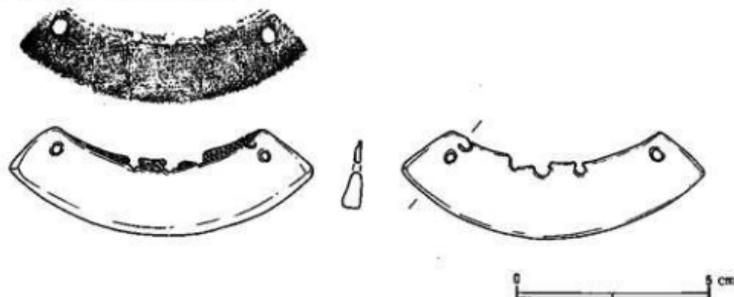
6号溝状遺構（西壁）土層説明

層 色 調	特 徴
1 黒褐色	顆粒状の土と小石を含む。しまり有。
2 黄褐色	下層の削いたもの。しまり弱。
3 黒褐色	砂質。黄土を少量含む。小石を含む。
4-a	砂礫層。砂質土とφ7cmの小石で構成される。
4-b	砂礫層。砂質土とφ2cmの小石で構成される。
5 黒褐色	砂礫を多量に含む。砂質。
6-a	砂礫層。砂質土とφ5cmの小石で構成される。
6-b	砂礫層。砂質土とφ8cmの小石で構成される。
7 黒褐色	砂礫を多量に含む。やや粘土質。しまり有。

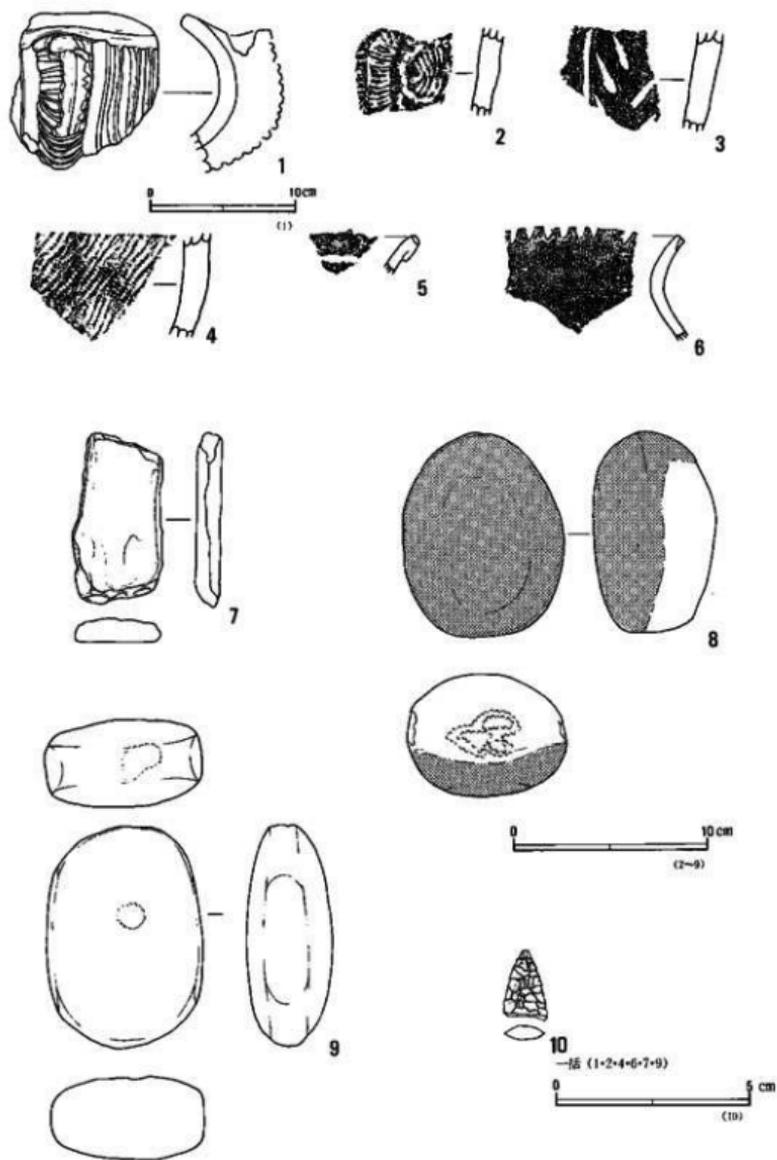
は一段深く削り取られている。壁は緩やかに立ち上がる逆台形状を呈し、やはり多数のピットが検出された。これらの底・壁にみられる多数のピットは規則性がなく、砂礫の流れ込みにより形成されたものと思われる。東-西方向の溝底比高差は約40cmであり、東側に傾斜している。

＜覆 土＞覆土は13層に分かれる。基本的には4~c層を境に上・下の2層に大別でき、それぞれ下層より、礫層（大型の礫）→礫層（小型の礫）→砂質土層の順（一部不整合）に堆積しており、二度にわたる砂礫の流れ込みがあったことが窺われる。

＜出土遺物＞遺物は土器破片が約270点出土しており、そのうち縄文時代の中期から晩期にかけての土器片が約130点、弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての土器片が約90点、時期不明の土器片が約50点出土している。これらの遺物は摩滅が激しく、上流において自然流入したものと考えられる。石器は石鏃・磨石・凹石・打製石斧がそれぞれ1点ずつ出土しており、No 8の磨石は全面に擦り面が見られ、一部2次焼成の影響と思われる剥離面が存在している。この他に初鋳1068年「照寧元寶」と初鋳1056年の「喜 通寶」の古銭が2枚検出されている。詳細については第 表を参照されたい。さらに本溝状遺構からは本遺跡において注目される遺物の一つである舶載鏡の鏡片が出土している。この鏡片の詳細については、第4章第3節で述べることにしたい。



第54図 5号溝状遺構 出土遺物 (1)



第55图 5号溝状遺構 出土遺物 (2)



第56図 5号溝状遺構 出土遺物 (3)

6号溝状遺構 (第53・57・58図、第25・78・92表、図版6—6、13—19・20、17—35・37)

<位 置> A・B・C・D-29・30グリッドに位置する。調査区内を東—西方向に直線的に走る。東側および西側は共に調査区外に延びているために未調査であり、また中央部やや東側は農道により削平されている。南側に平行して5号溝状遺構が存在する。

<形状・規模> 東側において本遺構とほぼ平行に走る溝状遺構がみられ農道の削平により明確ではないが本遺構につながると考えられる。形状は調査区外へ延びているために不明であるが、北側の溝状遺構で現長約11m・幅2.3~3.8m・底幅30~130cm・最深部2.1mを測り、断面形が底幅の狭い逆台形を呈している。

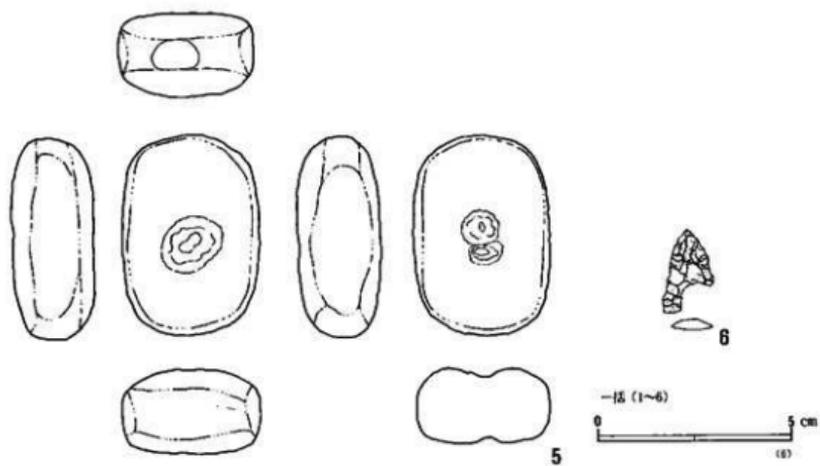
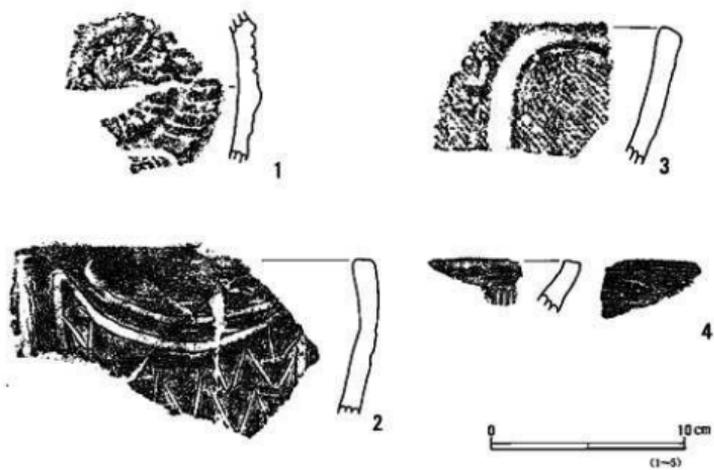
南側の溝状遺構は現長2.5m・幅60~70cm・底幅10~20cm・深さ30cmを測り、断面形はやはり底幅の狭い逆台形を呈している。

<底・壁> 北側の溝状遺構の底は凹凸が激しく多数のピットが検出された。中央部やや東側は一段深く削り取られている。壁は北壁は急傾斜に、南壁は緩やかに立ち上がり逆台形状を呈している。多数のピットが検出されたが、中でも西側の壁上部における大型のピットが目についた。これらの底・壁にみられる多数のピットは規則性がなく、砂礫の流れ込みにより形成されたものと考えられ、また大型のピットがみられることよりかなり激しく砂礫が流れ込んだように思われる。東—西方向の溝底比高差は約40cmであり、東側に傾斜している。

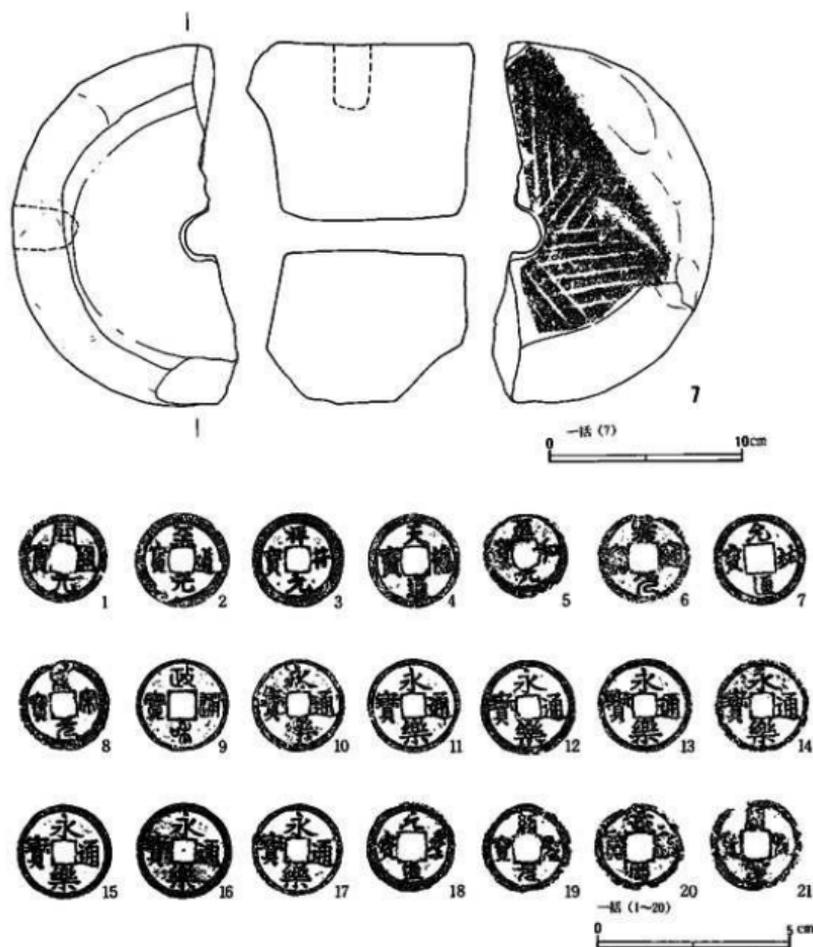
南側の溝状遺構の底もやはり凹凸が激しく多数のピットが検出され、壁はやや急激に立ち上がり逆台形を呈している。東—西方向の溝底比高差は約10cmであり、東側に傾斜している。

<覆 土> 覆土は7層に分かれる。基本的には4—b層を境に上・下の2層に大別でき、それぞれ下層より、礫層 (大型の礫) → 礫層 (小型の礫) → 砂質土層の順 (一部不整合) に堆積しており、二度にわたる砂礫の流れ込みがあったことが窺われる。

<出土遺物> 遺物は土器破片が約140点出土しており、そのうち縄文時代中期から後期にかけての土器片が約60点、弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての土器片が約20点、時期不明の土器片が約60点出土している。石器は凹石および石臼を1点ずつ検出している。また、「永楽通寶」を中心とする古銭が21点出土している。詳細については第92表を参照されたい。これらの遺物は摩滅が激しく、また4—bおよび6—bの砂礫層からの出土が主体を占めており上流において自然流入したものと考えられる。



第57图 6号溝状遺構 出土遺物 (1)

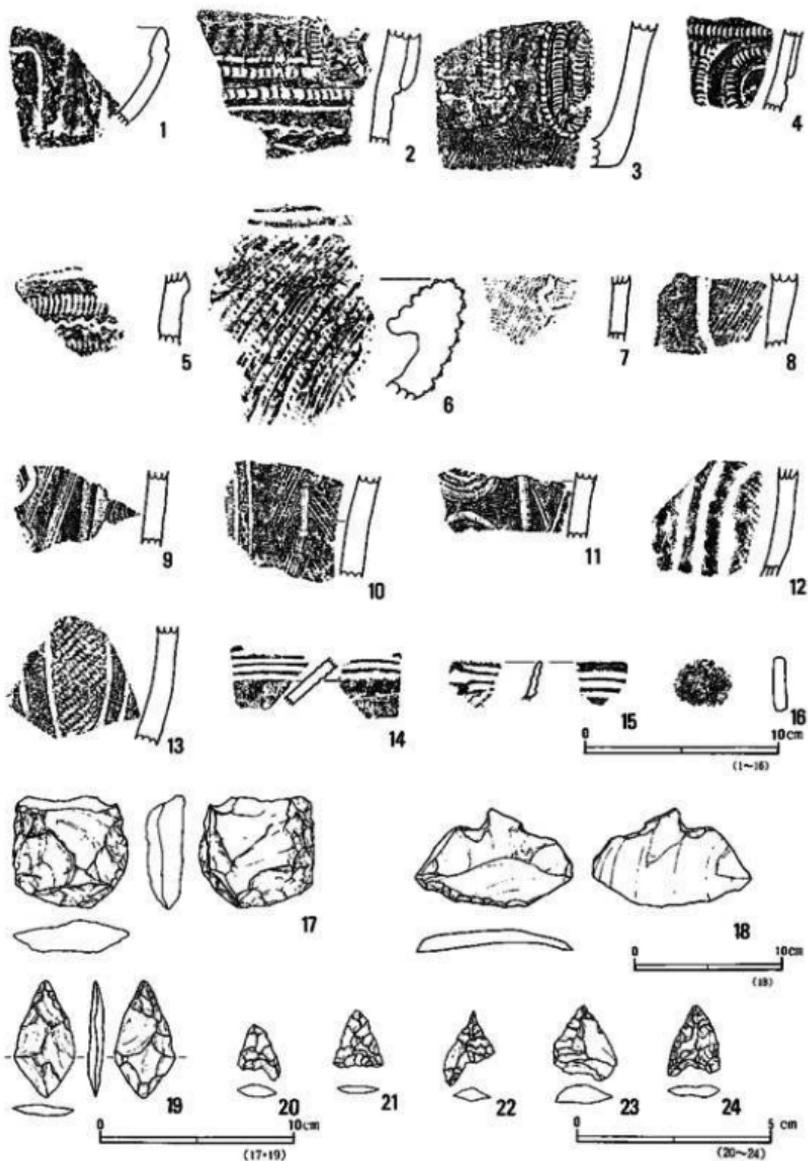


第58図 6号溝状遺構 出土遺物 (2)

第2節 遺構外出土遺物

1. 縄文時代 土器・土製品・石器 (第59図、第29・70・82表、図版12-16、13-18~20)

土器は、すべて小破片であり、中期～晩期にわたっている。中期の土器は烙沢式 (No 1～3)、新道式 (No 4)、蕨内式 (No 5)、曾利Ⅱ式 (6)、曾利Ⅳ式 (7～11)、後期の土器は堀之内Ⅰ式 (12・13)、晩期の土器は水式 (14・15) がみられる。



第59圖 第2次調査 遺構外出土 縄文時代 土器・土製品・石器

土製品は土製円盤が1点出土している。No16は摩耗が著しく進み、特に周辺部は顕著である。石器は打製石斧（No17）、石匙（No18）、石槍（No19）、石鏃（No20～24）が出土している。打製石斧は短冊形で、砂岩製である。石匙は横型で、頁岩製である。石槍は頁岩製で、完形である。14号住居址の調査中に出土した。石鏃はすべて黒曜石製であり、基部が平基か凹基で、有基のものはみられない。

2. 弥生時代～古墳時代 土器・石製品（第60図、第51・70表、図版13-18、16-30）

土器は弥生時代後期～古墳時代初頭の土器群が主体的であり、僅かに前期末葉から中期初頭の条痕文系土器（No1・2）が出土している。前者はいずれも小破片のため図示していないが、該期の遺構内出土遺物と同様な様相が捉えられる。後者は粗いハケ状工具により、縦方向・横方向などの単斜条痕がみられ、東海地方西部地域の条痕文土器の影響がみられる資料である。

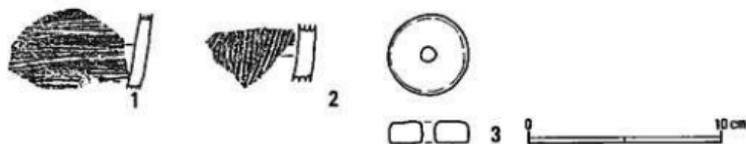
石製品は紡錘車（No3）が出土している。完形品であり、最大幅4.1cm、最大厚1.1cmを測る。

3. 中世 土器（第61図）

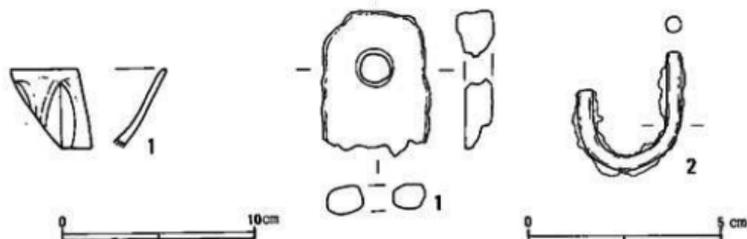
中国製陶磁器の青磁碗が1点出土している。No1は体部外面は鑄手連弁文を有するもので、釉は明青緑色で、貫入はなく、胎土は灰色である。龍泉窯系で、13世紀中葉～後半の所産と思われる。

4. 金属品（第62図、第85表、図版17-36）

鉄製品2点（No1・2）が出土しているが、いずれも器種は不明である。



第60図 第2次調査 遺構外出土 弥生時代～古墳時代 土器・石製品



第61図 第2次調査 遺構外出土 中世 土器

第62図 第2次調査 遺構外出土 金属品

第3章 第3・4次調査の成果

第1節 遺構および遺構内出土遺物

1. 検出状況

本年次において検出された遺構は、縄文時代の土坑が2基、弥生時代～古墳時代の住居址が9軒・土坑が9基、中世の土坑が32基・地下式竈13基、時期不明の土坑が24基・集石が1基・溝状遺構が36条・掘立柱建物址が2軒・柱穴列が2条である。

2. 縄文時代

検出した遺構は土坑2基である。

(1) 土坑

34号土坑（第63回）

<位置> B・C-3グリットに位置しており、南側に7号溝状遺構、北側に29号土坑、東側に28号土坑が存在している。

<形状・規模> 不整形円形を呈しており、長軸2.25m・短軸1.95m・底面までの最深部62cmを測る。

<底・壁> 底は平坦であるが、中央部および南と北壁際に不整形円形のピットがある。南側から18cm×10cm・深さ15cm、18cm×15cm・深さ17cm、34cm×32cm・深さ16cmを測る。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。

<覆土> 覆土は4層に分けられる。

<出土遺物> 遺物は検出されていない。

35号土坑（第63回、第20表）

<位置> C-4グリットに位置しており、南側に34号土坑、北側に22号住居址・10号溝状遺構、東側に28・29号土坑が存在している。

<形状・規模> 不整形円形を呈しており、長軸82cm・短軸68cm・最深部21cmを測る。

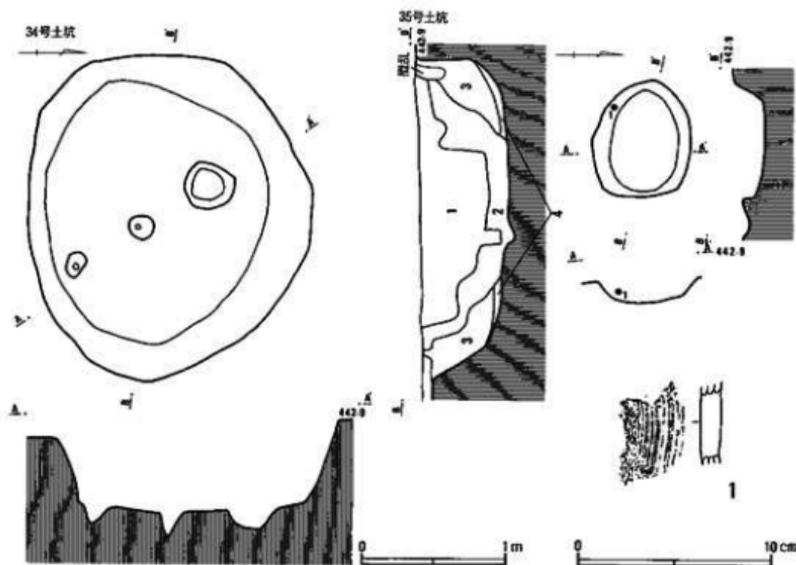
<底・壁> 底は中央部が皿状に窪んでいる。壁は緩傾斜に立ち上がる。

<覆土> 黒褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は縄文時代の土器片が出土している。

3. 弥生時代～古墳時代

検出した遺構は住居址11軒・土坑11基である。



34号土坑土層説明

層	色	調	特	徴
1	暗(黒)	褐色	下層において炭化物を顆状に少量含む。粘性に欠ける。しまり有。	
2	暗	茶	褐色	ローム粒子を含む。粘性に欠ける。しまり有。
3	暗	黄	褐色	粘性有。しまり有。
4	黄	褐	色	崩落土。ローム層。粘性強。しまり有。

第63図 34・35号土坑 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

(1) 住居址

19号住居址 (第64・65図、第37表、図版3-20)

<位 置> C・D-14グリットに位置する。北側5mに23号住居址、南側5mに8号溝状遺構が存在する。本住居址の西側は土置き場としていたが、西壁の一部がこの部分に延びているため拡張して調査を行った。遺構の残存状況は悪く、覆土と床面および壁は耕作による攪乱を受けており、特に東壁は削平され残存していない状態である。

<形状・規模> 平面形態はやや胴の張る隅丸長方形を呈している。主軸方位はN-22°-Wである。

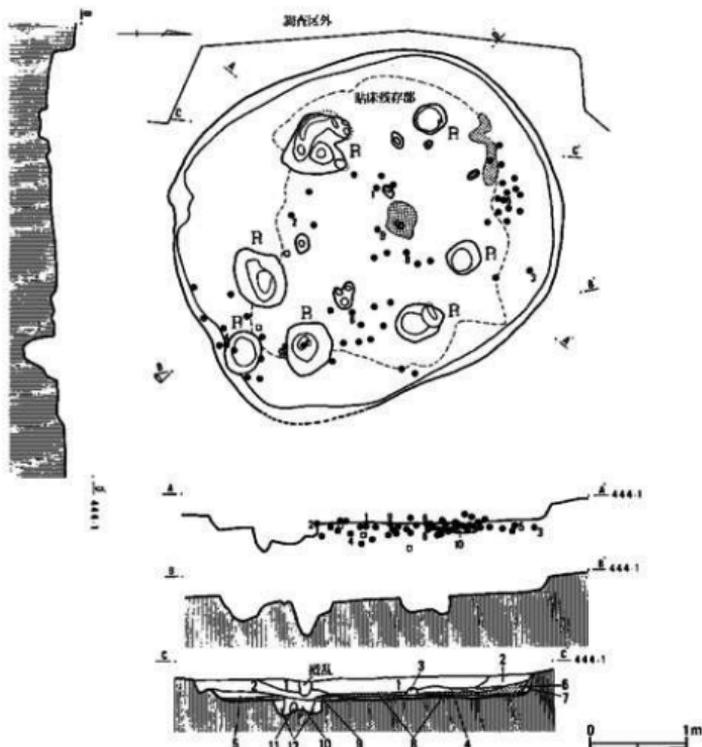
住居規模は長軸4.04m・短軸3.43mである。

<覆 土> 覆土は7層に分けられ、床面直上の第6・8層は焼土・炭化物を主体とする層である。

<床面・壁> 床面は壁際部の残存状況が悪いが、遺存部分ではほぼ平坦であり堅緻な貼床(第9層)が施されている。貼床は地山を掘り窪めた後、地山のロームブロックが混入している黄褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約5cmである。

壁も遺存状況が悪く、比較的残りの良い西壁で20cmを測る。

< 炉 > 炉址は住居址中央部やや北よりに位置する地床炉である。平面形態は不整長方形



19号住居址土層説明

層	色 質	特 徴	説 明
1	黄褐色	ローム粒子を多量に含む。しまりに欠ける。	
2	黒褐色	ローム粒子を少量含む。	
3	黒 色	黒色土ブロック。しまりに欠ける。	
4	黒褐色	ローム粒子を少量含む。しまりに欠ける。	
5	黄褐色	ローム粒子を多量に含む。炭化物を少量含む。	
6	黄褐色	炭化物・焼土を多量に含む。しまりに欠ける。	
7	黄 色	ロームに少量の黒色土が混入している。粘性强。	
8	黒褐色	炭化物を多量に含む。しまりに欠ける。	
9	黒褐色	ローム粒子を含む。(貯蔵)	
10	黄褐色	ローム粒子を多量に含む。しまりに欠ける。	
11	黄褐色	ロームブロック	
12	黒褐色	ロームブロックを多量に含む。しまりに異常に強。	

第64図 19号住居址 平面・土層・断面・遺物分布

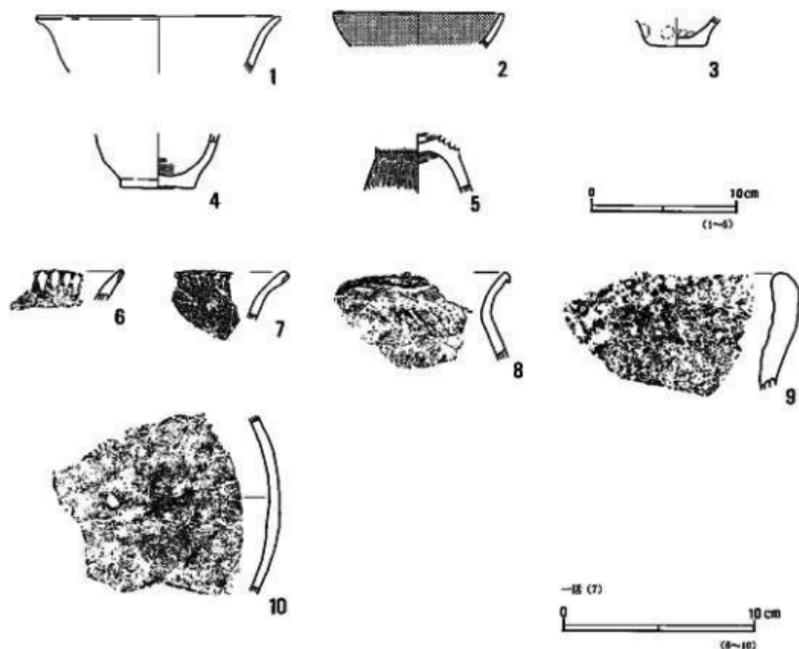
を呈し、規模は35cm×28cmを測り、断面は浅く皿状に掘り窪められている。

掘り方は床下全面におよび中央部が浅く、壁際が一段深く掘り込まれている。

周溝は検出されていない。

<その他の施設>住居址内においてピットが7ヶ所検出された。これらの内P1・P2・P3は主柱穴と考えられる。P1は36cm×30cm・深さ床面から20cm、P2は35cm×32cm・深さ床面から10cm、P3は48cm×48cm・深さ床面から35cmを測る。P4・P5・P6・P7は床面から検出され、P4は56cm×50cm・深さ(最深部)35cmを測る不整形長方形を呈し、配置等から貯蔵穴と考えられる。

掘り方は床下全面におよび、かなり激しい凹凸が確認され、住居址中央部を除く部分が



第65図 19号住居址 出土遺物

一段深く掘り込まれている。

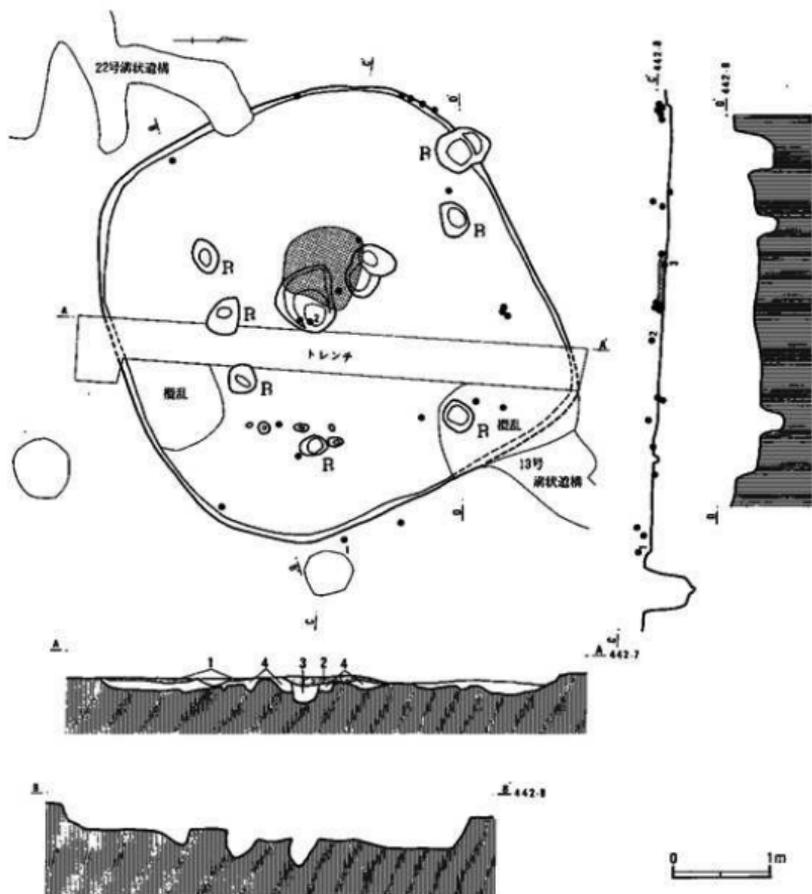
周溝は検出されていない。

<出土遺物>遺物は床面直上から土師器破片が出土しており、攪乱を受けているためか小破片が多く、図示し得るものは僅かである。№2の高杯の口縁部片は内外面共に赤彩が施されている。№3の小型壺の底部は二次利用された可能性がある。

20号住居址 (第66図、図版3-21)

<位 置> B・C-7グリットに位置する。北側2mに21号住居址・12号溝状遺構、南側3mに22号住居址が存在する。北東コーナーは13号溝状遺構、西壁中央部は22号溝状遺構と重複関係にある。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から20号住居址→13号溝状遺構、20号住居址→22号溝状遺構の順で新しい。遺構の残存状況は悪く、覆土および床面・壁が攪乱を受けているためにトレンチを設定し、調査を行った。

<形状・規模>平面形態は各壁が明確ではないが、床面あるいは掘り方等から方形を呈する



20号住居址土層説明

層	色 調	特 徴
1	黒 色	ローム粒子を少量含む。しまり強。(粘床)
2	黄褐色	ロームブロックを含む。しまり強。(粘床)
3	黒 色	ローム粒子・焼土粒子を少量含む。しまり弱。
4	黒 色	ローム粒子を少量含む。しまり弱。



1



2

0 10cm

第66図 20号住居址 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

と思われる。主軸方位はN-67°-Eである。

住居規模は長軸4.38m・短軸4.32mである。

<覆土>覆土は攪乱のため削平され検出できなかったが、掘り方の埋土が4層確認された。第1・2層が貼床である。

<床面・壁>床面は中央部に僅かに残存しており貼床(第1・2層)が検出され堅緻である。貼床は他の住居址同様、地山を掘り窪めた後ロームブロックが混入している黒褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約10cmである。

壁は削平されており、検出できなかった。

<炉>炉址は住居址中央部に位置する地床炉であり、皿状に約15cm掘り窪められている。

<その他の施設>住居址内においてピットが7ヶ所検出された。P1・P2は主柱穴と考えられる。P1は36cm×26cm・掘り方底面からの深さ17cm、P2は28cm×26cm・掘り方底面からの深さ30cmを測る。他のピットは比較的浅く小規模であり、貯蔵穴は確認されなかった。

周溝は検出されていない。

掘り方は床下全面におよび、ほぼ平坦であり住居址中央部を除く部分が若干掘り込まれている。

<出土遺物>遺物は床面直上に土師器の細片が少量出土しており、図示し得たものは僅かである。

21号住居址(第67図、第38表、図版3-22、14-24)

<位置>C-8グリットに位置する。北側4mに36号土坑・19号溝状遺構、南側1.5mに20号住居址、東側1mに13号溝状遺構が存在する。

<形状・規模>平面形態は小型のやや劇の張る隅丸長方形を呈している。主軸方位はN-70°-Eである。

住居規模は長軸2.92m・短軸2.36mである。

<覆土>覆土は16層に分けられ、下層(第5層以下)になるにしたがい焼土・炭化物が多量に検出されている。

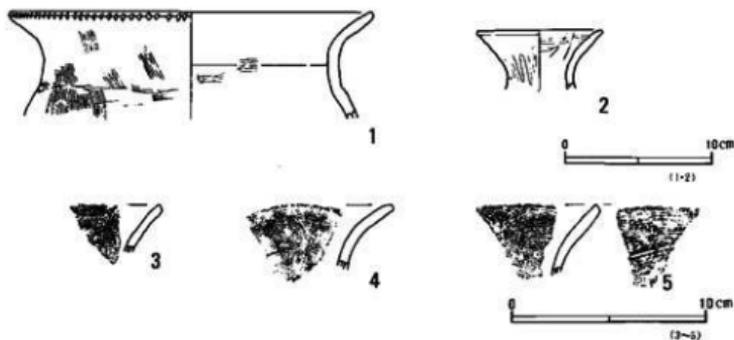
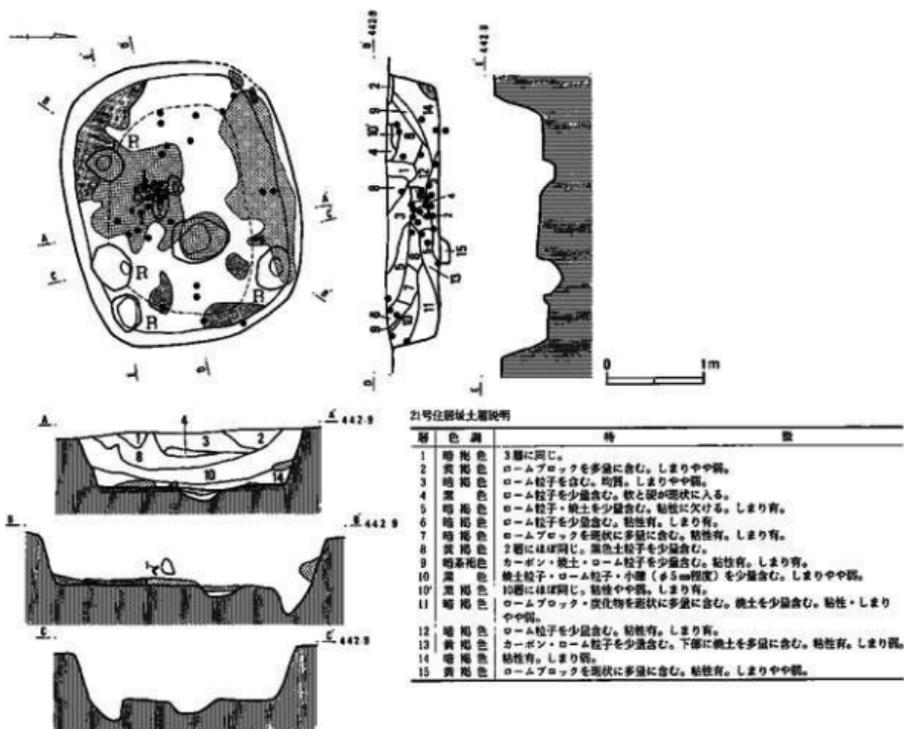
<床面・壁>床面は比較的遺存状況が良好で平坦であり、堅緻な貼床(第14層の下層)が施されている。貼床は地山を掘り窪めた後、地山のロームブロックが混入している黄褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約6cmである。床面直上および壁際においては炭化材や焼土が厚く堆積しており、焼失住居の可能性がある。

壁も遺存状況が良好でやや緩やかに立ち上がり、各壁とも50cmを測る。

<炉>炉址は住居址中央部やや東よりに位置する地床炉である。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は60cm×45cmを測る。断面は約14cm掘り窪め、皿状を呈している。

<その他の施設>住居址内においてピットが4ヶ所検出された。P1・P2・P3は主柱穴と考えられる。P1は36cm×32cm・深さ床面から17cm、P2は46cm×33cm・深さ床面から28cm、P3は38cm×27cm・深さ床面から12cmを測る。P4は48cm×38cm・深さ27cmを測る不整楕円形を呈し、配置等から貯蔵穴と考えられる。

掘り方は床下全面におよび住居址中央部を除く部分が一段深く掘り込まれている。



第67図 21号住居址 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

周溝は検出されていない。

<出土遺物>遺物（No1～4を含む）は住居址中央部の覆土内よりまとまって出土している。No3・4は接合資料であり、No2も同一個体と思われる。住居址中央部の床面直上からは20cm大の礫が1つ検出され、この礫に寄り添うようにして変形土器の口縁部の破片（No1）が出土している。

22号住居址（第68・69図、第39表、図版4-23）

<位置>A・B・C-4・5・6グリッドに位置する。北側3mに20号住居址、南側4mに28・29号土坑、西側に近接して23号溝状遺構が存在する。住居址中央部で9・10・11・20・21号溝状遺構、南壁で30号土坑、北壁で33号土坑と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から22号住居址→9・10・11・20・21号溝状遺構、22号住居址→30号土坑、22号住居址→33号土坑の順で新しい。東側は調査区外へ延びているため未調査である。また、遺構の残存状況が悪く、覆土および床面・壁が攪乱により削平されているためにトレンチを設定し、調査を行った。

<形状・規模>平面形態は東側が不明であるが、周溝あるいは床面の遺存状況、柱穴の配置等からやや胴の張る隅丸長方形を呈する大型住居址になると考えられる。主軸方位はN-77°-Eである。

住居規模は推定長軸9m・短軸6.5mである。

<覆土>覆土は7層に分けられるが攪乱を受けているため遺存状況は悪いが、掘り方の埋土が9層確認された。

<床面・壁>床面も遺存状況が悪く、住居址中央部やや西側に軟弱な貼床（第8層）が検出されている。他の住居址同様、貼床は地山を掘り窪めた後、地山のロームブロックが混入している黒褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは平均的に10cmである。

壁は削平されているために検出できなかった。

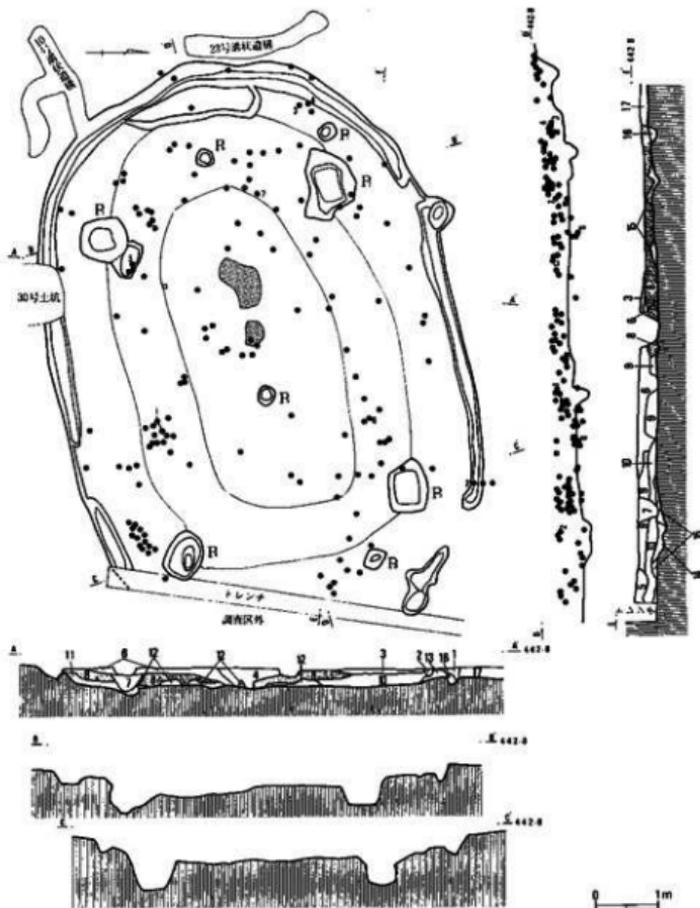
<炉>炉址は住居址中央部やや西よりに位置する地床炉である。平面形態は不整形長方形を呈し、規模は90cm×50cmを測る。断面は浅く掘り窪めた皿状を呈している。

<その他の施設>住居址内においてピットが8ヶ所検出された。P1・P2・P3・P4は対角線上に配置されており、主柱穴と考えられる。P1は78cm×78cm・掘り方底面からの深さ60cm、P2は104cm×80cm・掘り方底面からの深さ46cm、P3は86cm×64cm・掘り方底面からの深さ48cm、P4は76cm×56cm・掘り方底面からの深さ68cmを測る。P5・P6・P7・P8は掘り方底面より検出され、いずれも径30cmを測る。貯蔵穴は確認されなかった。

掘り方は床下全面および住居址中央部を除く部分が一段深く掘り込まれている。

周溝は全周すると考えられるが、北壁で部分的に途切れている。幅約40cm・深さは掘り方底面より15cmを測る。

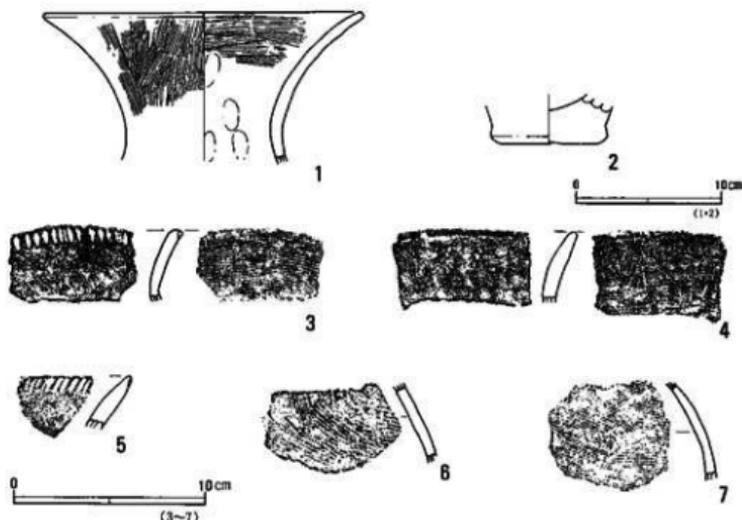
<出土遺物>遺物は床面直上から土師器の破片が出土しているが、削平されていたために細片が多く図示し得たものは僅かである。



22号住居址土層説明

層 色 調	特 徴
1 黄褐色	ローム粒子・焼土粒子を含む。
2 褐色	5層とはほぼ同じ。しまりやや弱。
3 黄褐色	ローム粒子(φ2mm)・炭化物を含む。炭化物はφ1~2cm程度のものである。しまりやや弱。
4 黒褐色	焼土を多量に含む。
5 褐色	7層に同じ。
6 黄褐色	焼土を少量含む。均質。
7 褐色	φ1cm程度のローム粒子を含む。5層に近いが、しまりに欠ける。
8 黄褐色	6層よりやや厚味がかっており、ローム粒子(φ5mm)を含む。(粘厚)
9 黒褐色	黒褐色土・黄褐色土が混在する。ローム粒子・ロームブロック(φ1cm)を含む。炭化物を少量含む。
10 褐色	8層にかなり近い。黒褐色土を連続に含む。ローム粒子(φ2~5mm)・小石(φ1cm)を含む。
11 黄褐色	ローム粒子を多量に含む。黒褐色土を含む。
12 黄色	ロームの中に黒褐色土が混入している。粘性強。
13 黄色	黄褐色土・黒褐色土が明瞭に混在する。しまりやや弱。
14 黄褐色	黒褐色土・黄褐色土が混在する。黒褐色土にロームブロック(φ2cm)を連続に含む。しまりに欠ける。
15 黄色	ロームの中に黒褐色土粒子を含む。しまりに欠ける。
16 黒色	ローム粒子を少量含む。
17 茶褐色	均質。しまり弱。(基本割序 V層)

第68図 22号住居址 平面・土層・断面・遺物分布



第69図 22号住居址 出土遺物

23号住居址（第70図、図版4-24）

〈位 置〉B・C-15・16グリッドに位置する。南側5mに19号住居址が存在する。覆土および床面と壁が耕作による攪乱を激しく受けているために、遺構の残存状況は悪い。

〈形状・規模〉平面形態は各壁が明確ではないが、柱穴の配置あるいは掘り方等からやや扇の張る隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方位はN-21°-Eである。

住居規模は推定長軸4m・推定短軸3.3mである。

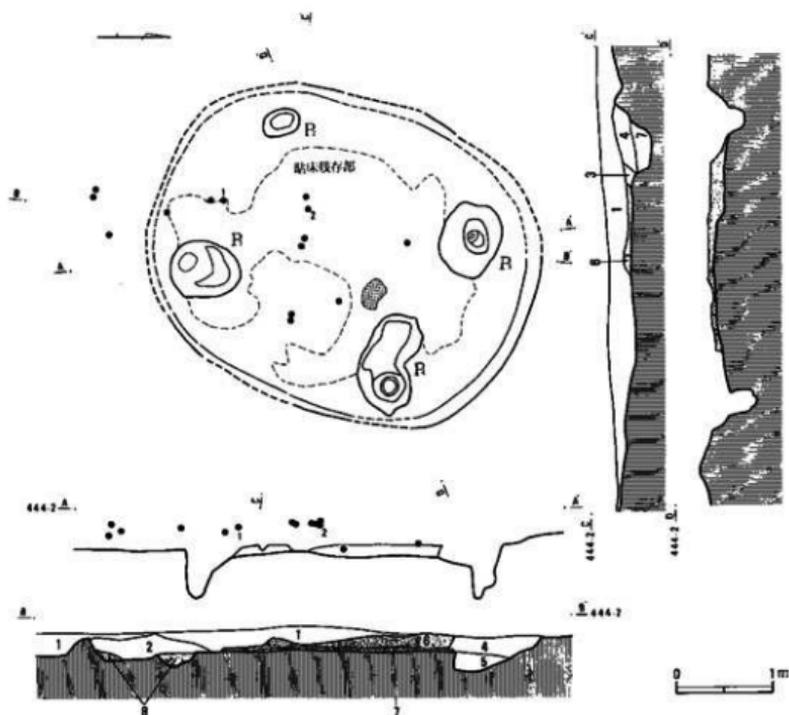
〈覆 土〉覆土は4層に分けられるが攪乱を受けており、遺存状況は悪い。1・2層は攪乱と考えられる。

〈床面・壁〉床面も遺存状況が悪く壁際が攪乱を受けており、住居址中央部に貼床（第6・7・8層）が残存するのみである。貼床は地山を掘り窪めた後、地山のロームブロックが混入している暗褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約13cmである。

壁は比較的残存状況が良好な北壁で壁高12cmを測り、緩やかな立ち上がりをみせる。

〈 炉 〉炉址は住居址中央部やや東よりに焼土が確認され、地床炉の形態をとると思われるが、攪乱を受けているために形状・規模等は明確に把握できない。

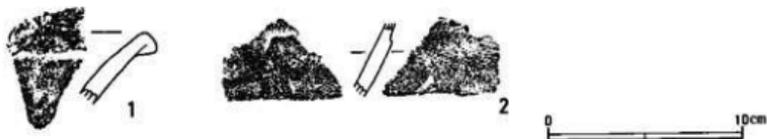
〈その他の施設〉住居址内においてピットが4ヶ所検出され、これらは主柱穴になると考えられる。P1は73cm×60cm・床面からの深さ55cm、P2は40cm×38cm・床面からの深さ40cm、P3は76cm×60cm・床面からの深さ20cm、P4は104cm×50cm・床面からの深さ48cmを測る。貯蔵穴は確認されていない。



23号住居址土層説明

層色調	特 徴
1 黒色	黒色土粒子・ローム粒子(径2mm)・ロームブロックを含む。しまりに欠ける。
2 黒褐色	ロームブロックを多量に含む。しまりに欠ける。
3 黄褐色	ローム粒子を多量に含む。やや粘上質。
4 黒色	ローム粒子・ロームブロックを含む(6層より少ない)しまりに欠ける。
5 黄褐色	ロームに黒色土が塊状に存在する。しまりに非常に強。
6 黄褐色	ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。しまりに強。(粘床)
7 黒色	床直上の黒色土。しまりに強。(粘床)
8 黒褐色	ローム粒子を含む。粘性弱。(粘床)

※ 1、2層は、飛灰部。



第70図 23号住居址 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

掘り方は床下全面におよび、かなり激しい起伏がみられ住居址中央部を除く部分が一段深く掘り込まれている。

周溝は検出されていない。

＜出土遺物＞遺物は覆土上層から土師器の破片が少量出土しているが、図示し得たものは僅かである。

24号住居址（第71～77図、第40表、図版4-25～28、14-25、15-26）

＜位 置＞C・D-22・23・24グリッドに位置する。北側1mに37・71号土坑、東側2.5mに25号住居址が存在する。住居址中央部の西壁から東壁にかけては24・25号溝状遺構と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から24号住居址→24号溝状遺構→25号溝状遺構の順で新しい。西壁側1/2は調査区外へ延びているため未調査である。また、覆土・床面および壁は24号溝状遺構によりかなり激しい攪乱を受けており残存状況は悪い。

＜形状・規模＞平面形態は西壁側が調査区外へ延びているために不明であるが、他の壁あるいは床面の遺存状況、柱穴の配置等から馴の張る隅丸長方形を呈する大型住居址になると考えられる。

主軸方位は柱穴の配置等からN-4°-Eと考えられる。

住居規模は推定長軸9.5m・推定短軸7mである。

＜覆 土＞覆土は4層に分けられるが、24・25号溝状遺構により切られている。第16～18層が貼床になると考えられる。

＜床面・壁＞床面は住居址中央部が24号溝状遺構により削平されているために起伏が激しく荒れているが、他の遺存部分ではほぼ平坦で堅緻な貼床（第6・7・18層）が検出されている。貼床は地山を掘り窪めた後、地山のロームブロックが混入している黒褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約8cmである。また、床面全体において焼土および炭化物が検出しており、焼失住居址の可能性が考えられる。

壁は遺存状況が良好な北壁で壁高73cmを測る。

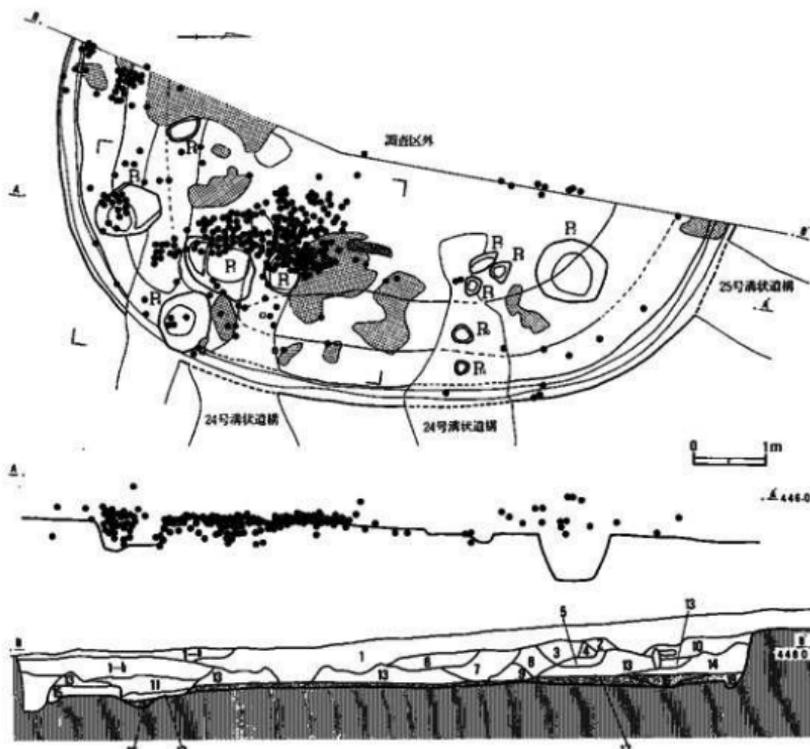
＜ 炉 ＞床面遺存部において広範囲に焼土が検出されたが炉址と考えられる掘り込みは確認されておらず、住居址西壁側の調査区外に存在すると思われる。

＜その他の施設＞住居址内においてピットは11ヶ所検出されたが、これらの中には24号溝状遺構に帰属するものがいくつか存在していると思われる。P1・P2は配置・規模等から主柱穴と考えられる。P1は100cm×76cm・床面からの深さ25cm、P2は94cm×86cm・床面からの深さ66cmを測る。P3は形態および住居内における配置より貯蔵穴と考えられる。規模は91cm×71cm・床面からの深さ40cmを測る。

掘り方は床下全面におよび住居址中央部を除く部分が一段深く掘り込まれている。

周溝は西壁側は未調査のため不明であるが、全周すると考えられる。幅約80cm・深さは床面より10cmを測る。

＜出土遺物＞遺物は住居址南東コーナー部の床面直上と貯蔵穴と考えられるP3の覆土内に集中して出土している。南東コーナー部では大型の壺型土器（№5）が押しつぶされて重なった



24号住居土層説明

層	色	説明
1	暗褐色	耕作土。(基本層作 1層) ローム粒子を少量含む。
1-a	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量含む。しまりに欠ける。
1-b	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量含む。
2	黒色	黄色の砂を含む。5層より深い。
3	黒褐色	きめの細かい砂質土。ローム粒子を少量含む。
4	黒褐色	黄色の砂を多量に含む。粘土質。
5	黒色	ローム粒子を少量含む。粘土質。
6	暗褐色	砂礫を大量に含む。礫はφ5~20mm。
7	暗褐色	砂礫・ローム粒子を少量含む。
8	黒褐色	砂礫・ローム粒子を少量含む。
9	暗褐色	砂礫を多量に含む。礫はφ5~10cmとし、10mm程の大礫も含む。
10	黄褐色	ローム粒子を少量含む。黒色土ブロックを塊状に含む。
11	黄褐色	やや砂質。ローム粒子を多量に含む。黒色土・焼土粒子を少量含む。
12	黒脚色	ローム粒子を少量含む。粘性有。
13	暗脚色	ローム粒子・焼土粒子を多量に含む。炭化物を少量含む。やや黄褐色を帯びる。粘性有。
14	暗脚色	ローム粒子を多量に含む。焼土粒子・炭化物を少量含む。
15	黄褐色	黒色土を少量含む。しまり強。
16	黄褐色	黒色土を少量含む。(粘床)
17	黄褐色	上面は焼け、一部に炭化物がのる。(粘床)
18	黄褐色	ロームブロックと少量の黒色土で構成される。しまり強。
18	黄褐色	ローム粒子を多量に含む。(粘床)

※ 1-a, 6-9, 11, 12層は、24号溝状道橋覆土、2-5層は、25号溝状道橋覆土。

第71図 24号住居 平面・土層・断面・遺物分布

状態で出土し、また台付甕の脚部 (No 11・12・13・14) が多く出土している点が注目される。貯蔵穴内の覆土からは小型の埴形土器 (No 23) が完形に近い状態で出土している。

25号住居址（第78・79図、図版4-29）

<位 置> A・B・C-24・25・26グリットに位置する。北側周辺に87号土坑から13号地下式墳（旧91号土坑）、西側2.5mに24号住居址が存在する。住居址中央部やや西側では86号土坑と西壁から南壁にかけては24号溝状遺構と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から25号住居址→24号溝状遺構、25号住居址→86号土坑の順で新しい。東壁側は調査区外へ延びているため未調査である。24号溝状遺構と重複している部分では壁の確認が困難であり、また住居址中央部やや西側では後世の攪乱を受けており、遺存状況は悪い。

<形状・規模> 平面形態は遺存している壁あるいは床面の状況、柱穴の配置等から大型の隅丸長方形を呈する住居址になると考えられる。主軸方位は残存壁および柱穴の配置等からN-55°-Eである。

住居規模は推定長軸11m・推定短軸7mである。

<覆 土> 覆土は3層に分けられるが、南壁側は24号溝状遺構により切られている。第5層が貼床である。

<床面・壁> 床面は遺存状況が悪く、住居址中央部やや西側のみ堅緻な貼床（第5層）が検出されている。貼床は地山を掘り窪めた後、地山のロームブロックが混入している黒褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約14cmである。

壁は遺存状況が比較的良好な北壁で壁高15cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

< 炉 > 炉址は住居址中央部やや西側に位置する地床炉である。平面形態は一部攪乱により破壊されているが不整形長方形を呈すると思われる、規模は推定長軸100cm・短軸47cmを測る。断面は約8cm掘り窪められた皿状を呈している。

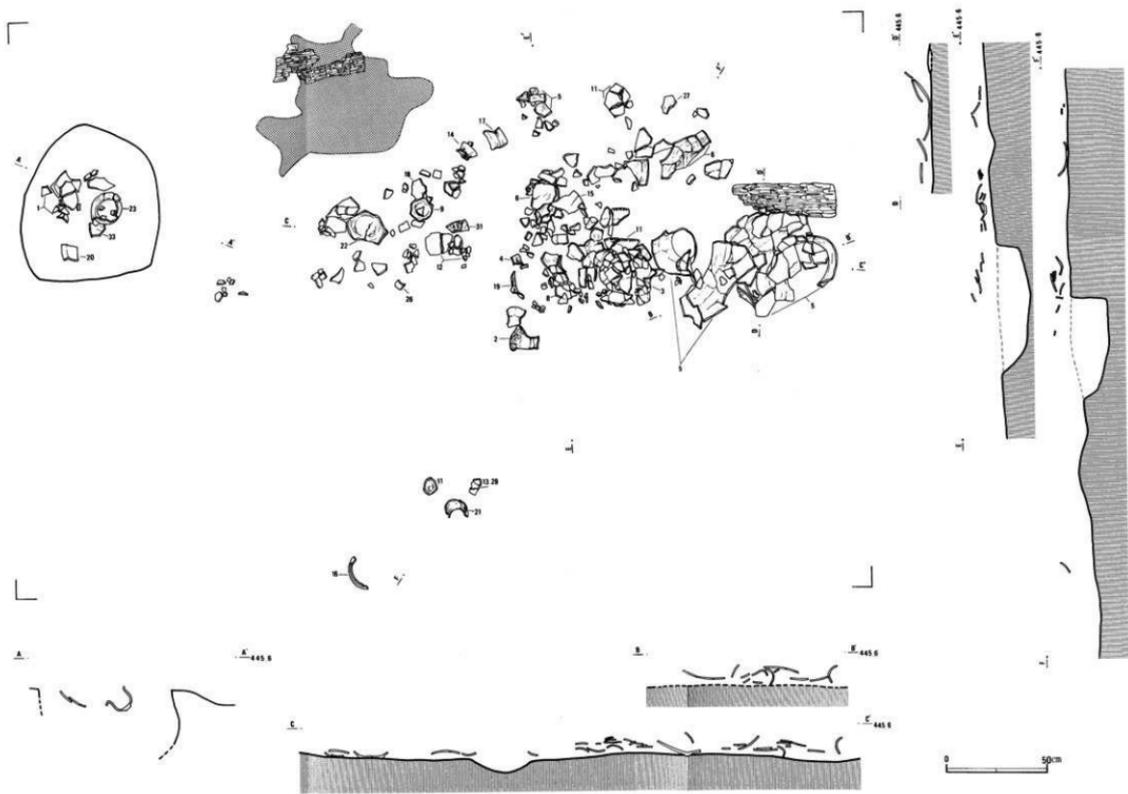
<その他の施設> 住居址内においてピットは3ヶ所検出された。P1・P2・P3は配置等から主柱穴と考えられる。P1は24号溝状遺構により上部を破壊されており、遺存している規模は89cm×78cm・深さ57cmである。P2は当初69号土坑と認定したが、重複する形で25号住居址が検出され、両遺構の覆土の層位関係から25号住居址の柱穴と考えられる。規模は径80cmのやや歪んだ正方形を呈し、床面からの深さ74cmを測る。P3は100cm×83cm・掘り方底面からの深さ約80cmを測る。

北壁際のP2とP3の間に長方形を呈する掘り込みが確認された。規模は長軸1.75m・短軸95cm・床面からの深さ10cmを測る。掘り込みの覆土は貼床のように非常に堅緻であり、暗褐色土に黒色土およびローム粒子が混入している。底面は起伏が激しく、凸凹している。用途については不明である。

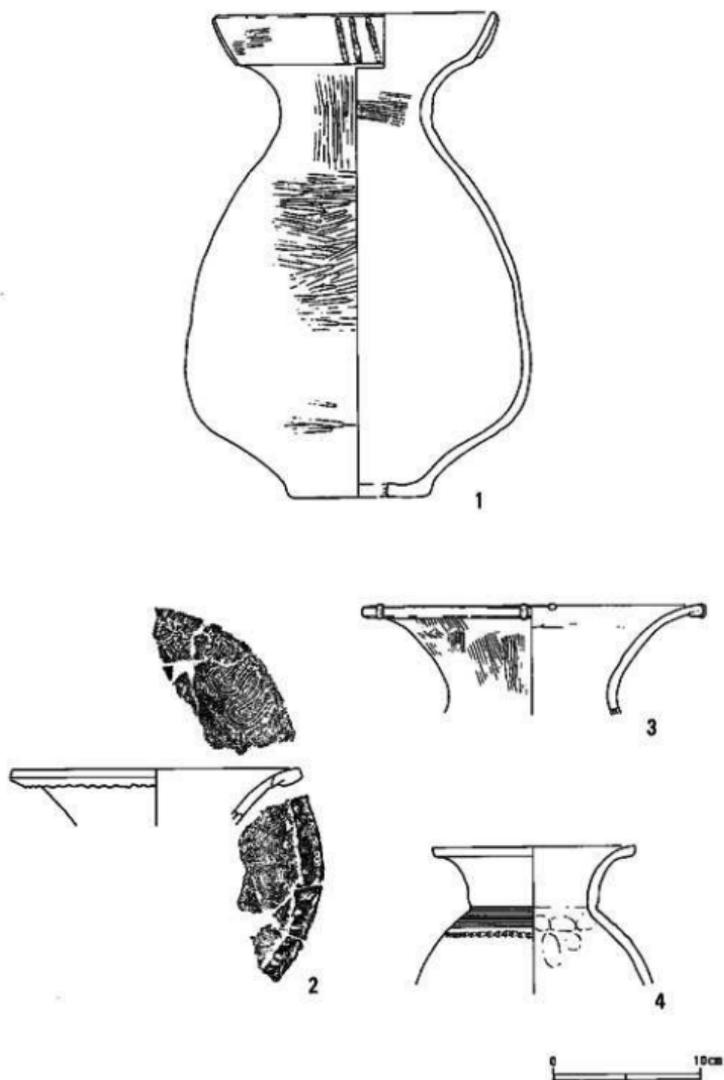
掘り方は床下全面におよび起伏が激しく凸凹しており、住居址中央部を除く部分が一段深く掘り込まれている。

周溝は遺存部では西壁と北壁に検出されているが、北西コーナーおよび北壁の一部で途切れている。幅約30cm・深さは掘り方底面より20cmを測る。

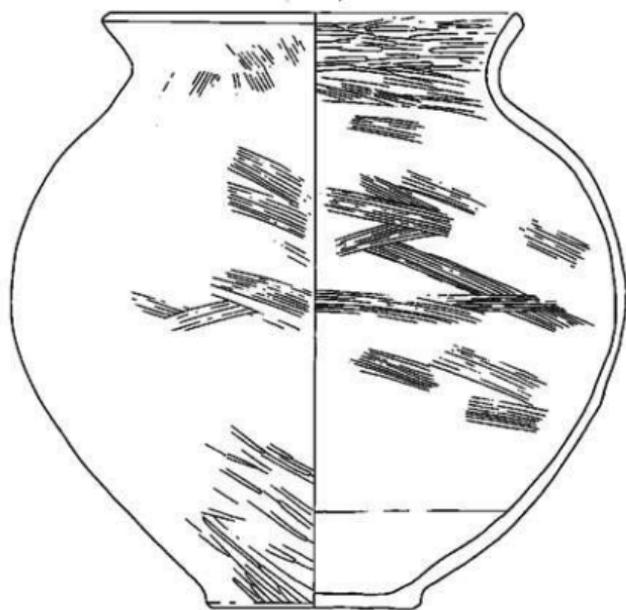
<出土遺物> 遺物は床面直上から土師器の細片が少量出土しており、図示し得たものは僅かである。



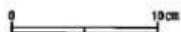
第72图 24号住居址 遺物出土状況



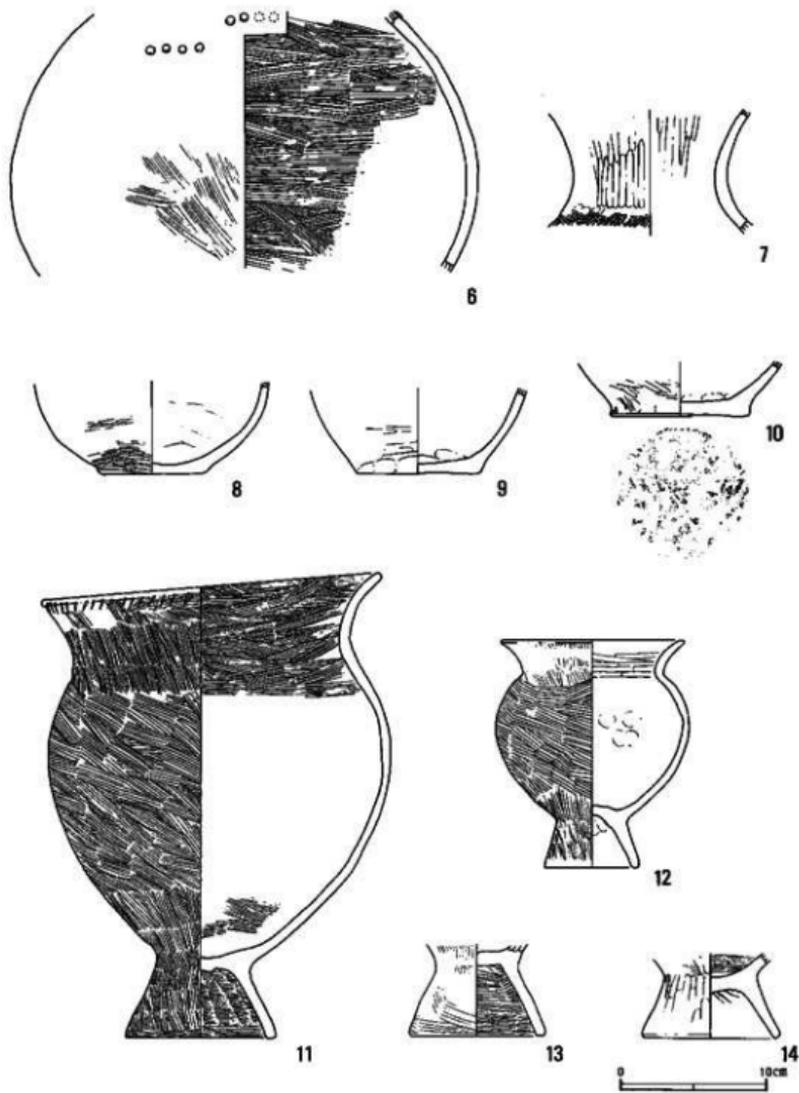
第73图 24号住居址 出土遗物 (1)



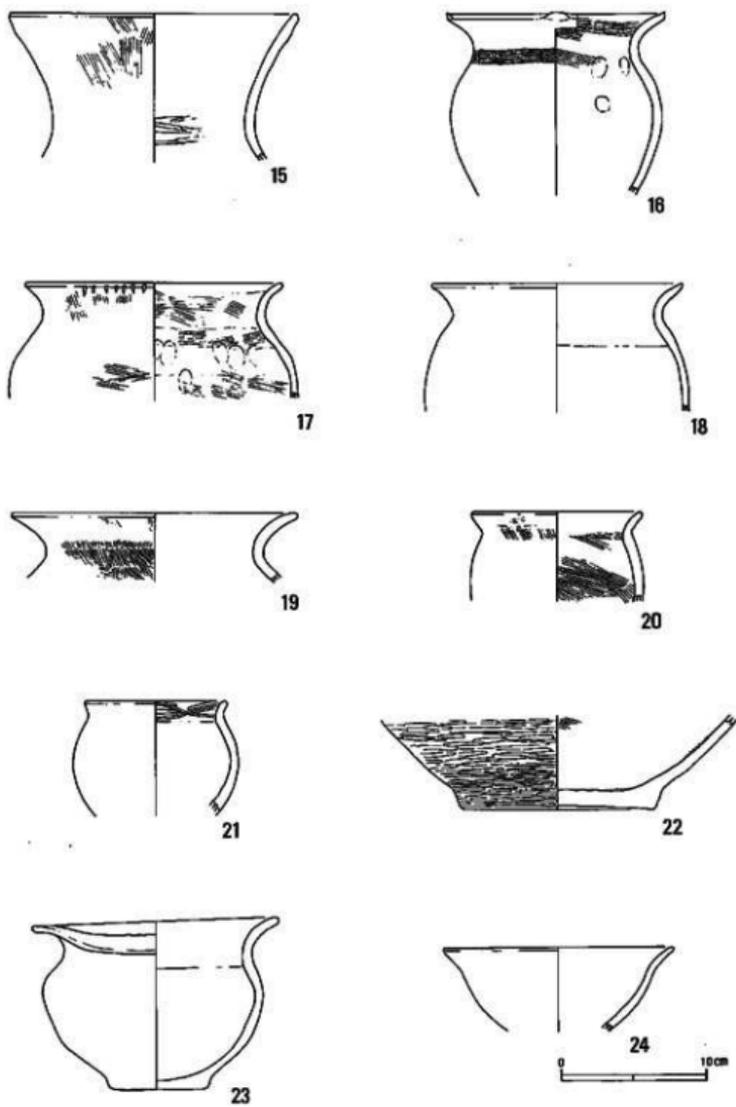
5



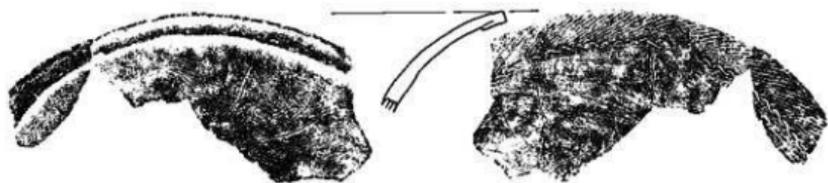
第74图 24号住居址 出土遺物 (2)



第75图 24号住居址 出土遗物 (3)



第76图 24号住居址 出土遺物 (4)



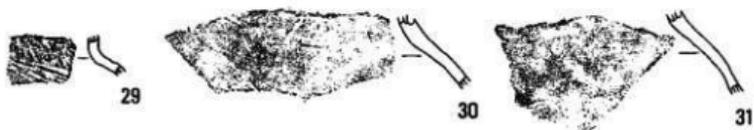
25



28

27

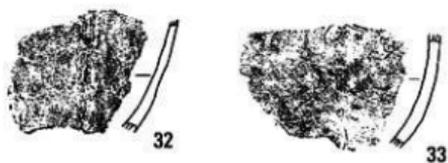
28



29

30

31

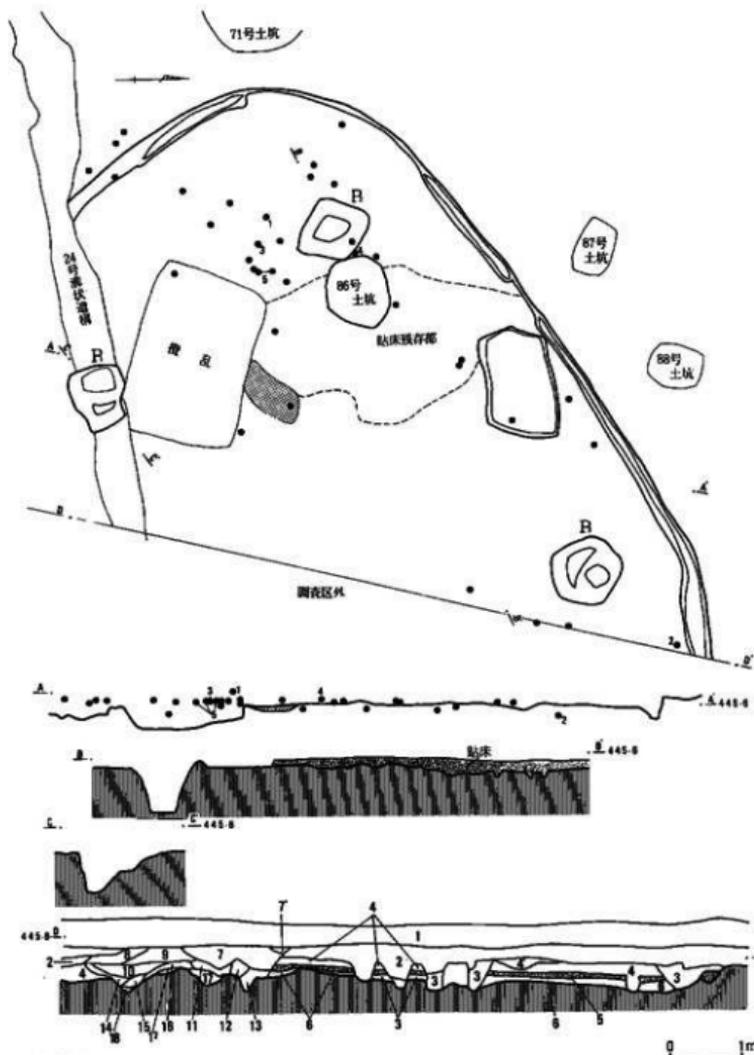


32

33



第77图 24号住居址 出土遺物 (5)



25号住居址土層説明

層	色調	特 徴	備 考
1	暗褐色	耕作土。(基本層序 1層)	
2	黒褐色	一部にローム粒子を含む。(基本層序 2層)	
3	黒褐色	黒色土・ロームがブロック状に混在する。しまりに欠ける。	
4	暗褐色	ローム粒子・ロームブロックを含む。	
5	暗褐色土	ローム粒子を少量含む。	(粘床) しまり強。

層	色調	特 徴	備 考
6	黒褐色	ロームを高率とし、黒色土をブロック状に含む。	
7	暗褐色	しまった土をブロック状に含む。ローム粒子を含む。	
7'	暗褐色	ロームブロックを含む。しまりに欠ける。	
8	黒褐色	しまった土をブロック状に含む。	
9	黒褐色	粘性有。	
10	暗褐色	ローム粒子・小礫(φ5mm程度)を少量含む。しまりに欠ける。	
11	黒褐色	ローム粒子を少量含む。粘性有。	
12	暗褐色	ローム粒子を含む。	
13	暗褐色	ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。	
14	黒褐色	黒色土をブロック状に含む。しまりに欠ける。	
15	黒褐色	φ5~10mmの小礫。ローム粒子を含む。	
16	暗褐色	砂質。ローム粒子を少量含む。しまり有。	
17	暗褐色	ローム粒子・ブロック状にしまった土を含む。	
17'	暗褐色	ローム粒子を少量含む。粘性有。	

※ 7~18層は、24号溝状遺構壁土。

第78図 25号住居址 平面・土層・断面・遺物分布



第79図 25号住居址 出土遺物

26号住居址 (第80図、第41表、図版4-30)

<位置> A・B・Z-34~37グリットに位置する。東壁側1/3は調査区外へ延びているために未調査である。本住居址の周辺は遺構が密集している地域である。北側2m付近に64~68号土坑、4m付近に99号土坑・10号地下式竈(旧81号土坑)・38~41号溝状遺構、西側1m付近に60・61・63号土坑・6号地下式竈(旧77号土坑)、2m付近に11号地下式竈(旧83号土坑)・33号溝状遺構、5m付近に7号地下式竈(旧78号土坑)、南側1mに100号土坑、5m付近に55・98号土坑・7m付近に97号土坑・28号溝状遺構・1号掘立柱建物址が存在する。重複している遺構は住居址中央部では101~106号土坑、中央部やや北側では32号溝状遺構・62・79号土坑、中央部やや西側では1・2号柱穴列、南壁側では2号掘立柱建物址・108号土坑と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から26号住居址が他の遺構に比べ古いと思われる。

<形状・規模> 平面形態は東壁側が調査区外へ延びているが、遺存している西壁および北壁あるいは柱穴の配置等から大型のやや刷の張る隅丸長方形を呈すると考えられる。

主軸方位は残存壁および柱穴の配置等からN-21°-Wである。

住居規模は推定長軸12m・推定短軸8mである。

<覆土> 覆土は11層に分けられ、第15層が貼床部、第16~21層が掘り方の埋土である。また、第9・11層はしまりが非常に強く堅緻であり、住居址中央部を除く壁際に堆積しており人為的に埋め戻されたと考えられる。

<床面・壁> 床面は遺存状況が悪く、住居址中央部やや北側および南壁際のみ堅緻な貼床(第15層)が検出されている。貼床は地山を掘り窪めた後、地山のロームブロックが混入している黒褐色土(第16~21層)を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約10cmである。また、北壁側の一部の貼床直下より炭化物および焼土が検出されている。

壁は遺存状況が比較的良好な北壁で壁高約80cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

<炉> 炉址は住居址中央部やや東よりに位置する地床炉であるが102号土坑および32号溝状遺構と重複しているために破壊されており、平面形態・規模は明確に把握できない。

<その他の施設> 住居址内においてピットは2ヶ所検出された。P1・P2は配置等から主柱穴と考えられる。P1の規模は1.15m×1m・深さ58cmである。P2は北側約1/2が32号溝状遺構と重複しているために破壊されており、遺存部での規模は1.22m×推定1.1m・深さ58cmである。

掘り方は遺存部では住居址中央部が浅く、壁際が幅約1m、深さ約15cmに掘り込まれている。

周溝は遺存部では各壁際に幅約30cm・深さは掘り方底面より13cm程を測る。

<出土遺物>遺物は床面直上から土師器の細片が少量出土しているのみであり、図示し得たものは僅かである。

27号住居址 (第61~85図、第42表、図版5-31・32、15-27)

<位置>A・B-45・46・47グリットに位置する。西壁および北壁側1/2は調査区外へ延びているため未調査である。北側8m付近に29号住居址、東側4.5mに28号住居址、南側4.5mに35号溝状遺構が存在している。住居址中央部北側では37号溝状遺構、南側で36号溝状遺構と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から27号住居址→36・37号溝状遺構となる。

<形状・規模>本住居址は壁および床面がかなり激しく削平されており、遺存状況は非常に悪い。平面形態は遺存している壁あるいは床面の状況、柱穴の配置等からやや大型の隅丸長方形を呈すると考えられる。主軸方位は残存壁および柱穴の配置等からN-30°-Wである。

住居規模は推定長軸10m・推定短軸7mである。

<覆土>覆土は2層に分けられるが、北壁側は36号溝状遺構、南壁側は37号溝状遺構により切られている。第17層が貼床である。

<床面・壁>床面は上記のように遺存状況が悪く、住居址中央部を除く壁際に堅緻な貼床(第17層)が検出されている。貼床は地山を掘り窪めた後、地山のロームブロックが混入している黒褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約10cmである。

壁は遺存状況が比較的良好な東壁で壁高18cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

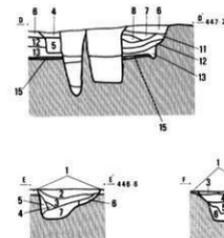
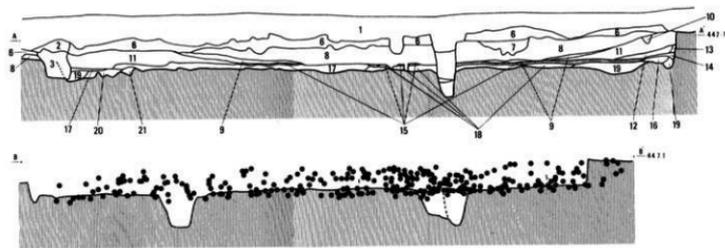
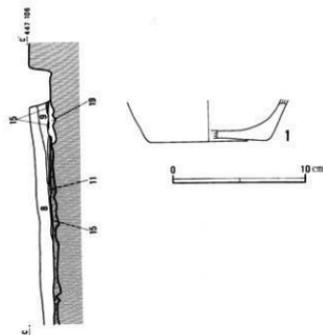
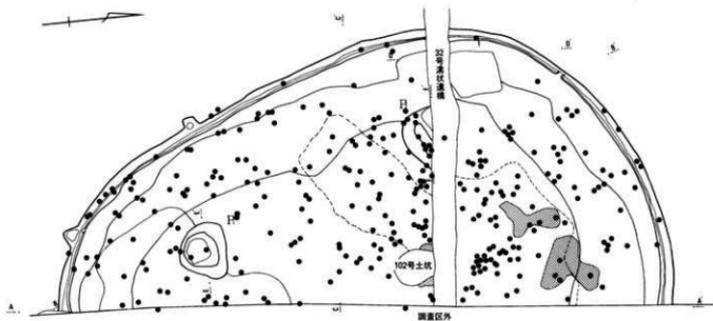
<炉>炉址は床面が激しく削平されているために検出できなかった。

<その他の施設>住居址内においてピットは5ヶ所検出された。P3・P5は配置等から主柱穴と考えられる。P3の規模は50cm×42cm・深さ55cmである。P5は西側1/2が調査区外へ延びているために明確な規模は把握できないが遺存部での規模は径80cm程の不整円形を呈し、掘り方底面からの深さ約40cmを測る。

掘り方は床面の遺存状況が悪く明確に把握できないが、住居址中央部を除く部分が一段深く掘り込まれている。

周溝は遺存部では検出されていない。

<出土遺物>遺構の遺存状況が悪いが遺物は床面直上から比較的まとまって出土している。壺形土器の破片が多く、No1は外面の頸部にRL縄文、折り返し口縁部にはハケ状工による刻みが、また内面は口縁部に結節のRL縄文、2個1組の穿孔が2ヶ所に施されている。



26号住居址（南西セクション図）土層説明

層 色 調	特 徴
1 暗赤褐色	耕作土。(基本層序 1層) ロームブロック・炭化物を少量含む。粘性や中弱。しまり有。
2 暗赤褐色	耕作土に似る。しまり弱。
3 暗 緑 色	ローム粒子を層状に少量含む。粘性。しまりに欠ける。
4 黄 褐色	ローム粒子を多量に含む。黒色土をブロック状に含む。やや粘上質。しまりに欠ける。
5 黒 色	小礫(φ=10mm)を含む。しまりに欠ける。
6 黒 褐色	粘性に欠ける。しまり中弱。
7 暗 褐色	黒色土・ロームブロックを層状に少量含む。粘性有。しまり有。
8 暗 褐色	黒色土・ロームブロック(φ2cm)を多量に含む。粘性有。しまり有。近郊遺構遺跡より南側の6層はロームブロックが中心部に層状に混入する。
9 黄褐色	ロームブロック・黒色土を多量に含む。粘性有。しまり非常に強。
10 暗 褐色	粘性に欠ける。しまり有。
11 暗 褐色	黒色土・ロームブロックを多量に含む。粘性有。しまり非常に強。
12 暗 褐色	黒色土・ロームブロックを多量に含む。粘性有。しまり非常に強。
13 暗 褐色	ロームブロックを少量含む。粘性に欠ける。しまり中弱。
14 暗 褐色	ロームブロックを少量含む。粘性に欠ける。しまり強。
15 暗 褐色	ロームブロック・黒色土を多量に含む。(固形)ローム・塊状粒子を多量に含む。粘性中弱。しまり非常に強。
16 暗 褐色	1層状に欠ける。
17 暗 褐色	粘質下部礫。黒色土・ロームブロックを多量に含む。粘性に欠ける。しまり弱。
18 黄 褐色	ロームブロックを多量・黒色土を少量含む。粘性有。しまり強。
19 暗 褐色	ロームを層状に含む。粘性強。しまり有。
20 暗 褐色	ロームブロックを少量含む。粘性強。しまり中弱。
21 黄 褐色	黒色土を少量含む。粘性強。しまり有。

※ 2・3層は、100号土坑層上。

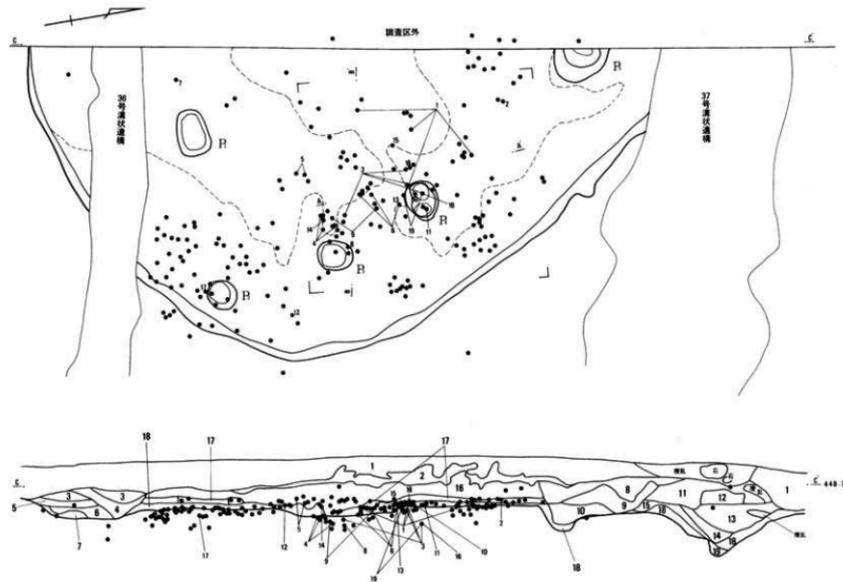
26号住居址 柱式(P.)土層説明

層 色 調	特 徴
1 暗褐色	ローム・黒色土を層状に含む。しまり有。
2 暗褐色	ローム・黒色土を層状に含む。1層よりロームを多量に含む。しまり中弱。
3 黄褐色	ロームブロックを主体とし、黒色土を少量含む。しまり有。
4 暗 色	ロームと黒色土を層状に含む。しまり非常に強。
5 暗 色	ロームブロック・黒色土を多量に含む。しまりに欠ける。
6 黄褐色	ロームブロック・内層礫ローム及び少量の黒色土で構成される。しまりに欠ける。
7 黄褐色	ロームブロック・内層礫ローム及び少量の黒色土で構成される。しまり有。

26号住居址 柱式(P.)土層説明

層 色 調	特 徴
1 暗褐色	ローム・黒色土を層状に含む。しまり有。
2 暗褐色	ローム・黒色土を層状に含む。1層よりロームを多量に含む。しまり中弱。
3 黄褐色	ローム・黒色土を層状に含む。ロームは少ない。しまり有。
4 黄褐色	ロームがやや多い。3層に層が、しまりに欠ける。
5 黄褐色	ロームブロックを主体とし、黒色土を少量含む。しまり有。
6 黄褐色	ロームブロックを主体とし、黒色土を少量含む。しまり有。
7 暗褐色	陥没土。黒色土を少量含む。しまりに欠ける。

第80図 26号住居址 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物



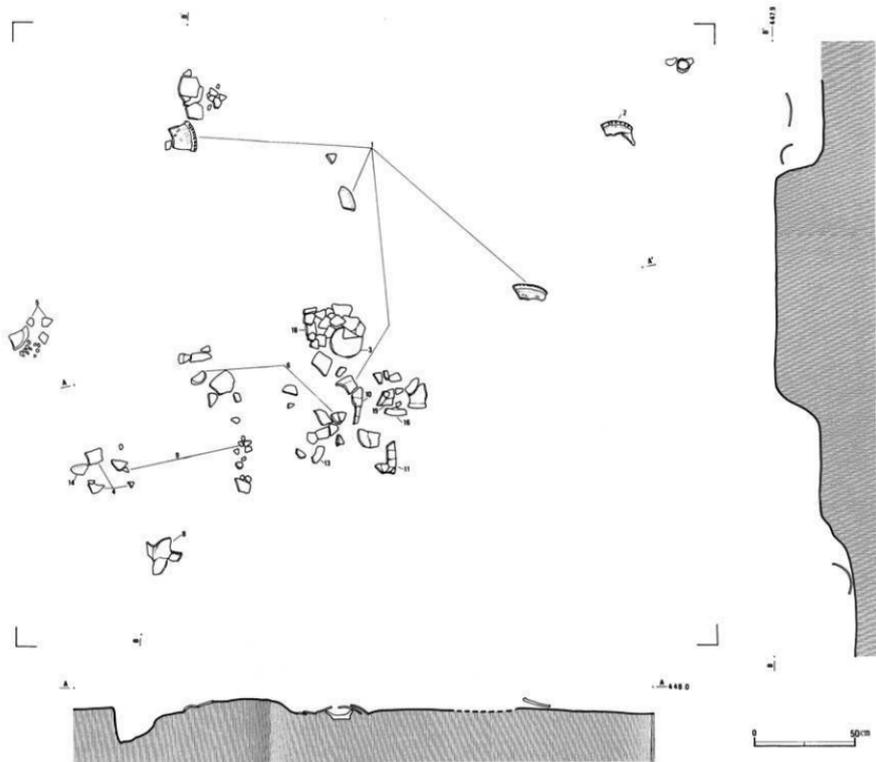
27号住居址土層説明

層	色	調	特	備
1	暗茶褐色		耕作土。(基本層序 1層) 雑草が多い。粘性有。しまり弱。	
2	暗原褐色		ローム粒子を少量含む。雑草が多い。しまり有。	
3	暗褐色		ローム粒子を少量含む。粘性有。しまり有。	
4	暗褐色		粘性強。しまり弱。	
5	黄褐色		ローム粒子を多量に含む。	
6	黄褐色		ローム粒子を多量に含む。	
7	黄褐色		ロームブロックを含む。	
8	黄褐色		ロームブロックを多量に含む。粘性強。しまり弱。	
9	暗褐色		粘性有。しまり弱。	
10	暗褐色		粘土粒子を少量含む。粘性有。しまり弱。	
11	黄褐色		16層に類似。	
12	暗褐色		ローム粒子を多量に含む。粘性強。しまり弱。	
13	暗褐色		12層より細かい。ローム粒子を多量に含む。粘性強。しまり弱。	
14	暗褐色		ローム粒子を少量含む。粘性強。しまり弱。	
15	暗褐色		ローム粒子を多量に含む。粘性強。しまり有。	
16	黄褐色		ロームブロックを多量に含む。粘性強。しまり弱。	
17	黄褐色		焼土粒子・炭化物を多量に含む。粘性に欠ける。しまり強。(粘床)	
18	黄褐色		焼土層。	
19	暗褐色		ローム粒子を多量に含む。粘性有。しまり有。	

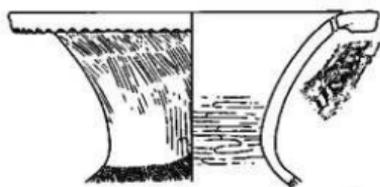
※ 3-7層は、36号溝状遺構層上。8-15層は、37号溝状遺構層上。

0 2 m

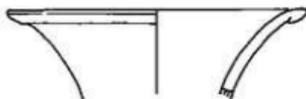
第81図 27号住居址 平面・土層・遺物分布



第82图 27号住居址 遺物出土状況



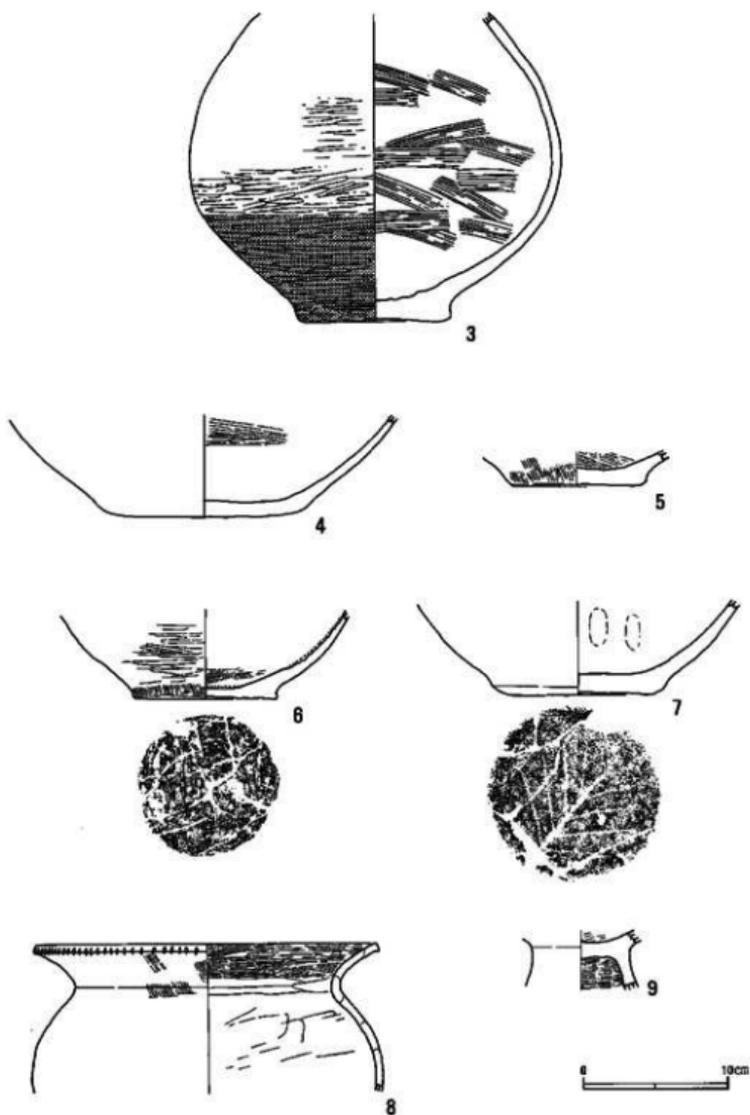
1



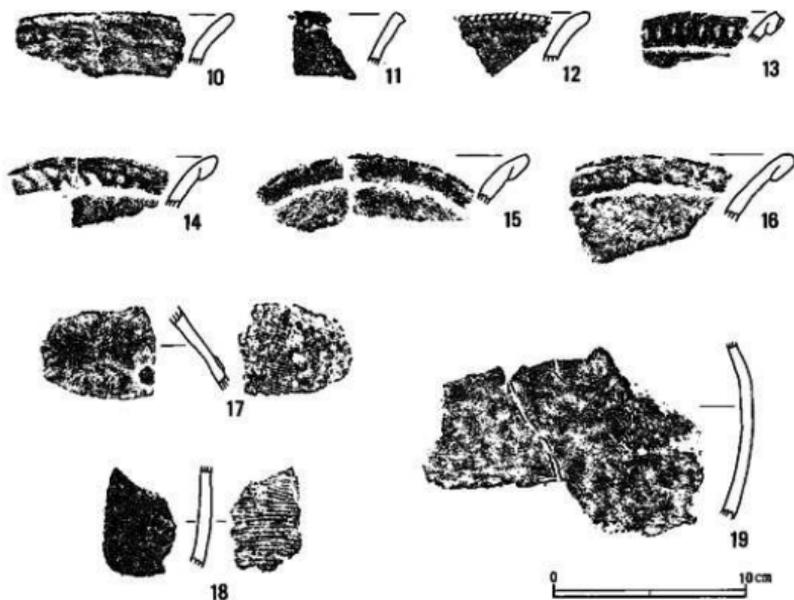
2



第83图 27号住居址 出土遺物 (1)



第84图 27号住居址 出土遺物 (2)



第85図 27号住居址 出土遺物 (3)

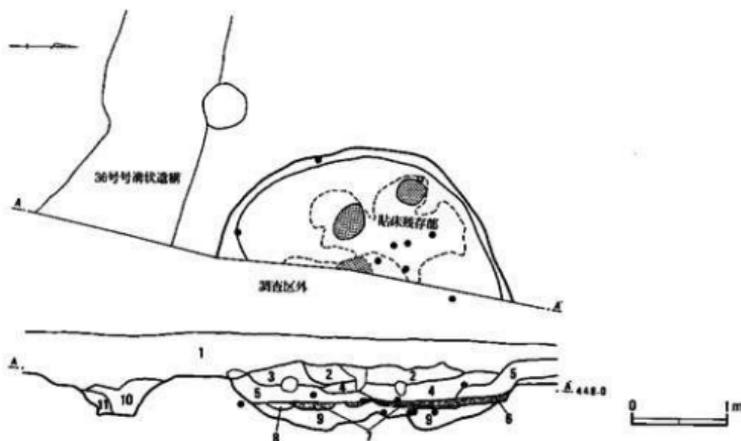
28号住居址 (第86図、図版5-33)

<位置> Z-45グリットに位置する。南側に近接して36号溝状遺構、北側6 mに37号溝状遺構、西側7 mに27号住居址が存在する。住居址の東側約1/2が調査区外へ延びており、未調査である。

<形状・規模> 住居規模は不明であるが、平面形態は残存している西壁と北壁の一部あるいは掘り方等から隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方位はN-71°-Eである。

<覆土> 覆土は4層に分けられ、下層へ移行するにしたがってロームブロックの混入が多くみられる。掘り方の埋土は4層確認され、第6・7層が貼床である。

<床面・壁> 床面は遺存状況が悪く、住居址中央部にのみ堅靱な貼床(第6・7層)が検出されている。貼床は地山を掘り窪めた後、地山のロームブロックが混入している暗褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約8 cmである。床面が残存している部分においては焼土



28号住居址土層説明

層	色	調	特	徴
1	褐色		耕作土。(基本層序 [I層]) 焼土が塊状に混入する。炭灰が多い。粘性弱。しまり弱。	
2	暗褐色		ロームブロック・焼土を少量含む。粘性有。しまり有。	
3	褐色		粘性・しまりに欠ける。	
4	暗褐色		ロームブロックを多量に含む。粘性有。しまり有。	
5	暗褐色		4層よりも暗い。ロームブロックを少量含む。粘性有。しまり有。	
6	黒色		粘性に欠ける。しまり強。(黒床)	
7	暗褐色		ロームブロックを含む。粘性に欠ける。しまり非常に強。(黒床)	
8	暗褐色		9層よりも黄色が強い。粘性強。しまり有。	
9	暗褐色		粘性強。しまり有。	

第88図 28号住居址 平面・土層・遺物分布

魂が多量に検出されており、焼失住居の可能性がある。

壁は北壁で壁高20cmを測りやや緩やかに立ち上がり、南西コーナー部で壁高25cmを測り緩やかに立ち上がる。

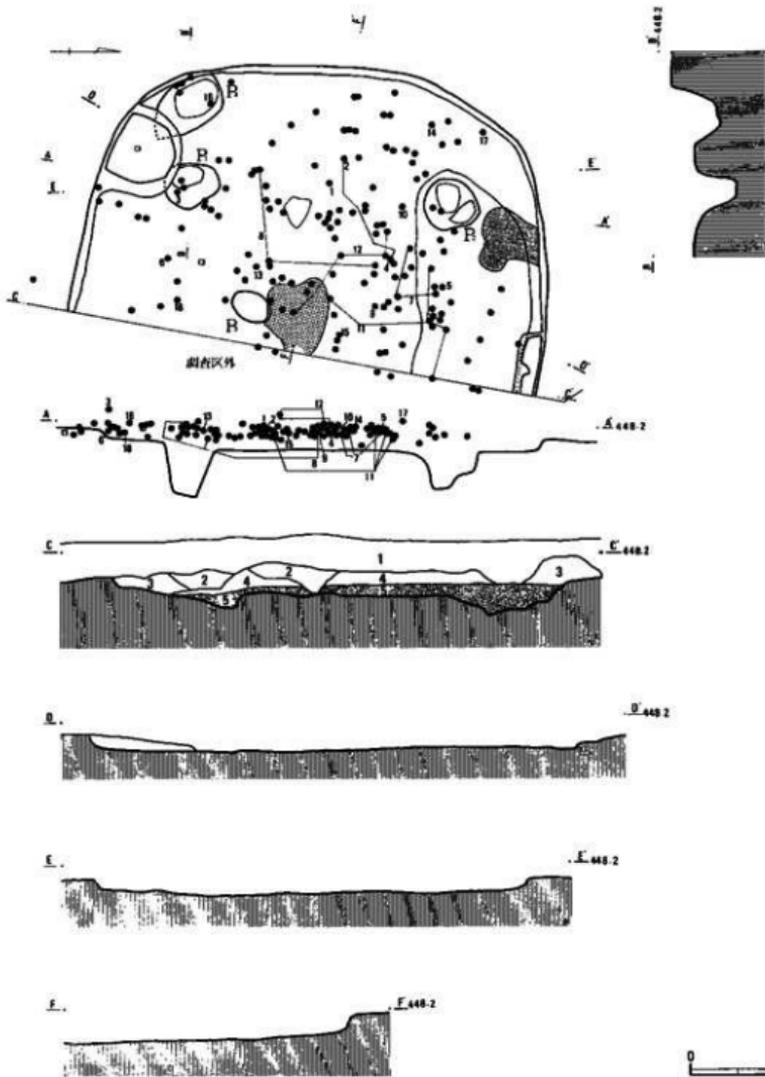
< 炉 > 炉址は住居址中央部やや西よりに位置する地床炉である。平面形態はほとんどの部分が調査区外へ延びているために不明である。断面は皿状を呈すると思われる。

< その他の施設 > 住居址内においてピットおよび周溝は検出されていない。

掘り方は床下全面におよび、住居址中央部を除く部分が一段深く掘り込まれている。

< 出土遺物 > 遺物は床面直上から土師器の細片が少量出土しているのみである。

29号住居址 (第87・88図、第43表、図版5-34)

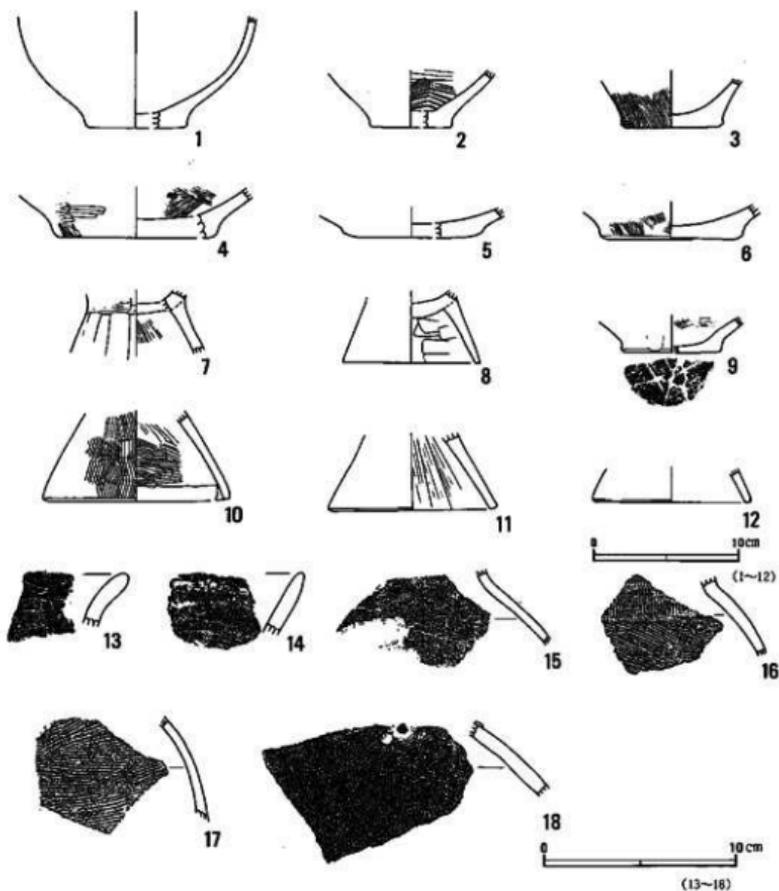


29号住居址土層説明

層	色調	特	徴
1	暗褐色	耕作土(基本層序 1層)	粘性・しまりに欠ける。
2	暗褐色	暗粒状。	粘性・しまりに欠ける。
3	茶褐色	粘性強。	しまり有。
4	暗褐色	黒色土を底状に多量に含む。	粘性強。しまり有。
5	黄褐色	暗褐色土を含む。	粘性非常に強。しまり有。(粘床)

※ 2層は、埋込部。

第87図 29号住居址 平面・土層・断面・遺物分布



第88図 29号住居址 出土遺物

<位置> Z-49・50グリットに位置する。西側2.5mに70号土坑が存在している。東壁側は1/2が調査区外へ延びており、未調査である。

<形状・規模> 平面形態は遺存している壁あるいは床面の状況、柱穴の配置等から隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方位は残存壁および柱穴の配置等からN-88°-Wである。

住居規模は推定長軸6.5m・短軸5mである。

<覆土> 覆土は2層に分けられ、地表から床面までの深さが45cmと浅いため、上層（第2

層)は耕作による攪乱を受けている。第5層が貼床である。

<床面・壁>床面は残存部においては比較的良好であり、平坦で堅緻な貼床が検出されている。貼床は地山を掘り窪めた後、地山のロームブロックが混入している暗褐色土を埋め戻し構築している。貼床の厚さは約25cmを測る。

壁は北壁で壁高14cm、南壁で壁高10cm、西壁で壁高17cmを測り、各壁とも緩やかに立ち上がる。

< 炉 >炉址は住居址中央部やや東よりに位置する地床炉である。平面形態は一部調査区外へ延びているが不整楕円形を呈すると思われる。規模は推定長軸90cm・短軸60cmを測る。断面は約15cm程掘り窪められた皿状を呈している。

<その他の施設>住居址内においてピットは4ヶ所検出された。P1・P2は配置等から支柱穴と考えられる。P1は57cm×47cm・床面からの深さ57cm、P2は57cm×56cm・床面からの深さ40cmを測る。P3は炉址を切っており、耕作による攪乱の影響とも考えられる。P4は位置的に貯蔵穴と考えられる。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は85cm×52cm・床面からの深さ35cmを測る。

南西コーナーにおいて床面より一段高い部分が検出されている。平面形態は西壁に接する半円形を呈し、規模は径72cm・幅103cm・高さ15cmを測る。用途については不明であり、P1はこの下部より検出している。

掘り方は床下全面におよび緩やかな起伏がみられ、北壁側のみ一段深く掘り込まれており、他の部分については検出されていない。

周溝は西壁中央部で検出され、幅約25cm・深さは床面より10cmを測る。

<出土遺物>遺物は土師器破片が床面直上より比較的まとまって出土しており、なかでも台付壺の脚部(Nh7・8・10・11・12など)が多く確認されている。これらの脚部は接合資料が多く、床面に散在して検出されている。

(2) 土坑

28号土坑(第89図)

<位 置>B-3グリットに位置する。西側に29号土坑、北側に22号住居址、南側に7号溝状遺構が存在している。

<形状・規模>形状は不整形を呈しており、長軸1.4m・短軸1.1m・最深部34cmを測る。

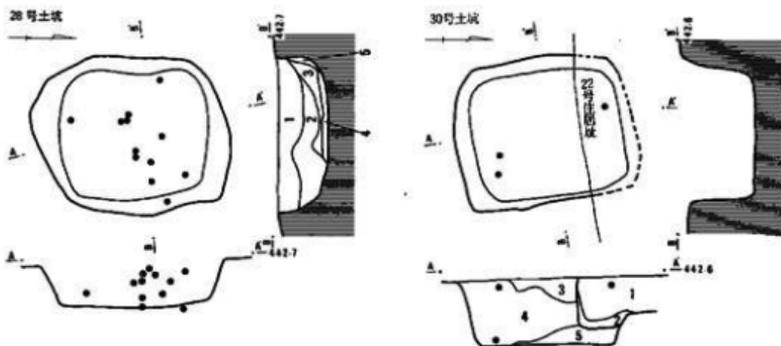
<底・壁>底は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

<覆 土>覆土は5層に分けられ、下層へ移行するにしたがいロームブロックの混入が多くなる。

<出土遺物>遺物は覆土内より土器片が少量出土しているが、細片のため図示し得るものはなかった。

30号土坑(第89図、図版6-40)

<位 置>B-4グリットに位置する。東側周辺に9・10・11・20・21号溝状遺構、南側に



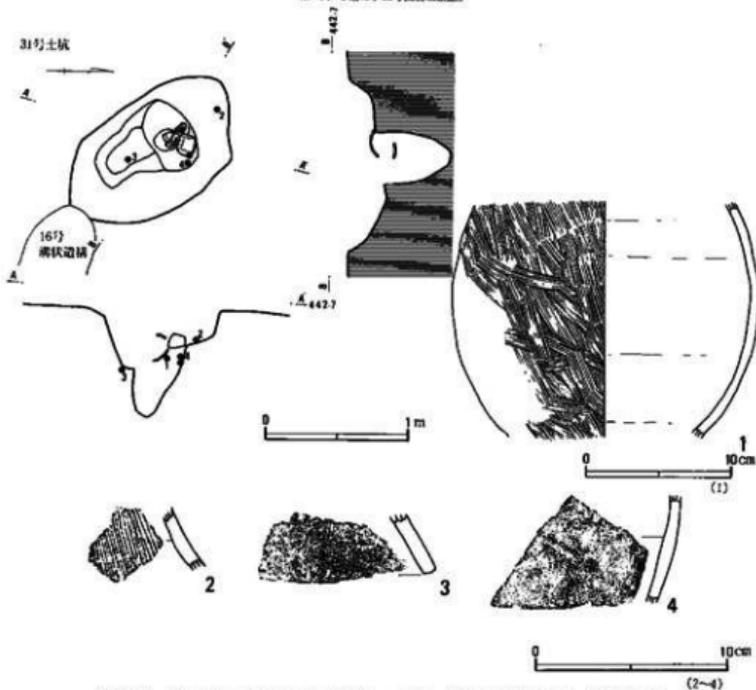
28号土坑土層別明

層	色調	特	徴
1	暗赤褐色	粘性强。しまり有。	
2	暗赤褐色	ロームブロック(φ0.1~0.5m)を含む。粘性强。しまり有。	
3	暗赤褐色	ロームブロック(φ0.1~0.5m)少量含む。粘性强。しまり有。	
4	暗赤褐色	ロームブロック(φ0.1~2m)を多量に含む。粘性强。しまり有。	
5	茶褐色	崩落土。粘性强。しまり有。	

30号土坑土層別明

層	色調	特	徴
1	暗赤褐色	ロームブロック(φ0.1~1m)・灰化物を少量含む。粘性强。しまり有。	
2	暗赤褐色	22号住居址跡層。ロームブロック(φ1m)含む。粘性强。しまり有。	
3	暗赤褐色	ロームブロック(φ0.5m)を少量含む。粘性强。しまり有。	
4	暗赤褐色	ロームブロック(φ0.1~1m)を多量に含む。粘性强。しまり強。	
5	茶褐色	ロームブロック(φ0.1~2m)を少量含む。粘性强。しまり強。	

附1. 2層は、22号住居址層土。



第89図 28・30・31号土坑 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

28・29号土坑が存在している。北側で22号住居址と重複している。新旧関係は30号土坑→22号住居址の順で新しい。

<形状・規模>形状は長方形を呈しており、推定長軸1.24m・短軸1.03m・最深部47cmを測る。

<底・壁>底は平坦である。残存している壁は急傾斜で立ち上がる。

<覆土>覆土は3層に分けられ、各層においてロームブロックの混入がみられる。北側は22号住居址の覆土により切られている。

<出土遺物>遺物は覆土内より土器片が少量出土しているが、細片のため図示し得るものはなかった。

31号土坑(第89図、第46表、図版6-41)

<位置>A-8グリットに位置する。西側に20号住居址、東側周辺に14・15・18号溝状遺構が存在している。東側で16号溝状遺構と重複している。新旧関係は28号土坑→16号溝状遺構の順で新しい。

<形状・規模>形状は不整形円形を呈しており、推定長軸1.35m・短軸80cm・底面までの最深部39cmを測る。

<底・壁>底は南傾斜しており、中央部に不整形円形のピットがある。規模は52cm×31cm・底部からの深さ53cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。

<覆土>覆土は2層に分けられ、上層は黒色土層、下層は褐色土層である。

<出土遺物>遺物はピット上部に変形土器の胴部が礫とともに出土している。この他、覆土内より土器破片が少量出土している。

32号土坑(第90図)

<位置>A-10・11グリットに位置する。北側に8号溝状遺構、南側に近接して19号溝状遺構が存在している。東壁から南壁にかけて13号溝状遺構と重複している。新旧関係は32号土坑→13号溝状遺構の順で新しい。

<形状・規模>形状は長方形を呈しており、長軸2.63m・短軸1.59m・最深部45cmを測る。

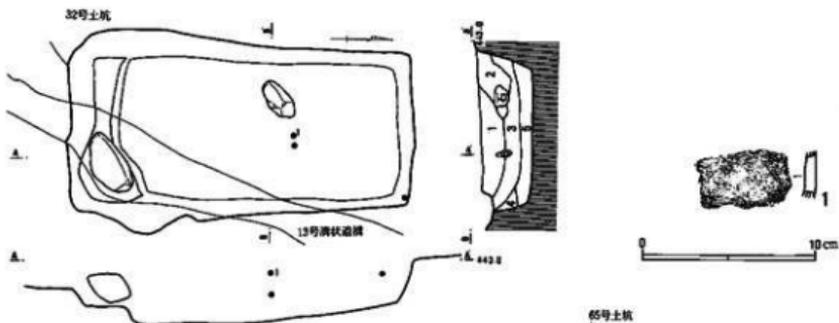
<底・壁>底は南傾斜しており、東壁側は一段テラス状に高く(比高差12cm)なっている。壁は急傾斜で立ち上がる。

<覆土>覆土は5層に分けられ、下層において砂粒が少量検出されている。

<出土遺物>遺物は覆土内より土器片が少量出土しているが、細片のため図示し得たのは1点のみである。また、長軸40cm大の礫が土坑内の底面中央部およびテラス部より検出されている。

62号土坑(第90図)

<位置>A-36グリットに位置する。本土坑周辺は遺構が密集して検出されている。北側に64~68号土坑、南側に77号土坑・33号溝状遺構、西側に79・83号土坑、東側に101~106号

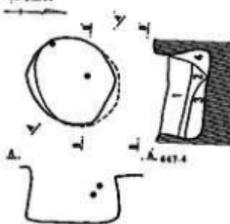


32号土坑土層説明

層	色	調	特	備
1	黒褐色		ローム粒子-炭化物を少量含む。しまり弱。	
2	黒色		しまりやや弱。	
3	褐色		ローム粒子を多量に含む。砂層(φ1mm)を少量含む。しまり有。	
4	黄褐色		5層よりやや高湿がみられる。しまりやや弱。	
5	黄褐色		ロームに黒色土及び砂粒子を少量含む。しまり有。	
6	茶褐色		砂粒子(φ1mm)を含む。しまりに欠ける。	

※ 6層は、埋込層。

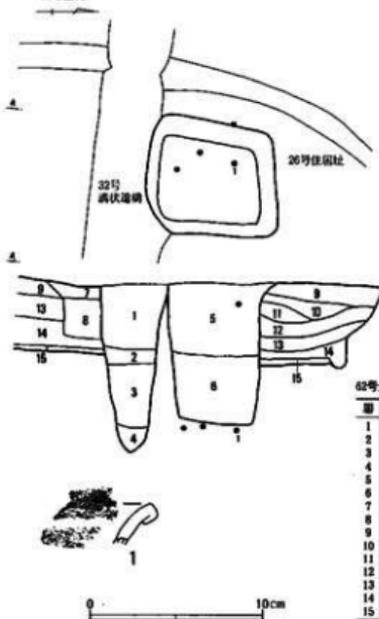
65号土坑



65号土坑土層説明

層	色	調	特	備
1	暗褐色		ローム粒子を少量含む。粘性やや弱。しまり有。	
2	暗褐色		ローム粒子を多量に含む。粘性やや弱。しまりやや弱。	
3	暗褐色		粘性やや弱。しまりやや弱。	
4	暗褐色		ローム粒子を少量含む。粘性有。しまりやや弱。	

62号土坑



62号土坑土層説明

層	色	調	特	備
1	褐色		ローム粒子・小礫(φ5~10mm)を含む。しまりに欠ける。	
2	褐色		ローム粒子を含む。しまりに欠ける。	
3	褐色		ローム粒子を多量に含む。しまりに欠ける。	
4	暗褐色		ローム粒子を含む。黒色土をブロック状に含む。やや粘土質。しまりに欠ける。	
5	黒褐色		ローム粒子を塊状に含む。しまりに欠ける。	
6	黒褐色		5層よりも多量にローム粒子を含む。しまりに欠ける。	
7	黄褐色		ローム粒子を多量に含む。黒色土をブロック状に含む。しまりに欠ける。	
8	黒色		小礫(φ5~10mm)を含む。しまりに欠ける。	
9	黄褐色		黒色土粒子・ローム粒子を含む。しまり有。	
10	暗褐色		黒色土をブロック状に含む。しまり有。	
11	黄褐色		ロームをブロック状に含む。粘土質。	
12	暗褐色		黒色土をブロック状に含む。ローム粒子を含む。しまり有。	
13	黄褐色		ローム粒子を含む。粘土質。	
14	黄褐色		ロームブロックを塊状に含む。粘土質。	
15	暗褐色		ロームブロックを含む。しまりに欠ける。(粘床)	

※ 7~15層は、20号住居址土。1~4層は、32号溝状遺構土。

68号土坑土層説明

層	色	調	特	備
1	暗褐色		粘性・しまりに欠ける。	
2	茶褐色		粘性やや弱。しまり有。	
3	暗褐色		ロームブロックを塊状に少量含む。粘性やや弱。しまり有。	
4	暗褐色		ロームブロックを塊状に少量含む。粘性・しまりに欠ける。	

※ 1, 2層は埋込層。

第90図 32・62・65・68号土坑 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

土坑が存在している。32号溝状遺構および26号住居址と重複している。新旧関係は26号住居址→62号土坑→32号溝状遺構の順で新しい。

<形状・規模>形状は不整形を呈しており、長軸99cm・短軸88cm・最深部1.1mを測る。

<底・壁>底は平坦であり、壁は垂直に立ち上がる。

<覆土>覆土は2層に分けられ、下層に移行するにしたがいローム粒子の混入が多くなる。

<出土遺物>遺物は底面直上より土師器片が少量出土しているが、細片のため図示し得たのは1点のみである。

65号土坑 (第90図)

<位置>B-38グリットに位置する。西側に80号土坑、東側周辺に64～68号土坑が存在する。

<形状・規模>形状は不整形を呈しており、長軸65cm・短軸63cm・最深部44cmを測る。

<底・壁>底は平坦である。壁は南壁側が垂直に立ち上がり、北壁側が内湾して立ち上がる。

<覆土>覆土は4層に分けられる。

<出土遺物>遺物は覆土内より土師器破片が少量出土しているが、細片のため図示し得るものはなかった。

68号土坑 (第90図)

<位置>A-38グリットに位置する。北側に64・66～68号土坑、西側に80号土坑が存在している。北側は攪乱により削平されている。

<形状・規模>形状は不整形を呈しており、長軸70cm・短軸68cm・最深部36cmを測る。

<底・壁>底は平坦であり、壁は遺存状況の良好な南壁側では下部はほぼ垂直に、上部はやや外反して立ち上がる。

<覆土>覆土は2層に分けられるが、北壁側は攪乱を受けている。

<出土遺物>遺物は覆土上層より土師器片が少量出土しているが、細片のため図示し得るものはなかった。

104号土坑 (第91図)

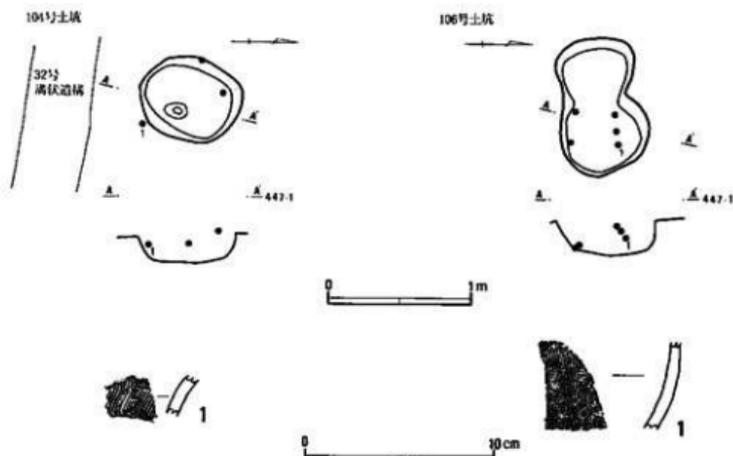
<位置>A-36グリットに位置する。北側に近接して105・106号土坑、南側に101・102号土坑・32号溝状遺構、東側に103号土坑、西側に62号土坑が存在している。26号住居址と重複している。新旧関係は26号住居址→104号土坑の順で新しい。

<形状・規模>形状は不整形を呈しており、長軸69cm・短軸59cm・最深部20cmを測る。

<底・壁>底はほぼ平坦で堅緻である。壁は緩やかに立ち上がる。

<覆土>覆土は2層に分けられ、上層は黒色土層、下層は暗(灰)褐色土層である。

<出土遺物>遺物は覆土内より土師器片が少量出土しているが、細片のため図示し得たのは1点のみである。



第91図 104・106号土坑 平面・断面・遺物分布 出土遺物

106号土坑（第91図）

- <位 置> A-37グリットに位置する。南側に近接して104・105号土坑・32号溝状遺構が存在している。26号住居址と重複している。新旧関係は26号住居址→106号土坑の順で新しい。
- <形状・規模> 形状は不整形円形を呈しており、長軸98cm・短軸62cm・最深部24cmを測る。
- <底・壁> 底はほぼ平坦で堅緻である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆 土> 覆土は黒色土の単一層である。
- <出土遺物> 遺物は覆土内より土師器片が少量出土しているが、細片のため図示し得るのは1点のみである。

4. 中世

検出した遺構は土坑45基、地下式竈13基である。ここで取り上げた地下式竈は遺存状況が悪く、土坑との区別がつけられなかったために調査時点に土坑として扱ったもの（土坑の通しナンバーを付けたもの）であり、整理段階において改めて「地下式竈」としたものである。

(1) 土坑

39号土坑（第92図、第53表）

- <位 置> B-28グリットに位置する。北側に26号溝状遺構、南側に30号溝状遺構・58号土坑、東側に25号溝状遺構、西側に41号土坑が存在している。北側に2号地下式竈（旧73号土坑）と重複している。新旧関係は断面観察が判然としないため不明であり、本土坑は2号地下式竈に付随する可能性もある。
- <形状・規模> 形状は不整形円形を呈しており、長軸80cm・短軸73cm・最深部40cmを測る。

- <底・壁>底はほぼ平坦で堅微である。北西側に不整形形のピットがあり、規模は長軸47cm・短軸39cm・最深部15cmを測る。遺存している壁は袋状に内湾しながら立ち上がる。
- <覆土>覆土は黒色土にロームブロックが斑状に混入している単一層である。
- <出土遺物>遺物は覆土内より土師質土器片(Na1・2)が少量出土している。

41号土坑(第92図)

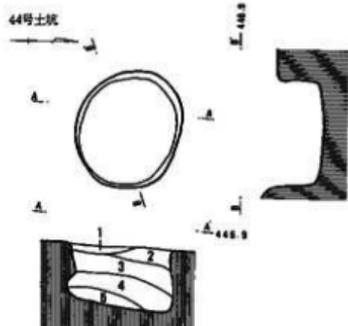
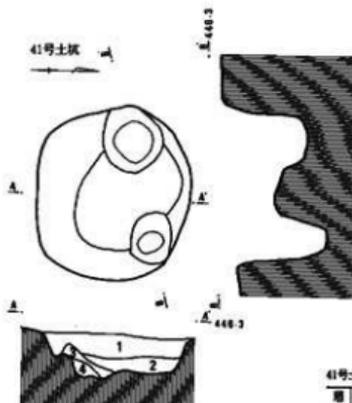
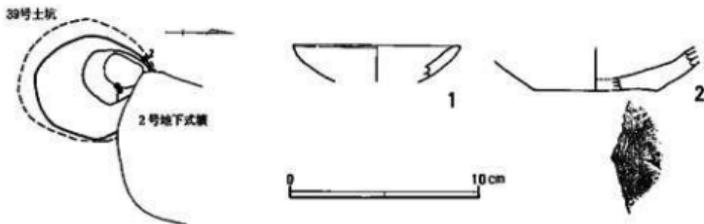
- <位置>C-28・29グリットに位置する。北側に26号溝状遺構、南側に30号溝状遺構、東側に39号土坑・2号地下式竈(旧73号土坑)、西側に51・57号土坑が存在している。
- <形状・規模>形状は不整形円形を呈しており、長軸1.23m・短軸1.06m・底面までの最深部45cmを測る。
- <底・壁>底はやや西傾斜している。西壁と東壁側にそれぞれピットが存在する。西壁側は不整形円形を呈し、規模は46cm×41cm・底面からの深さ23cmを測る。東壁側は不整形円形を呈し、規模は36cm×28cm・底面からの深さ37cmを測る。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆土>覆土は4層に分けられ、上層において小礫および焼土が検出された。
- <出土遺物>遺物は出土していない。

42号土坑(第92図、第54表)

- <位置>C-29・30グリットに位置する。北側に27号溝状遺構、南側に26号溝状遺構、西側に42号土坑・3号地下式竈(旧74号土坑)が存在している。
- <形状・規模>形状は不整形長方形を呈しており、長軸1.38m・短軸94cm・最深部42cmを測る。
- <底・壁>底はやや北傾斜している。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆土>覆土は3層に分けられ、下層においてロームブロックを多く含んでいる。
- <出土遺物>遺物は土師質土器片が少量出土している。

44号土坑(第92図)

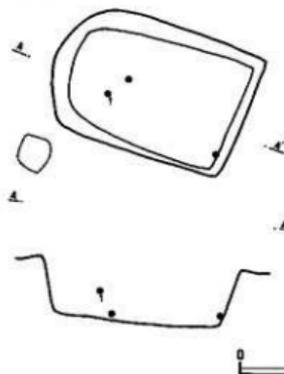
- <位置>B-32グリットに位置する。北側に45号土坑、南側に近接して59号土坑が存在している。
- <形状・規模>形状は不整形円形を呈しており、長軸86cm・短軸72cm・最深部43cmを測る。
- <底・壁>底はやや北に傾斜している。壁は南壁は下部が内湾し、それからやや外反しながら立ち上がる。他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆土>覆土は5層に分けられ、上層において小礫の混入がみられる。
- <出土遺物>遺物は出土していない。



41号土坑土層説明

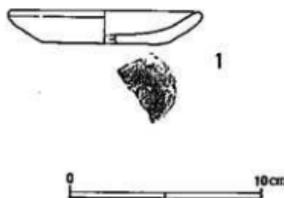
層	色	質	特	備
1	灰	色	ローム粒子 (φ5mm)・小礫 (φ1mm)・焼土を含む。	
2	黄褐色		ロームブロック・ローム粒子 (φ5mm)・黒色土が混在する。しまり有。	
3	黒	色	しまりや中礫。粘性有。	
4	黒褐色		ローム粒子 (φ1mm以下) を含む。しまりや中礫。粘性有。	

42号土坑



44号土坑土層説明

層	色	質	特	備
1	灰褐色		小礫 (φ5mm)・ローム粒子 (φ3mm) 含む。しまり有。	
2	黄	色	ローム両端部か。白色の小礫 (φ2~5mm) を多量に含む。しまりに欠ける。	
3	黒	色	ローム粒子 (φ5~10mm) を多量に含む。黒色の粒子 (φ2mm) を含む。	
4	黒	色	3層よりも粘性有。ローム粒子を少量含む。	
5	黒	色	ロームをほとんど含まず。黒色土のブロックを含む。しまりに欠ける。	



第92図 39・41・42・44号土坑 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

45号土坑（第93回）

<位置> B-32グリットに位置する。北側に28号溝状遺構、南側に44・59号土坑、西側に82号土坑、東側に46号土坑が存在している。

<形状・規模> 形状は不整長方形と不整円形が重複したような形を呈しており、二つの土坑が重複している可能性も考えられたが、断面観察から一つの遺構と判断した。不整長方形側の規模は長軸75cm・短軸67cm・最深部54cmを測る。不整円形側の規模は長軸87cm×85cm・最深部45cmを測る。

<底・壁> 底はほぼ平坦であり、不整長方形側が一段テラス状に高く（比高差13cm）なっている。各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土> 覆土は3層に分けられ、下層に移行するにしたがって黒色土ブロックを多く含んでいる。

<出土遺物> 遺物は出土していない。

46号土坑（第93回）

<位置> B-32グリットに位置する。北側に28号溝状遺構、南側に44・59号土坑、西側に45号土坑が存在している。

<形状・規模> 形状は不整円形を呈しており、長軸69cm・短軸66cm・最深部60cmを測る。

<底・壁> 底はほぼ平坦である。壁は各壁とも下部から上部にかけてオーバーハングして立ち上がる。

<覆土> 覆土は3層に分けられ、下層に移行するにしたがって黒色土ブロックを多く含んでいる。上層において小礫の混入がみられる。

<出土遺物> 遺物は出土していない。

47号土坑（第93回）

<位置> C-32グリットに位置する。北側に28号溝状遺構、南側に53号土坑・31号溝状遺構、東側に82号土坑が存在している。西壁側は調査区外へ延びているため未調査である。

<形状・規模> 形状は遺存している壁より不整円形を呈すると考えられる。規模は推定長軸1m・短軸96cm・最深部45cmを測る。

<底・壁> 底はほぼ平坦である。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土> 覆土は4層に分けられるが、上層は不自然な堆積状況を示しており、耕作等による攪乱を受けていると思われる。

<出土遺物> 遺物は出土していない。

48号土坑（第93回）

<位置> B-34グリットに位置する。北側に近接して34号溝状遺構、南側に5号地下式塙（旧76号土坑）、西側に84号土坑が存在している。

<形状・規模>形状は長方形を呈しており、長軸1.34m・短軸1.24m・底面までの最深部73cmを測る。

<底・壁>底は中央部に向けて傾斜している。また、中央部には径40cm・底面からの深さ13cmの円形のピットが存在する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土>覆土は暗褐色土の2層に分けられ、下層へ移行するにしたがってロームブロックおよびローム粒子が多くみられるようになる。

<出土遺物>遺物は覆土内から土器片が2点出土しているが、細片のため図示し得るものはなかった。

49号土坑（第93図）

<位置>B-27グリットに位置する。東側に92・94号土坑が存在している。西壁側では50号土坑、中央部においては25号溝状遺構と重複している。新旧関係は覆土の層位より25号溝状遺構→49号土坑の順で新しい。50号土坑との新旧関係は互いの壁がほぼ接する状態であり、断面観察からは判然としない。

<形状・規模>形状は隅丸長方形を呈しており、長軸1.36m・短軸91cm・最深部50cmを測る。

<底・壁>底は緩やかに東壁側に傾斜している。壁は東壁でやや緩やかに立ち上がり、他の壁は垂直に立ち上がる。

<覆土>覆土は3層に分けられる。厚く堆積している第1層ではロームブロックが斑状に多く含まれている。

<出土遺物>遺物は検出していない。

54号土坑（第93図、図版6-42）

<位置>B-32グリットに位置する。北側に44・45・59号土坑、西側に53号土坑、東側に52号土坑が存在している。

<形状・規模>形状は不整形円形を呈しており、長軸72cm・短軸58cm・最深部43cmを測る。

<底・壁>底は緩やかに西壁側に傾斜している。壁は西壁の一部を除き各壁とも下部から上部にかけてオーバーハングして立ち上がる。

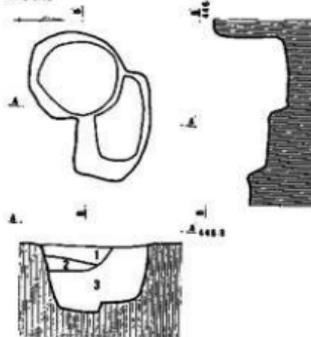
<覆土>覆土は2層に分けられる。第2層においてロームブロックおよびローム粒子が斑状に多量に混入している。

<出土遺物>遺物は覆土内より土器片が1点出土しているが、細片のため図示できなかった。

56号土坑（第94図）

<位置>C-34グリットに位置する。西側に29号溝状遺構が存在している。西側約1/2は調査区外へ延びているため未調査である。周辺地域の層序においては多くの攪乱が確認されており、本土坑はこの攪乱された地点に掘り込んでいる。

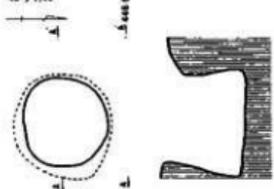
45号土坑



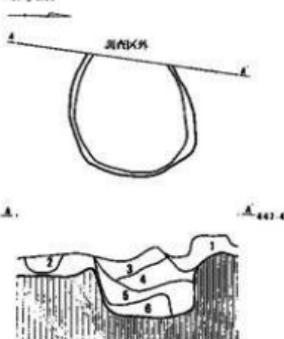
45号土坑土層説明

層	色調	特	備
1	暗褐色	灰色土・ロームブロックが存在する。ローム粒子・灰色土粒子も混入し、顆粒状を呈する。	
2	黒褐色	1層よりも黒色土ブロックを多量に含む。	
3	暗褐色	2層よりも更に黒色土を多量に含む(φ5~10mm)。しまりに欠ける。	

46号土坑



47号土坑

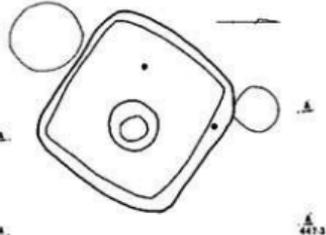


47号土坑土層説明

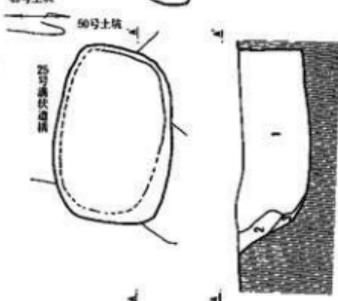
層	色調	特	備
1	黄	軟質ローム層。	
2	茶褐色	腐作土に類似。ロームを多量に含む。	
3	灰	細粒子。ロームをほとんど含まない。	
4	茶褐色	ロームと黒色土が存在する。	
5	茶褐色	2層と同様だが、黒色土の含有量が多い。	
6	黄	堀山のロームに上層の茶褐色土が若干混入している。	

※ 1, 3層は、復原形。

48号土坑



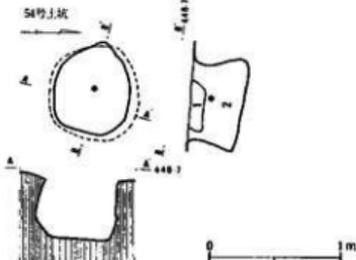
49号土坑



49号土坑土層説明

層	色調	特	備
1	暗褐色	ロームブロックを散状に多量に含む。堅性に欠ける。しまり有。	
2	暗茶褐色	ロームブロックを散状に多量に含む。脆性・しまりに欠ける。	
3	暗茶褐色	ロームブロックを散状に多量に含む。脆性。しまりやや有。	

54号土坑



54号土坑土層説明

層	色調	特	備
1	暗褐色	粘性やや弱。しまり強。	
2	暗褐色	ロームブロック・ローム粒を散状に多量に含む。	

<形状・規模>形状は西側が不明のため明確ではないが遺存部より不整形円形を呈すると考えられる。推定長軸75cm・推定短軸70cm・最深部83cmを測る。

<底・壁>底は中央部がやや皿状に窪んでいる。確認された壁についてはほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土>覆土は2層に分けられる。下層に移行するにしたがってロームブロックが多量に混入している。

<出土遺物>遺物は出土していない。

57号土坑（第94図、第55表、図版6-43）

<位置>C-28グリットに位置する。北側に51号土坑、南側に1号地下式墳（旧72号土坑）、東側に40号土坑が存在している。東側コーナーで30号溝状遺構、南西コーナーでピットと重複している。新旧関係は57号土坑→ピットの順で新しい。30号溝状遺構との新旧関係は断面観察が判然としなため不明である。遺存状態は天井部が崩落しており、良好とは言えない。

<形状・規模>形状は不整形長方形を呈しており、規模は長軸1.7m・短軸1.55m・最深部76cmを測る。また西壁中央部は半円形に張り出す形を呈しており、この部分は底面より一段高く（比高差15cm）なっている。

<底・壁>底はほぼ平坦である。西壁・南壁は垂直に立ち上がり、北壁は下部は垂直に、上部はやや外反しながら立ち上がり、西壁はやや緩やかに立ち上がる。

<覆土>覆土は12層に分けられ、レンズ状に自然堆積している。

<出土遺物>底面直上および覆土上層（No.1）より土師質土器片が少量出土している。

60号土坑（第95図、第56表、図版6-44）

<位置>B-35グリットに位置する。北側に63号土坑・6号地下式墳（旧77号土坑）・近接して61号土坑、南側に近接して34号溝状遺構、東側に26号住居址が存在している。西側の一部は耕作による攪乱で破壊されている。

<形状・規模>形状は不整形円形を呈している。規模は長軸1.05cm・短軸1.02cm・最深部76cmを測る。

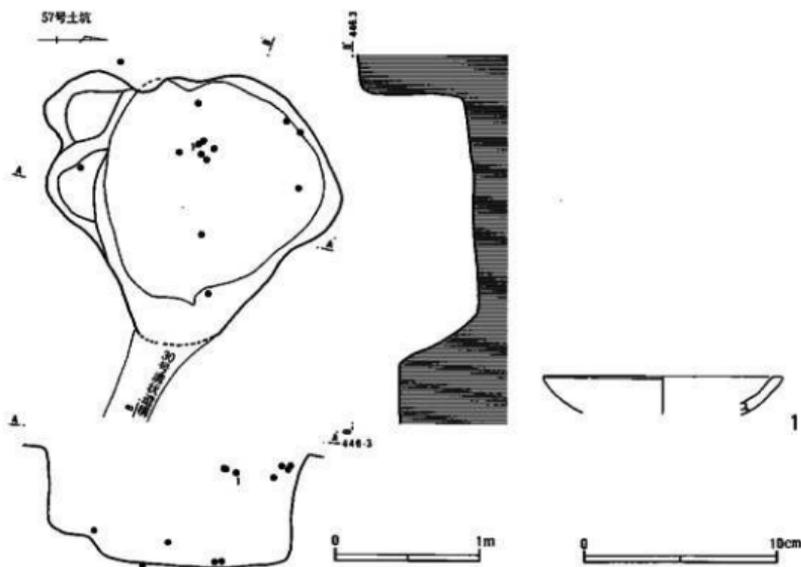
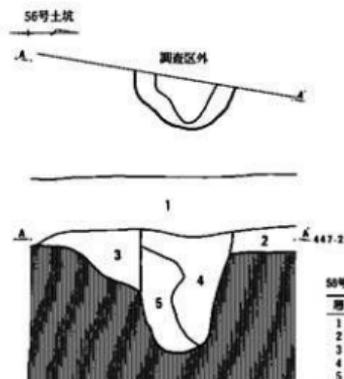
<底・壁>底はほぼ平坦である。壁は南壁はほぼ垂直に立ち上がり、他の壁はフラスコ状にオーバーハングして立ち上がる。

<覆土>覆土は暗褐色土の単一層であるが、上層部は攪乱されている。

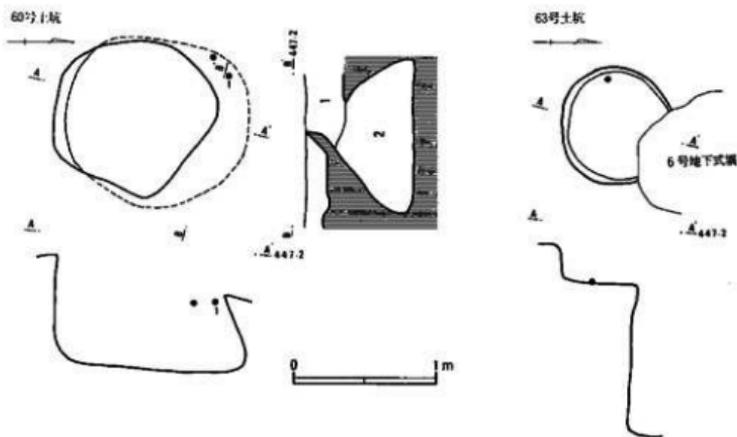
<出土遺物>遺物は覆土上層より土師質の皿形土器（No.1）などが出土している。

63号土坑（第95図）

<位置>B-35グリットに位置する。南側に近接して61号土坑、東側に26号住居址が存在している。北側は6号地下式墳（旧77号土坑）と重複している。新旧関係は断面観察が判然としなため不明であり、本土坑は6号地下式墳に付随する可能性もある。



第94図 56・57号土坑 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物



60号土坑土層説明

層	色調	特	徴
1	暗褐色	粘性に欠ける。しまり青。	
2	暗褐色	ロームブロックを多量に含む。粘性に欠ける。しまり弱。	

※ 1層は復乱層。



第95図 60・63号土坑 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

<形状・規模>形状は不整形を呈している。規模は長軸82cm・推定短軸75cm・最深部29cmを測る。

<底・壁>底はほぼ平坦である。遺存している壁においてはほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土>覆土は暗褐色土の単一層であり、多量のロームブロックが混入している。

<出土遺物>遺物は底面直上より1点出土しているが、細片のため図示できなかった。

64号土坑 (第96図)

<位置>A-37・38グリットに位置する。北側に99号土坑・10号地下式溝(旧81号土坑)・38・39・40・41号溝状遺構、東側に26号住居址、西側に65・66・68号土坑・9号地下式溝(旧80号土坑)・12号地下式溝(旧85号土坑)が存在している。南西コーナーで66号土坑と重

復している。新旧関係は断面観察が判然としないため不明である。

<形状・規模>形状は不整長方形を呈しており、規模は推定長軸1.45m・短軸1.2m・最深部78cmを測る。

<底・壁>底はほぼ平坦である。遺存している壁は垂直に立ち上がる。

<覆土>覆土は4層に分けられる。厚く堆積している第1層にはロームブロックが斑状に多量に混入している。

<出土遺物>遺物は覆土中層から上層にかけて土師質土器片が少量出土している。

71号土坑 (第98図、第57表、図版6-45)

<位置>C-24・25グリットに位置する。北側に37号土坑・25号溝状遺構、南側に24号住居址・24号溝状遺構、東側に25号住居址・86号土坑が存在している。本土坑は覆土の堆積状況および形状が本遺跡内で確認された地下式竈に類似しており、これらに含まれる可能性がある。

<形状・規模>形状は不整円形を呈しており、規模は長軸1.52m・短軸1.34m・最深部1.1mを測る。

<底・壁>底はほぼ平坦である。壁は各壁とも中位より上部にかけてオーバーハングしている。

<覆土>覆土は5層に分けられる。第4層の暗褐色土は厚く堆積し、ロームブロックが斑状に少量混入している。

<出土遺物>遺物は覆土中層から上層にかけて土師質土器片が少量出土している。

82号土坑 (第97図)

<位置>B・C-32・33グリットに位置する。北側に28号溝状遺構、南側に53号土坑・31号溝状遺構、東44・45・46・59号土坑、西側に47号土坑が存在している。

<形状・規模>形状は不整楕円形を呈しており、規模は長軸1.06m・短軸75cm・最深部95cmを測る。また西壁中央部は半円形に張り出す形を呈しており、この部分は底面より一段高く(比高差15cm)なっている。

<底・壁>底はほぼ平坦である。南壁は上部にテラス状の平坦面があり、底面との比高差は75cm程である。西壁は垂直に立ち上がり、東壁および北壁の一部はフラスコ状にオーバーハングして立ち上がる。

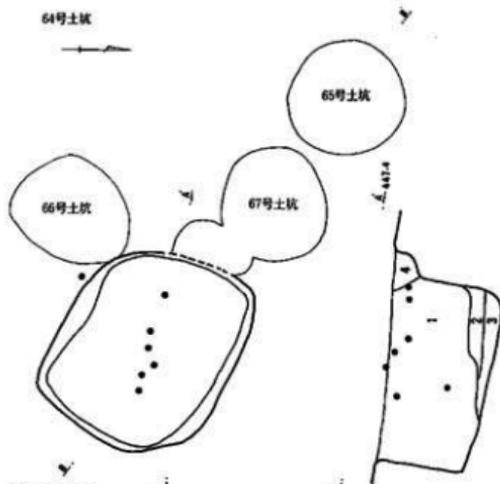
<覆土>覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

84号土坑 (第97図)

<位置>B-34グリットに位置する。北側に11号地下式竈(旧83号土坑)・南側に5号地下式竈(旧76号土坑)、東側に48号土坑・34号溝状遺構が存在している。

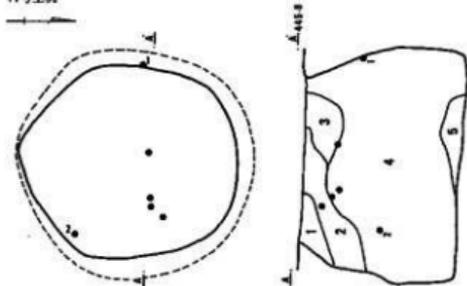
<形状・規模>形状は不整形を呈しており、規模は長軸81cm・短軸70cm・最深部70cmを測る。



64号土坑土層説明

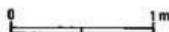
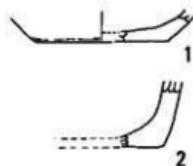
層	色	土質	特徴
1	暗褐色	ロームブロック(ま1mm)を塊状に多量に含む。粘性・しまりや中強。	
2	暗黄褐色	剛性層(1層・2層の場合)。ロームブロックを含む。粘性有。しまりや中強。	
3	黄褐色	軟弱土。粘性有。しまり有。	
4	暗褐色	ローム粒子を多量に含む。粘性に欠ける。しまりや中強。	

71号土坑



71号土坑土層説明

層	色	土質	特徴
1	暗褐色	ローム粒子を塊状に少量含む。粘性に欠ける。しまり有。	
2	黄褐色	天井部の陥没した土。粘性有。しまりや中強。	
3	暗褐色	境上を陥没に含む。1層に類似するが、しまりや中強。	
4	暗褐色	ロームブロックを塊状に少量含む。粘性有。しまりや中強。	
5	暗褐色	4層に類似するが、ロームブロックをより多量に含む。粘性強。	

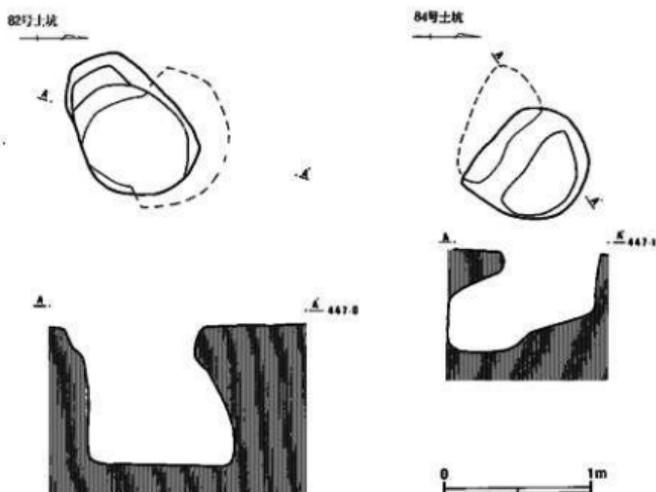


第96図 64・71号土坑 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

<底・壁>底はほぼ平坦である。北東壁側はテラス部があり、やや南西に傾斜している。南西壁は底面より中位にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その後強くオーバーハングして立ち上がる。

<覆 土>覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は検出されていない。



第97図 82・84号土坑 平面・断面

86号土坑 (第98・99図、第87表)

<位 置>B-25グリッドに位置する。北側に87・88号土坑、西側に37・71号土坑が存在している。25号住居址と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から25号住居址→86号土坑の順で新しい。

<形状・規模>形状は不整形円形を呈している。規模は長軸1.06m・推定短軸90cm・最深部10cmを測る。

<底・壁>底は平坦である。壁は各壁とも緩やかに立ち上がる。

<覆 土>覆土は2層に分けられる。上層は黒色土、下層は褐色土であり、下層に多量のロームブロックが混入している。

<出土遺物>遺物は底面直上および覆土内より古銭が6点出土している。No 2は「元豊通寶」

の北宋銭、№3は1101年初鑄の「聖宋元寶」、№5は1433年初鑄の「宣德通寶」である。№1・4・6は腐蝕により銭名が不鮮明であるが、それぞれ「熙寧元寶」「皇宋元寶」「元符通寶」と思われる。また、№2・3・4および№5・6はそれぞれ錆により附着している。

87号土坑（第98図）

＜位 置＞B-26グリットに位置する。北側から西側にかけて25号溝状遺構、南側に25号住居址、東側に88号土坑、西側に38号土坑が存在している。

＜形状・規模＞形状は不整形長方形を呈しており、長軸76cm・短軸52cm・最深部14cmを測る。

＜底・壁＞底は緩やかに東側に傾斜している。壁は各壁とも緩やかに立ち上がる。

＜覆 土＞覆土は褐色土の単一層であり、少量のロームブロックが混入している。

＜出土遺物＞遺物は出土していない。

88号土坑（第98図）

＜位 置＞B-26グリットに位置する。北側に89・90・92・93号土坑、13号地下式塙（旧91号土坑）、南側に25号住居址、西側に87号土坑が存在している。

＜形状・規模＞形状は不整形長方形を呈しており、長軸73cm・短軸63cm・最深部31cmを測る。

＜底・壁＞底はほぼ平坦である。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

＜覆 土＞覆土は暗褐色土の2層に分けられる。下層に移行するにしたがってロームブロックが多量に混入している。

＜出土遺物＞遺物は出土していない。

89号土坑（第98図）

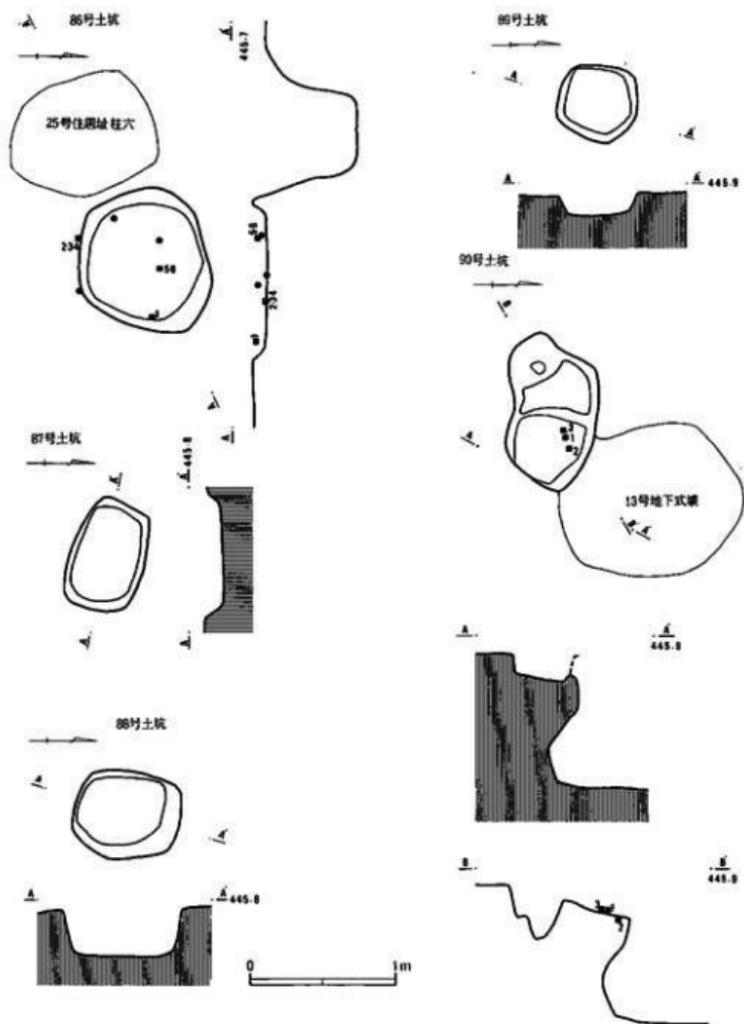
＜位 置＞B-27グリットに位置する。北側に92号土坑、南側に25号住居址・88号土坑、東側に90号土坑・13号地下式塙（旧91号土坑）、西側に25号溝状遺構・93号土坑が存在している。

＜形状・規模＞形状は不整形長方形を呈しており、長軸54cm・短軸52cm・最深部14cmを測る。

＜底・壁＞底はやや南側に傾斜している。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

＜覆 土＞覆土は黒褐色土の単一層であり、少量のロームブロックが混入している。

＜出土遺物＞遺物は出土していない。



第98图 86·87·88·89·90号土坑 平面·断面·遗物分布



第99図 86号土坑 出土遺物



第100図 90号土坑 出土遺物

90号土坑（第98・100図、第88表）

＜位 置＞A-27グリットに位置する。北側に92号土坑、南側に25号住居址・88号土坑、西側に25号溝状遺構・89・93号土坑が存在している。北側は13号地下式竈（旧91号土坑）と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から13号地下式竈（旧91号土坑）→90号土坑の順で新しい。

＜形状・規模＞形状は不整楕円形を呈しており、長軸88cm・短軸58cm・最深部17cmを測る。

＜底・壁＞底はやや北側に傾斜している。西壁の一部は緩やかに立ち上がり、他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。

＜覆 土＞覆土は黒色土の単一層であり、少量のロームブロックが混入している。

＜出土遺物＞遺物は古銭が5点出土しており、その内2点は破片である。No.1は990年初鋳の「淳化元寶」である。No.2・3は腐蝕が激しく銭名は不明である。

92号土坑（第101図）

＜位 置＞A-27グリットに位置する。北側に94号土坑、南側に89号土坑、北側から西側にかけて25号溝状遺構、西側に49号土坑、東側に近接して13号地下式竈（旧91号土坑）が存在している。

- <形状・規模>形状は不整長方形を呈しており、長軸1.13m・短軸1.02m・最深部40cmを測る。
- <底・壁>底はほぼ平坦である。壁は各壁とも底部から上部にかけてオーバーハングして立ち上がる。
- <覆土>覆土は黒褐色土の単一層であり、少量のロームブロックが混入している。
- <出土遺物>遺物は底面付近および覆土内より土師質土器片が少量出土しているが、細片が多く図示できるものは1点のみである。

94号土坑（第101図）

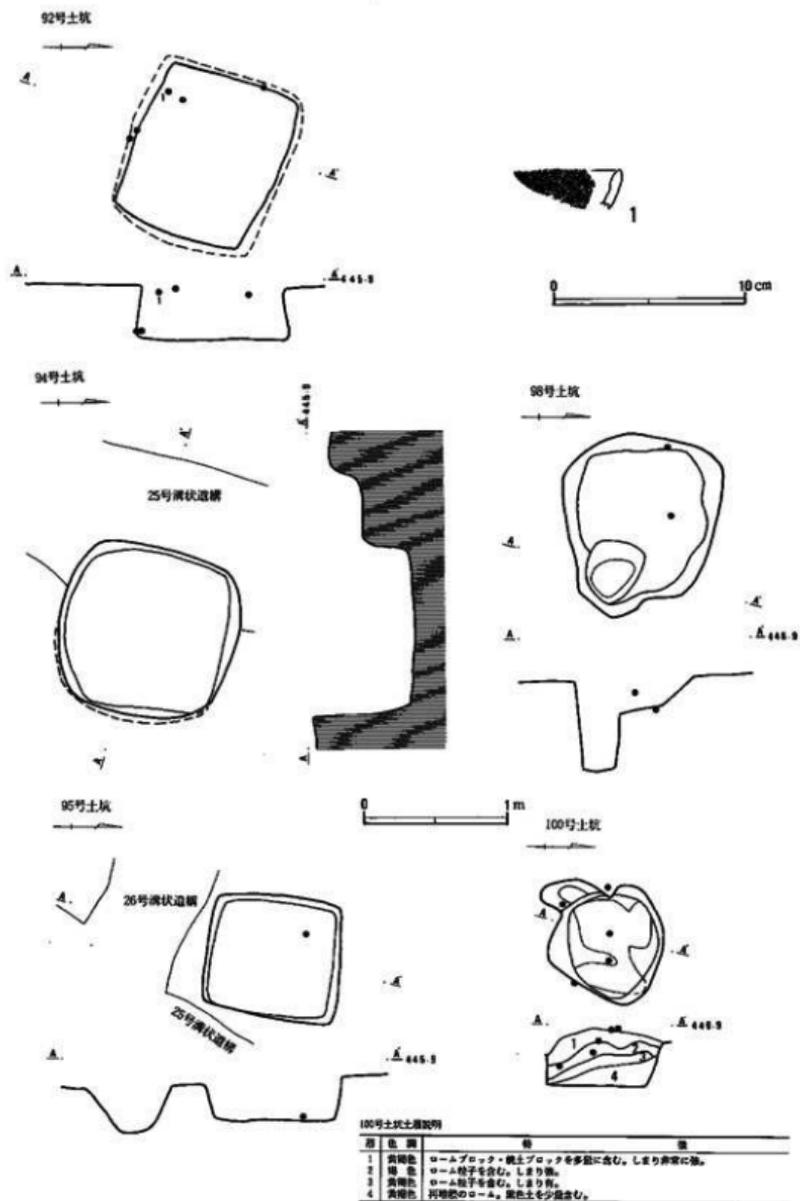
- <位置>A-28グリットに位置する。南側に92号土坑、西側に49号土坑が存在している。西側は25号溝状遺構と重複している。新旧関係は25号溝状遺構→94号土坑の順で新しい。
- <形状・規模>形状は不整方形を呈しており、長軸1.23m・短軸1.2m・最深部73cmを測る。
- <底・壁>底はほぼ平坦である。壁は遺存している部分ではほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆土>覆土は2層に分けられ、上層は薄いローム層、下層は黒褐色土層である。下層にはロームブロックが多く含まれている。
- <出土遺物>遺物は出土していない。

95号土坑（第101図）

- <位置>A-29グリットに位置する。北側に96号土坑・27号溝状遺構、南側に近接して26号溝状遺構、東側に近接して25号溝状遺構が存在している。
- <形状・規模>形状は不整方形を呈しており、長軸94cm・短軸87cm・最深部32cmを測る。
- <底・壁>底はほぼ平坦である。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆土>覆土は黒褐色土の2層に分けられ、下層に移行するにしたがってローム粒子の混入が多くなる。
- <出土遺物>遺物は底面直上より土師質土器片が1点出土しているが、細片のため図示できなかった。

98号土坑（第101図）

- <位置>A-33グリットに位置する。北側に26号住居址、南側に28号溝状遺構・97号土坑、西側に55号土坑が存在している。東側はピットにより切られている。
- <形状・規模>形状は不整長方形を呈しており、長軸1.3m・短軸1.07m・最深部26cmを測る。
- <底・壁>底は遺存部ではやや南に傾斜している。壁は北壁の一部は緩やかに立ち上がり、その他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆土>覆土は褐色土の単一層であり、少量のロームブロックが混入している。
- <出土遺物>遺物は底面付近および覆土内より土師質土器片が2点出土しているが、細片のため図示できるものはなかった。



第101図 92・94・95・98・100号土坑 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

100号土坑（第101図）

<位置> A-34・35グリットに位置する。東側に近接して26号住居址、西側に60号土坑・34号溝状遺構が存在している。本土坑上層（第1層）および周辺部は焼土ブロックを含む硬い黄褐色土が堆積している。

<形状・規模> 形状は不整形を呈しており、長軸80cm・短軸75cm・最深部32cmを測る。

<底・壁> 底は平坦である。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土> 覆土は4層に分けられる。各層とも非常に硬くしまっており、人為的に固めた可能性が考えられる。さらに本土坑上層（第1層）および周辺部は既記したように焼土ブロックを含む硬い黄褐色土が検出されており、人為的に本土坑をふさいでいるようである。

<出土遺物> 遺物は覆土上層より土師質土器片が少量出土しているが、細片のため図示できなかった。

101号土坑（第102図）

<位置> A-36グリットに位置する。北側に32号溝状遺構、東側に102号土坑が存在している。本土坑は26号住居址の覆土上層に掘り込まれている。

<形状・規模> 形状は不整形を呈しており、長軸70cm・短軸67cm・最深部15cmを測る。

<底・壁> 底は中央部に向けて皿状に窪んでいる。壁は各壁とも緩やかに立ち上がる。

<覆土> 覆土は褐色土の単一層であり、少量のロームブロックが混入している。

<出土遺物> 遺物は底面直上より1点出土しているが、細片のため図示できなかった。

102号土坑（第102図、第58表、図版6-46）

<位置> Z-36グリットに位置する。北側に103・104・105・106号土坑、近接して32号溝状遺構、西側に101号土坑が存在している。26号住居址と重複しており、新旧関係は26号住居址→102号土坑の順で新しい。また北側周辺には焼土が検出されたが、26号住居址に関するものであろう。

<形状・規模> 南側に天井部が存在し南壁の奥行がある。土坑の上場は長軸95cm・短軸75cmの不整形円形を呈し、底面は長軸1.4m・短軸70cmの不整形長方形を呈している。天井部は長軸1.5m・短軸80cmの不整形円形を呈している。底面から土坑の上場までの深さは60cmを測る。

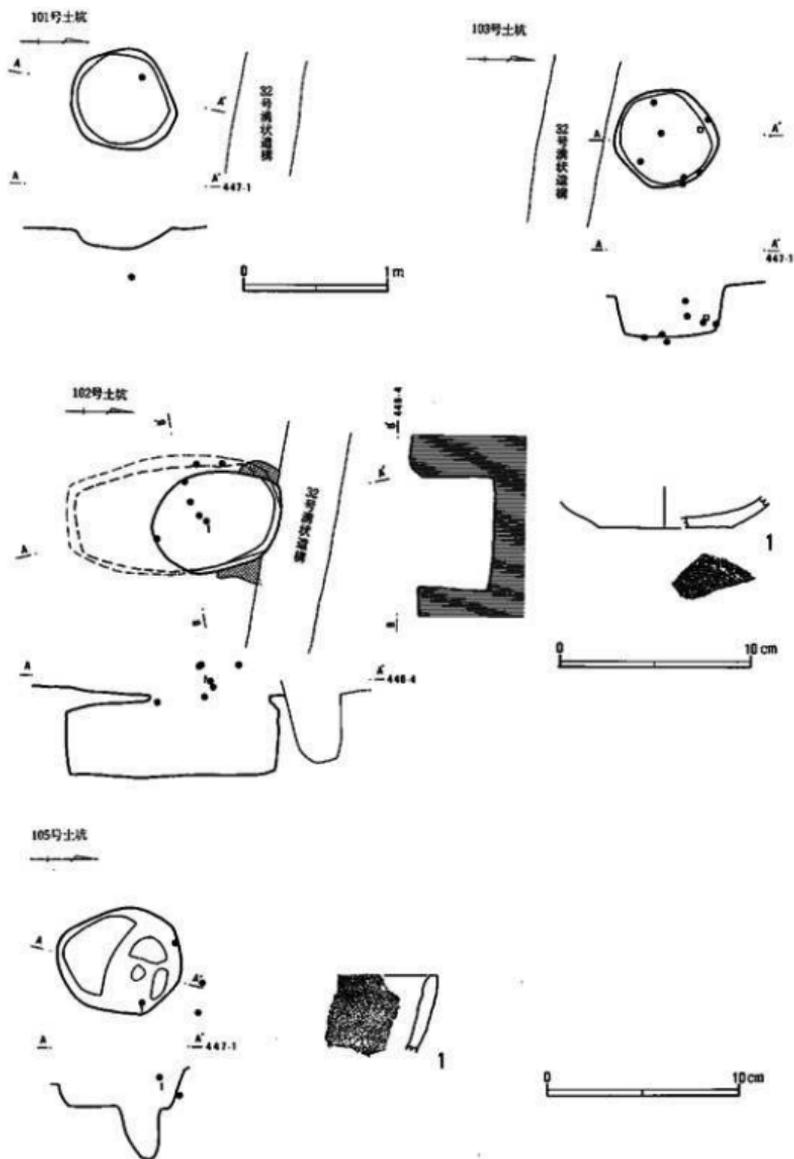
<底・壁> 底はほぼ平坦である。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土> 覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は覆土上層より土師質の皿形土器の底部片（No.1）が検出されている。

103号土坑（第102図）

<位置> A-36グリットに位置する。北西側に104・105・106号土坑、南側に32号溝状遺構・102号土坑が存在している。本土坑は26号住居址の覆土上層に掘り込まれている。



第102图 101·102·103·105号土坑 平面·断面·遺物分布 出土遺物

- <形状・規模>形状は不整形を呈しており、長軸71cm・短軸66cm・最深部35cmを測る。
- <底・壁>底はほぼ平坦であり、硬くしまっている。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆土>覆土は黒色土の単一層である。
- <出土遺物>遺物は底面付近および覆土内より土師質土器片が少量出土しているが、細片のため図示できるものはなかった。

105土坑（第102図）

- <位置>A-36・37グリットに位置する。北側に106号土坑、南側に32号溝状遺構・104号土坑が存在している。本土坑は26号住居址の覆土上層に掘り込まれている。
- <形状・規模>形状は不整形を呈しており、長軸87cm・短軸72cm・底面までの最深部25cmを測る。
- <底・壁>底は平坦である。北壁側にピットが存在する。形状は不整形を呈し、規模は32cm×30cm・底部からの深さ39cmを測る。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆土>覆土は1層：褐色土、2・3層：黄褐色土の3層に分けられ、下層に移行するにしたがってロームブロックが多く混入している。
- <出土遺物>遺物は覆土内より土師質土器片が2点出土しているが、細片のため図示し得るものは1点のみである。

(2) 地下式墳

1号地下式墳（旧72号土坑）（第103図、図版7-54）

- <位置>C-27・28グリットに位置する。北側に40・57号土坑、東側に49・50号土坑・25号溝状遺構が存在している。本遺構は覆土の層位・遺構の遺存状況が他の比較的大型の土坑（64・71号土坑）と類似しており、これらに含まれる可能性もあるが、南西側に堅坑らしい掘り込みが確認されているので地下式墳と判断した。天井部を含む上部構造は崩落し、壁面も一部剥落しており、遺存状況は悪い。
- <形状・規模>形状は遺存状況が悪いため明確に把握できないが、南西側に堅坑らしい掘り込みがある。この部分の形状は不整形を呈しており、幅55cmを測る。断面はほぼ垂直に立ち上がり、深さ55cm、坑底は長軸40cm・短軸16cmを測る。非常に狭い構造である。地下室と堅坑との間には段差はみられず、比高差は65cmある。地下室は底面で長軸1.9m・短軸1.65m・遺存部の高さは91cm程を測る。天井部は崩壊しているために正確な規模は不明であるが、遺存部で長軸約1.7m・短軸1.45mを測る。底面から堅坑の上場までの高さは1.2m以上を測る。
- <底・壁>地下室の底はほぼ平坦であり、壁は各壁ともやや内傾しながら立ち上がり、工具痕は残存していない。
- <覆土>覆土は2層の暗褐色土に分けられ、下層はロームブロックが多量に混入し、上層はロームブロックが塊状に多量に混入している。覆土上層部より焼土と炭化物が混じっている部分が検出された。
- <出土遺物>遺物は底面直上より覆土中位にかけて土師質土器片が少量出土している。

2号地下式墳（旧73号土坑）（第103図）

＜位 置＞B-28・29グリットに位置する。北側に95・96号土坑・27号溝状遺構、南側に58号土坑・30号溝状遺構、東側に25号溝状遺構、西側に41・51・57号土坑が存在している。北側に26号溝状遺構、南側に39号土坑と重複している。新旧関係は2号地下式墳→26号溝状遺構の順で新しく、39号土坑との新旧関係は断面観察が判然としないため不明である。本遺構も1号地下式墳同様に覆土の層位・遺構の遺存状況が他の比較的大型の土坑（64・71号土坑）と類似しており、これらに含まれる可能性があるが、南西側に堅坑らしい掘り込み（新旧関係が明確ではないので39号土坑として区別しているが本遺構に付随する可能性がある）が確認されているので地下式墳と判断した。

＜形状・規模＞天井部および壁が崩落し、また北側は26号溝状遺構により切られているために形状は明確には把握できないが、南西側の39号土坑が堅坑になる可能性がある。地下室は底面で長軸1.55m・短軸95cm、天井部は崩壊しているために計測不可能である。底面から天井部までの高さは遺存部で70cm程を測る。堅坑部は崩落のため未検出である。底面から堅坑の上場までの高さは1.2m以上を測る。

＜底・壁＞地下室の底はほぼ平坦であり、壁は比較的残存状況の良い南壁で底面から中位まではほぼ垂直に立ち上がり、上部は崩落しているため不明である。壁には工具痕などは検出されなかった。

＜覆 土＞覆土は3層に分けられる。下層の暗褐色土は厚く堆積し、ロームブロックが斑状に混入している。

＜出土遺物＞遺物は検出されていない。

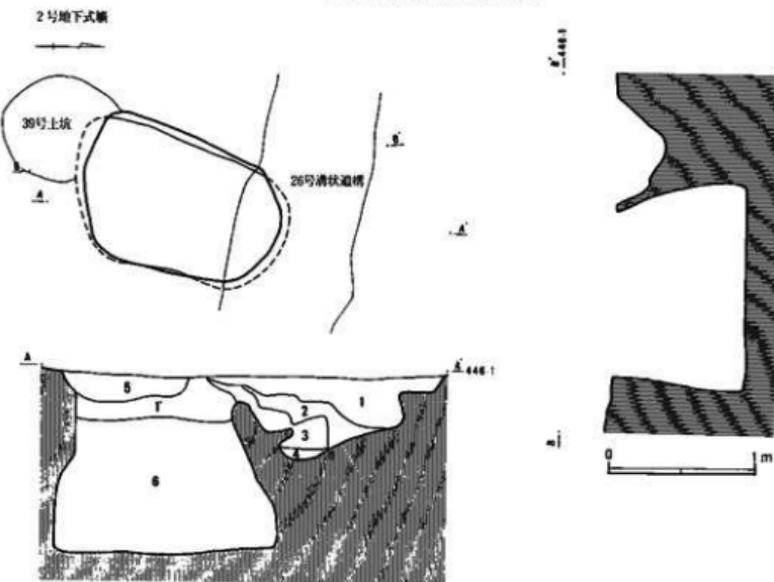
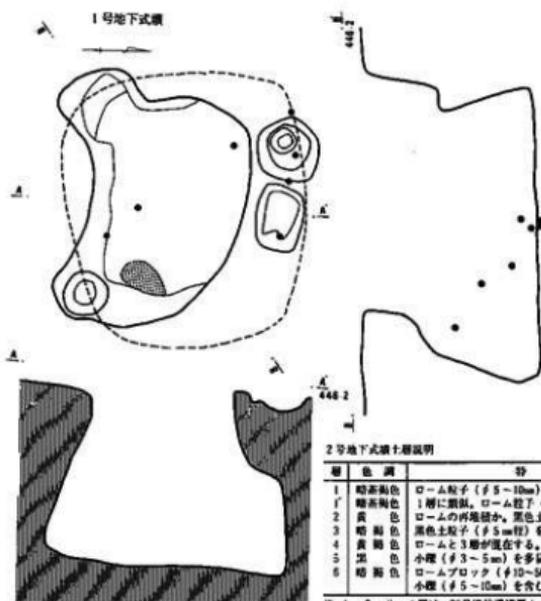
3号地下式墳（旧74号土坑）（第104図、第59・89表、図版7-55）

＜位 置＞C-30グリットに位置する。北側に27号溝状遺構、南側に26号溝状遺構、東側に42号土坑が存在している。本地下式墳は比較的残存状況が良好であるが、西側約1/4は調査区外へ延びているため未調査である。

＜形状・規模＞一部調査区外へ延びているが地下室中央部に堅坑が構築されるタイプである。覆土の堆積状況（第4層）よりある程度埋没してから堅坑の壁および天井部の一部が崩落したようである。堅坑は上場で推定長軸1.5m以上・短軸1.5mの不整円形、下場は長軸1.45m・推定短軸1.25mの不整円形を呈すると思われる。断面形は下場から中位にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その後各壁が外傾しV字形に開口している。深さは92cmを測る。地下室は底面で推定長軸2m以上・短軸1.9mの不整円形、天井部もほぼ同様な規模であり不整円形を呈すると思われる。高さは最高部で1.1mを測る。底面から堅坑の上場までの高さは2mを測る。

＜底・壁＞地下室の底はやや起伏がみられ、壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。工具痕は検出されていない。

＜覆 土＞覆土は23層に分けられる。炭化物・焼土が混入している層（第4・8・12・20層）



第103図 1・2号地下式墳 平面・土層・断面・遺物分布

と混入していない層が互層状に堆積している。

＜出土遺物＞遺物は覆土中層より土師質土器片が少量出土しており、底部片（№1）などがみられる。また、土器片の出土位置よりやや上部で古銭（№2）が検出されている。銭名は「天聖元寶」であり、詳細については第89表を掲げたので参照されたい。

4号地下式墳（旧75号土坑）（第104図）

＜位 置＞C-31グリットに位置する。北側に51号土坑・31号溝状遺構、南側に27号溝状遺構、東側に43号土坑が存在している。西側約1/3は調査区外へ延びているため未調査である。本遺構は堅坑と地下室の区別が明確ではないが覆土の層位・遺構の遺存状況が他の地下式墳と類似しているため地下式墳と判断した。

＜形状・規模＞一部調査区外へ延びているが地下室中央部に堅坑が構築されるタイプと思われる。覆土の堆積状況（第7層）より堅坑の壁および天井部の一部が崩落したことが窺われる。堅坑は崩落しているため未検出である。地下室は底面で長軸1.3m・推定短軸1.1mの不整形を呈すると思われる。天井部は崩落しているために規模は計測不可能である。底面から堅坑の上場までの高さは1.5mを測る。

＜底・壁＞地下室の底はほぼ平坦であり、壁は底面から中位にかけて遺存し、やや内傾しながら立ち上がる。工具痕は検出されていない。

＜覆 土＞覆土は8層に分けられる。第3層において少量の焼土が検出している。

＜出土遺物＞遺物は検出されていない。

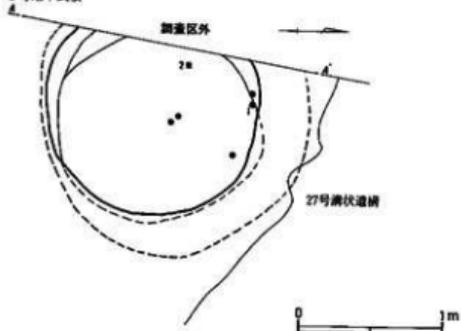
5号地下式墳（旧76号土坑）（第105図、図版7-56・57）

＜位 置＞B-33・34グリットに位置する。北側に48・84号土坑、南側に28・29号溝状遺構、東側に55・98号土坑、西側に56号土坑が存在している。本遺構も1・2号地下式墳同様に覆土の層位・遺構の遺存状況が他の比較的大型の土坑（64・71号土坑）と類似しており、これらに含まれる可能性があるが、南側に堅坑らしい掘り込みが確認されているため地下式墳と判断した。

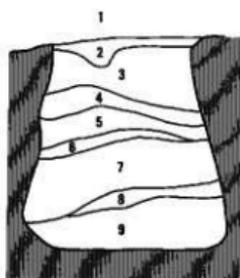
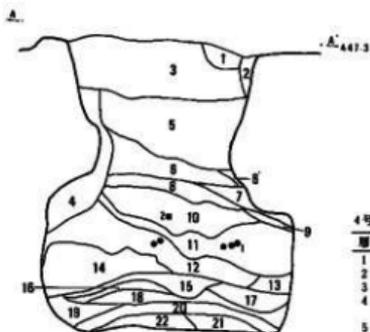
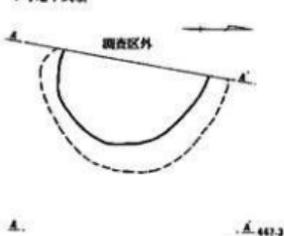
＜形状・規模＞天井部および堅坑部が崩落し、遺存状況が悪いために明確な形状は把握できない。堅坑らしい部分の形状は不整形長方形を呈しており、幅95cmを測る。断面は坑底よりやや緩やかに立ち上がり、深さ45cmを測る。坑底はテラス状に若干検出されている。地下室と堅坑の間には段差はみられず、比高差は80cm程である。地下室は底面で径1.6m程の円形を呈し、遺存部の高さは1.05mを測る。天井部は崩壊しているために正確な規模は不明であるが、遺存部で長軸約1.8m・短軸1.75mを測る。底面から堅坑の上場までの高さは1.4m以上を測る。

＜底・壁＞地下室の底はほぼ平坦であり、底面直上には灰と思われる白色の粘質物が一面に検出されている。この物質については新ためて化学的な分析を行いたい。壁は底面から中位にかけて遺存しており、やや外傾しながら立ち上がる。工具痕は検出されていない。

3号地下式竈



4号地下式竈

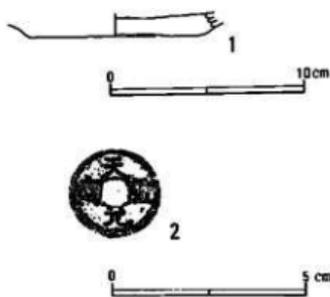


4号地下式竈 (B75土坑) 土層説明

層	色	調	特	説
1	暗褐色		耕作土。(基本層序 1層)	ローム粒子を微量に含む。
2	黒色		ロームブロックを微量に含む。	粘性・しまりに欠ける。
3	黒色		ロームブロック・炭化物を微量に含む。	粘性・しまりに欠ける。
4	黄褐色		ロームブロック層。黒土ブロック(φ1cm)を微量に含む。	粘性有。しまりに欠ける。
5	黒褐色		ロームブロックを少量含む。	粘性やや弱。しまりに欠ける。
6	黒色		層序。粘性・しまりに欠ける。	
7	黒色		5層よりロームブロックを多量に含む。	粘性やや弱。しまりやや弱。
8	黒色		ロームブロックを少量含む。	粘性弱。しまり有。
9	黒褐色		ロームブロックを微量に含む。	粘性やや弱。しまり強。

3号地下式竈 (B74土坑) 土層説明

層	色	調	特	説
1	黒色		粘性。しまりに欠ける。	
2	黒褐色		ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。	粘性・しまりに欠ける。
3	黒褐色		ローム粒子を微量に含む。	赤色粒子を少量含む。粘性・しまりに欠ける。
4	黄褐色		層序。ロームブロックを微量に含む。	粘性・しまりに欠ける。
5	黒褐色		ロームブロック・焼土粒子・炭化物を少量含む。	粘性に欠ける。しまり有。
6	黒褐色		下にロームブロックを含む。	4層に類似するが、しまりやや弱。
6'	黒褐色		4層より、ロームブロックを少量含む。	
7	黒褐色		6層より、ロームブロックを少量含む。	
8	黒褐色		ロームブロック・炭化物を少量含む。	粘性・しまりに欠ける。
9	黒褐色		7層とは同様に。	
10	黄褐色		ロームブロックを多量に含む。	5層を微量に含む。
11	黒褐色		12層より、ロームブロックを多量に含む。	
12	黒褐色		ロームブロック・炭化物・焼土を微量に含む。	粘性・しまりに欠ける。
13	黄褐色		ロームブロック層。	
14	黄褐色		ロームブロック粒子層。層序。粘性・しまりに欠ける。	
15	黄褐色		ロームブロックを多量に含む。	粘性やや弱。しまり有。
16	黒褐色		ロームブロックを多量に含む。	粘性有。しまり有。
17	黄褐色		ロームブロック層。	
18	黒褐色		16層より、ローム粒子を多量に含む。	
19	黄褐色		ロームブロックを多量に含む。	
20	黒褐色		ロームブロックを多量に含む。	炭化物を少量含む。
21	黒褐色		粘性に欠ける。しまりやや弱。	
22	黒褐色		ロームブロック層。しまりに欠ける。	
23	黄褐色		20層よりロームブロックを多量に含む。	炭化物を含まない。



第104図 3・4号地下式竈 平面・土層・遺物分布 出土遺物

<覆 土>覆土は上記したように底面直上で白色の粘質物(灰)が一面に検出され、さらにこの上部に炭化物(敷物状)が多量に混入している層が黄褐色および黒色土と互層状に堆積している。
<出土遺物>遺物は検出されていない。

6号地下式墳(旧77号土坑)(第105図、図版8-58)

<位 置>B-35・36グリットに位置する。北側に32・33号溝状遺構・8号地下式墳(旧79号土坑)・11号地下式墳(旧83号土坑)、南側に60・61号土坑、東側に26号住居址が存在している。南側で63号土坑、北側で2号柱穴列と重複しており、両遺構との新旧関係は断面観察が判然としないため不明である。本遺構は覆土の層位・遺構の遺存状況が他の比較的大型の土坑(64・71号土坑)と類似しており、これらに含まれる可能性もあるが、北側の2号柱穴列と重複している地点に堅坑らしい掘り込みが確認されているので地下式墳と判断した。天井部を含む上部構造は崩落し、壁面も一部剥落しており、遺存状況は悪い。

<形状・規模>形状は遺存状況が悪いため明確に把握できないが、南側に堅坑らしい掘り込みがある。この部分の形状は不整長方形を呈しており、幅70cmを測る。断面はほぼ垂直に立ち上がり、深さ57cm、坑底は長軸50cm、短軸28cmを測る。非常に狭い構造である。地下室と堅坑の間には段差はみられず、比高差は65cmある。地下室は底面で長軸1.6m、短軸1.25m・遺存部の高さは1m程を測る。天井部は崩壊しているために正確な規模は不明であるが、遺存部で長軸約1.4m、短軸は計測不可能である。底面から堅坑の上場までの高さは1.25m以上を測る。

<底・壁>地下室の底はほぼ平坦であり、壁は遺存状況の比較的良好な東壁で底面から中位にかけてやや内傾し、その後強くオーバーハングして立ち上がる。工具痕は検出されていない。

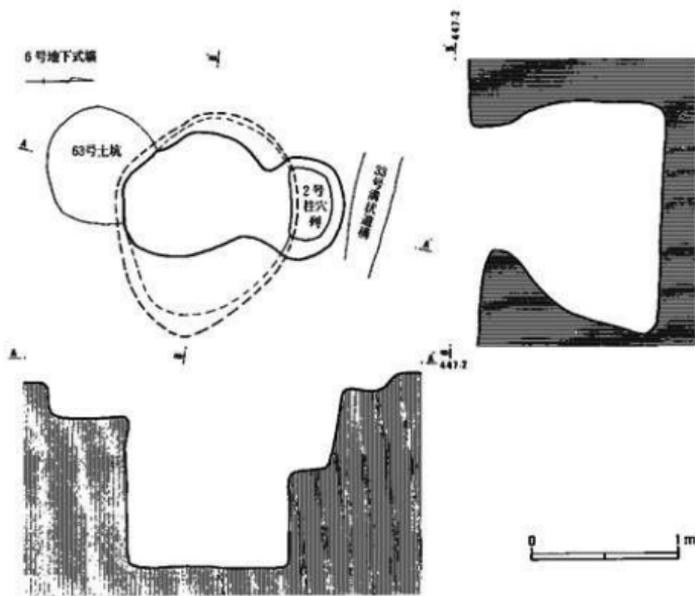
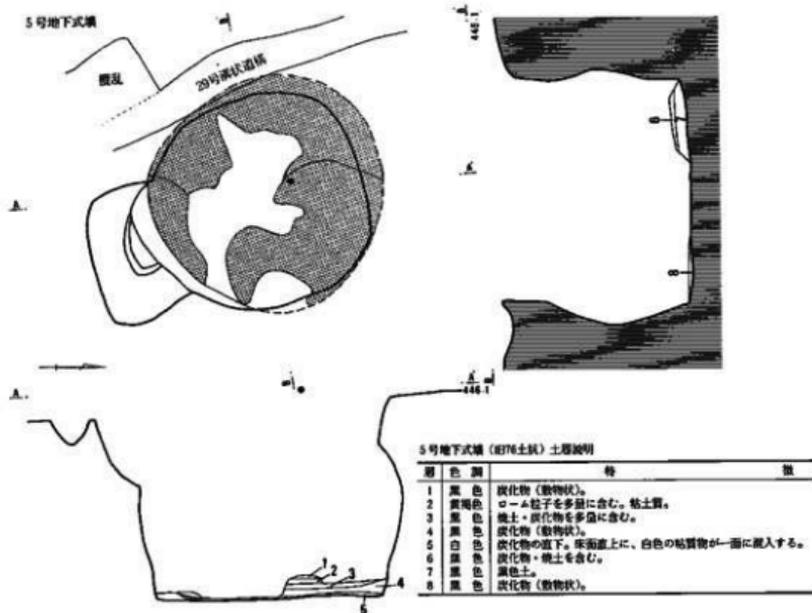
<覆 土>覆土は調査の都合上、明確な分層は行えなかったが、他の地下式墳同様にロームブロックが混入している層と混入していない層が互層状に堆積している。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

7号地下式墳(旧78号土坑)(第106図、図版8-59)

<位 置>C-36グリットに位置する。北側に9号地下式墳(旧80号土坑)・12号地下式墳(旧85号土坑)、東側に26号住居址・11号地下式墳(旧83号土坑)・8号地下式墳(旧79号土坑)が存在している。中央部で32号溝状遺構と重複している。新旧関係は7号地下式墳→32号溝状遺構の順で新しい。西側約1/2は調査区外へ延びているため未調査である。

<形状・規模>一部調査区外へ延びているが比較的死存状況は良好であり、地下室中央部に堅坑が構築されるタイプである。堅坑は上場で長軸2.1m以上・推定短軸1.8mの不整円形、下場は長軸1.2m・推定短軸1.2mの不整円形を呈すると思われる。断面形は下場から中位にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その後各壁が大きく外傾しV字形に開口している。深さは70cmを測る。地下室は底面で長軸1.7m・推定短軸1.4mの不整円形、天井部は長軸1.8m・推定短軸1.5mの不整円形を呈すると思われる。高さは最高部で1.2mを測る。底面から堅坑の上場ま



第105図 5・6号地下式墳 平面・土層・断面・遺物分布

での高さは1.9mを測る。

<底・壁>地下室の底はやや起伏がみられ、壁は各壁ともやや外傾しながら立ち上がる。工具痕は検出されていない。

<覆 土>覆土は15層に分けられる。ロームブロックが多量に混入している層と混入していない層が互層状に堆積している。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

8号地下式墳（旧79号土坑）（第106図、図版8-60）

<位 置>B-36グリットに位置する。北側に9号地下式墳（旧80号土坑）、南側に33号溝状遺構、6号地下式墳（旧77号土坑）、東側に8号地下式墳（旧79号土坑）・26号住居址・62号土坑が存在している。南側で32号溝状遺構と重複している。新旧関係は8号地下式墳→32号溝状遺構の順で新しい。

<形状・規模>比較的残存状況は良好であり、地下室中央部に竪坑が構築されるタイプである。竪坑は上場で長軸75cm・短軸65cmの不整形を呈し、下場は長軸85cm・短軸75cmの不整形を呈する。断面形は下場から中位にかけてやや内傾し、その後外反して立ち上がり、開口している。深さは80cmを測る。地下室は底面で長軸1.6m・短軸1.55mの不整形を呈し、天井部は推定長軸1.4m・短軸1.3mの不整形を呈する。高さは最高部で1mを測る。底面から竪坑の上場までの高さは1.7mを測る。

<底・壁>地下室の底はやや起伏がみられ、北側には底面より一段高いテラス部（比高差10cm程）がある。壁は各壁ともやや内傾しながら立ち上がる。工具痕は検出されていない。

<覆 土>覆土は調査の都合上、明確な分層は行えなかったが、他の地下式墳同様にロームブロックが混入している層と混入していない層が互層状に堆積している。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

9号地下式墳（旧80号土坑）（第107図）

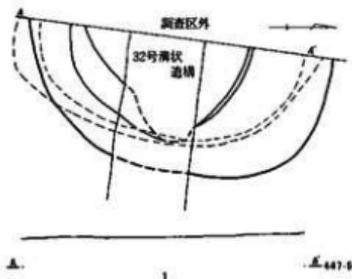
<位 置>B・C-37・38グリットに位置する。南側に7号地下式墳（旧78号土坑）・11号地下式墳（旧83号土坑）、東側に64・65・66・67・68号土坑・西側に12号地下式墳（旧85号土坑）が存在している。

<形状・規模>比較的残存状況は良好であり、地下室中央部に竪坑が構築されるタイプである。竪坑は一部崩落しており、遺存部の上場で長軸90cm・短軸85cmの不整形を呈し、下場は長軸75cm・短軸70cmの不整形を呈する。遺存部の最深部は55cmを測る。地下室は底面で長軸2.2m・短軸2mの不整形を呈し、天井部は長軸2.45m・短軸2.2mの不整形を呈する。高さは遺存部で1.5mを測る。底面から竪坑の上場までの高さは2.1mを測る。

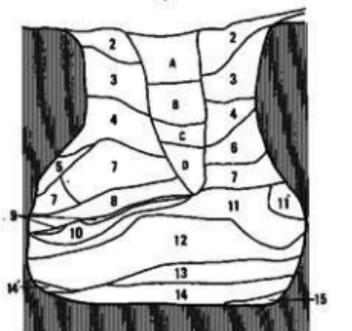
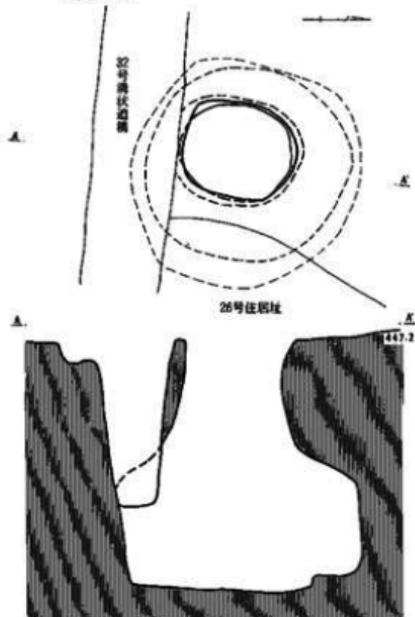
<底・壁>地下室の底はやや起伏がみられ、礫層を約50cm程掘り込んでいる。壁は東壁の一部を除き、やや外傾しながら立ち上がる。工具痕は検出されていない。

<覆 土>覆土は調査の都合上、明確な分層は行えなかったが、他の地下式墳同様にローム

7号地下式竈



8号地下式竈



7号地下式竈 (旧78号土坑) 土層説明

層	色	調	特	徴
1	暗褐色		耕作土。(基本層序 1層)	ローム粒子を微量に含む。
2	暗褐色		やや黄色みを帯びる。ローム粒子を多量に含む。焼土粒子・炭化物を少量含む。	粘性有。
3	黒色		ロームブロックを多量に含む。粘性に欠ける。しまりや中硬。	
4	黒色		ロームブロックを少量含む。粘性に欠ける。しまりや中軟。	
5	黒色		粘性弱。しまりに欠ける。	
6	黄褐色		ロームブロック層。しまりに欠ける。	
7	黄褐色		ロームブロックを少量含む。	
8	黄褐色		ロームブロック層。硬直。	
9	黒色		ローム粒子を微量に含む。粘性に欠ける。しまり有。	
10	黄褐色		ロームブロック層。黒色土粒子を微量に含む。粘性有。しまり有。	
11	黄褐色		11層より。しまりに欠ける。	
12	黄褐色		ローム粒子を少量含む。粘性有。しまりに欠ける。	
13	黄褐色		ロームを含まない。硬直。	
14	黄褐色		ロームブロックを多量に含む。	
14'	黄褐色		14層より。ロームブロックを微量に含む。	
15	黄褐色		ロームブロック層。硬直土か。	

※ A～D層は、32号溝状遺構直上。

第106図 7・8号地下式竈 平面・土層・断面

ブロックが混入している層と混入していない層が互層状に堆積している。

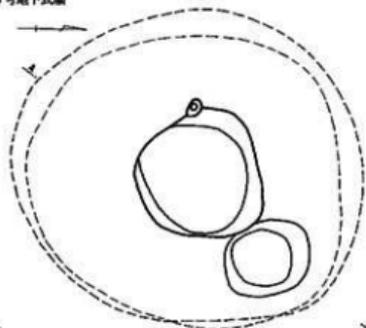
<出土遺物> 遺物は検出されていない。

10号地下式竈 (旧81号土坑) (第107図、第60表、図版 8-61、17-33)

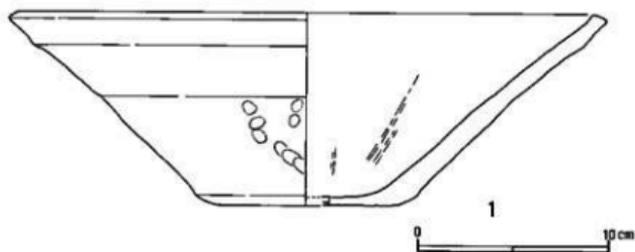
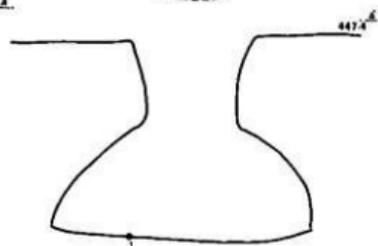
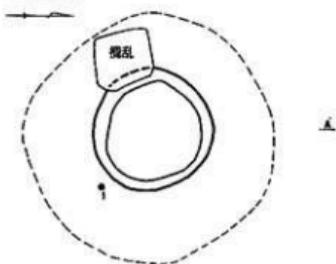
<位置> A-38グリットに位置する。北側に42号溝状遺構、南側に26号住居址、東側に99号土坑・38・39・40・41号溝状遺構が存在している。

<形状・規模> 比較的残存状況は良好であり、地下室中央部に堅坑が構築されるタイプである。堅坑は上場で長軸85cm・短軸80cmの不整形円形を呈し、下場は長軸70cm・短軸65cmの不整形円形

9号地下式墓



10号地下式墓



第107图 9・10号地下式墓 平面・断面・遺物分布 出土遺物

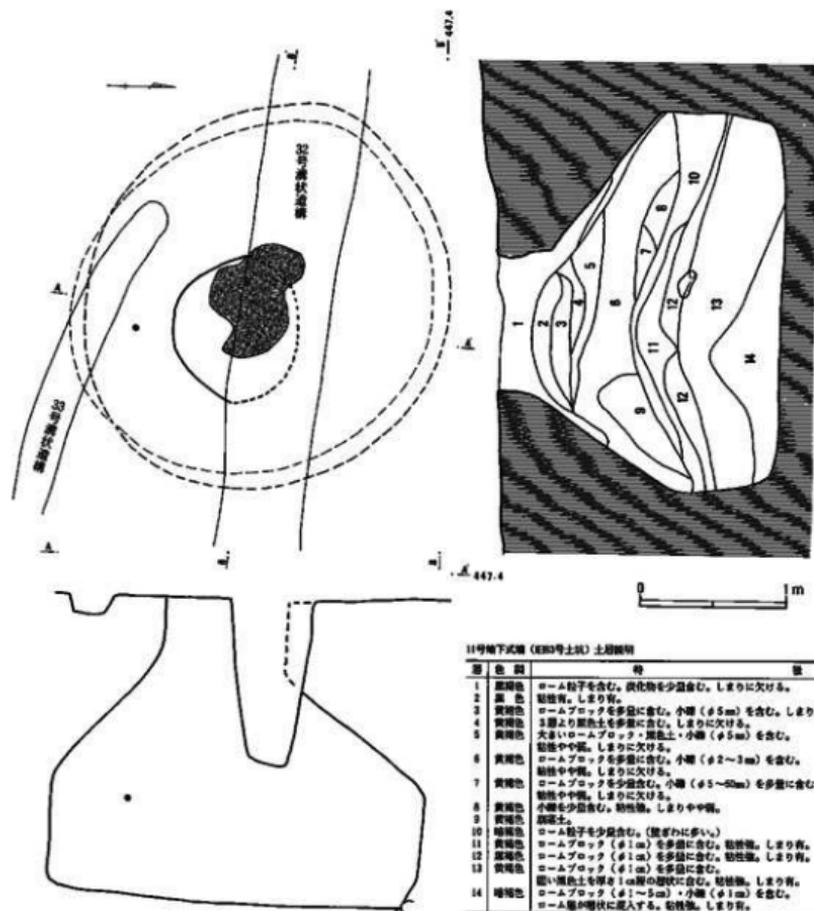
- を呈する。深さは65cmを測る。地下室は底面で径1.75mの円形を呈している。天井部は径1.7mの円形を呈している。高さは80cmを測る。底面から竪坑の上場までの高さは1.45mを測る。
- <底・壁>地下室の底はやや起伏がみられる。壁は各壁とも底面から徐々に内傾し、天井部へとつながり、断面形は半球状を呈している。工具痕は検出されていない。
- <覆 土>覆土は調査の都合上、明確な分層は行えなかったが、他の地下式墳同様にロームブロックが混入している層と混入していない層が互層状に堆積している。
- <出土遺物>遺物は底面直上より土師質土器の摺り鉢型土器破片(№1)が1点検出されている。

11号地下式墳(旧83号土坑)(第108図、図版8-62・63)

- <位 置>B-36グリットに位置する。北側に65・66・67・68・64号土坑・9号地下式墳(旧80号土坑)・12号地下式墳(旧85号土坑)、南側に60・61・63号土坑・6号地下式墳(旧77号土坑)、東側に26号住居址・8号地下式墳(旧79号土坑)、西側に7号地下式墳(旧78号土坑)が存在している。中央部に32号溝状遺構、東側に8号地下式墳(旧79号土坑)と重複している。新旧関係は11号地下式墳→32号溝状遺構の順で新しい。8号地下式墳との新旧関係は断面観察が判然としないため不明である。また竪坑部の上面に炭化物が検出されたが後世のものであろう。
- <形状・規模>地下室中央部に竪坑が構築されるタイプである。覆土の堆積状況(第9層)より一部の天井部が崩落したようである。竪坑は上場で長軸1m・推定短軸85cmの不整形円形、下場は長軸1.1m・推定短軸85cmの不整形円形を呈すると思われる。断面形は遺存部ではほぼ垂直に立ち上がり開口している。深さは30cmを測る。地下室は底面で長軸2.5m・短軸2.35mの不整形円形を呈し、天井部は長軸2.75m・短軸2.45mの不整形円形を呈する。高さは1.8mを測る。底面から竪坑の上場までの高さは2.1mを測る。
- <底・壁>地下室の底はやや起伏がみられ、礫層を約10cm掘り込んでいる。壁は各壁ともやや外傾しながら立ち上がる。工具痕は検出されていない。
- <覆 土>覆土は14層に分けられる。小礫を含む層が最下層および中層以上にみられる。
- <出土遺物>遺物は覆土中層より土師質土器片が1点出土している。

12号地下式墳(旧85号土坑)(第109図、第61表、図版8-64)

- <位 置>C-37グリットに位置する。南側に7号地下式墳(旧78号土坑)、東側に9号地下式墳(旧80号土坑)が存在している。西側約1/2は調査区外へ延びているため、未調査である。
- <形状・規模>一部調査区外へ延びているが比較的残存状況は良好であり、地下室中央部に竪坑が構築されるタイプである。覆土の堆積状況(第4・10・11層)より一部の天井部が崩落したようである。竪坑は上場で長軸80cm・推定短軸60cmの不整形円形を呈すると思われる。下場は崩落のため計測不可能である。断面形は遺存部ではほぼ垂直に立ち上がり開口している。深さは遺存部で25cmを測る。地下室は底面で長軸2.11m・推定短軸1.7mの不整



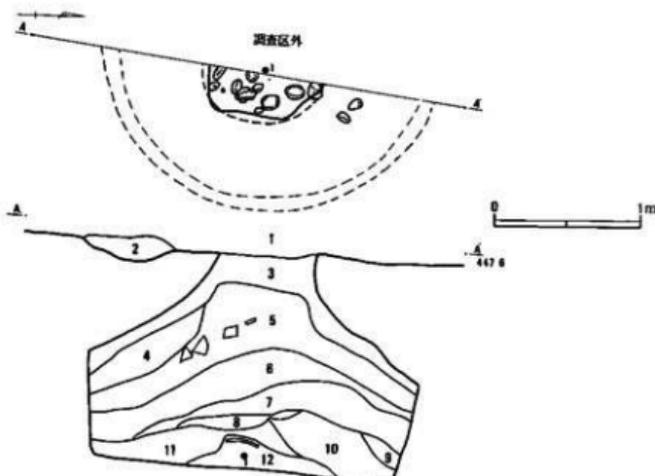
第108図 11号地下式墳 平面・土層・断面・遺物分布

円形、天井部は長軸2.3m・推定短軸1.9mの不整形円形を呈すると思われる。高さは遺存部で1.3mを測る。底面から堅坑の上場までの高さは1.5mを測る。

<底・壁>地下室の底遺存部ではほぼ平坦であり、壁は各壁ともやや外傾しながら立ち上がる。

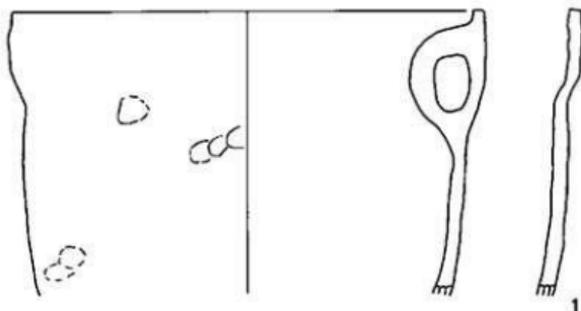
<覆土>覆土は12層に分けられる。第4層中に径14cm大の大きさの小礫が多量に混入している。

<出土遺物>遺物は底面に近い覆土内より土師質の内耳土器(Na1)の破片が出土している。



12号地下式墓 (196号土坑) 土層説明

層	色	質	特	説
1	暗褐色	耕作土。(基本耕作 1層)	ローム粒子を多数に含む。	
2	暗褐色	ローム・黒色土が混在する。		
3	黒色	φ1cm位の小礫を含む。しまりに欠ける。		
4	黄褐色	ローム・腐殖土。		
5	黄褐色	ロームブロックを少量含む。礫を含む。		
6	黒色	ロームブロックを多数に含む。3層に近似。しまりに欠ける。		
7	黄褐色	ロームブロック・黒色土粒子を多数に含む。しまりに欠ける。		
8	暗褐色	ロームブロック・黒色土を多数に含む。しまりに欠ける。		
9	黄褐色	黒色土粒子を少量含む。粘性強。しまり有。		
10	黄褐色	ローム・腐殖土。		
11	黄褐色	黒色土粒子を少量含む。(ローム：天井崩落か)。粘性強。		
12	黄褐色	ローム粒子・ロームブロックを多数に含む。しまり有。		



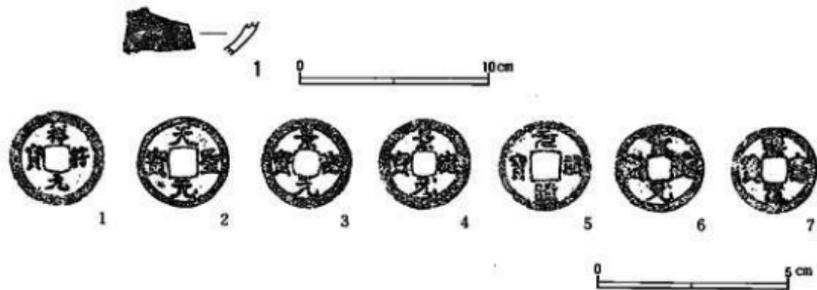
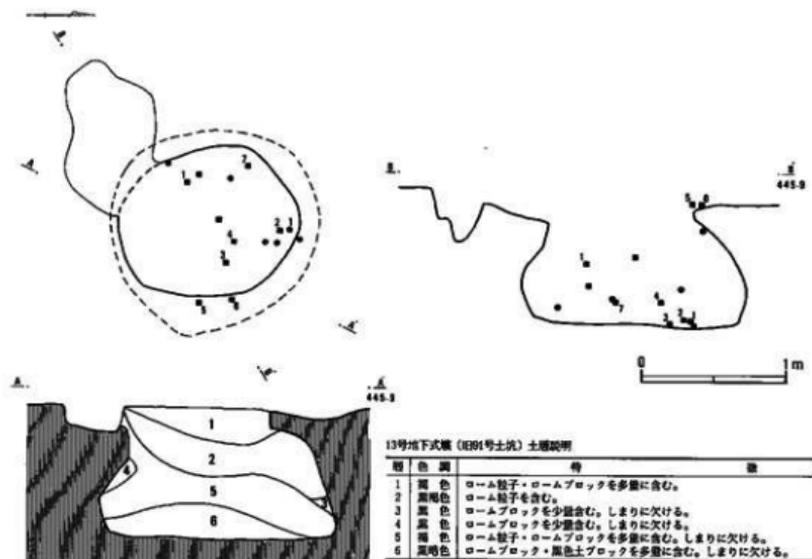
0 10cm

第109図 12号地下式墓 平面・土層・遺物分布 出土遺物

13号地下式墳（旧91号土坑）（第110図、第90表、図版8-65）

<位 置> A-27グリットに位置する。北側に26号溝状遺構、南側に25号住居址・88号土坑、西側に89・92号土坑・25号溝状遺構が存在している。南側で90号土坑と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の残存状況より13号地下式墳→90号土坑の順で新しい。

<形状・規模> 堅坑および天井部が崩落し、また南側が90号土坑により切られているために形状は明確には把握できないが、他の地下式墳の形態から推測して天井部の中央に堅坑が存在



第110図 13号地下式墳 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

していたと思われる。地下室は底面で長軸1.6m・短軸1.5mの不整形を呈し、天井部は崩壊しているために計測不可能である。底面から天井部までの高さは遺存部で80cmを測る。壁部は崩壊のため未検出である。底面から壁の上端までの高さは90cmを測る。

<底・壁>地下室の底はやや起伏がみられ、壁は比較的残存状況の良い北壁でやや内傾しながら立ち上がる。壁には工具痕などは検出されなかった。

<覆土>覆土は6層に分けられる。第5・6層を除く各層は均一に堆積しており、ロームブロックが比較的多く検出された。

<出土遺物>遺物は土師質の土器片(№1)が検出されている。また覆土下層に集中して古銭が9点(内2点は破片)が検出している。詳細については第90表を掲げたので参考にされたい。

5. 時期不明

検出した遺構は土坑24基、溝状遺構35条、集石1基、掘立柱建物址2軒、柱穴列2条である。

(1) 土坑

29号土坑(第111図)

<位置>B-3グリットに位置する。北側に22号住居址、南側に34号土坑、西側に35号土坑、東側に28号土坑が存在している。

<形状・規模>形状は不整形を呈しており、長軸1.86m・短軸1.3m・最深部68cmを測る。

<底・壁>底は2段になっており、上段(南壁側)は平坦、下段(中央部)は起伏がある。壁は東壁・西壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁は上段の底面より緩やかに立ち上がり、北東コーナーの壁は中にテラス部があり、この部分以外はほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土>覆土は10層に分けられ、全体的に粘性が強く均質である。

<出土遺物>遺物は検出されなかった。

33号土坑(第111図)

<位置>A-6グリットに位置する。南西側に近接して22号住居址が存在している。

<形状・規模>形状は不整形を呈しており、長軸1.63m・短軸83cm・最深部19cmを測る。

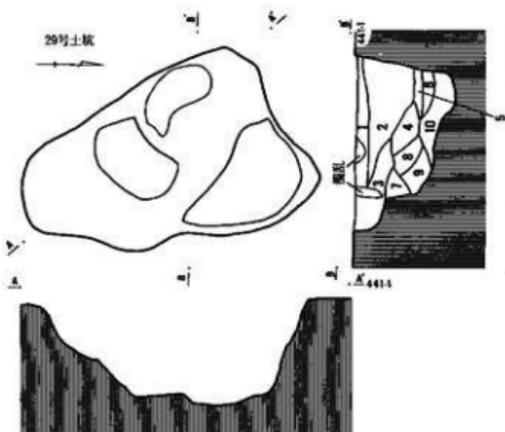
<底・壁>底は凹凸が激しい。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土>覆土は3層に分けられ、ロームブロックが少量混入している。

<出土遺物>遺物は覆土内より土師器片が2点出土したが、細片のため図示できなかった。

36号土坑(第111図)

<位置>C-9グリットに位置する。南側に21号住居址が存在している。19号溝状遺構と重複している。新旧関係は覆土の層位から36号土坑→19号溝状遺構の順で新しい。西壁側は調査区外へ延びており、未調査である。

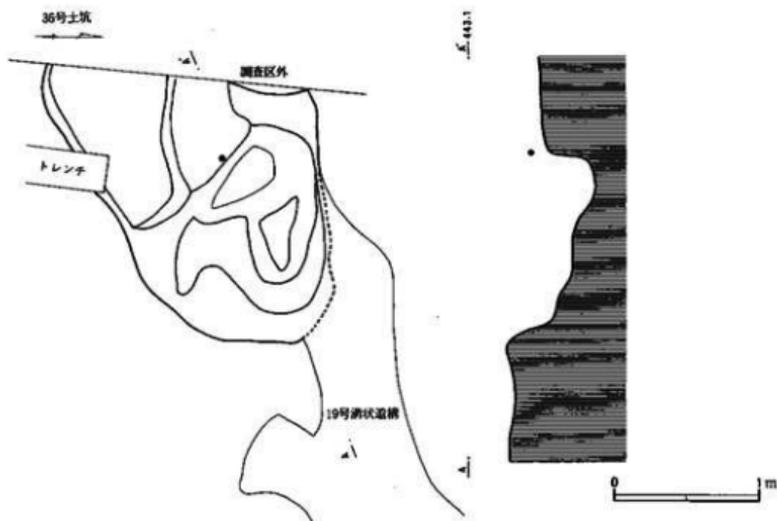
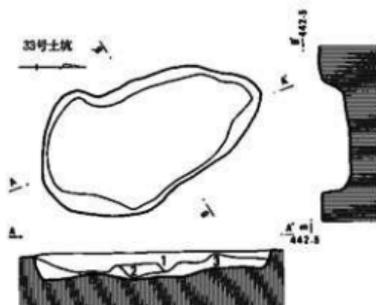


29号土坑土層説明

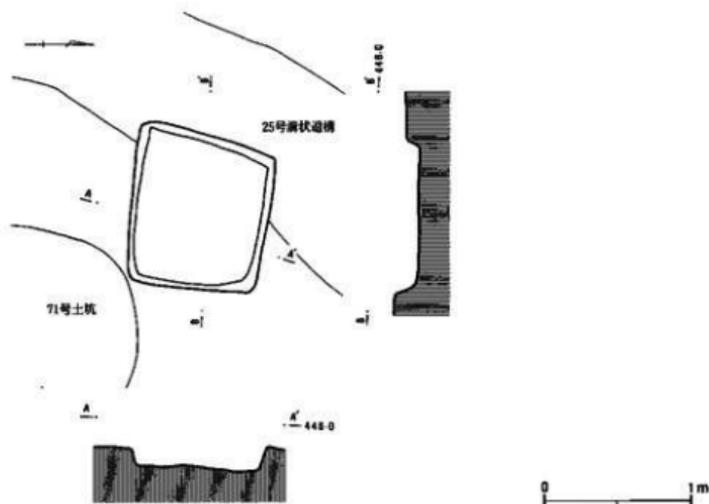
層	色	質	特	徴
1	暗茶褐色		粘性有。しまり有。	
2	暗茶褐色		1層よりも暗い。粘性有。しまり有。	
3	暗褐色		粘性有。しまり有。	
4	暗褐色		粘性やや強。しまりやや弱。	
5	暗褐色		粘性強。しまりやや弱。	
6	褐色		腐葉土。粘性強。しまり有。	
7	暗褐色		腐葉土。粘性やや強。しまりやや弱。	
8	暗褐色		粘性強。しまり有。	
9	暗褐色		粘性有。しまり有。	
10	暗褐色		粘性非常に強。しまり有。	

30号土坑土層説明

層	色	質	特	徴
1	暗褐色		粘性有。しまり有。	
2	茶褐色		粘性強。しまりやや弱。	
3	暗茶褐色		粘性有。しまりやや弱。腐葉土が、下部・側面に混入する。	



第111図 29・33・36号土坑 平面・土層・断面・遺物分布



第112図 37号土坑 平面・断面

- <形状・規模>本土坑は19号溝状遺構により切られているため遺構上面は削平されている。形状は不整形を呈しており、推定長軸2.6m・短軸1.6m・最深部67cmを測る。
- <底・壁>底は東壁側から西壁にかけて徐々に高さを増していく階段状を呈している。壁面は各壁ともほぼ垂直な立ち上がりを見せるが、凹凸が激しい。
- <覆土>覆土は暗褐色土の単一層である。
- <出土遺物>遺物は検出されなかった。

37号土坑 (第112図)

- <位置>C-25グリッドに位置する。南東側に71号土坑、南側に24号住居址、東側に25号住居址が存在している。25号溝状遺構と重複している。新旧関係は覆土の層位、遺構の遺存状況等から25号溝状遺構→37号土坑の順で新しい。
- <形状・規模>形状は不整形を呈しており、長軸1.06m・短軸96cm・掘り込みは浅く最深部で17cmを測る。
- <底・壁>底は細かい凹凸がある。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。
- <覆土>覆土は黒褐色土の単一層であり、ローム粒子が斑状に混入している。
- <出土遺物>遺物は検出されなかった。

38号土坑（第113図）

＜位 置＞B-26グリットに位置する。南側に近接して71号土坑・26号住居址、東側に25号住居址が存在している。25号溝状遺構と重複している。新旧関係は覆土の層位から25号溝状遺構→38号土坑の順で新しい。

＜形状・規模＞形状は不整形を呈しており、長軸1m・短軸96cm・最深部35cmを測る。

＜底・壁＞底はほぼ平坦であり、硬くしまっている。壁は各壁ともやや緩やかに立ち上がる。

＜覆 土＞覆土は黒褐色土の単一層であり、ローム粒子が斑状に混入している。

＜出土遺物＞遺物は検出されなかった。

40号土坑（第113図）

＜位 置＞B・C-28グリットに位置する。北側に30号溝状遺構、西側に57号土坑・1号地下式塙（旧72号土坑）、東側に25号溝状遺構が存在している。

＜形状・規模＞形状は不整形を呈しており、長軸98cm・短軸75cm・最深部54cmを測る。

＜底・壁＞底は凹凸がみられる。壁は西壁が底部から上部にかけてオーバーハングして立ち上がり、他の壁は垂直に立ち上がる。

＜覆 土＞覆土は6層に分けられ、全体的にロームブロックが斑状に多く混入している。

＜出土遺物＞遺物は検出されなかった。

43号土坑（第113図）

＜位 置＞B-31グリットに位置する。北側に54号土坑、南側に26号溝状遺構、西側に31号溝状遺構・4号地下式塙（旧75号土坑）が存在している。

＜形状・規模＞形状は不整形を呈し、南壁の一部に半円形の張り出しがある。規模は長軸1.2m・短軸69cm・最深部35cmを測る。

＜底・壁＞底は凹凸がみられる。壁は緩傾斜で立ち上がる。

＜覆 土＞覆土は黒褐色土の単一層であり、ローム粒子が斑状に混入している。

＜出土遺物＞遺物は検出されなかった。

50号土坑（第113図）

＜位 置＞B-27グリットに位置する。北側に30号溝状遺構・ピット群、西側に1号地下式塙（旧72号土坑）、東側に近接して25号溝状遺構が存在している。東壁側に49号土坑と重複している。新旧関係は互いの壁がほぼ接する状態であり、断面観察からは判然としない。

＜形状・規模＞形状は不整形を呈し、西壁側に張り出しがある。規模は長軸1.09m・推定短軸65cm・底面までの最深部は43cmを測る。

＜底・壁＞底は凹凸が激しく、北壁側に円形のピットがある。規模は長軸46cm・短軸37cm・底面からの最深部は15cmを測る。壁は遺存している壁においてはほぼ垂直に立ち上がる。

＜覆 土＞覆土は明褐色土の単一層であり、ロームブロックが混入している。

<出土遺物>遺物は検出されなかった。

51号土坑 (第113図)

<位 置>C-29グリットに位置する。北側に26号溝状遺構、南側に近接して57号土坑、東側に41号土坑が存在している。本土坑は2つのピットが重複している形状を呈しており、別々のピットの可能性が考えられるが、断面観察において切り合いが確認されなかったので1つの土坑として認定した。

<形状・規模>形状は不整楕円形を呈しており、長軸1.29m・短軸72cm・底面までの最深部60cmを測る。

<底・壁>底は2段になっており、上段(北側)と下段(南側)の比高差は23cmである。南壁側にピットがある。形状は不整円形を呈し、長軸22cm・短軸21cm・底面からの最深部は10cmを測る。壁は各壁とも垂直に立ち上がる。

<覆 土>覆土は暗褐色土の単一層であり、ロームブロックが斑状に多く混入している。

<出土遺物>遺物は覆土内より土師器片が1点検出されたが、細片のため図示できなかった。

52号土坑 (第113図)

<位 置>B-31グリットに位置する。北側に59号土坑、南側に27号溝状遺構、西側に43・54号土坑が存在している。

<形状・規模>形状は不整円形を呈しており、長軸80cm・短軸74cm・最深部49cmを測る。

<底・壁>底はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

<覆 土>覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

53号土坑 (第114図)

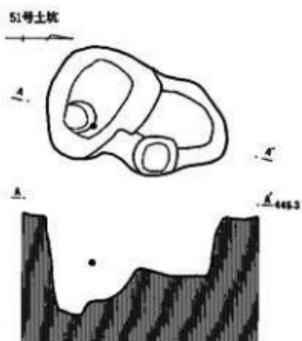
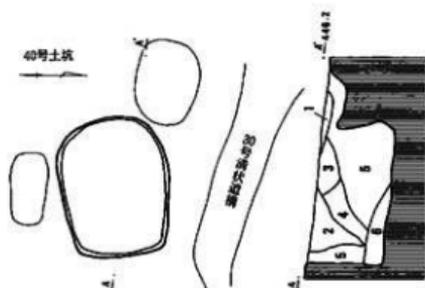
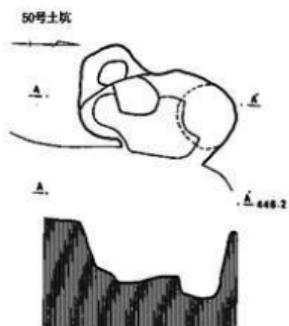
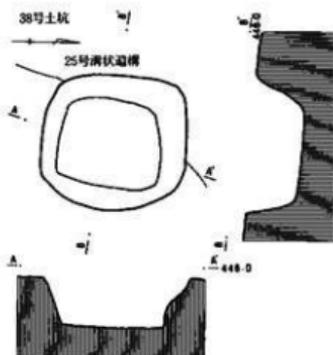
<位 置>C-32グリットに位置する。北側に47・82号土坑、南側に近接して31号溝状遺構、東側に54号土坑が存在している。32グリット周辺は耕作による攪乱が激しく、本土坑上面も一部削平されている。

<形状・規模>形状は東壁および西壁が削平されており明確ではないが、遺存部の壁と底面より不整円形を呈すると思われる。規模は長軸92cm・短軸83cm・底面までの最深部51cmを測る。

<底・壁>底は平坦である。北壁より不整円形のピットがある。規模は長軸50cm・短軸32cm・底面からの最深部は35cmを測る。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

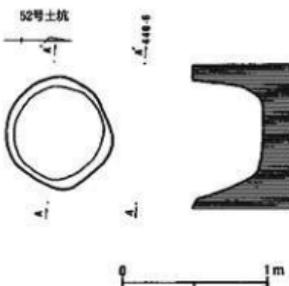
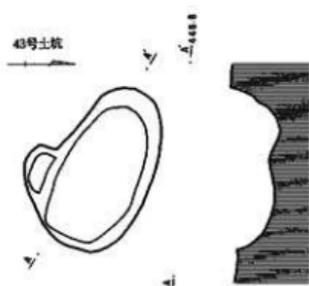
<覆 土>覆土は茶褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は検出されていない。



40号土坑土層説明

層	色	調	特	徴
1	暗褐色		ロームブロックを多量に含む。粘性有。しまり有。	
2	暗褐色		ロームブロックを少量含む。粘性に欠ける。しまり有。	
3	暗褐色		ロームブロック（1層よりやや大きめのブロック）を多量に含む。粘性有。しまり有。	
4	暗褐色		ロームブロックを多量に含む。粘性有。しまり有。	
5	暗褐色		ロームブロックを多量に含む。粘性中程度。しまり有。	
6	暗褐色		ロームブロック（やや大きめ）を多量に含む。粘性強。しまり有。	



第113図 38・40・43・50・51・52号土坑 平面・土層・断面・遺物分布

55号土坑 (第114図)

<位置> A-33・34グリットに位置する。北側に34号溝状遺構・100号土坑・26号住居址、南側に28号溝状遺構、東側に98号土坑が存在している。

<形状・規模> 形状は不整形円形を呈している。規模は長軸1.07m・短軸81cm・最深部84cmを測る。

<底・壁> 底は平坦であり、壁は各壁とも垂直に立ち上がる。

<覆土> 覆土は茶褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は検出されていない。

58号土坑 (第114図)

<位置> B-28グリットに位置する。北側に39号土坑・2号地下式塋(旧73号土坑)、南側にピット群、東側に25号溝状遺構が存在している。30号溝状遺構と重複している。新旧関係は断面観察が判然としなため不明である。また本土坑の覆土上層からは20cm大の礫が3個検出されており、集石遺構の可能性もある。

<形状・規模> 形状は不整形円形を呈している。規模は長軸65cm・短軸52cm・最深部48cmを測る。

<底・壁> 底は中央部が皿状にやや窪んでいる。壁は各壁とも垂直に立ち上がる。

<覆土> 覆土は暗褐色土の単一層であり、上層部に礫がある。

<出土遺物> 遺物は検出されていない。

59号土坑 (第114図)

<位置> B-32グリットに位置する。北側に近接して44・45・46号土坑、南側に52・54号土坑が存在する。

<形状・規模> 形状は不整形円形を呈している。規模は長軸75cm・短軸69cm・最深部22cmを測る。

<底・壁> 底はほぼ平坦である。壁は各壁とも垂直に立ち上がる。

<覆土> 覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は検出されていない。

61号土坑 (第114図)

<位置> B-35グリットに位置する。北側に近接して63号土坑・6号地下式塋(旧77号土坑)、南側に近接して60号土坑、東側に26号住居址が存在する。

<形状・規模> 形状は不整形円形を呈している。規模は長軸96cm・短軸77cm・最深部63cmを測る。

<底・壁> 底は中央部が窪んでいる。壁は各壁ともやや垂直に立ち上がる。

<覆土> 覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は検出されていない。

66号土坑 (第114図)

<位 置> A-37グリットに位置する。北側に近接して67号土坑、東側に近接して64号土坑、南側に26号住居址が存在する。

<形状・規模> 形状は不整形円形を呈している。規模は長軸82cm・短軸68cm・最深部48cmを測る。

<底・壁> 底は凹凸がみられる。壁は各壁とも底部から中位にかけて垂直に立ち上がり、中位からはやや外反して立ち上がる。

<覆 土> 覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は検出されていない。

67号土坑 (第114図)

<位 置> A・B-37・38グリットに位置する。北側に近接して68号土坑、南側に近接して66号土坑、西側に近接して65号土坑が存在している。本土坑は51号土坑と同様に2つのピットが重複している形状を呈しており、別々のピットが重複している可能性が考えられるが、断面観察において切り合いが確認されなかったので1つの土坑として認定した。東壁側で64号土坑と重複しているが、新旧関係は断面観察からは判然としないため不明である。

<形状・規模> 形状は不整形円形を呈しており、長軸1.26m・短軸77cm・最深部38cmを測る。

<底・壁> 底は2段になっており、上段(北側)と下段(南側)の比高差は15cmである。壁は北壁がやや緩やかに立ち上がり、その他はほぼ垂直に立ち上がる。

<覆 土> 覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は検出されていない。

70号土坑 (第115図)

<位 置> A-49・50グリットに位置する。東側に29号住居址が存在している。

<形状・規模> 形状は不整形を呈しており、長軸3.19m・短軸1.84m・最深部72cmを測る。

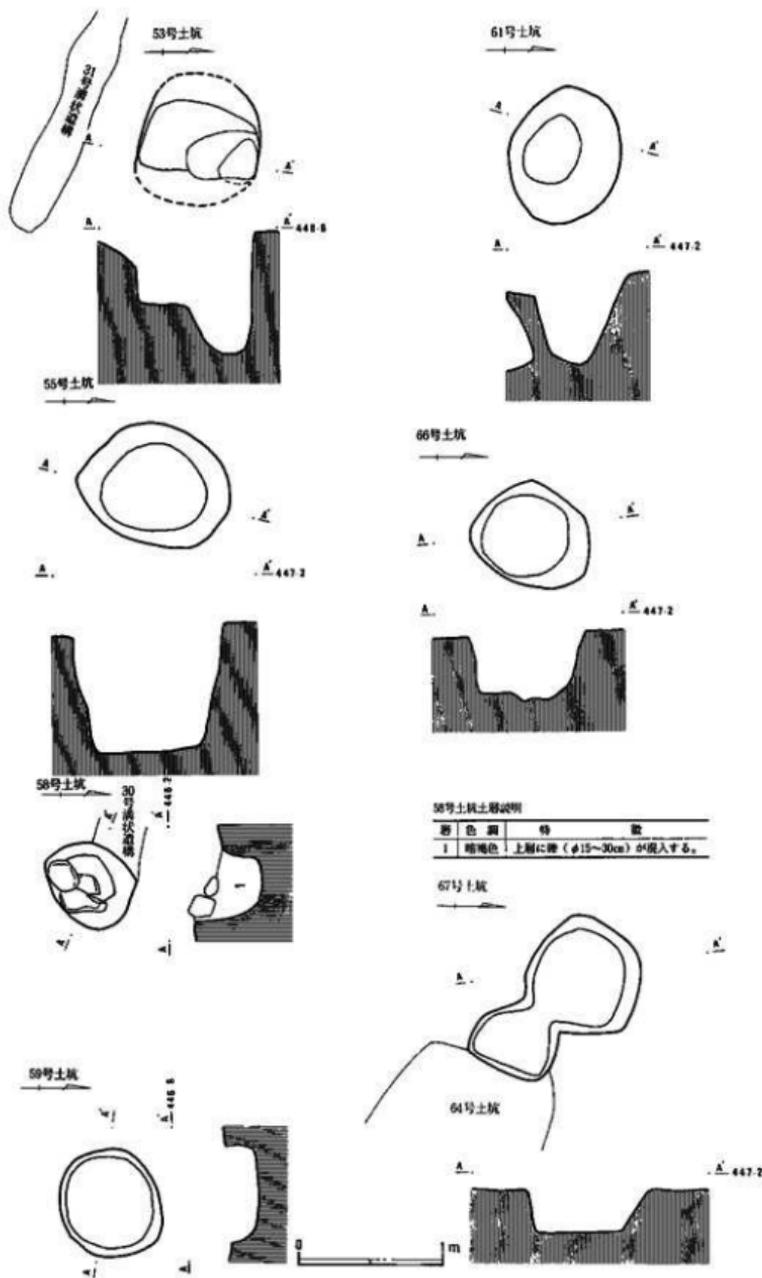
<底・壁> 底は中央部やや南よりで皿状に窪みあり、北壁側は底部との比高差41cmにテラス状の平坦面が存在する。壁は各壁とも緩やかに立ち上がる。

<覆 土> 覆土は6層に分けられ、下層に移行するにしたがってローム粒子が多く混入している。

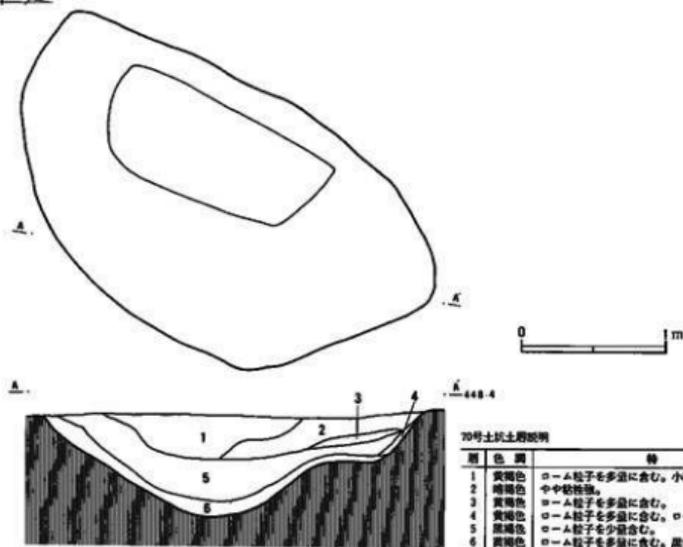
<出土遺物> 遺物は検出されていない。

93号土坑 (第116図)

<位 置> B-27グリットに位置する。北側に92号土坑、南側に87・88号土坑、東側に89号土坑、西側で25号溝状遺構が近接している。



第114图 53·55·58·59·61·66·67号土坑 平面·土层·断面



70号土坑土層説明

層	色 調	特 徴
1	黄褐色	ローム粒子を多量に含む。小礫(φ2cm程度)を少量含む。やや粘土質。
2	暗褐色	やや粘性强。
3	黄褐色	ローム粒子を多量に含む。
4	黄褐色	ローム粒子を多量に含む。ローム再堆積少。粘性强。
5	黄褐色	ローム粒子を少量含む。
6	黄褐色	ローム粒子を多量に含む。褐色土を層状に含む。粘性强。

第115図 70号土坑 平面・土層

<形状・規模>形状は不整形円形を呈している。規模は長軸93cm・短軸74cm・最深部40cmを測る。

<底・壁>底は西壁側で皿状に窪んでいる。壁は東壁は2段のテラスがあり、底部からの比高差は1段目で10cm、2段目で25cmである。他の壁はやや緩やかに立ち上がる。

<覆 土>覆土は4層に分けられ、下層に移行するにしたがってローム粒子が多く混入している。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

96号土坑 (第116図)

<位 置>A-31グリットに位置する。北側に27号溝状遺構、南側に近接して95号土坑・26号溝状遺構、東側に4号集石が存在している。東壁側で25号溝状遺構と重複している。新旧関係は25号溝状遺構→96号土坑の順で新しい。

<形状・規模>形状は長方形を呈している。規模は長軸87cm・短軸60cm・最深部38cmを測る。

<底・壁>底は平坦である。壁は各壁とも垂直に立ち上がる。

<覆 土>覆土は褐色土の単一層で、ローム粒子を含んでいる。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

97号土坑（第116図）

<位置> A-33グリットに位置する。北西側に98号土坑が存在している。南壁側で28号溝状遺構と重複している。新旧関係は断面観察からは判然としないため不明である。

<形状・規模> 形状は不整長方形を呈している。規模は長軸75cm・短軸62cm・最深部15cmを測る。

<底・壁> 底は浅く、凹凸が激しい。壁は各壁とも緩やかに立ち上がる。

<覆土> 覆土は褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は検出されていない。

99号土坑（第116図）

<位置> A-38グリットに位置する。西側に10号地下式城（旧81号土坑）・40号溝状遺構、東側に39号溝状遺構、南壁側に38・40号溝状遺構が存在している。

<形状・規模> 形状は不整円形を呈している。規模は長軸72cm・短軸66cm・最深部21cmを測る。

<底・壁> 底は凹凸がみられる。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土> 覆土は3層に分けられ、下層に移行するにしたがって、ロームブロックが多く混入している。

<出土遺物> 遺物は検出されていない。

107号土坑（第116図）

<位置> Z-41グリットに位置する。北壁側に35号溝状遺構、南壁側に42号溝状遺構が存在している。

<形状・規模> 形状は不整楕円形を呈している。規模は長軸1.22m・短軸81cm・最深部30cmを測る。

<底・壁> 底は凹凸が激しく、東壁際は1段テラス状に高く（底部からの比高差15cm）なっている。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土> 覆土は2層に分けられる。上層は暗黄褐色土、下層は黄褐色土である。

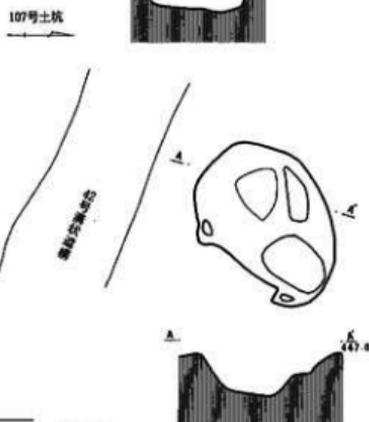
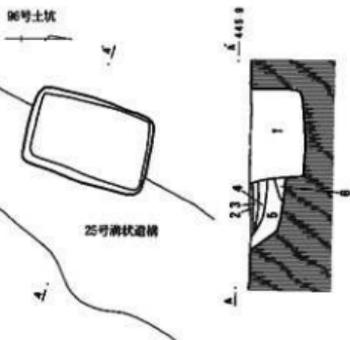
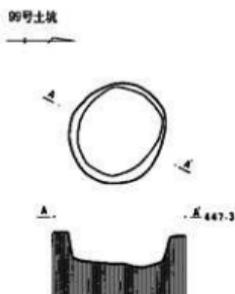
<出土遺物> 遺物は検出されていない。

108号土坑（第116図）

<位置> Z-34グリットに位置する。本土坑のほとんどは調査区外へ延びており、平面プランは把握できなかった。南壁側で26号住居址と重複している。新旧関係は覆土の層位から26号住居址→108号土坑の順で新しい。

<形状・規模> 形状および規模はほとんどの部分が未調査であるため、不明である。

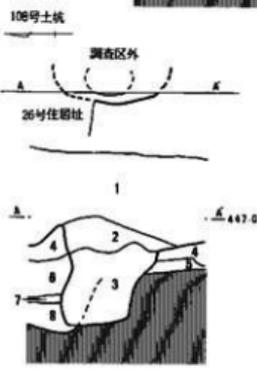
<底・壁> 底はほぼ平坦である。検出されている壁のうち、西壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁はやや外反しながら立ち上がり、南壁は中位までは内湾しており、上部ではほぼ垂直に立ち上がる。



96号土坑土層説明

層	色調	特	量
1	褐色	ローム粒子・黒色土ブロックを含む。	
2	褐色	やや砂質。	
3	黄褐色	砂質。ローム粒子を少量含む。	
4	黄褐色	粘性强。	
5	黄褐色	ローム粒子を多量に含む。黒色土粒子を少量含む。	
6	黒色	ローム粒子を含む。ブロック状にしまっている。	

※ 2～6層は、25号溝状遺構覆土。



108号土坑土層説明

層	色調	特	量
1	増草褐色	耕作土。ロームブロック・炭化物を少量含む。(基本層序 I層)	
2	増草褐色	粘性やや弱。しまり有。	
3	増草褐色	粘性に欠ける。しまり有。	
4	黒色	ローム粒子を塊状に少量含む。粘性・しまりに欠ける。	
5	増草褐色	顆粒状。粘性・しまりやや弱。(基本層序 IV層)	
6	増草褐色	黒色土・ロームブロックを多量に含む。(基本層序 V層)	
7	増草褐色	粘性強。しまり有。	
8	増草褐色	黒色土・ロームブロックを多量に含む。粘性有。しまり非常に強。	
9	増草褐色	黒色土・ロームブロックを多量に含む。粘性に欠ける。しまり強。	
10	増草褐色	ロームが塊状に混入する。粘性強。しまり有。	

※ 6～8層は、29号住居跡覆土。



第116図 93・96・97・99・107・108号土坑 平面・土層・断面

<覆 土>覆土は2層に分けられる。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

(2) 溝状遺構

7号溝状遺構(第117～119図、第26・47・79表、図版13-20、16-29)

<位 置>A・B・C-1グリットに位置する。調査区内を東-西方向に直線的に走る。東側および西側は共に調査区外へ延びているため未調査である。

<形状・規模>形状は調査区外へ延びているために不明であるが、現長約9m・幅1.66～2.68m・底幅10～60cm・最深部1.4mを測り、断面形が底幅の狭い逆台形を呈している。

<底・壁>底は起伏が激しく、数条に挟られている。北壁および南壁は緩やかに立ち上がり、逆台形状を呈しており、多数のピットが検出された。これらの壁にみられる多数のピットは規則性がなく、砂礫の流れ込みにより形成されたものと考えられ、また大型のピットがみられることより、かなり激しく砂礫が流れ込んだように思われる。東-西方向の溝底比高差は5cm程であり、西側にやや傾斜している。

<覆 土>覆土は14層に分けられる。基本的には上層の3～5層、中層の6～12層、下層の13・14の3層に大別でき、3度にわたる砂礫の流れ込みがあったことが窺われる。

<出土遺物>遺物は土器破片が約600点出土しており、そのうち縄文時代の土器片が約140点、弥生時代後半から古墳時代にかけての土器片が約460点出土している。また、打製石斧が1点出土している。これらの遺物は摩滅しており、特に縄文時代の土器片の摩滅が激しく、自然流入したものと考えられる。

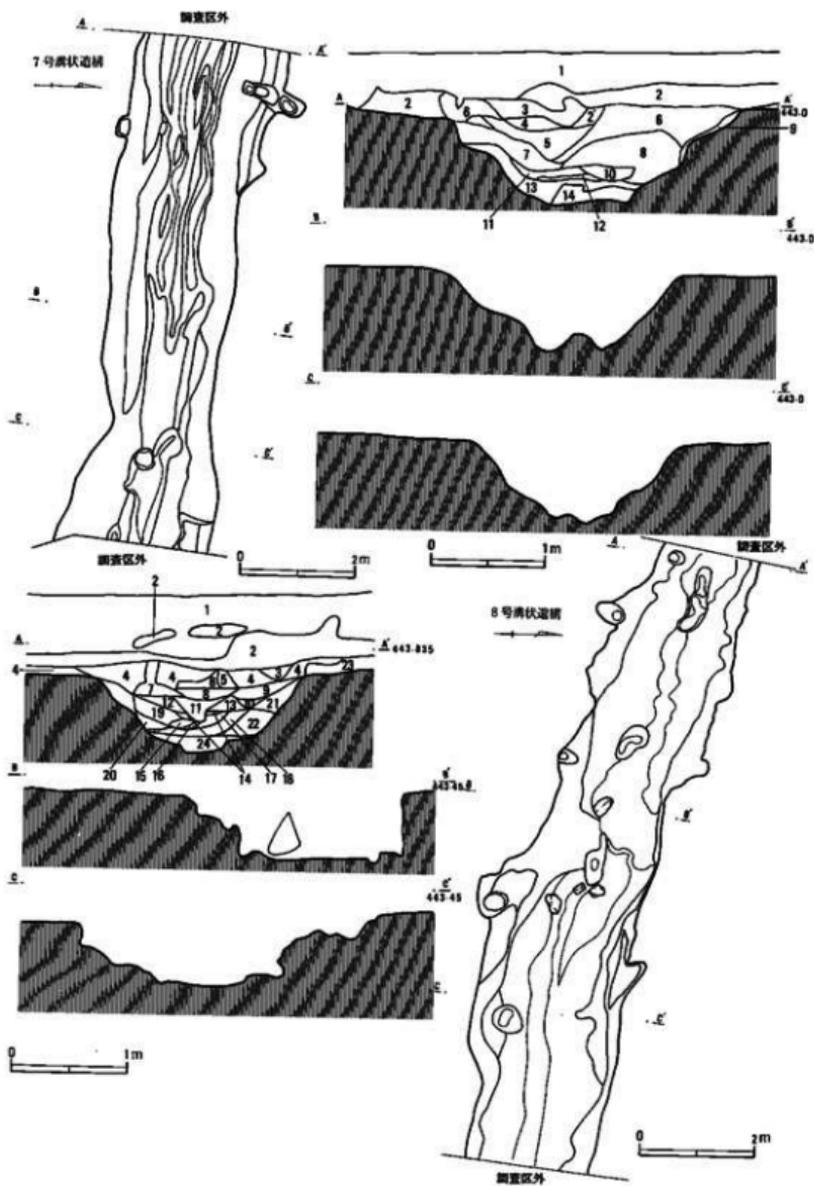
8号溝状遺構(第117・120図、第27・48・62・80表、図版7-49、13-19・20、16-28・29)

<位 置>A・B・C-12・13グリットに位置する。東側および西側は共に調査区外へ延びているため未調査である。北側に19号住居址、南側に32号土坑・19号溝状遺構が存在している。東側端部に13号溝状遺構と重複している。新旧関係は8号溝状遺構→13号溝状遺構の順で新しい。

<形状・規模>調査区内を北東-南西方向に直線的に走り、両端部は調査区外へ延びているために不明であるが、規模は現長約11.3m・幅2～2.4m・底幅0.34～1.45m・最深部65cmを測り、断面形が底幅の狭い逆台形を呈している。

<底・壁>底は起伏が激しく、多数のピットが検出されている。壁は北壁が比較的急傾斜で立ち上がり、南壁が緩やかに立ち上がる。断面形は逆台形状を呈しており、7号溝状遺構同様に多数のピットが検出された。これらの壁にみられる多数のピットは規則性がなく、砂礫の流れ込みにより形成されたものと考えられ、また大型のピットがみられることよりかなり激しく砂礫が流れ込んだように思われる。東-西方向の溝底比高差は10cm程であり、西側に傾斜している。

<覆 土>覆土は22層に分けられ、基本的には上層の3～7層、中層の8～23層、下層の24層の3層に大別できる。まず下層の24層の礫層が流れ込み、次に中層のうちの19～23層が



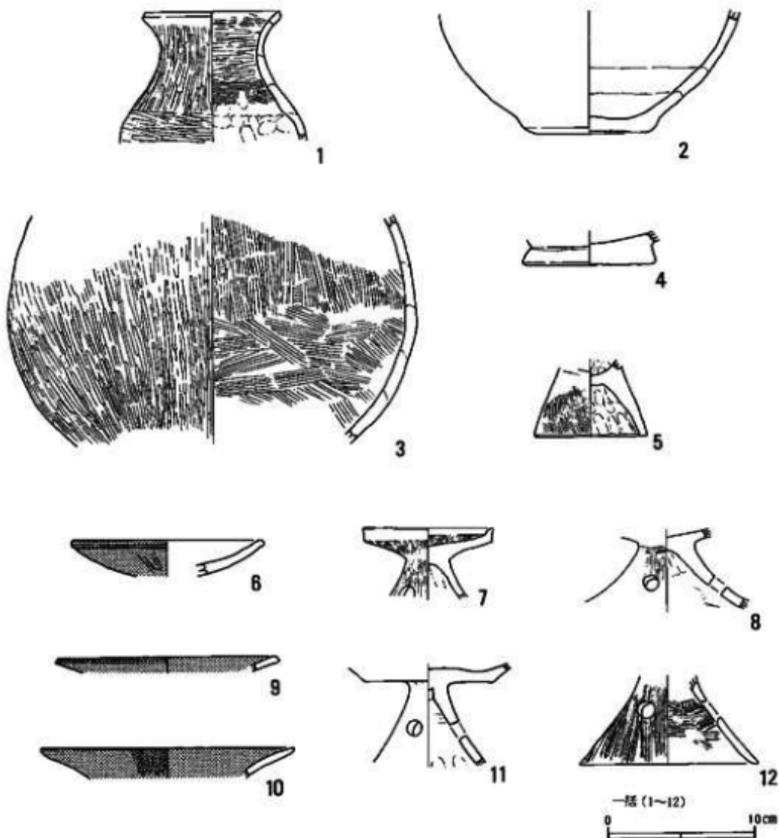
第117图 7·8号沟状遗址 平面·土层·断面

7号溝状遺構土層説明

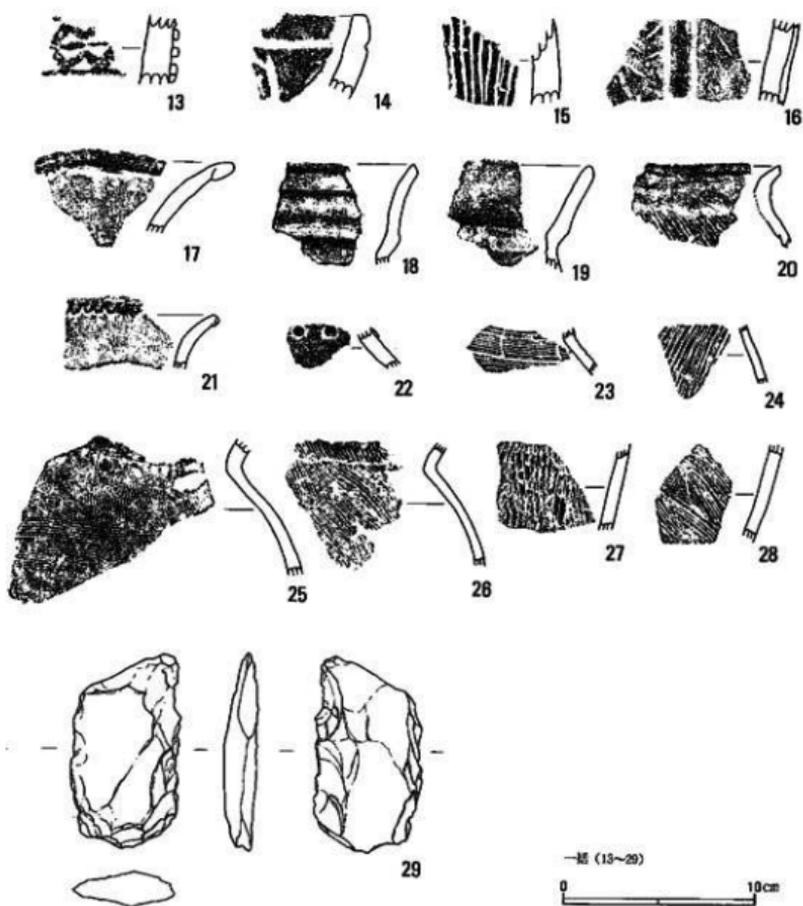
層	色	調	特	注
1	暗茶褐色		灰化物・粘土層を穿する。粘性強。しまり強。(基本層序 1層)	
2	黒褐色		粘性に欠ける。しまり強。(基本層序 4層)	
2'	黒褐色		2層が境界の境目により入り込んだ層。砂利(φ1~5cm)を含む。	
3	暗茶褐色		砂利(φ3~5cm)を含む。きめが粗い。	
4	青灰色		砂利(φ1~10cm)を含む。きめが粗い。	
5	暗茶褐色		砂利(φ0.5~3cm)を含む。きめが粗い。	
6	暗茶褐色		ローム粒子を少量含む。粘性弱。しまり弱。	
7	暗茶褐色		粘性弱。しまり弱。	
8	暗茶褐色		土と砂利(φ0.1~2mm)が互層状になる。砂利は下にいく程量が大きくなる。	
9	黒褐色		粘性やや強。しまり弱。(基本層序 5層)	
10	暗茶褐色		ロームを層状に多量に含む。粘性に欠ける。しまり弱。	
11	暗茶褐色		粘性弱。しまり弱。	
12	暗茶褐色		砂利(φ0.1~1cm)を含む。粘性に欠ける。しまり弱。	
13	暗茶褐色		ローム粒子が層状に少量含む。粘性強。しまり弱。	
14	暗茶褐色		砂利(φ1~3cm)を含む。砂利は底部にいく程量が大きくなる。	

8号溝状遺構土層説明

層	色	調	特	注
1	(灰)褐色		粘土土(基本層序 1層)	
2	黒色		やや砂質。きめが細かい。(基本層序 4層)	
3	暗灰色		砂礫層。砂を中心に層(φ3cm)を含む。	
4	黒色		2層より砂層(φ2mm以下)が多く、ローム粒子を少量含む。	
5	黒色		4層とはほぼ同じだが、ローム粒子がやや大きく、多量に含む。	
6	灰褐色		砂層(φ3mm)を多量に含む。しまりに欠ける。	
7	黒色		ローム粒子を少量含む。砂質。	
8	黒褐色		砂礫層。砂と層(φ5cm)がほぼ半分ずつ存在する。	
9	暗灰色		砂礫層。砂を中心に層(φ1cm)とローム粒子を含む。	
10	暗灰色		砂礫層。砂・層(φ5mm以下)が存在する。	
11	暗灰色		砂礫層。層(φ1~5cm)が中心。	
12	暗灰色		砂礫層。やや褐色。砂が中心。φ3mm程の層も多い。	
13	暗灰色		砂質。黒色土・ローム粒子を少量含む。	
14	灰褐色		砂質。きめが粗く、やや粘性強。	
15	暗灰色		砂礫層。砂を中心に層(φ3~10cm)を含む。	
16	黒色		粘土土。ローム粒子を少量含む。	
17	暗灰色		砂礫層。砂を中心に層(φ3~30cm)を含む。	
18	暗灰色		砂礫層。層が中心。厚はバラツキが大きく5~10cmを中心に50cmを越すものもある。	
19	暗灰色		13層とはほぼ同じ。	
20	黒褐色		砂質。黒色土粒子・ローム粒子を含む。	
21	黒褐色		砂質。ローム粒子を多量に含む。しまりに欠ける。	
22	灰褐色		ローム粒子を少量含む。粘性強。	
23	黄褐色		ロームと2層が交互する。ロームが多い。(基本層序 5層)	
24	暗灰色		砂礫層。やや粗い砂が中心。層(φ1cm)を少量含む。	



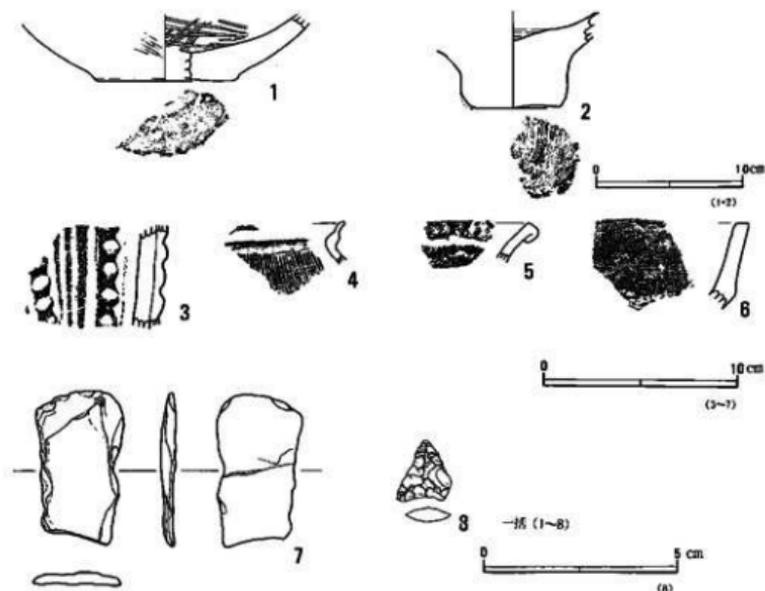
第118図 7号溝状遺構 出土遺物 (1)



第119図 7号溝状遺構 出土遺物 (2)

層が堆積し、その後これらの中層を削り取る状態で8～18層の礫層および砂礫層が流れ込んでいる。最後に上層の3～7層が堆積し、埋没したと思われる。本溝状遺構においては3度にわたる砂礫の流れ込みがあったことが窺われる。

<出土遺物>遺物は土器破片が約500点出土しており、そのうち縄文時代の土器片が約100点、弥生時代後半から古墳時代にかけての土器片が約410点出土している。また、打製石斧・石鏃



第120図 8号溝状遺構 出土遺物

がそれぞれ1点出土している。これらの遺物は摩滅が激しく、自然流入したものと考えられる。

9号溝状遺構（第121図）

<位置> B-5グリットに位置する。南側に30号土坑、本溝状遺構と平行して東側に11号溝状遺構、西側に20号溝状遺構が存在する。西側で21号溝状遺構、北側で10号溝状遺構、全体が22号住居址とそれぞれ重複している。新旧関係は10号溝状遺構と21号溝状遺構に関しては、断面観察が判然としないため不明である。22号住居址との新旧関係は22号住居址→9号溝状遺構の順で新しい。また、本土坑中央部の覆土内および周辺部において焼土が確認されており、これは本溝状遺構と重複している22号住居址の炉に伴うものであることが後に判明した。

<形状・規模> 南-北方向に直線的に走る細長い溝状遺構で、長さ9.32m・幅0.95~1.62m・底幅35~68cm・最深部48cmを測り、断面形は皿状を呈する。

<底・壁> 底はやや起伏があり、壁は各壁とも緩やかに立ち上がる。南-北方向の溝底比高差は13cm程であり、北側に緩やかに傾斜している。

<覆土> 覆土は暗茶褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は土師器片が少量出土しているが、細片のため図示できなかった。

10号溝状遺構（第121・122図）

〈位 置〉A・B・C-4・5グリットに位置する。北側に20・21・23号溝状遺構、南側に30号土坑が存在する。東側で11号溝状遺構、中央部で9号溝状遺構、全体が22号住居址と重複している。新旧関係は9・11号溝状遺構に関しては断面観察が判然としないため不明である。22号住居址との新旧関係は22号住居址→10号溝状遺構の順で新しい。

〈形状・規模〉南西-北東方向に走る細長い溝状遺構で、南西側端部付近で南側にL字状に枝分かれしている。東端付近にテラス状の段差がある。規模は長さ15.6m・幅70cm・底幅40cm・最深部21cmを測る。

〈底・壁〉底は比較的平坦である。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。南西-北東方向の溝底比高差は20cm程であり、北東側に緩やかに傾斜している。

〈覆 土〉覆土は暗茶褐色土の単一層である。

〈出土遺物〉遺物は土師器片が数点出土しているが、細片のため図示できたのは土師器の甕形土器の口縁部片（No1）1点のみである。

11号溝状遺構（第121図）

〈位 置〉A・B-5グリットに位置する。西側に9・20・21号溝状遺構が存在する。南側で10号溝状遺構、全体が22号住居址と重複している。新旧関係は10号溝状遺構に関しては断面観察が判然としないため不明である。22号住居址との新旧関係は22号住居址→11号溝状遺構の順で新しい。

〈形状・規模〉南-北方向に直線的に走る細長い溝状遺構で、南側は10号溝状遺構と重複しているために不明である。規模は現長4.23m・幅0.68~1.03m・底幅30~82cm・最深部40cmを測る。

〈底・壁〉底は比較的平坦である。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。南-北方向の溝底比高差は10cm程であり、北側に緩やかに傾斜している。

〈覆 土〉覆土は暗茶褐色土の単一層である。

〈出土遺物〉遺物は検出されていない。

12号溝状遺構（第123図）

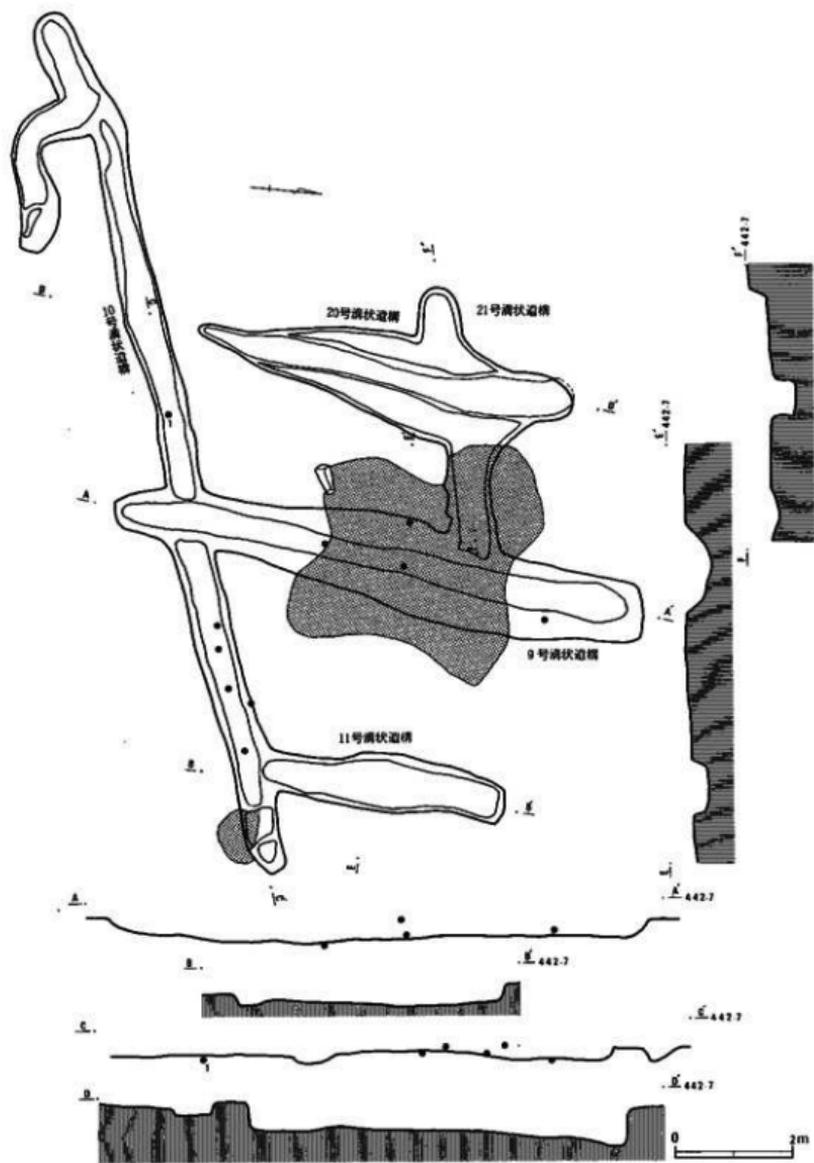
〈位 置〉B-8グリットに位置する。北側に19号溝状遺構、南側に20号住居址、東側に13号溝状遺構、西側に21号住居址が存在する。

〈形状・規模〉北東-南西方向に直線的に走る細長い溝状遺構で、規模は長さ3.1m・幅48cm・底幅16cm・最深部17cmを測り、断面形は皿状を呈している。

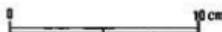
〈底・壁〉底はほぼ平坦である。壁は各壁とも垂直に立ち上がる。

〈覆 土〉覆土は暗茶褐色土の単一層である。

〈出土遺物〉遺物は検出されていない。



第121图 9·10·11·20·21号满状遗榫 平面·断面·土层·遗物分布



第122図 10号溝状遺構 出土遺物

13号溝状遺構（第124図、図版7-50）

〈位 置〉A・B-8・9・10・11・12グリットに位置する。東側に31号土坑・14・15・16・18号溝状遺構、西側に12号溝状遺構・21号住居址が存在する。北側端部で8号溝状遺構、中央部やや北寄りで32号土坑・19号溝状遺構、南側端部で20号住居址とそれぞれ重複している。新旧関係は32号土坑・8・19号溝状遺構→13号溝状遺構の順で新しい。20号住居址との新旧関係は重複している地点が攪乱されており、断面観察が判然としなため不明である。また、北東側は調査区外へ延びているため未調査である。

〈形状・規模〉北東-南西方向に直線的に走る細長い溝状遺構で、南西側（20号住居址と重複している部分）は攪乱され、北東側は未調査のためそれぞれ不明である。規模は現長18m・幅28-58cm・底幅14-32cm・最深部14cmを測り、断面形は皿状を呈している。

〈底・壁〉底はやや起伏がみられる。遺存している壁は緩やかに立ち上がる。北東-南西方向の溝底比高差は10cm程であり、南西側にやや傾斜している。

〈覆 土〉覆土は暗茶褐色土の単一層である。

〈出土遺物〉遺物は土師器片が数点出土しているが、細片のため図示できたのは土師器の甕形土器の口縁部片（No.1）1点のみである。

14号溝状遺構（第123図）

〈位 置〉A-9グリットに位置する。西側に13号溝状遺構、南側に31号土坑とほぼ平行するよううに15・16・18号溝状遺構が存在する。北東側は調査区外へ延びているため未調査である。

〈形状・規模〉南西-北東方向に直線的に走る細い溝状遺構で、北東側は未調査のため不明である。規模は現長1.93m・幅29cm・底幅24cm・最深部8cmを測る。

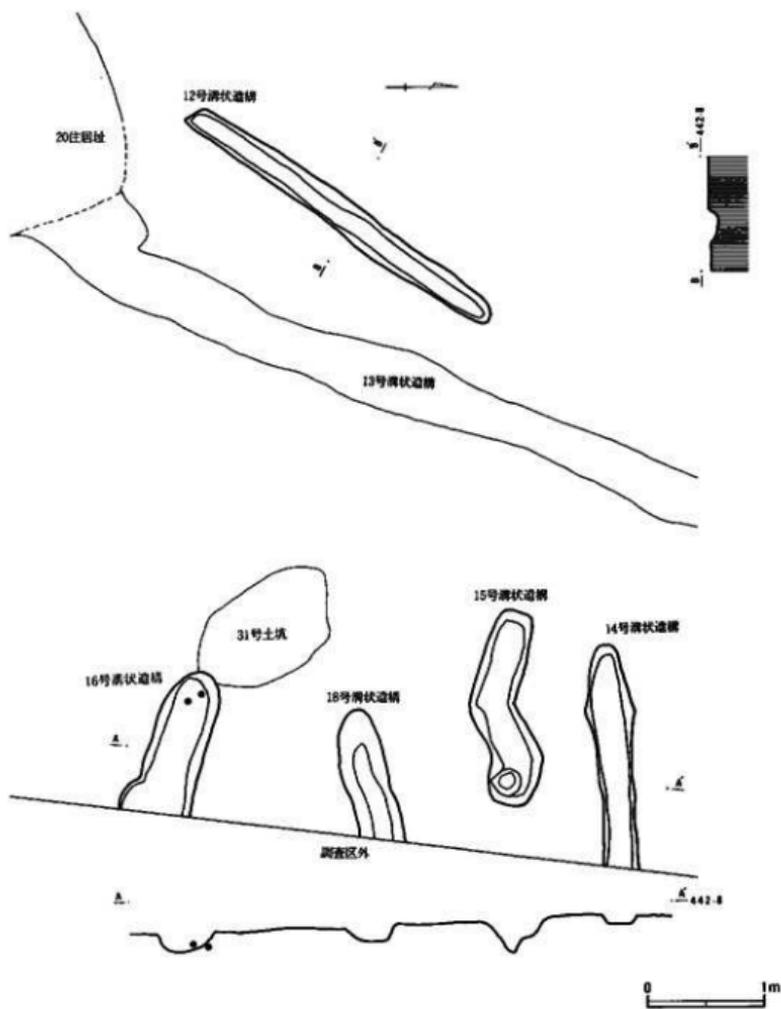
〈底・壁〉底はやや起伏があり、壁は各壁とも緩やかに立ち上がる。

〈覆 土〉覆土は暗茶褐色土の単一層である。

〈出土遺物〉遺物は検出されていない。

15号溝状遺構（第123図）

〈位 置〉A-9グリットに位置する。北側に14号溝状遺構、西側に13号溝状遺構、南側に31号土坑とほぼ平行するよううに16・18号溝状遺構が存在する。



第123图 12·14·15·16·18号溝状遺構 平面·断面·遺物分布

- <形状・規模>東-西方向に走る溝状遺構で、中央部がやや南側に「くの字状」に屈曲している。
規模は長さ1.69m・幅39cm・底幅22cm・底面までの最深部18cmを測る。
- <底・壁>底はやや起伏があり、東端部に不整形のピットがある。規模は長軸25cm・短軸24cm・底面からの最深部14cmである。壁は各壁とも垂直気味に立ち上がる。
- <覆土>覆土は暗茶褐色土の単一層である。
- <出土遺物>遺物は検出されていない。

16号溝状遺構（第123図）

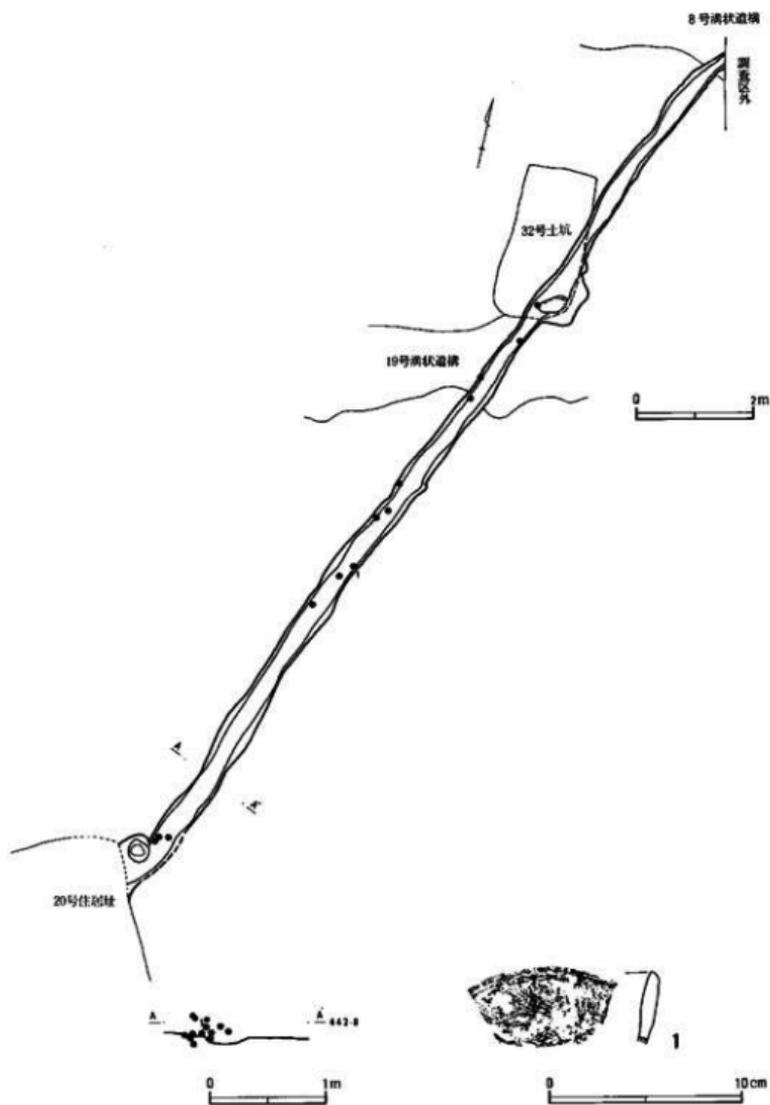
- <位置>A-8グリットに位置する。北側に平行するように14・15・18号溝状遺構、西側に13号溝状遺構が存在する。西側端部で31号土坑と重複しており、新旧関係は31号土坑→16号溝状遺構の順で新しい。東側は調査区外へ延びているため未調査である。
- <形状・規模>東-西方向に走る溝状遺構で、東側の一部が南側に膨らみを持つ弧状を呈している。東側は未調査のため不明である。規模は現長1.29m・幅49cm・底幅30cm・最深部19cmを測り、断面形は皿状を呈している。
- <底・壁>底はやや起伏があり、壁は各壁とも緩やかに立ち上がる。
- <覆土>覆土は暗茶褐色土の単一層である。
- <出土遺物>遺物は土師器片が2点検出されているが、細片のため図示できなかった。

18号溝状遺構（第123図）

- <位置>A-8グリットに位置する。北側に平行するように14・15号溝状遺構、南側に16号溝状遺構、西側に13号溝状遺構が存在する。東側は調査区外へ延びているため未調査である。
- <形状・規模>南西-北東方向に直線的に走る溝状遺構で、北東側は未調査のため不明である。規模は現長1.15m・幅40cm・底幅16cm・最深部16cmを測る。
- <底・壁>底はやや起伏がみられ、断面形は皿状を呈している。壁は各壁とも緩やかに立ち上がる。
- <覆土>覆土は暗茶褐色土の単一層である。
- <出土遺物>遺物は検出されていない。

19号溝状遺構（第126図）

- <位置>A・B・C-9・10グリットに位置する。北側に8号溝状遺構、南側に21号住居址・12号溝状遺構が存在する。南西側で36号土坑、北東側で32号土坑・13号溝状遺構と重複している。新旧関係は19号溝状遺構→32号土坑→13号溝状遺構、36号土坑→19号溝状遺構の順で新しい。東側端部は削平され、明確な形状をとどめていない。西側は調査区外へ延びているため未調査である。



第124图 13号溝状遺構 平面・断面・遺物分布 出土遺物

<形状・規模>南西-北東方向に直線的に走る溝状遺構で、北東および南西西端部は既記したように不明である。規模は現長11.1m・幅0.6~1.72m・底幅0.39~1.15m・最深部23cmを測る。

<底・壁>底は起伏が激しく、多数のピットが検出された。これらのピットは規則性がなく、砂礫の流れ込みにより形成されたものと考えられる。南西-北東方向の溝底比高差は20cm程であり、北東側にやや傾斜している。

<覆土>覆土は砂礫を多量に混入している暗茶褐色土の単一層であり、南西から北東方向へ流れ込んでいる。

<出土遺物>遺物は底面直上から土師器破片が流れ込んでいるように点在して出土している。条痕文系の変形土器の破片(№2)が1点出土している。

20号溝状遺構(第121図)

<位置>B-5グリットに位置する。西側に23溝状遺構、東側に平行して9号溝状遺構、11号溝状遺構、南側に10号溝状遺構が存在する。中央部やや北よりで21号溝状遺構と重複している。新旧関係は覆土の層位および遺構の遺存状況より、21号溝状遺構→20号溝状遺構の順で新しい。また、東壁側の21号溝状遺構と重複する壁面において焼土が確認されており、これは本溝状遺構と重複している22号住居地の炉に伴うものであることが後に判明した。

<形状・規模>南-北方向に走り、中央部から南側に移行するにしたがって狭くなる形状を呈している。規模は長さ6.6m・最大幅1.7m・底最大幅1.48m・最深部64cmを測る。

<底・壁>底は比較的平坦である。東壁および西壁側に一段高いテラス部(底面との比高差がそれぞれ40cmを測る)が存在する。壁は各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土>覆土は暗茶褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

21号溝状遺構(第121図)

<位置>B・C-5グリットに位置する。西側に23溝状遺構、東側に11号溝状遺構、南側に平行して10号溝状遺構が存在する。中央部やや西よりで20号溝状遺構、東側で9号溝状遺構と重複している。20号溝状遺構との新旧関係は覆土の層位および遺構の遺存状況より、21号溝状遺構→20号溝状遺構の順で新しく、9号溝状遺構との新旧関係は断面観察が判然としないため不明である。中央部やや東よりに焼土が確認されており、これは本溝状遺構と重複している22号住居地の炉に伴うものであることが後に判明した。

<形状・規模>9号溝状遺構および20号溝状遺構と重複しているために明確なプランはつかめないが遺存部より東-西方向に走る細い溝状遺構になると思われる。規模は現長4.7m・幅0.76m・底幅53cm・最深部46cmを測る。

<底・壁>底は平坦である。壁は遺存部ではほぼ垂直に立ち上がる。

<覆土>覆土は暗茶褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

22号溝状遺構（第125図、第28表）

<位 置>C-6・7グリットに位置する。南側に22号住居址・23号溝状遺構、北側に21号住居址が存在する。東側で20号住居址と重複している。20号住居址との新旧関係は覆土の層位および遺構の遺存状況より、20号住居址→22号溝状遺構の順で新しい。西側は調査区外へ延びているため未調査である。

<形状・規模>形状は西側が調査区外へ延びているために明確なプランはつかめないが、現存部では1条の溝状遺構から3条に枝分かれする形状を呈している。現長（東西方向）3.1m・幅25～55cm・底幅5～36cm・最深度25cmを測る。

<底・壁>底は起伏が激しく荒れている。壁は比較的急激な立ち上がりを見せている。

<覆 土>覆土は暗茶褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は縄文時代中期の口縁部の破片（№1）が出土している。

23号溝状遺構（第125図）

<位 置>C-5グリットに位置する。北側に22号溝状遺構、東側に9・10・11・20・21号溝状遺構・22号住居址が存在する。

<形状・規模>北-南方向に走る溝状遺構で、中央部で東側に緩やかな弧状を描いている。規模は長さ（直線距離）2.3m・幅27～36cm・底幅12～24cm・最深度17cmを測る。

<底・壁>底は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

<覆 土>覆土は暗茶褐色土の単一層である。

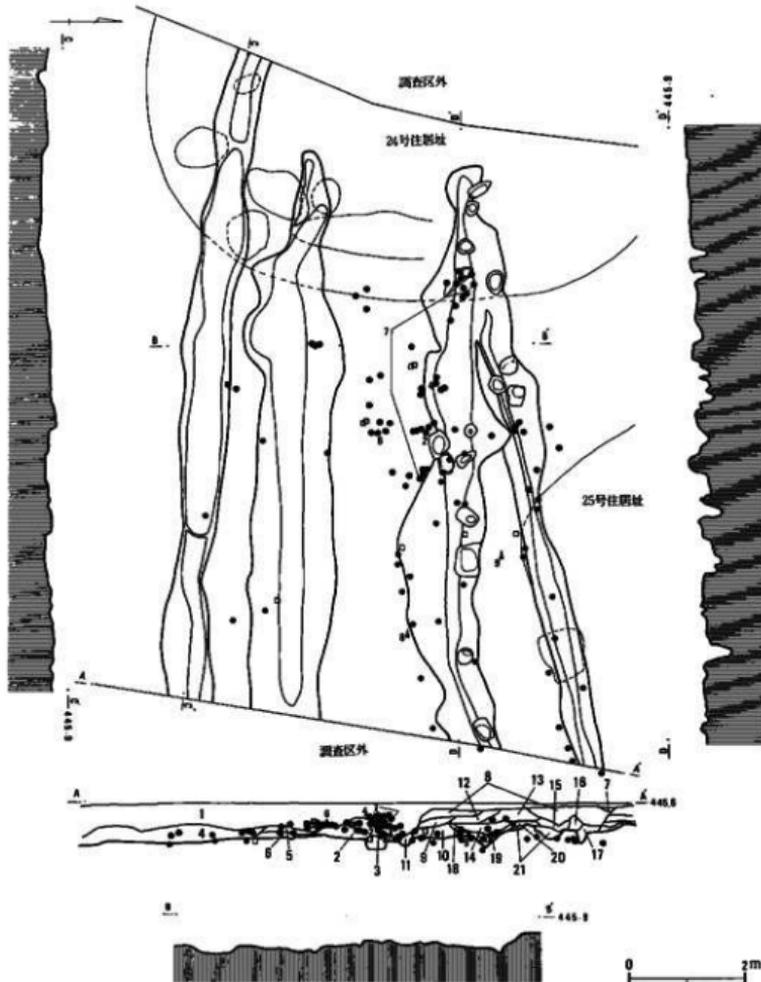
<出土遺物>遺物は検出されていない。

24号溝状遺構（第126・127図、第63・81表、図版4-25、13-19、17-32～34）

<位 置>A・B・C-23・24グリットに位置する。北側に72号土坑・25号溝状遺構が存在する。調査区内を東-西方向に直線的に走るが、東側および西側は共に調査区外へ延びているため未調査である。西側で24号住居址、東側で25号住居址と重複する。新旧関係は覆土の層位および残存部の状況等から24・25号住居址→24号溝状遺構の順で新しくなる。

<形状・規模>本溝状遺構は底面に非常に多くの小ピットおよび3条の筋状の流路の痕跡が検出されており、かなり大規模で激しい砂礫の流れ込みがあったようである。また、上面（上場および各壁）は耕作による攪乱を受け、遺存状況は悪い。現長11.5m・遺存部の底幅4.7～7.7m・最深度32cmを測る。

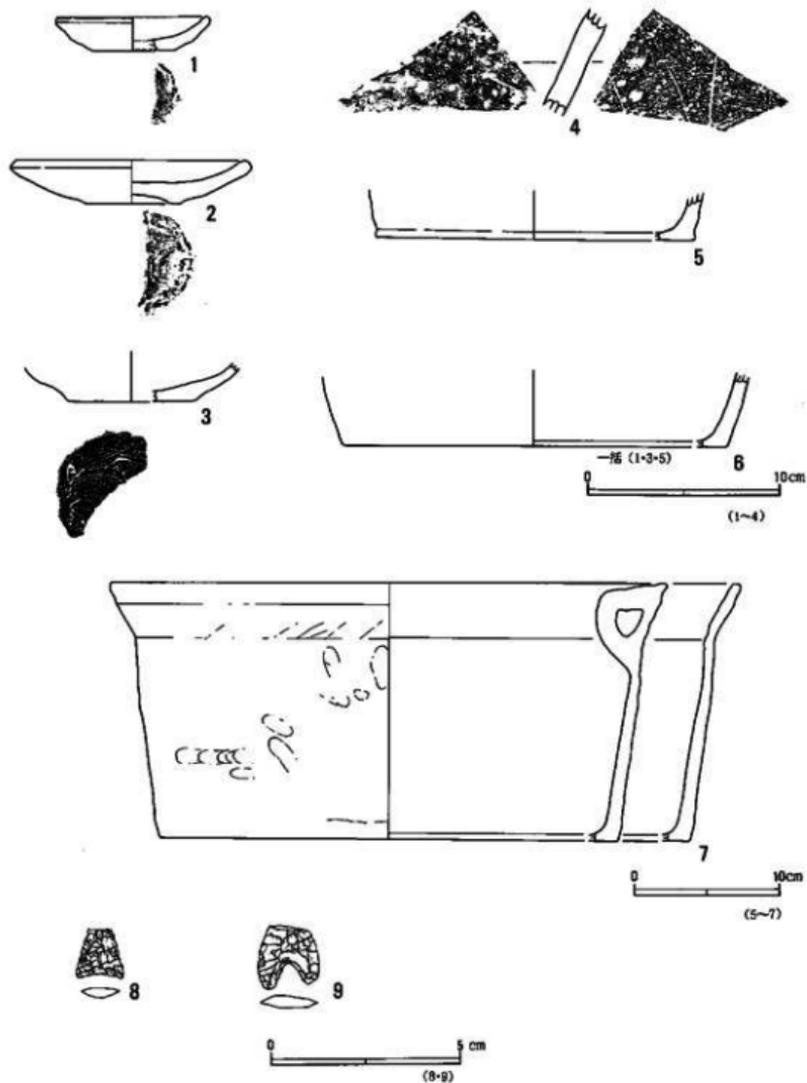
<底・壁>底は既記したように氾濫源のような状況を呈しており、起伏が激しく多数のピットが検出され、10cm大の礫も底部に点在している。また24号住居址の床面をかなり破壊している。壁は比較的残りの良い北壁で緩やかに立ち上がり、南壁はほとんど遺存していない状況である。東-西方向の溝底比高差は15cm程であり、東側に傾斜している。



24号溝状遺構土層説明

層	色	質	物	説
1	暗褐色		耕作土。(基本層中 1層)	
2	褐色		ローム粒子・小礫(φ3-5cm)を含む。しまり有。	
3	黄褐色		ロームブロックを含む。粘性質。しまり有。	
4	暗褐色		小礫(φ3-5cm)を多量に含む。ロームブロックを少量含む。粘性質。	
5	暗褐色		小礫(φ3-5cm)。粘土を含む。しまり有。	
6	褐色		ローム粒子を多量に含む。粘性質。しまり有。	
7	黄褐色		ロームブロックを含む。しまりに欠ける。	
8	暗褐色		ローム粒子を少量含む。	
9	褐色		小礫(φ3-5cm)・ブロック状の土を含む。ローム粒子を少量含む。	
10	褐色		ローム粒子・粘土を含む。しまり有。	
11	黄褐色		ローム粒子を多く含む。しまりに欠ける。	
12	黄褐色		しまった土をブロック状に含む。	
13	黄褐色		しまり有。	
14	暗褐色		ローム粒子を含む。小礫(φ3-5cm)を少量含む。しまりに欠ける。	
15	黄褐色		ローム粒子を少量含む。粘性質。	
16	褐色		ローム粒子を含む。	
17	黄褐色		ローム片層状。褐色土をブロック状に含む。しまりに欠ける。	
18	黄褐色		小礫(φ3-5cm)。ローム粒子を含む。	
19	黄褐色		砂質。ローム粒子を少量含む。しまり有。	
20	褐色		ローム粒子・ブロック状にしまった土を含む。	
21	黄褐色		ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。粘性質。	

第126図 24号溝状遺構 平面・土層・断面・遺物分布



第127図 24号溝状遺構 出土遺物

<覆 土>覆土は20層に分けられる。上層は擾乱により破壊されており、下層は小礫（径5～10mm）を含む層が検出されている。覆土中に検出されている焼土は重複している24号住居址に帰属するものであろう。

<出土遺物>遺物は縄文時代の土器片から中世の土師質土器片が覆土中よりまとまって出土している。図示できたのは中世の遺物のみである。皿形土器が3点(Na1・2・3)、内耳土器が3点(Na5・6・7)出土している。Na7の内耳土器は覆土上層に比較的まとまって出土しており接合資料である。この他に掘り鉢(Na4)が1点出土している。これらの遺物は西側の発掘区外より流れ込んだものと思われる。

25号溝状遺構(第128図、第49表、図版7-51)

<位置>A・B・C・Z-24・25・26・27・28・29・30・31グリットに位置する。本溝状遺構の中央部付近東側に87・88・89・90号土坑・13号地下式竈(旧91号土坑)・92・93号土坑、西側に39・40・41・58号土坑・2号地下式竈(旧73号土坑)等が集中して存在している。また多数の遺構と重複しており、北側から27号溝状遺構・96号土坑・26号溝状遺構・94・49・38・37号土坑・24号住居址と重複している。新旧関係は24号住居址→25号溝状遺構→27号溝状遺構・96号土坑・26号溝状遺構・94号土坑・49号溝状遺構・37・38号土坑の順で新しい。南西側の24号住居址と重複している部分は調査時点で新旧関係が判然とせず、24号住居址より掘り下げたため遺存していない。また、北東側は調査区外へ延びているため未調査である。

<形状・規模>調査区内を南西-北東方向に直線的に走る溝状遺構である。規模は現長28m・幅0.8~1.4m・底幅60~80cm・最深部50cmを測る。

<底・壁>底は比較的平坦である。北西壁および南東壁は遺存状況が良好であり、ほぼ垂直に立ち上がる。北東-南西方向の溝底比高差は17cm程であり、南西から北東にかけて緩やかに傾斜している。

<覆土>覆土は11層に分けられる。基本的には上層の暗褐色土、中層の砂粒子混じりの暗褐色土、下層のローム粒子混じりの暗褐色土の3層に大別できる。まず、下層の土が堆積し、次に中層の砂粒子混じりの土が流れ込み、最後に上層の土が堆積し、埋没したものと思われる。

<出土遺物>遺物は覆土内より土師器破片が数点出土しているが細片が多く、図示し得たのは皿型土器の破片(Na1)および壺型土器の底部破片(Na2)のみである。

26号溝状遺構(第129図、図版7-51)

<位置>A・B・C-29グリットに位置する。北側に42・95・96号土坑・4号集石・3号地下式竈(旧74号土坑)、平行して27号溝状遺構、南側に39・40・41・45・51・57・58号土坑、平行して30号溝状遺構が存在する。南壁側中央部で2号地下式竈(旧73号土坑)、中央部やや東よりで25号溝状遺構と重複する。新旧関係は覆土の層位および残存部の状況等から2号地下式竈→26号溝状遺構、25号溝状遺構→26号溝状遺構の順で新しくなる。東側および西側は共に調査区外へ延びているため未調査である。

<形状・規模>形状は調査区外へ延びており全体の形状は把握できないが、調査区内において

は東-西方向に直線的に走る。規模は現長11.3m・幅0.64~1.1m・底幅12~30cm・最深部67cmを測る。

<底・壁>中央部より西側では底幅が広くテラス状に2段に分かれ、緩やかな起伏がみられる。テラス部の比高差は18cm程である。東側では底幅が狭く、激しい起伏が検出され、壁の立ち上がりは急傾斜を呈している。東-西方向の溝底比高差は50cm程であり、東側に徐々に傾斜している。

<覆土>覆土は4層に分けられる(B-B'地点)。各層において多量のローム粒子およびロームブロックの混入がみられる。砂礫層は確認されていない。

<出土遺物>遺物は土師質土器の細片が少量出土している。

27号溝状遺構(第129図、第64表、図版7-51・17-32)

<位置>A・B・C・Z-29・30グリットに位置する。北側に43号土坑・4号地下式墳(旧75号土坑)・52・53・54号土坑、平行して31号溝状遺構、南側に42・95・96号土坑・4号集石・3号地下式墳(旧74号土坑)が存在する。東側で25号溝状遺構と重複している。新旧関係は覆土の層位および残存部の状況等から25号溝状遺構→27号溝状遺構の順で新しい。東側および西側は共に調査区外へ延びているため未調査である。

<形状・規模>調査区外へ延びているために全体の形状は把握できない。26号溝状遺構に平行して調査区内を東-西方向に直線的に走るが、26号溝状遺構に比較して壁および底面は荒れている。規模は現長11.16m・幅0.8~1.7m・底幅10~40cm・最深部51cmを測る。

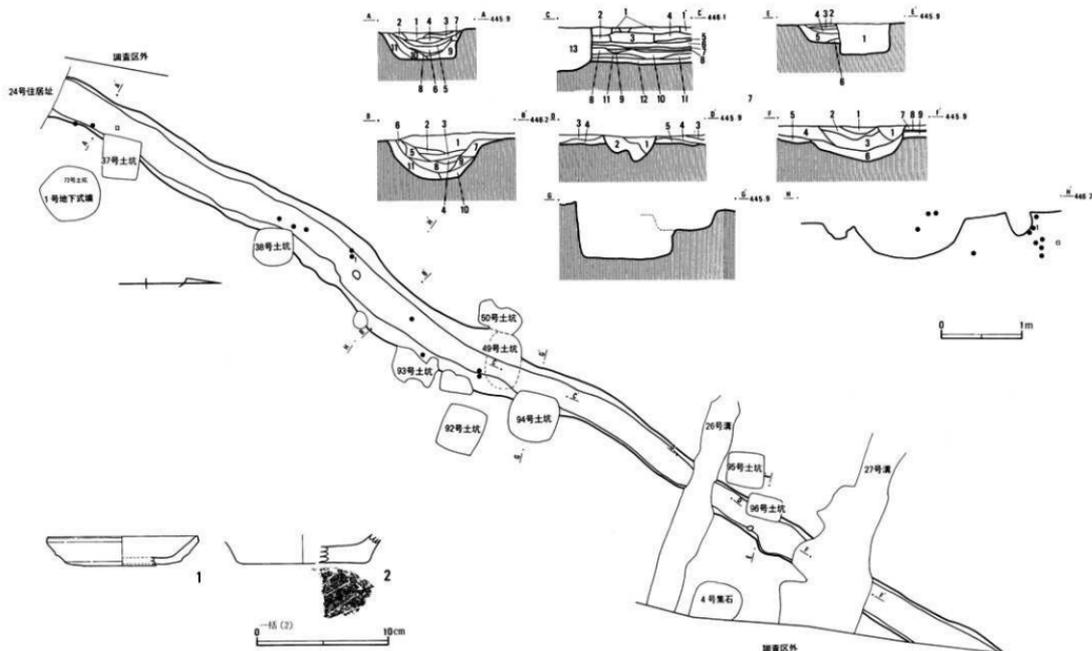
<底・壁>底は起伏が激しく数条に挟られており、径60cm程のピットが散在して検出された。壁は北壁が比較的垂直に立ち上がり、南壁は基本的には緩やかな立ち上りを呈するが、かなり激しく荒れており遺存状況は悪い。これらの底部および壁にみられるピットは規則性がなく、砂礫等の流れ込みにより形成されたものと考えられる。東-西方向の溝底比高差は62cm程であり、西から東に向けて徐々に傾斜している。

<覆土>覆土は4層に分けられる(E-E'地点)。各層において26号溝状遺構同様にローム粒子およびロームブロックの混入がみられ、また第6層において炭化物が検出されている。また砂礫層は確認されていない。

<出土遺物>遺物は土師質土器片が多く出土しており、これらは流れ込みによるものと思われる。

28号溝状遺構(第130図)

<位置>A・B・C・Z-32・33グリットに位置する。北側に48・55・56・98号土坑・5号地下式墳(旧76号土坑)、南側に44・45・46・47・53・54・59・82号土坑が存在している。中央やや西よりで29号溝状遺構・1号掘立柱建物址、東側で97号土坑と重複している。これらの遺構との新旧関係は断面観察が判然としなため不明である。東側および西側は共に調査区外へ延びているため未調査である。



25号溝状遺構 (A-A') 土層説明

層色	調	特	説
1	黄褐色		しまり有。粘粒に欠ける。
2	暗褐色		砂粒子を少量含む。しまり有。粘粒中～強。
3	暗褐色		砂粒子を多量に含む。しまり有。粘粒中～強。
4	暗褐色		腐植状。砂粒子を多量に含む。しまり有。粘粒中～強。
5	暗褐色		砂粒子を多量に含む。しまり有。粘粒有。
6	黄褐色		ローム粒子を含む。しまり有。粘粒中～強。
7	黄褐色		しまり有。粘粒有。
8	黄褐色		ロームブロックを含む。しまり有。粘粒有。
9	黄褐色		ロームブロックを含む。しまり有。粘粒有。
10	黄褐色		ロームブロックを含む。しまり有。粘粒有。
11	黄褐色		湖沼土。しまり有。粘粒中～強。

25号溝状遺構 (B-B') 土層説明

層色	調	特	説
1	暗褐色		ローム粒子を少量含む。しまり中～強。粘粒弱。
2	暗褐色		腐植状の黄褐色土粒子を含む。しまり中～強。粘粒に欠ける。
3	暗褐色		砂土を多量に含む。しまり中～強。粘粒に欠ける。
4	暗褐色		粘土を多量。ローム粒子を少量含む。しまり有。粘粒に欠ける。
5	暗褐色		しまり有。粘粒中～強。
6	黄褐色		ローム粒子を少量含む。しまり有。粘粒中～強。
7	黄褐色		小石を少量含む。しまり有。粘粒有。
8	黄		ローム粒子を少量含む。しまり有。粘粒有。
9	暗褐色		ローム粒子を少量含む。しまり有。粘粒有。
10	暗褐色		ローム粒子を少量含む。しまり有。粘粒有。
11	暗褐色		ローム粒子を少量含む。しまり有。粘粒に欠ける。

25号溝状遺構 (C-C') 土層説明

層色	調	特	説
1	黄褐色		砂質土・ローム粒子を少量含む。
2	黄		中～強粘粒。しまり有。
3	黄褐色		黄褐色土ブロックを腐植状に含む。しまりに欠ける。
4	黄褐色		黄褐色土粒子・ローム粒子が混在する。中～強粘。粘粒に欠ける。
5	黄		中～強粘粒。しまり有。
6	黄褐色		砂質層。砂を中心とする(φ2~8mm)を多量に含む。ローム粒子を少量含む。
7	黄褐色		砂質。ローム粒子を含む。
8	暗褐色		砂質。ローム粒子を多量に含む。しまり有。
9	暗褐色		砂質層。6層土の中～強粘い層を多量に含む。
10	黄		砂質。ローム粒子を多量に含む。
11	黄褐色		ローム粒子で構成される。黄褐色土を少量含む。粘粒有。
12	黄		粘土・ローム粒子を腐植状に含む。しまり有。
13	暗褐色		ローム粒子(φ5~15mm)を腐植状に含む。しまりに欠ける。

※13層は、49号土坑覆土。

25号溝状遺構 (D-D') 土層説明

層色	調	特	説
1	暗褐色		黄褐色土粒子を含む。しまり有。粘粒中～強。
2	暗褐色		ローム粒子を多量に含む。しまり有。粘粒中～強。
3	暗褐色		土の粒子が細かい。しまり有。粘粒中～強。
4	暗褐色		ローム粒子を腐植状に少量含む。しまり有。粘粒中～強。
5	暗褐色		ローム粒子を腐植状に少量含む。しまり有。粘粒中～強。

※1, 2層は、27号溝状遺構覆土。

25号溝状遺構 (E-E') 土層説明

層色	調	特	説
1	黄		ローム粒子・黄褐色土ブロックを含む。
2	黄		中～強粘。
3	黄褐色		砂質。ローム粒子を少量含む。
4	黄		粘粒が混在する。しまり有。粘粒中～強。
5	黄褐色		ローム粒子を少量含む。黄褐色土を少量含む。
6	黄		ローム粒子を含む。しまり有。

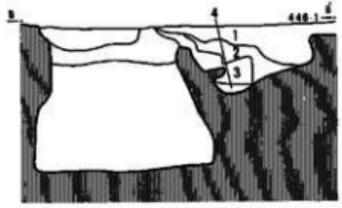
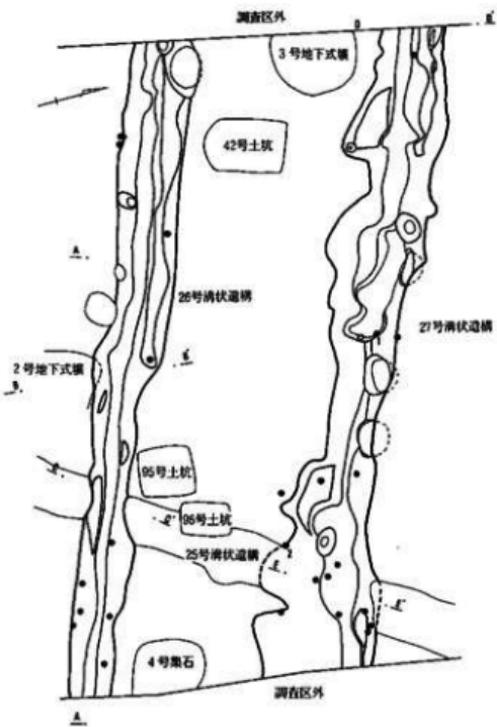
※1層は、26号土坑覆土。

25号溝状遺構 (F-F') 土層説明

層色	調	特	説
1	黄		ローム粒子を含む。
2	黄		1層より中～強い。ローム粒子を含む。
3	黄褐色		黄褐色土ブロック・ロームが混在する。
4	黄		ローム粒子・腐植状を含む。
5	黄		4層よりしまり有。
6	黄褐色		腐植状を多量に含む。黄褐色土ブロック・ローム・ロームブロックを腐植状に含む。
7	黄褐色		ローム粒子を含む。腐植物を少量含む。中～強粘。
8	黄		粘粒層。砂(φ1mm)有。
9	黄		ローム粒子を少量含む。

※1~6層は、27号溝状遺構覆土。

第128図 25号溝状遺構 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物



26号溝状遺構 (B-B') 土層説明

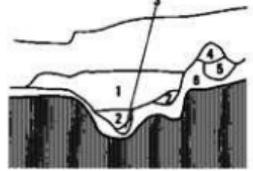
層	色	調	特	備
1	暗褐色		ローム粒子 (φ5~10mm) を混雑に含む。しまりに欠ける。	
2	黄		ローム再構築か。しまりや中散。粘土質。	
3	暗褐色		黒色土をプロック状に混雑に含む。	
4	暗		黒色土粒子 (φ5mm) を含む。しまりに欠ける。	
			3層とロームが混在する。粘土質。しまりに欠ける。	



26号溝状遺構 (C-C') 土層説明

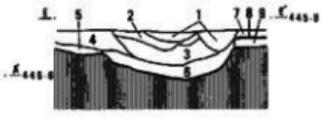
層	色	調	特	備
1	暗褐色		黒色土粒子を含む。粘土や中散。しまり有。	
2	暗褐色		ローム粒子を多量に混入。粘土や中散。しまり有。	

446-3

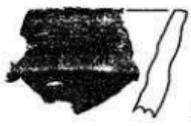
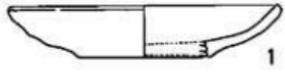


27号溝状遺構 (D-D') 土層説明

層	色	調	特	備
1	暗褐色		ローム粒子を少量含む。粘粒・しまりや中散。	
2	暗褐色		ロームプロックを少量含む。粘粒質。しまりや中散。	
3	暗褐色		ロームプロックを多量に含む。粘粒・しまりに欠ける。	
4	暗褐色		ロームプロックを多量に含む。粘粒・しまりに欠ける。	
5	暗褐色		ローム粒子を少量含む。	
6	暗褐色		ローム再構築。	



0 2m



27号溝状遺構 (E-E') 土層説明

層	色	調	特	備
1	暗褐色		ローム粒子を含む。	
2	暗褐色		1層よりローム中散し。ローム粒子を含む。	
3	暗褐色		ロームプロックを主体とし、黒色土をプロック状に含む。	
4	暗褐色		ローム粒子・炭化物を含む。	
5	暗褐色		炭化物を多量に含む。ローム・黒色土がプロック状に混在する。	
6	暗褐色		中散粒。ローム粒子を含む。炭化物を少量含む。	
7	暗褐色		砂層。砂 (φ1mm)。	
8	暗褐色		ローム粒子を少量含む。	

※ 4、5、7~9層は、26号溝状遺構覆土。

0 1m

第129図 26・27号溝状遺構 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

<形状・規模>調査区外へ延びているために全体的な形状は把握できないが、26・27号溝状遺構と同様に東-西方向に直線的に細く走っている。現長10.74m・幅0.45~1.08m・底幅23~75cm・最深部31cmを測る。

<底・壁>底は起伏が激しく、小ピットが散在している。27号溝状遺構と同様に北壁がほぼ垂直に立ち上がり、南壁がかなり激しく荒れている状況である。東-西方向の溝底比高差は53cm程であり、東側に向けて徐々に傾いている。

<覆土>覆土は黄褐色土の単一層であり、ロームブロックが混入している。砂礫層は確認されていない。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

29号溝状遺構（第130図、第65表）

<位 置>B・C-33・34グリットに位置する。北側に32号溝状遺構、南側に44・45・46・47・53・54・59・82号土坑、東側に48・55・98号土坑・5号地下式壙（旧76号土坑）・84号土坑、西側に56号土坑が存在している。中央部で1・2号掘立柱建物址、南側端部で28号溝状遺構と重複している。新旧関係は断面観察が判然としないため不明である。周辺には多くのピット群が検出されており本溝状遺構との重複も確認され、また中央やや東側は攪乱されており、全体的に遺構の残存状況は良好とは言えない。

<形状・規模>北西-南東方向にほぼ直線的に走る細い溝状遺構である。規模は現長6.6m・幅17cm・底幅32cm・最深部10cmを測る。

<底・壁>底は所々に起伏がある。また中央部やや西側で一段の段差がみられ、比高差は17cmである。東壁および西壁はほぼ垂直に立ち上がる。北-南方向の溝底比高差は55cm程であり、南側に向けて徐々に傾斜している。

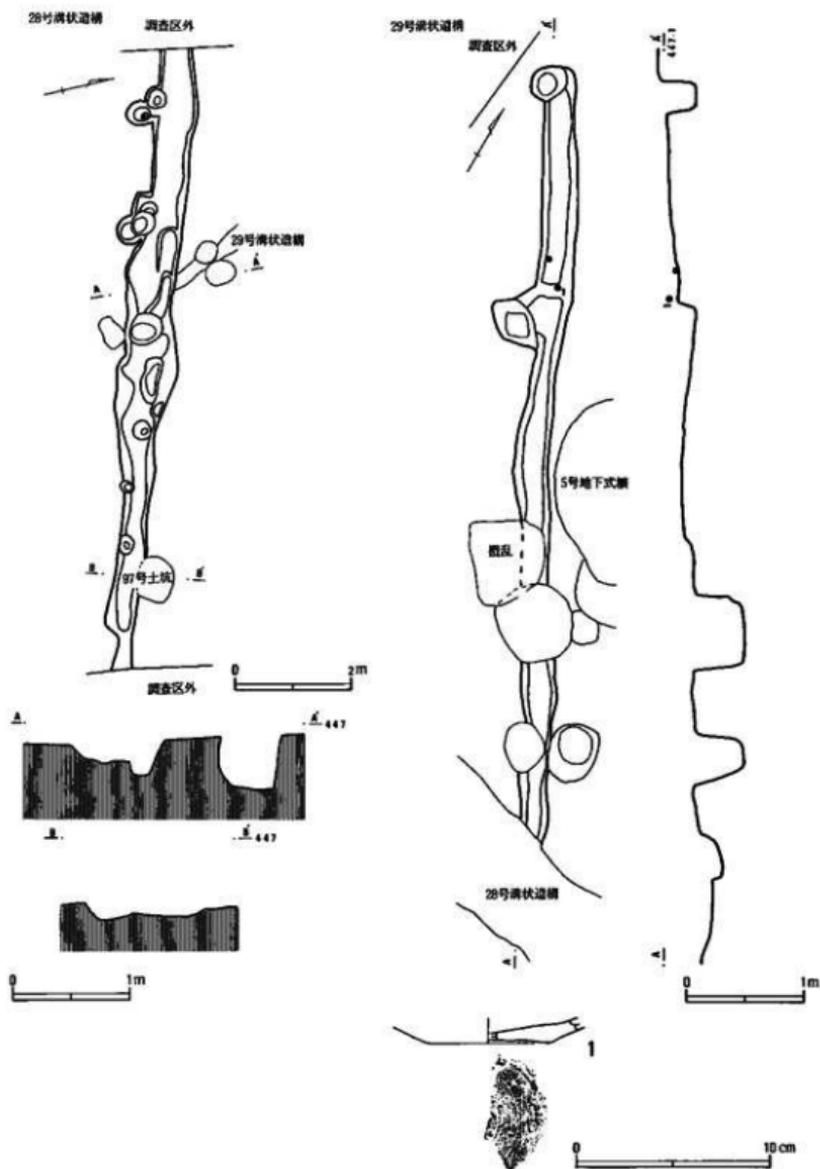
<覆土>覆土は暗褐色土の単一層である。砂礫の混入は確認されていない。

<出土遺物>遺物は覆土内より土師質土器片が2点出土しており、№1の皿形土器の底面に糸切り痕がみられる。

30号溝状遺構（第131図）

<位 置>B・C-28グリットに位置する。北側に39・41・51号土坑・2号地下式壙（旧73号土坑）、平行して26・27号溝状遺構が存在し、南側に40号土坑・1号地下式壙（旧72号土坑）・ピット群、東側に25号溝状遺構・94号土坑が存在している。東側に58号土坑、西側で57号土坑と重複している。新旧関係は断面観察が判然としないため不明である。

<形状・規模>重複している部分は形状が不明であり途切れている。他の遺存部は58号土坑と57号土坑とを結ぶように東-西方向に走り、中央部やや東寄りで屈曲している。規模は現長2.8m・幅20~45cm・底幅10~30cm・最深部32cmを測る。



第130图 28・29号溝状遺構 平面・断面・遺物分布 出土遺物

<底・壁>底は中央部やや東よりの屈曲部が平坦で最も浅く、他の東側および西側は屈曲部より一段下がって平坦面をなしている。遺存している壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

<覆土>覆土は暗褐色土の単一層である。砂礫の混入は確認されていない。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

31号溝状遺構 (第131図)

<位置>C-31・32グリットに位置する。北側に53号土坑、平行して28号溝状遺構、南側に4号地下式塋(旧75号土坑)・東側に52・54号土坑が存在する。西側は調査区外へ延びているために未調査である。また、本溝状遺構の周辺は耕作による攪乱の影響を受けており、遺構の残存状況は悪い。

<形状・規模>西側が調査区外へ延びているために全体の形状は明確ではないが、現存部においては東-西方向に直線的に細く走る。現長2.63m・幅31cm・底幅13cm・底面までの最深度12cmを測る。

<底・壁>底は起伏が激しく、中央部に不整形のピットが存在する。規模は長軸35cm・短軸32cm・底面からの最深度43cmを測る。壁は上面が耕作により削平され遺存状況が悪いために、ほぼ垂直に立ち上がるが浅い。

<覆土>覆土は暗褐色土の単一層である。砂礫の混入は確認されていない。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

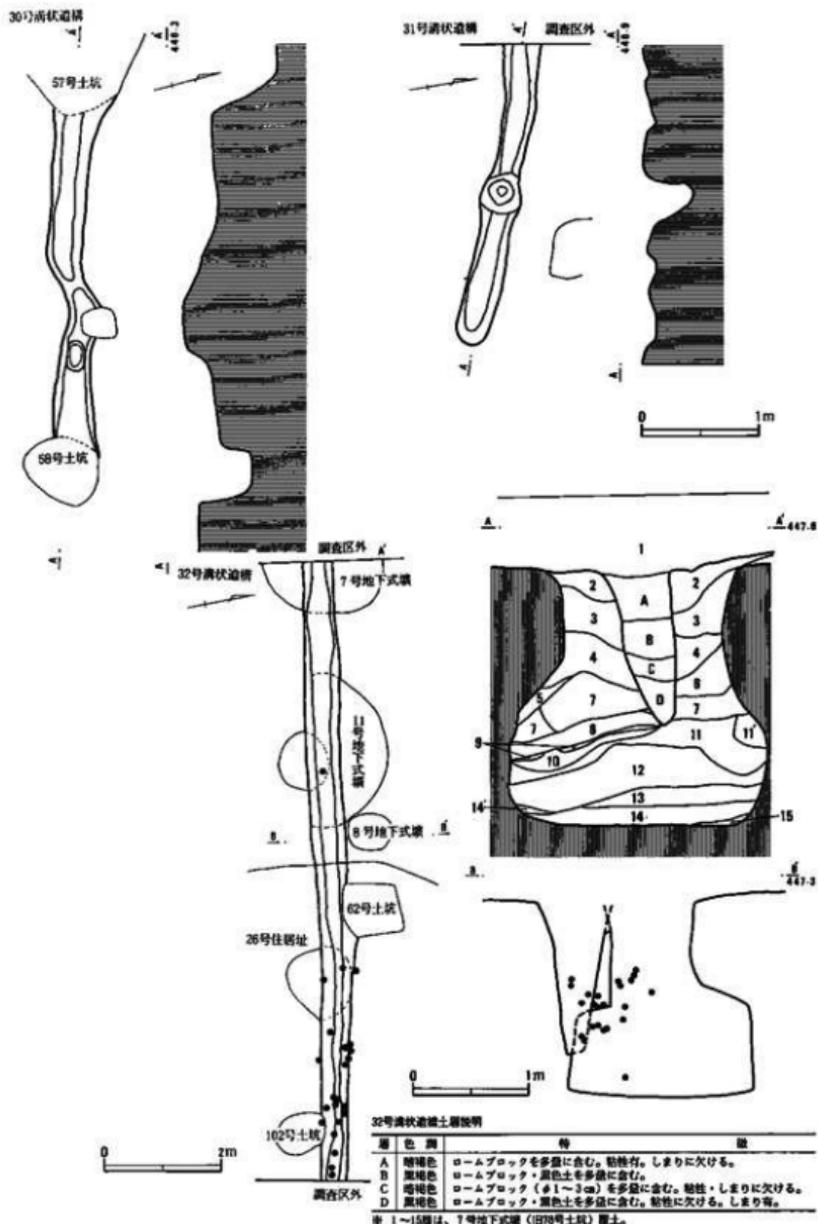
32号溝状遺構 (第131図、図版7-52)

<位置>A・B・C・Z-36グリットに位置する。東側および西側は共に調査区外へ延びているため未調査である。北側に64・65・66・67・68・103・104・105・106号土坑・9号地下式塋(旧80号土坑)・12号地下式塋(旧85号土坑)、南側に60・61・63・101・102号土坑・6号地下式塋(旧77号土坑)・33号溝状遺構・1・2号掘立柱建物址が存在する。西側に7号地下式塋(旧78号土坑)、中央部に62号土坑・8号地下式塋(旧79号土坑)・11号地下式塋(旧83号土坑)、東側に26号住居址・102号土坑と重複している。新旧関係は覆土の層位および遺構の遺存状況より26号住居址・62・102号土坑・7・8・11号地下式塋→32号溝状遺構の順で新しい。

<形状・規模>形状は調査区外へ延びているために全体は把握できないが、東-西方向に直線的に走る溝状遺構である。規模は現長10.7m・幅44~59cm・底幅10~42cm・最深度1.3mを測る。

<底・壁>底は硬くしまり、平坦である。壁は垂直に立ち上がる。東-西方向の溝底比高差は1m程であり、東側に向けて徐々に傾きを強めながら傾斜している。

<覆土>覆土は4層に分けられる。ロームブロックが多量に含まれる。砂礫の流れ込みは確認されていない。



第131図 30・31・32号溝状遺構 平面・土層・断面・遺物分布

<出土遺物>遺物は覆土内下層から土師器片が少量出土しており、細片のため図示し得るものはなかった。

33号溝状遺構（第132図）

<位 置>B-36グリットに位置する。北側に32号溝状遺構・11号地下式墳（旧83号土坑）、南側に63号土坑・6号地下式墳（旧77号土坑）・1・2号掘立柱建物址、東側に26号住居址が存在する。

<形状・規模>東-西方向に走り、僅かに南側に膨らむ弧状を描いている。規模は長さ2.5m・幅29cm・底幅20cm・最深部14cmを測る。

<底・壁>底は比較的平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

<覆 土>覆土は暗褐色土の単一層である。砂礫の流れ込みは確認されていない。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

34号溝状遺構（第132図）

<位 置>B-33・34グリットに位置する。北側に60・61・63号土坑・6号地下式墳（旧77号土坑）、南側に48・55・98号土坑・5号地下式墳（旧76号土坑）・28号溝状遺構・1号掘立柱建物址、東側に26号住居址・100号土坑が存在する。周辺はピット群があり、本遺構とも重複しており、破壊されている。

<形状・規模>南-北方向に走り、中央部で屈曲している。規模は長さ（直線距離）2m・幅35cm・底幅14cm・最深部16cmを測る。

<底・壁>底は起伏が激しく、荒れている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

<覆 土>覆土は暗褐色土の単一層である。砂礫の流れ込みは確認されていない。

<出土遺物>遺物は土師器破片が2点出土している。

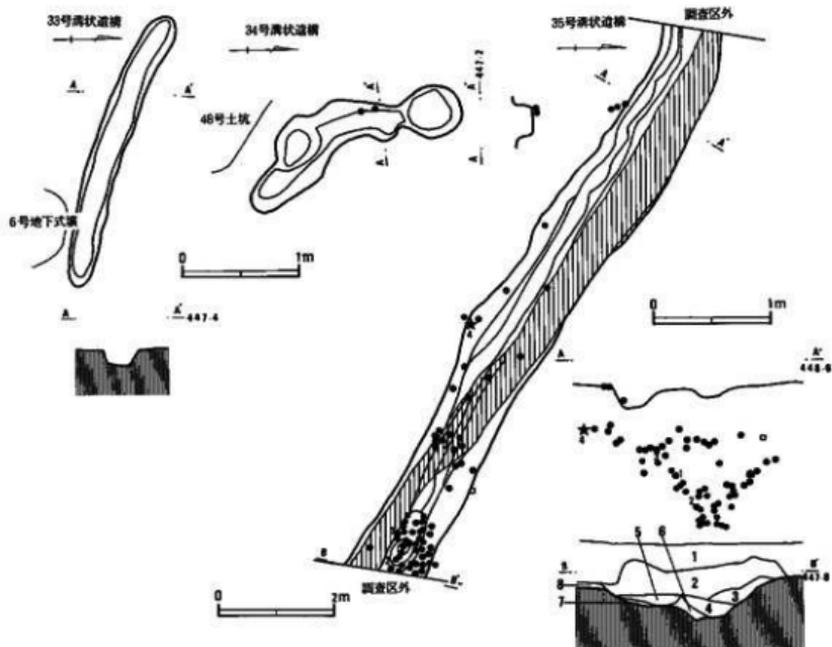
35号溝状遺構（第132図、第50・84表、図版17-36）

<位 置>A・B・Z-42・43グリットに位置する。東側および西側は共に調査区外へ延びているため未調査である。北側に27号住居址・平行して36号溝状遺構、南側に107号土坑、平行して42号溝状遺構が存在している。また、遺状に硬くしまった（黒色土で非常にしまっている）面が重複して検出されている（第132図の平面図の斜線部）。

<形状・規模>調査区外へ延びているために全体の形状は明確ではない。現存部は北西から南東に直線的に走る。規模は現長10.8m・幅1.05～1.5m・底幅10～26cm・最深部35cmを測る。

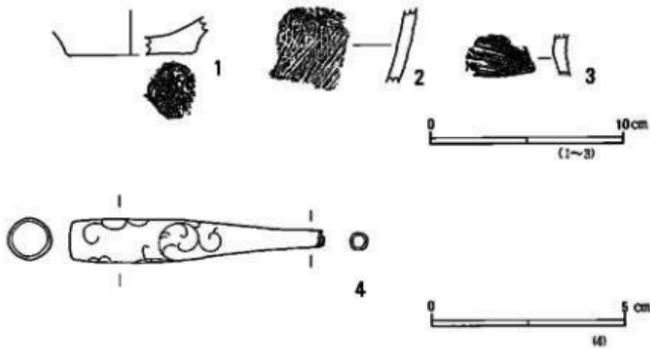
<底・壁>底は起伏が激しく荒れており、中央部と東側は特に深く抉れている。壁は遺存状況が悪く、僅かな立ち上がりが見られる。東-西方向の溝底比高差は80cm程であり、東側に徐々に傾きを強めながら傾斜している。

<覆 土>覆土は7層に分けられる。各層においてローム粒子が検出され、第7層において砂礫の流れ込みが確認されている。



35号溝状遺構土層説明

層色調	特 徴
1 暗褐色	耕作土。(基本層 Ⅰ層)
2 黒褐色	暗褐色土をブロック状に含む。しまりに欠ける。
3 暗 色	ローム粒子を含む。
4 暗 色	砂礫(φ3~5mm)を多量に含む。
5 黒褐色	ローム粒子を少量含む。
6 暗 色	ローム粒子を多量に含む。
7 黒褐色	砂礫(φ3~5mm)を多量に含む。
8 黄褐色	ローム再堆積層。しまりに欠ける。



第132図 33・34・35号溝状遺構 平面・土層・断面・遺物分布 出土遺物

<出土遺物>遺物は土師器および土師質土器片が出土しており、東側の深く挟られている部分からの出土が多く、ほとんどの遺物が摩耗している。また、キセルが1点検出されている。

36号溝状遺構（第133図）

<位 置>A・B・Z-44・45グリットに位置する。東側および西側は共に調査区外へ延びているため未調査である。北側に平行して37号溝状遺構、近接して28号住居址、南側にほぼ平行して35号溝状遺構が存在する。西側で27号住居址と重複している。新旧関係は27号住居址→36号溝状遺構の順で新しい。

<形状・規模>調査区外へ延びているために全体は把握できない。現存部は東-西方向に直線的に走り、西側から東側に移行するにしたがって溝幅は広さを増している。規模は現長10.4m・幅0.8~1.1m・底幅20~70cm・最深部30cmを測る。

<底・壁>底は硬くしまっているが、所々に起伏がみられる。西側ではほぼ垂直に、東側では緩やかに立ち上がる。東-西方向の溝底比高差は72cm程であり、東側に徐々に傾斜している。

<覆 土>覆土は5層に分けられる。下層に移行するにしたがって、ローム粒子が多く混入している。また、第4層は非常に堅緻であり、焼土・炭化物が混入している。

<出土遺物>遺物は底面直上より土師器の変形土器の胴部および土師質土器の口縁部などが出土しているが細片のため図示できなかった。

37号溝状遺構（第133・134図、第93表、図版7-53、17-33-37）

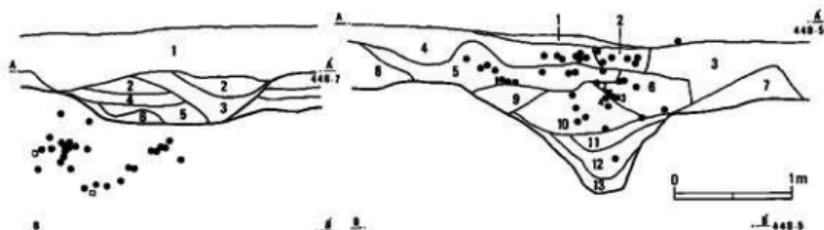
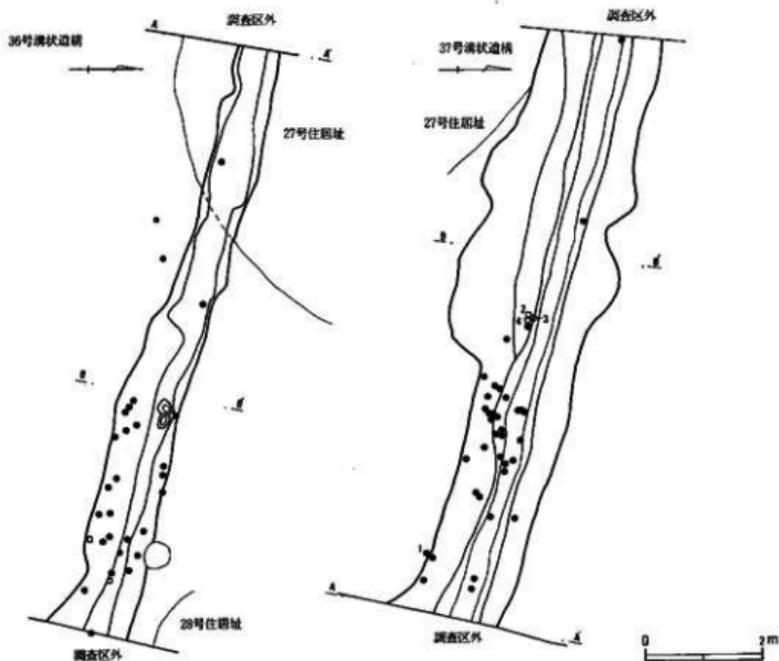
<位 置>A・B・Z-46・47グリットに位置する。36号溝状遺構同様に東側および西側は共に調査区外へ延びているため未調査である。北側に70号土坑・28号住居址、南側に28号住居址、平行して36号溝状遺構が存在する。西側で27号住居址と重複している。新旧関係は27号住居址→37号溝状遺構の順で新しい。

<形状・規模>全体の形状は東・西側の両端部が調査区外へ延びているために把握できない。現存部の規模は現長10.4m・幅1.5~2.5m・最深部1.05mを測り、中央部やや西よりの立ち上がり幅が広がりを見せている。底幅は60~70cmと比較的安定し、断面形が底幅の狭い逆台形を呈している。

<底・壁>底はやや起伏がみられるものの硬くしまっており、平坦である。北壁および南壁は底面から50cm程までは垂直に近い立ち上がりを見せ、その上部は両壁とも緩やかな傾斜で立ち上がる。東-西方向の溝底比高差は60cm程であり、東側に傾斜している。

<覆 土>覆土は13層に分けられる。上層は不自然な堆積を呈しており、人為的に埋め戻された可能性があり、下層についてはレンズ状の自然堆積を呈している。

<出土遺物>遺物は覆土上層より土師器および土師質土器破片が混在して出土しているが細片が多く、図示し得るものは播り鉢(Na1)1点のみである。また、中央部より古銭が3点出土している。詳細については第93表を参照されたい。



36号溝状遺構土層説明

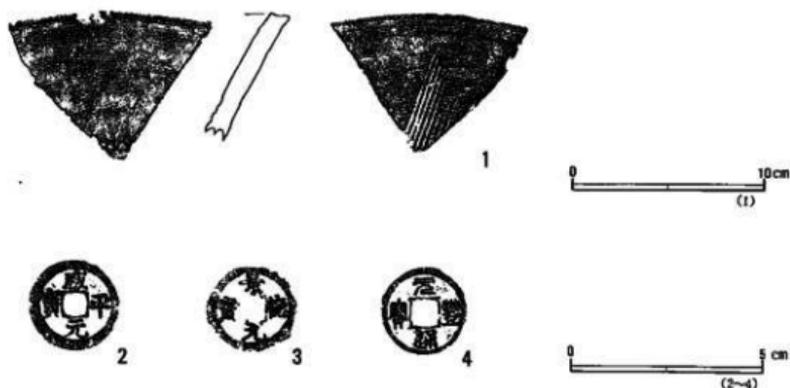
層	色 別	特 徴
1	暗赤褐色	耕作土。(基本層序 1層) 腐植が多い。粘性有。しまり固。
2	暗褐色	ローム粒子を多量に含む。粘性・しまり有。
3	暗褐色	粘性有。しまり固。
4	黄褐色	ローム粒子を多量に含む。
5	黄褐色	ローム粒子を多量に含む。
6	黄褐色	ロームブロックを含む。

37号溝状遺構土層説明

層	色 別	特 徴
1	暗 色	ローム粒子を含む。
2	暗褐色	しまりに欠ける。
3	暗褐色	ローム粒子・ロームブロック(φ5~10mm)を含む。しまりに欠ける。
4	暗褐色	黄褐色土・ローム粒子を含む。
5	黒褐色	黄褐色土・ロームブロックを層状に含む。しまりに欠ける。
6	暗褐色	ロームブロック(φ2~5cm)を多量に含む。黄褐色土ブロックを少量含む。
7	黄褐色	ロームブロック(φ3~5cm)を多量に含む。しまりに欠ける。
8	黒 色	粘土・暗褐色土を含む。ローム粒子を少量含む。
9	暗褐色	黄褐色土を含む。粘土を少量含む。
10	暗褐色	腐を含む。粘土を少量含む。
11	黒褐色	暗褐色土を含む。
12	暗褐色	ローム粒子をブロック状に含む。
13	黄褐色	ローム粒子ブロック状に多量に含む。ロームブロックを含む。

※ 8層は、27号住居址覆土。

第133図 36・37号溝状遺構 平面・土層・断面・遺物分布



第134図 37号溝状遺構 出土遺物

38号溝状遺構 (第135図)

<位 置> A・Z-38グリットに位置する。北側に99号土坑・10号地下式塋(旧81号土坑)・40・41号溝状遺構、平行して40号溝状遺構、南側に26号住居址・103・104・105・106号土坑が存在する。中央部に39号溝状遺構と重複している。新旧関係は遺構の残存状況より39号溝状遺構→38号溝状遺構の順で新しい。東側は調査区外へ延びているために未調査である。また本遺構周辺は耕作によると思われる攪乱の影響を受け、遺構検出面は非常に荒れており、本溝状遺構も攪乱による可能性が考えられる。

<形状・規模> 全体の形状は把握できないが、現存部は東-西方向に直線的に走る細い溝状遺構である。規模は現長3.03m・幅30cm・底幅18cm・最深部15cmを測る。

<底・壁> 底は比較的安定した平坦面を呈している。壁の遺存状況は悪く、特に西側はほとんど削平されている状況である。

<覆 土> 覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物> 遺物は土師質土器片が1点出土しているのみである。

39号溝状遺構 (第135図)

<位 置> A・Z-38・39グリットに位置する。西側に99号土坑・10号地下式塋(旧81号土坑)・41号溝状遺構、南側に26号住居址・103・104・105・106号土坑が存在している。南端部で38号溝状遺構、中央やや南寄り40号溝状遺構と重複している。新旧関係は遺構の残存状況より40号溝状遺構→39号溝状遺構→38号溝状遺構の順で新しい。北側は調査区外へ延びているために未調査である。また38号溝状遺構同様、本遺構周辺は耕作によると思われる攪乱の

影響を受け、遺構検出面は非常に荒れており、本溝状遺構も攪乱による可能性が考えられる。

<形状・規模>全体の形状は不明であるが、南西-北東方向に走る溝状遺構で、北側で進路を東に変え、調査区外へ延びている。規模は現長（直線距離）2.8m・幅25~40cm・底幅10~30cm・最深部10cmを測る。

<底・壁>底は起伏が激しく、2ヶ所でピットが検出されている。壁はほぼ垂直な立ち上がりのみせるが、所々で攪乱の影響を受けている。

<覆土>覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

40号溝状遺構（第136図）

<位置>A・Z-38グリットに位置する。北側に99号土坑、近接して41号溝状遺構、南側に26号住居址・103・104・105・106号土坑、平行して38号溝状遺構、西側に10号地下式壙（旧81号土坑）が存在している。中央やや東よりで39号溝状遺構と重複している。新旧関係は遺構の残存状況より40号溝状遺構→39号溝状遺構の順で新しい。また38号溝状遺構同様、本遺構周辺は耕作によると思われる攪乱の影響を受け、遺構検出面は非常に荒れており、本溝状遺構も攪乱による可能性が考えられる。

<形状・規模>形状は東-西方向に緩やかな弧状を描きながら走る細い溝状遺構である。規模は長さ1.76m・幅24cm・底幅15cm・最深部10cmを測る。

<底・壁>底はやや起伏があるが硬くしまっている。壁はほぼ垂直に立ち上がるが攪乱の影響を受け浅い。

<覆土>覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

41号溝状遺構（第135図）

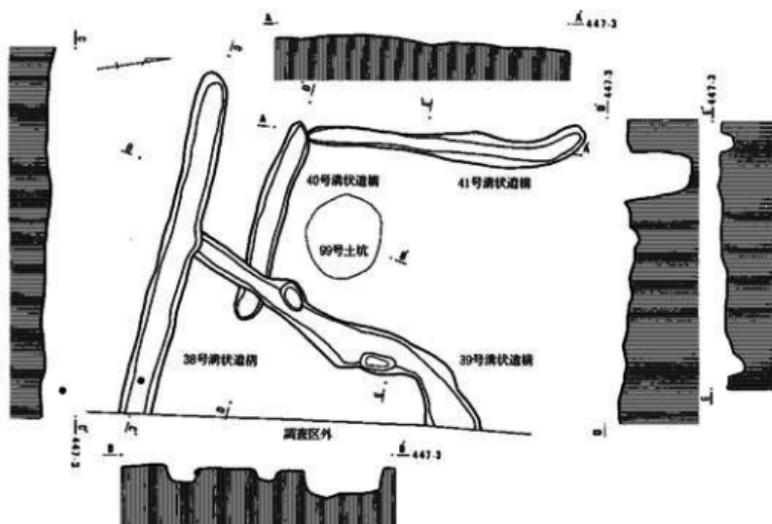
<位置>A-38・39グリットに位置する。東側に99号土坑・39・40号溝状遺構、西側に10号地下式壙（旧81号土坑）、南側に26号住居址・103・104・105・106号土坑が存在している。38号溝状遺構同様、本遺構周辺は耕作によると思われる攪乱の影響を受け、遺構検出面は非常に荒れており、本溝状遺構も攪乱による可能性が考えられる。

<形状・規模>調査区内を南-北方向に走り、北端部がやや西側に角度を変えて延びている。規模は長さ（直線距離）2.4m・幅15~27cm・底幅10cm・最深部15cmを測る。

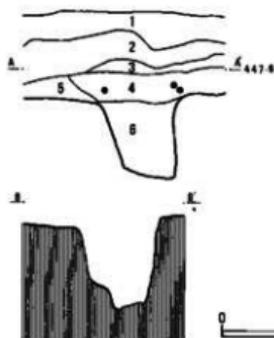
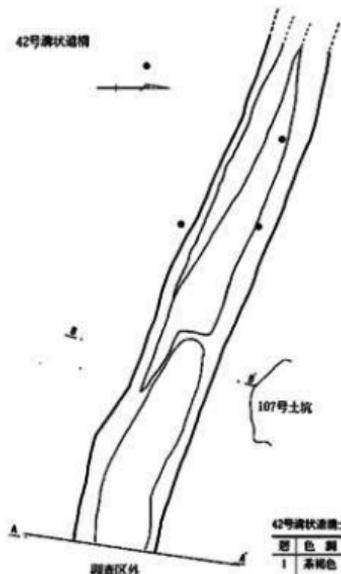
<底・壁>底は起伏が激しい。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北側に移行するにしたがって深く掘り込まれている。

<覆土>覆土は暗褐色土の単一層である。

<出土遺物>遺物は検出されていない。



42号溝状遺構



42号溝状遺構土層説明

層	色	質	特	徴
1	赤褐色		ロームブロック・ローム粒子・黒色土をブロック状に含む。しまり非常に強。 耕作土。(基本層序 I層)	
2	暗褐色		ロームブロックを含む。しまり弱。	
3	黒褐色		黒色土・ロームブロックが混在する。一部に暗褐色土が層状に混入する。 しまりに欠ける。	
4	黄褐色		ローム層堆積層。暗褐色土を含む。しまりに欠ける。(基本層序 V層)	
5	黄褐色		ロームブロックを少量含む。	
6	暗褐色			

第135図 38・39・40・41・42号溝状遺構 平面・土層・断面・遺物分布

42号溝状遺構（第135図）

<位置> A・B・C Z-41グリットに位置する。北側に107号土坑、ほぼ平行して35号溝状遺構が存在している。東側は調査区外へ延びているため未調査である。

<形状・規模> 全体の形状は東側が調査区外へ延びており、明確にできない。また西側は攪乱により破壊され途切れている。現存部は東-西方向に直線的に走る溝状遺構であり、規模は現長4.7m・幅70cm・底幅40cm・最深部75cmを測る。

<底・壁> 遺存部の底は中央部やや東よりで比高差20cmの段差があり、東側は底面に自然の礫群が検出されている。壁は良好であり、しっかりと垂直に立ち上がる。

<覆土> 覆土は2層に分けられる。

<出土遺物> 遺物は覆土上層より土師器片が3点出土しており、いずれも細片のため図示できなかった。

(3) 集石遺構

4号集石（第136図、図版9-69）

<位置> A・Z-29グリットに位置する。北側に27号溝状遺構、南側に26号溝状遺構、西側に95・96号土坑・25号溝状遺構が存在する。東側は約1/4が調査区外へ延びており、未調査である。

<形状・規模> 本集石は土坑を伴うものである。土坑の形状は遺存部より不整形を呈すると思われる。規模は推定長軸65cm・短軸60cm・底面までの最深部27cmを測る。礫は人拳大の大きさを中心にして20個検出され、土坑の底面より少し浮いて集中している。また、礫はいずれも火熱を受けていない。

<底・壁> 底はやや中央部が窪む皿状を呈している。壁は底部より緩やかに立ち上がる。

<覆土> 覆土は2層に分けられる。下層にローム粒子が多く混入している。

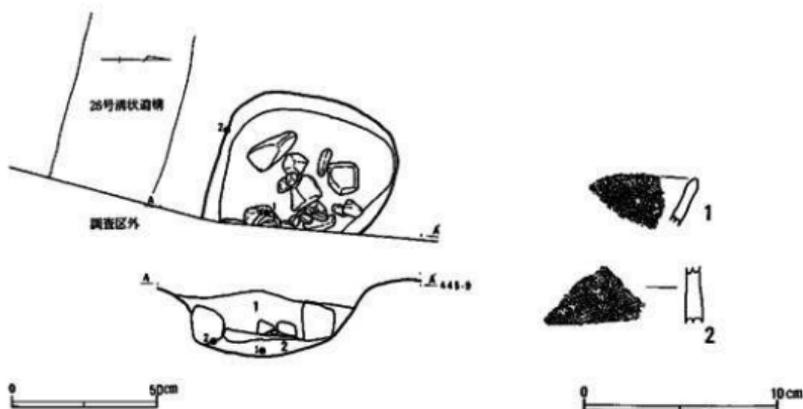
<出土遺物> 遺物は土師質土器片が2点出土している。No.1は皿型土器の口縁部片、No.2は内耳土器の胴部片であり、共に底面近くより検出されている。

(4) 掘立柱建物址

1号掘立柱建物址（第137図、図版9-72）

<位置> A・B・C-33・34グリットに位置する。北側に26号住居址・32・33・34号溝状遺構・48・60・61・63・100号土坑・6号地下式竈（旧77号土坑）・8号地下式竈（旧79号土坑）・11号地下式竈（旧83号土坑）、南側に44・45・46・47・59・85号土坑、西側に56号土坑が存在している。北側に55号土坑・5号地下式竈（旧76号土坑）、南側に28号溝状遺構、東側で2号建物址、西側で29号溝状遺構と重複している。新旧関係は遺構の遺存状況から1号掘立柱建物址→55号土坑・5号地下式竈・28・29号溝状遺構の順で新しい。2号掘立柱建物址との新旧関係は不明である。また周辺には多数のピットが検出されており、本遺構との識別が非常に困難であったため、これらの中には本遺構に伴う可能性のものも含まれている。

<形状・規模> P1・P2の間には柱穴が検出されなかったが、8号地下式竈により破壊され



4号集石土層説明

層 色 区	特 徴
1 黒褐色	中やブロック状(φ10cm)を認める。
2 黄褐色	ローム粒子を多量に含む。粘性强。

第136図 4号集石 平面・土層・遺物分布 出土遺物

たものと考えられ、これはN-72°-Wに主軸方向をとる3間×2間の掘立柱建物址と考えられる。

北棟柱穴列はP1・P2・P3、南棟柱穴列はP5・P6・P7・P8、東妻柱穴列はP3・P4・P5、西妻柱穴列はP1・P8・P9であり、桁行5.5m、梁行3.9mを測る。棟側柱間距離は西から1.9m・1.9m・1.7m、妻側柱間距離は南から1.9m・1.9mである。柱穴の平面形はほぼ不整形を呈し、径35cmから55cmを測り、確認面から底面までの深さは40cmから60cmである。

<出土遺物>遺物は検出されていない。

2号掘立柱建物址(第137図、図版9-72)

<位 置>A・B・Z-33・34グリッドに位置する。北側に33・34号溝状遺構・60・61・63・100号土坑・6号地下式竈(旧77号土坑)・11号地下式竈(旧83号土坑)・8号地下式竈(旧79号土坑)、南側に44・45・46・47・59・82号土坑、西側に56号土坑が存在している。北側で34号溝状遺構、南側で55・98・48号土坑・5号地下式竈(旧76号土坑)、西側で29号溝状遺構と重複している。新旧関係は遺構の遺存状況から2号建物址→48・55・98号土坑・5号地下式竈・29号溝状遺構の順で新しい。1号掘立柱建物址との新旧関係は不明である。また1号掘立柱建物址同様、周辺には多数のピットが検出されており、本遺構との識別が非常に困難であったため、これらの中には本遺構に伴う可能性のものも含まれている。

<形状・規模>N-75°-Wに主軸方向をとる3間×3間の掘立柱建物址と考えられる。北棟

柱穴列はP1・P2・P3・P4、南棟柱穴列はP7・P8・P9・P10、東妻柱穴列はP4・P5・P6・P7、西妻柱穴列はP1・P10・P11・P12であり、桁行5.6m、梁行5.5mを測る。棟側柱間距離は西から1.8m・1.9m・1.9m、妻側柱間距離は南から1.9m・2m・1.6mである。柱穴の平面形はほぼ不整形を呈し、径40cm～75cmを測り、確認面から底面までの深さは30cmから60cmである。

<出土遺物>遺物は出土していない。

(5) 柱穴列

1号柱穴列（第137図、図版9-72）

<位置>A・B・C・Z-35グリットに位置する。北側に33・34号溝状遺構・61・63号土坑・6号地下式竈（旧77号土坑）・7号地下式竈（旧78号土坑）・8号地下式竈（旧79号土坑）・11号地下式竈（旧83号土坑）・平行して2号柱穴列、南側に1・2号掘立柱建物址・48・60号土坑が存在している。東側で26号住居址と重複している。新旧関係は遺構の遺存状況から26号住居址→1号柱穴列の順で新しい。また1・2号掘立柱建物址同様、周辺には多数のピットが検出されている。

<形状・規模>調査区内を東西方向に一直線状に並んでおり、調査区外へさらに延びていると考えられる。主軸はN-72°-Wにとる。柱穴間距離はほぼ2mである。柱穴の平面形はほぼ不整形を呈し、径30cmから90cmを測り、確認面から底面までの深さは20cmから50cmである。本遺構は位置的に2号柱穴列と共に1号掘立柱建物址および2号掘立柱建物址に関する施設と考えられる。

<出土遺物>遺物は出土していない。

2号柱穴列（第137図、第66表、図版17-32）

<位置>A・B・C・Z-35・36グリットに位置する。北側に33・34号溝状遺構・101・102・103・104号土坑・7号地下式竈（旧78号土坑）・8号地下式竈（旧79号土坑）・11号地下式竈（旧83号土坑）、南側に1・2号掘立柱建物址・60・61・63・100号土坑、平行して2号柱穴列が存在している。中央部で6号地下式竈、東側で26号住居址と重複している。新旧関係は遺構の遺存状況から26号住居址→2号柱穴列の順で新しい。6号地下式竈との関係は不明である。また1・2号掘立柱建物址同様、周辺には多数のピットが検出されている。

<形状・規模>調査区内を東西方向に一直線状に並んでおり、調査区外へさらに延びていると考えられる。主軸はN-74°-Wにとる。柱穴間距離は1.9m～2.4mである。柱穴の平面形はほぼ不整形を呈し、径40cm～50cmを測り、確認面から底面までの深さは20cm～60cmである。本遺構は位置的に1号柱穴列と共に1号掘立柱建物址および2号掘立柱建物址に関する施設と考えられる。

<出土遺物>遺物はP2の西側上部より土師製の皿形土器が1点（No1）出土している。

第2節 遺構外出土遺物

1・縄文時代 土器（第138図、第30表、図版12-17）

中期後半～後期前半にわたる土器片が出土しているが、破片資料が多く、図示し得るものは僅かである。曾利Ⅰ式（No1・2）、曾利Ⅳ式（No3～5）、曾利Ⅴ式（No6～10）、中期末葉（No11）、称名寺Ⅱ式（No13・14）、堀之内Ⅰ式（No15～17）に比定されよう。No15は下北原系の資料である。

2・縄文時代 石器（第139図、第83表、図版13-20）

凹石（No1）1点、磨石（No2・3）2点が出土している。凹石は片面に凹を有し、石材は輝石安山岩である。磨石は2点ともほぼ全面に磨面がみられる。石材はNo2は花崗岩類、No3は砂岩である。

3・弥生時代～古墳時代 土器（第140図、第52表、図版16-29）

弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が主体的であり、僅かに前期末葉から中期初頭の条痕文系土器が出土している。前期末葉から中期初頭の条痕文系土器はいずれも小破片のため、図示していないが体部外面に粗いハケ状工具による条痕文が施されている。弥生時代後期～古墳時代初頭の土器は肩部に円形浮文や複合口縁に棒状浮文を施した駿河系土器（No3・11）、「く」の字形の口縁を有する北陸系土器（No12）、肩部に摺指波状文を持つ中部高地系土器（No13）および小形甕台（No10）など外来系土器が在来系土器とともに出土している。No5の小形甕は胴下半部に屈曲した稜を持ち、後期前半の東海系土器も散見される。

4・中世 土器（第141図、第67表）

土師質皿形土器が1点出土している。No1は口径は11.2cm、器高は2.3cmを測る。底部は回転系切りされている。出土地点は24号住居址覆土内である。

5・金属品（第142図、第86表、図版17-36）

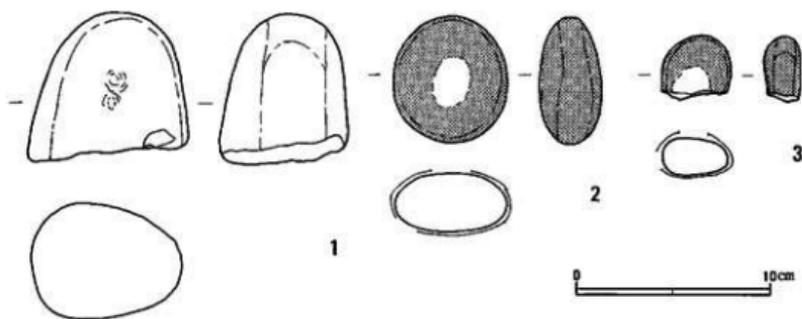
鉄製品が2点出土している。No1は板状を呈すが欠損部が多く器種は不明である。No2は欠損部が多いが鎌の可能性はある。

6・古銭（第143図、第94表）

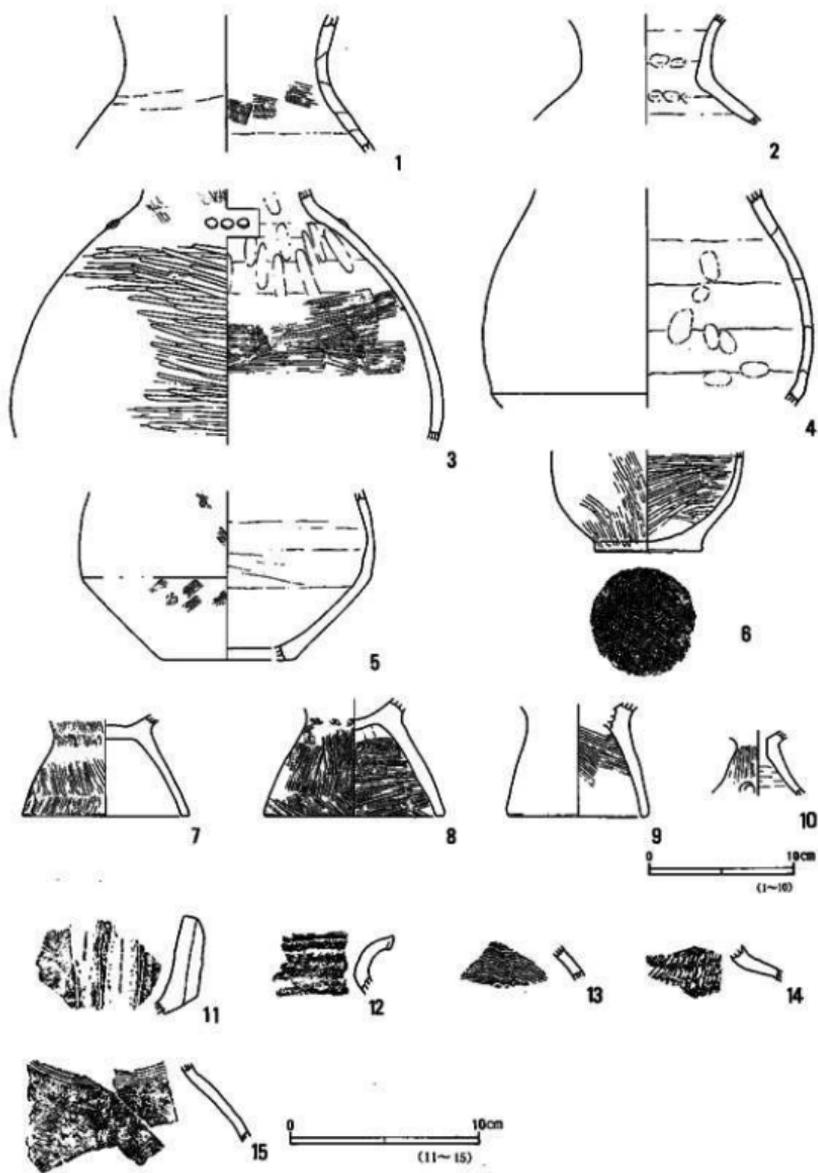
古銭は7点出土している。No1は「皇宋通寶」、No2は「元豊通寶」、No3は「寛永通寶」、No7は「文久永寶」、No4～6は鏽に覆われ銭名は不明である。No7の「文久永寶」の背面には波紋がみられる。No1・2・4～6はB-44グリットからまとまって出土しているが遺構との関係は認められない。



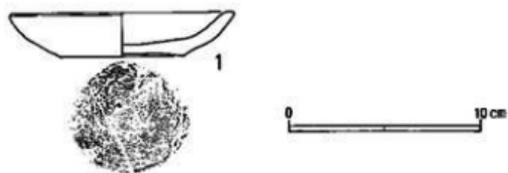
第138圖 第3・4次調査 遺構外出土 縄文時代 土器



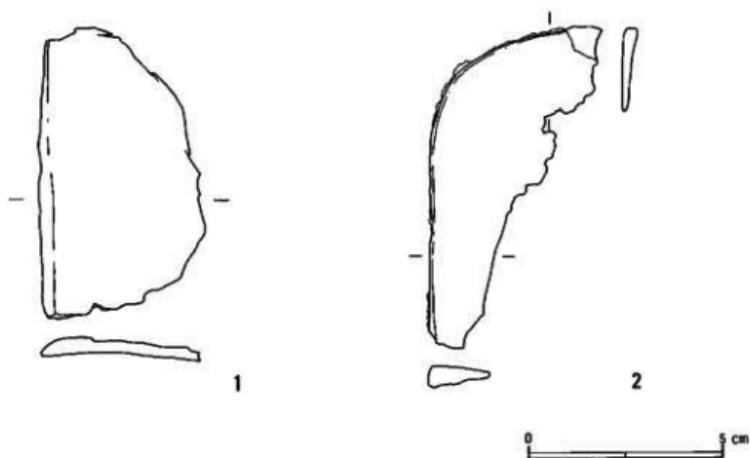
第139圖 第3・4次調査 遺構外出土 縄文時代 石器



第140图 第3・4次調査 遺構外出土 弥生時代～古墳時代 土器



第141図 第3・4次調査 遺構外出土 中世 土器



第142図 第3・4次調査 遺構外出土 金属品



第143図 第3・4次調査 遺構外出土 古銭

第4章 調査のまとめ

第1節 旧石器時代

旧石器時代については、ナイフ形石器が2点出土している。出土状況はいずれも遺構覆土や遺構確認面（基本層序第V層上面）から偶然発見されたものであるが、形態の特徴から遺構確認面付近に確認されたA T降灰層より上位の出土が考えられよう。この他、14号住居址覆土中から石槍が1点検出されたが、縄文時代草創期に属する可能性があろう。市之瀬台地は本遺跡に隣接する六科丘遺跡でもナイフ形石器が出土しており、八ヶ岳山麓及び曾根丘陵地域同様に当該期の遺跡の存在が想定される地域である。本遺跡において実施したテフラ分析によりA T降灰層が確認され、曾根丘陵や南関東地域の立川ローム層との対応関係を明確にする上で重要な成果が得られ、今後は層位学的な検討を行い、本地域の旧石器文化様相を解明していきたい。

第2節 縄文時代

縄文時代は中期～晩期にかけての遺構と遺物が検出され、調査区中央部から南側縁辺部の緩傾斜地帯に分布する傾向がある。遺構は竪穴住居址4軒、土坑2基、集石遺構3基、竪穴状遺構2基、埋設土器2基などが検出されている。

中期土器（第I群）は五領ケ台式～曾利式、加曾利E式が出土し、特に曾利Ⅳ～Ⅴ式の出土量が縄文時代全体の中で大きな割合を占めている。中期土器の分布は調査区中央部から南側縁辺部にかけての緩傾斜地帯の広範囲で出土するが、時期差により占地が異なる様相が捉えられる。五領ケ台式～猪沢式は調査区南側の7～9号住居址周辺に、曾利Ⅰ～Ⅴ式、加曾利EⅢ～Ⅳ式は調査区中央部の7～10・12・15・17・19・23～26号土坑群周辺に集中する傾向がある。

五領ケ台式土器は深鉢（キャリバー形土器）と浅鉢がある。深鉢の口縁部文様帯には沈線によるT字状文や隆帯による渦巻文などがあり、押し文による文様描出もみられる。これらは縄文系の土器群が主体的であり、僅かに沈線文系の土器群がみられる。いずれもⅡ式段階の新相に属すると思われる。猪沢式土器はキャリバー形、桶形などの深鉢がある。多段化した楕円区画内を縦位や斜位などの角押し文列で充填したり、波状文を描くものや隆帯に沿って2条の角押し文を施すものが主体的であり、僅かに隆帯に沿って幅広と幅狭の角押し文を施すものがみられる。新道式土器から井戸尻式土器は破片資料が僅かに出土するのみであり、細分に対応した編年の位置づけは難しい。曾利式土器はⅠ～Ⅴ式が出土し、特にⅣ・Ⅴ式が主体的である。Ⅳ式は胴部を隆線ないし沈線で区画し、その中を縦・斜位条線文、綾形条線文などの地文と波状の沈線による懸垂文が施文されるものが多く、口縁部及び胴部に渦巻文を施文するものも存在する。Ⅴ式は長方形の沈線区画内に連続八の字文や刺突文が施されるものが主体的である。加曾利E式土器はⅢ・Ⅳ式がわずかに出土し、いずれも区画文は隆帯ないし沈線で描出され、縄文が充填されるものが多い。Ⅳ式は19号土坑で曾利Ⅳ式と、12・15号土坑で曾利Ⅴ式と伴出している。

中期に比定される主な遺構は五領ケ台式期の1号集石、1・2号竪穴状遺構、猪沢式期の7

～9号住居址、3・13号土坑、藤内式期の22号土坑、曾利Ⅳ期の1・19号土坑、2号埋設土器、曾利Ⅴ式期の10・12・15・17・23～26号土坑である。

後期土器（第Ⅱ群）は称名寺式～堀之内Ⅰ式が出土し、堀之内Ⅰ式が中心である。後期土器の分布は7号住居址から南側（第1次調査区内）に集中的に分布し、中期とは占地を分けている。

称名寺式はⅠ・Ⅱ式が僅かに出土している。Ⅰ式は主に渦巻文、J字文のモチーフが沈線により帯状に描かれ、内部に縄文が充填されている。Ⅱ式はJ字文のモチーフが描かれ、内部に円形や列点状の刺突が多用され、口唇部の一部に貼付文や沈線文をもつものもみられる。第1次調査地点の遺構外より中津系土器が出土している点は注目される。堀之内Ⅰ式は口唇部に沈線文または刺突文が施文され、頸部に強いきびれをもつ鉢や直線的に立ち上がる深鉢などがみられる。文様は沈線文により構成されるものが主体的で、この他に櫛歯状文や磨消縄文などがみられるが量的には少ない。地文は縄文と無文があり、やや無文地が多く感じられる。これらは器形及び口縁部、胴部文様の特徴よりⅠ式に属するものと考えられる。なお、第1次調査地点の遺構外より下北原系土器も出土している。

後期に比定される遺構は堀之内Ⅰ式期の2号土坑、1号埋設土器がある。

晩期土器（第Ⅲ群）は水式が出土しているが、量的に極めて少なく、調査区南縁側の第1次調査区の遺構外に集中して分布している。出土資料はすべて口縁部破片のみのため器種は不明確であるが鉢形土器と甕形土器に分類されよう。鉢形土器は口縁内外に数条の平行沈線をめぐらし、底部から口縁部にかけてほぼ直線的に開く浅鉢や、口縁端部が外反し、口縁直下から浮線文による網状文を施し、やや内湾した胴部を持つ浅鉢などがある。甕形土器は口縁直下に幅広い凹線を数条めぐるものや口縁部内外に平行沈線がめぐるものなどがある。これらの土器群の類例は長野県石行遺跡、御社宮司遺跡、氷遺跡に求められ、氷Ⅰ式の最新相段階に比定されよう。県内では金生遺跡や宮の前遺跡から出土した浮線文土器群に相当するものである。

出土石器について

今回の調査で出土した石器は66点（遺構内12点、遺構外54点）、石核・剥片類（フレイク473点、チップ70点）は543点、総数609点である。石器の器種及び石材はナイフ形石器2点3.0%（黒曜石）、石槍1点1.5%（頁岩）、石鏃29点43.9%（黒曜石）、石匙1点1.5%（頁岩）、石錐3点4.5%（黒曜石）、ピエス・エスキュー1点1.5%（黒曜石）、打製石斧9点13.6%（粘板岩3点、砂岩3点、ホルンフェルス2点、頁岩1点）、磨製石斧1点1.5%（ホルンフェルス）、凹石7点10.6%（輝石安山岩）、磨石6点9.1%（砂岩3点、輝石安山岩2点、花崗岩類1点）、石錘2点3.0%（頁岩1点・砂岩1点）、石皿2点3.0%（緑色点紋岩1点・玄武岩1点）、台石1点1.5%（輝石安山岩）、石臼1点1.5%（玄武岩）である。この内、ナイフ形石器は旧石器時代、石臼は近代に属するものと考えられ、これらを除く石器63点（遺構内12点、遺構外51点）が縄文時代に比定されよう。遺構内出土資料に基づく、縄文期の石器組成を把握する事は困難な状況であり、ここでは先述したように出土土器と遺構のあり方から、調査区南側（第1次調査区～9号住居址周辺）の縄文中期前半（五領ヶ台式～貉沢式）、調査区中央部（12号住居址～8号溝状遺構）の中期後半（曾利Ⅳ・Ⅴ式）の活動域だったと考えられる各地域から出土した石器の出土傾向を探り、大まかな石器組成の変遷を捉えてみたい。調査区南側（中期前半）では石鏃16点、石錐3点、石匙1点、打製石斧3点、磨製石斧1点、ピエス・エスキュー1点、石錘2点、

凹石3点、磨石1点、石皿1点等、多くの器種が存在し、なかでも石鏃、打製石斧、凹石・磨石類が主体的となっている。調査区中央部（中期後半）では石鏃13点、打製石斧6点、凹石4点、磨石5点、石皿1点、台石1点が出土し、中期前半の様相を引き継ぐ中で、特に打製石斧が高い割合を維持している。本遺跡における石器組成も縄文中期の遺跡にみられる傾向と同様な状況が捉えられよう。石器石材は黒曜石33点（52.4%）、輝石安山岩10点（15.9%）、砂岩6点（9.5%）、頁岩5点（7.9%）、粘板岩3点（4.8%）、ホルンフェルス3点（4.8%）、花崗岩類1点（1.6%）、緑色点紋岩1点（1.6%）、玄武岩1点（1.6%）の9種類ある。黒曜石、輝石安山岩、砂岩、ホルンフェルスは中期前半～後半にかけて一貫してみられるのに対し、頁岩、粘板岩、花崗岩類、玄武岩は後半になってから利用され始めている。また黒曜石、輝石安山岩、砂岩、頁岩は多器種に使用される状況が捉えられる。

石核は23点（遺構内6点、遺構外17点）あり、すべて黒曜石の残骸である。フレイクは473点あり、黒曜石467点（98.7%）、水晶3点（0.6%）、頁岩2点（0.4%）、チャート1点（0.2%）である。黒曜石はフレイク318点（遺構内65点、遺構外253点）、ユースト・フレイク43点（遺構内8点、遺構外35点）、加工痕のあるフレイク106点（遺構内11点、遺構外95点）である。チップは70点（遺構内11点、遺構外59点）あり、すべて黒曜石である。水晶・チャートはいずれも遺構外出土であり、加工痕等は認められない。頁岩は8号住居址及び遺構外出土であり、2点とも加工痕がある。これらの出土状況は調査区中央部～南縁辺部を中心に分布し、縄文中期の活動域と対応している。特に五領ヶ台式期の1・2号竪穴状遺構、猪沢式期の7・8号住居址、曾利V式期の23号土坑からは黒曜石の石核、フレイク（ユースト・フレイク、加工痕のあるフレイク）、チップ類がまとめて検出され、廃棄する行為があったことが想定されよう。

第3節 弥生時代～古墳時代

今回の調査では弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器群及び竪穴住居址25軒等が調査区全体で検出され、該期の集落が標高440m前後の市之瀬台地奥部の緩傾斜地帯に形成されていたことが確認された。ここでは土器群の編年の位置づけ及び集落の変遷について検討してみたい。

出土土器について

県内における該期土器の様相については近年の急激な増加傾向により複雑な様相を呈しているが中山誠二²⁾、小林健二³⁾ 両氏による再検討が行われ、土器様相の変化が明確化された。本遺跡では器形全体が窺える資料が少なく、また各住居址からの出土量が非常に少ないため器種及び形態変化にもとづく分類は難しい状況であるため、これらの研究成果に基づいて土器の編年の位置づけを行うこととした。

I期（5期併行）は24号住居址及び遺構外出土遺物がある。器種は主に壺、甕によって構成され、いずれも在来系が主体である。在来系の壺は単純口縁、刻目口縁、折り返し口縁などがある。外来系については壺では幅広有段口縁に棒状貼付文を付し、下膨れで腰折れした駿河系や頸部から胴上部に櫛描籠状文、横線文、波状文、刺突文などが施文される中部高地系の影響を受けた土器が見られる。この他、高坏、小型壺などが散見される。該期は在地系土器群にA・B相の主に新相が混在する状況が捉えられる。

Ⅱ期（6期A相併行）は10・27号住居址出土遺物がある。Ⅰ期同様、器種は壺、甕により構成され、在地系が主体である。甕は在来系の刻み目口縁をもつ台付甕が主体を占める。外来系については折り返し口縁の内面及び肩部に結節縄文をもつ西相模の影響を受けた壺がみられる。

Ⅲ期（6期B相併行）は4・6号住居址出土遺物がある。器種は壺、甕、鉢、高坏、ヒサゴ壺、小型壺などによって構成され、壺、甕はⅡ期に引き続き在来系が主体である。外来系については駿河湾系の壺の他、濃尾平野系のS字甕、パレススタイル壺、高坏や北陸系の甕、鉢などがみられる。S字甕は口縁部中段の外面に刺突文をもつ赤塚分類A類新段階の在地品であろう。パレススタイル壺は口縁部に凹線文、口縁内面中位に隆帯をめぐらし、矢羽根状文様が施された赤彩壺であり、濃尾平野のものに起源が求められるものである。高坏は小型で碗形のものがある。北陸系には北陸西部系（福井県東部・石川県南部）の有段口縁の甕・小型鉢や北陸東部系（石川県北部・富山県・新潟県）の「く」の字形口縁をもつ甕がみられる。該期は濃尾平野系が主体的ではあるが北陸系も存在し、特に4・6号住居址における濃尾平野系（S字甕A類、パレススタイル壺、高坏）と北陸系（甕、小型鉢）の共存関係は注目されよう。

Ⅳ期は3・11号住居址出土遺物がある。器種は壺、甕、鉢、高坏、器台、小型壺などにより構成される。外来系については濃尾平野系のS字甕、高坏、北陸系の壺、甕、鉢などがある。S字甕は摩滅が著しいため正確な位置づけは不明であるがC類以降に属するものであろう。高坏は坏部が大きく開く有段のものである。北陸系には北陸西部系の有段口縁の小型壺や北陸東部系の「く」の字形口縁をもつ甕がある。この他、出自は不明であるが該期に属すると思われる器台が遺構外から出土している。

住居址について

主軸方位は北西方向（N-21°-EからN-40°-W）と北東方向（N-77°-EからN-55°-E）の二方向に集中している。平面形態は全容を検出できたものは僅かであるが、遺存した壁部及び柱穴の配置関係等から24軒の平面形を明らかにした。楕円形3軒（5・16・18号）、隅丸長方形17軒（1・2・10・13・17・19・21・29号）、長方形（方形）4軒（3・4・6・20号）で、隅丸長方形が主体的である。規模は25軒中、推測を含め規模を測り得たものは23軒であり、最大のもは12.0×8.0m（96㎡）を測る26号住居址、最小のもは2.92×2.36m（6.9㎡）の21号住居址である。長軸が8mを超える大型住居址7軒30.4%（13・17・22・24・27号）、4.5m～8mの中型住居址11軒47.8%（1～6・11・12・16・18・29号）、4.5m未満の小形住居址5軒21.7%（10・19～21・23号）である。便宜的に長軸×短軸によって床面積を計測した平均値は大型住居址69.6㎡、中型住居址27.2㎡、小形住居址12.3㎡を測り、大型住居址の巨大性が捉えられよう。掘り方は14軒で確認され、2形式（A・B）に分類される。A形式は掘り方が床下全面に及び、底面が平坦あるいは凸レンズ状・凹レンズ状を呈するもので、床面の凹凸が激しいもので、4軒（19・20・23・27号）ある。B形式は壁際を一旦深く掘り段部を形成するもので、10軒（11・13・16・21・22・24～26・28・29号）ある。この他の住居址については削平が著しいものや掘り方の確認作業を行っていないものであり、いずれかの形式に属すると思われる。住居址内施設には炉、柱穴、貯蔵穴、厨溝、ベット状の遺構などがある。炉址は15軒の住居址から1ヶ所づつ床床炉が検出され、住居址中央部及び長軸方向にそってやや奥まった場所（北寄り）に設置されているものが多い。検出されなかった他の住居址においては攪乱を

受け確認できなかったものであるが、10号住居址については中央やや西寄りに焼土が検出されたが、炉としての使用状況は認められず、住居規模及び柱穴等の様相からも本来炉を持たなかった可能性が考えられる。柱穴は25軒中、15軒で確認されたが、いずれも床面の遺存状況が悪いため断定し得ないが、4本主柱穴が主体的になるとと思われる。貯蔵穴も遺存状況が悪いため4軒のみで検出され、炉と相対する南壁際に設置されるものが多く、その周囲に周境帯を持つものは確認されていない。周溝は5軒(22・24~26・29)で確認され、大型住居址に多くみられる傾向がある。ベット状的遺構については26号住居址の北壁際で上面が堅緻で床面との段差がなく、緩やかに立ち上がる施設が確認されている。機能及び性格については不明であり、今後、ベット状遺構との比較検討を行い追求したい。

集落の変遷について

ここでは伴出土器、遺構の重複、位置関係等によって想定された時期区分(I~IV期)における住居址の主軸方位(a)、形態(b)、規模(c)、被災住居の有無(d)、分布状況(e)等を捉え、集落の様相を概観してみたい。なお、15号住居址は不確定要素が多く時期決定が困難なため、除外して考えたい。

I期(5期併行)は4軒(2・5・17・24号)。a:北西方向。b:楕円形1軒(5号)、隅丸長方形3軒(2・17・24号)。c:大型2軒(17・24号)、中型2軒(2・5号)。d:2軒(17・24号)。e:大型住居址を含む小住居址群が形成される。

II期(6A期併行)は10軒(1・10・13・16・18・19・26~29号)。a:北西方向。b:楕円形2軒(16・18号)、隅丸長方形8軒(1・10・13・19・26~29号)。c:大型3軒(13・26・27号)、中型4軒(1・16・18・29号)、小型2軒(10・19号)、不明1軒(28号)。d:3軒(19・26・28号)。e:各小住居址群内の構成住居址数が増加すると共に大型と中・小型住居址のセット関係が認められ、集落の拡大傾向が窺えられる。また調査区右側縁辺部(深沢川側)に大型住居址の占有率が高い傾向が捉えられる。

III期(6B期併行)は8軒(4・6・12・20~23・25号)。a:調査区左側(漆川側)は北西方向、右側(深沢川側)は北東方向。b形態:隅丸長方形5軒(12・21~23・25号)、長方形・方形3軒(4・6・20号)。c:大型2軒(22・25号)、中型3軒(4・6・12号)、小型3軒(20・21・23号)。d:1軒(21号)。e:調査区中央より右側(深沢川側)ではII期に引き続き、大型と小型住居址のセット関係が捉えられる。

IV期は2軒(3・11号)。a:北東方向。b:隅丸長方形1軒(11号)、長方形1軒(3号)。c:中型2軒(3・11号)。d:1軒(11号)。e:住居址が減少すると共に小住居址群が調査区左側のみに存在し、集落の衰退傾向が窺える。

本遺跡における集落変遷の特徴をまとめると以下ようになる。まず、主軸方向が各時期を通して調査区左側(漆川側)は北西方向、右側(深沢川側)は北東方向となり、調査区中央部を中心として環状に配置することを意識した現象と思われ、居住域の選定に規制が働いていたことが窺われる。平面形態はI・II期は楕円形・隅丸長方形が主体的であるが、III期以降は長方形(方形)が出現し、このタイプへの移行が想定される。特にS次変A類を伴う4号住居址が方形プランを採用している点は注目される。規模は各時期を通して大型住居址が存在し、県内の当該期の遺跡と比較し高い占有率を示し、特筆されよう。被災住居はII・III期を中心と

して33% (24軒中8軒)の割合を占め、県内の当該期の遺跡と同様な傾向が捉えられる。Ⅲ・Ⅳ期における濃尾平野系及び北陸系の土器が調査区南縁辺部に集中する傾向が捉えられる。

今回の調査では道路幅のみのため市之瀬台地奥部に占地する集落の一部が明らかにされたに過ぎない。それゆえに、住居群のあり方、集落の構成・復元等(大型住居址、時期不明とした掘立柱建物址、被災住居址の意義づけや生産基盤の解明を含め)、不明確な点が多く残されている。今後は六科丘遺跡をはじめとする隣接遺跡や遠隔遺跡との系統的検討及び自然科学分析の援用を受けつつ本遺跡の位置づけを行っていきたい。

鏡片について

本資料は5号溝状遺構の底部付近の砂礫層中より検出された。伴出遺物として縄文時代から古墳時代初頭の土器群と石器群及び中世の古銭などがあり、いずれも摩滅が激しく自然流入した状況である。溝状遺構の時期は遺物の出土状況などから享保20(1735)年の絵図面に描かれた市之瀬台地上の開発に伴う用水路である可能性が高く、近世以降の所産と考えらる。本資料は遺跡の性格を考慮すると弥生時代後期後半から古墳時代初頭の集落址内に廃棄されたものとして捉えられよう。鏡片の存在形態は研磨や穿孔など二次的加工痕が確認できる破鏡である。検出部位は外区周縁のみであり、幅広の素縁(幅1.5cm、厚さ2~4mm)と斜行歯歯文帯がみられる。周縁の残存角度は98°となり、復元径は11.4cmである。研磨は破断面に施されており、光沢が認められる。穿孔は6ヶ所にみられ、素縁の内区側の両端部にあるものと素縁から斜行歯歯文帯にかけてみられるものがある。前者の二つの穿孔は径3mmの円形であり、双孔間隔は5.4cmあり、懸垂孔としての機能が考えられる。後者の四つの穿孔は鏡体を割り砕くための穿孔と考えられる。このうち外側の一つは穿孔途中であり、背・鏡面に円弧形の溝状痕が残存し、他の三つの穿孔は研磨によって原形(円形)を止めていない。全体的に錆上がりは良好で、暗緑色を呈している。重さは34.6グラムあり、大きさの割には重量感がある。鏡種については外区周縁のみという残存状況より断定する事は難しいが、幅広の素縁部が外周から内区側に向かって強い傾斜を持つ点は、後漢鏡の古相(方格規矩四神鏡・内行花文鏡)では見られない新相(後漢末)の特徴であり、復元径11.4cmという鏡の大きさや斜行歯歯文帯の歯歯文の斜行が整っている点を考え合わせると後漢鏡の双頭龍文鏡と推定される。双頭龍文鏡は鈕を扶んで縦方向に「位至三公」の銘帯を入れ、その左右に逆S字状の平彫りされた龍文を配し、通称位至三公鏡と呼ばれ、洛陽燒溝漢墓編年の第六期(2世紀前半から3世紀初頭)に出現する鏡種である。この鏡種については本資料の鉛同位体比分析の結果により華南産の鉛が検出され、後漢鏡であることが確認されていることから首肯されよう。全国における鏡片の出土数は約150例以上に達し、南は鹿児島県から、東は神奈川県・長野県・石川県を結ぶ地域まで波及し、分布の中枢が九州北半部にあり、東日本の出土が3例のみで、いずれも住居・溝・土坑などの生活遺構に伴う点が注目される。本資料は東日本の4例目となり、後漢鏡の東限地となる。流入経路については北陸地方との関わりが示唆される。①本資料の背・鏡面に見られる円弧形の溝状痕は竹管状の剝孔用工具の使用が示唆され、北陸地方における玉・石製品生産における穿孔方法(剝抜穿孔)と共通する点、②石川県金沢市無量寺B遺跡から双頭龍文鏡片が出土している点、③本遺跡の庄内期併行の住居址から北陸系土器が出土している点などから北陸地方經由の流入経路が想定される。庄内併行期段階は、「弥生母集落の解体・再編が著しく進行し、銅

鏡以外にも土器の広域交流など多くの物品流通に異変が生じている」との指摘があり、甲斐地域においても同様な状況が窺われる。破鏡の中で双孔を持つ例の用途については懸垂孔としての機能が考えられ、本資料にみられる一対の穿孔も同様であろう。これらの用法は、被葬者の胸部を加飾していたらしい実例として愛媛県今治市相の谷9号墓で確認されており、身体に直接装着する「首飾り」としての機能が示唆されている。破鏡については多くの研究が行われ、今日では破鏡の実像が見え始めてきている状況である。これらの成果を踏まえ、本資料を捉えると2世紀後半ごろ北部九州弥生人が手した双頭龍文鏡（焼溝漢墓編年の第6期）をさほど時間をおかず瀬戸内以東の弥生人が入手し、破鏡としてある期間伝世した後に北陸地方経由？（再度加工が施されたかもしれない）で本地域に流入し、司祭者的中小首長が集落祭祀における銅鏡祭儀に使用し、集落の廃絶に伴い居住区に廃棄したことが想定されるのではないだろうか。

第4節 中世

中世の遺構は土坑45基、地下式墳13基が確認された。遺存状況が悪く両者の区別が困難なものを土坑としたため、地下式墳の検出数は増加する可能性がある。これらの遺構の分布は調査区北側の第3・4次調査地区のA・B・C-21~38グリットの方に集中する傾向があり、明らかに縄文時代の遺構とは、占地を異にする状況が捉えられる。

地下式墳の形態はすべて竪坑1箇所、地下室が単室である。竪坑部と地下室の平面形態（a）、竪坑部の位置（b）、底面から竪坑の上場までの高さ（c）により3形式（A~C）に分けられる。A形式（3・4・7・8・9・10・11・12・13号）は、a：竪坑・地下室は円形、b：中央部、c：1.5~2m。B形式（1・2号）は、a：竪坑は方形、地下室は長方形、b：南西部、c：1.5m未満。C形式（5・6号）は、a：竪坑は長方形、地下室は円形、b：南部、c：1.5m未満である。各形式の竪坑部は遺存状況が悪いためか足掛け穴等の付属施設は確認されていない。地下室内の付属施設は唯一8号で床面にテラス状の壇が確認され、壁面の工具痕はいずれも確認されていない。伴出するとと思われる遺物は1・3・10・11・12・13号から出土している。1・3・11・13号は土師質皿形土器、内耳土器が出土しているが、いずれも小破片のため時期を判断するのは困難である。10号からは播鉢が出土し、産地は不明であるが形態的特徴より16世紀以降の所産と思われる。12号からは内耳土器が出土し、形態的特徴から15世紀後半~16世紀中葉頃に位置づけられよう。また、3・13号からは古鏡、11・12号からはやまとまって礫が確認されている。この他1・3・4・5号からは炭化物及び焼土を含む層が検出され、1・4号は覆土上層、3・5号は覆土下層に集中している。特に5号は地下室内の底部一面に灰と思われる白色粘質物と炭化物が検出され、火を焚いた痕跡が確認されている。出土遺物から10・12号は15世紀後半~16世紀前半に位置づけられよう。この他は出土遺物からの時期決定は困難であるが集中して存在する遺構の検出状況を考慮すると同時期に属すると思われる。

地下式墳の機能については諸説あり、大きくは墓塚説、貯蔵庫説に分けられる。本遺跡においては貨幣の伴出や火葬を行ったと考えられる遺構など宗教的色彩が窺えられ、墓塚説を裏づける傍証となるのではないだろうか。また、集中して構築されている状況からは墓域としての空間がここに意識されていたことが想定されよう。

第5節 近世・近代

本遺跡では明確に近世・近代に位置づけられる遺構は確認できなかったが、本報告で時期不明として扱った遺構には当該期に所属する可能性のあるものが存在している。その一つに溝状遺構が挙げられる。本遺跡で検出した溝状遺構は進行方向(a)、形態的特徴(b-1:幅、2:深さ、3:断面形)、覆土堆積状況(c)、底部状況(d)、遺物出土状況(e)等により大きく3形式(A~C)に分けられる。A形式(5・6・7・8・19・35号)は、a:東-西方向、b-1:1~4m、2:1~2m、3:底幅の狭い逆台形、c:多層で礫層がある、d:凹凸が激しく、多数のピットがある、e:縄文~中世の土器片が多量に出土。B形式(2・4・17・27・28・36・37・42号)は、a:東-西方向、b-1:0.5~1m、2:0.3~1m、3:逆台形・皿状、c:少層で礫層があるものとないつものがある、d:凹凸がある、e:縄文~近代の土器片少量出土。C形式(10~16・18・20~23・29~31・33・34・38~41号)は、a:東-西、南-北方向、b-1:0.1~0.5m、2:0.1~0.5m、3:逆台形・皿状、c:単一層で礫層がない、d:平坦、e:僅かに出土。これらの形式別の様相からは形式差が機能の違いを示唆していることが捉えられる。すなわち、A形式は構築状況及び水性堆積状況より水路としての機能が考えられる。B形式は現状の土地区画の線と一致する検出状況より、土地の境界線としての機能が考えられる(第1図、図版7-53)。また、B形式の中には水性堆積状況が確認され水路等の機能をもつと考えられるものも存在し、水路が土地の境界線としての役割も果たしたことが窺われる。土地境界線と考えられる溝状遺構は本遺跡と同じく柳形町に立地するセツ打C遺跡でも1条確認されている。C形式は水性堆積状況が認められず、A・Bとは異なる機能が想定されるが現状では不明である。各形式の所産時期は覆土内から土器、石器、古銭等が出土しているが、いずれも縄文時代~近世という時間幅があり、時期決定は困難な状況であるが、A形式は享保20(1735)年の絵図面に描かれている市之瀬台地上の開発に伴う用水路の可能性があり、B形式はセツ打C遺跡で出土遺物から18世紀末以降に比定されており、本遺跡のB形式も同時期に位置づけられよう。今回の調査により市之瀬台地における近世・近代像が僅かではあるが明らかになってきている。今後は考古学的資料の検討を行うとともに、民俗学的資料や文献資料との研究を通して近世・近代の実相を解明していきたい。

注

- 1) 中山誠二 1993 「甲斐弥生土器編年の現状と課題-時間軸の設定-」 【研究紀要9】
山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 2) 小林健二 1993 「外来系から在来系へ-甲斐のS字壺の変遷-」 【研究紀要9】
山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

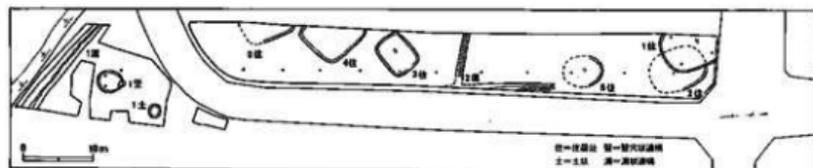
付篇1 第1次調査概要報告

第1次調査(昭和63年度)は、調査区南側の緩傾斜地帯の長さ80m、幅約10mの範囲(約800㎡)において実施された。南縁辺部は漆川による深い沢が開析し、比高差20m余りの急崖となっている。調査により検出された主な遺構は縄文時代中期の土坑1基、竪穴状遺構1基、後期の土坑1基、弥生時代後期終末から古墳時代初頭の住居址6軒、時期不明の溝状遺構3条などであり、遺物は遺構に伴う当該期の土器や石器のほか、遺構外から縄文時代後期を主体とする土器群がまとまって検出されている。ここでは縄文時代の土器群を中心に報告することとし、調査の経過及び方法については第1章第1節を、縄文時代の石器(No53~59)及び弥生時代後期終末~古墳時代初頭の土器群(No60~69)については第4章をそれぞれ参照して頂きたい。

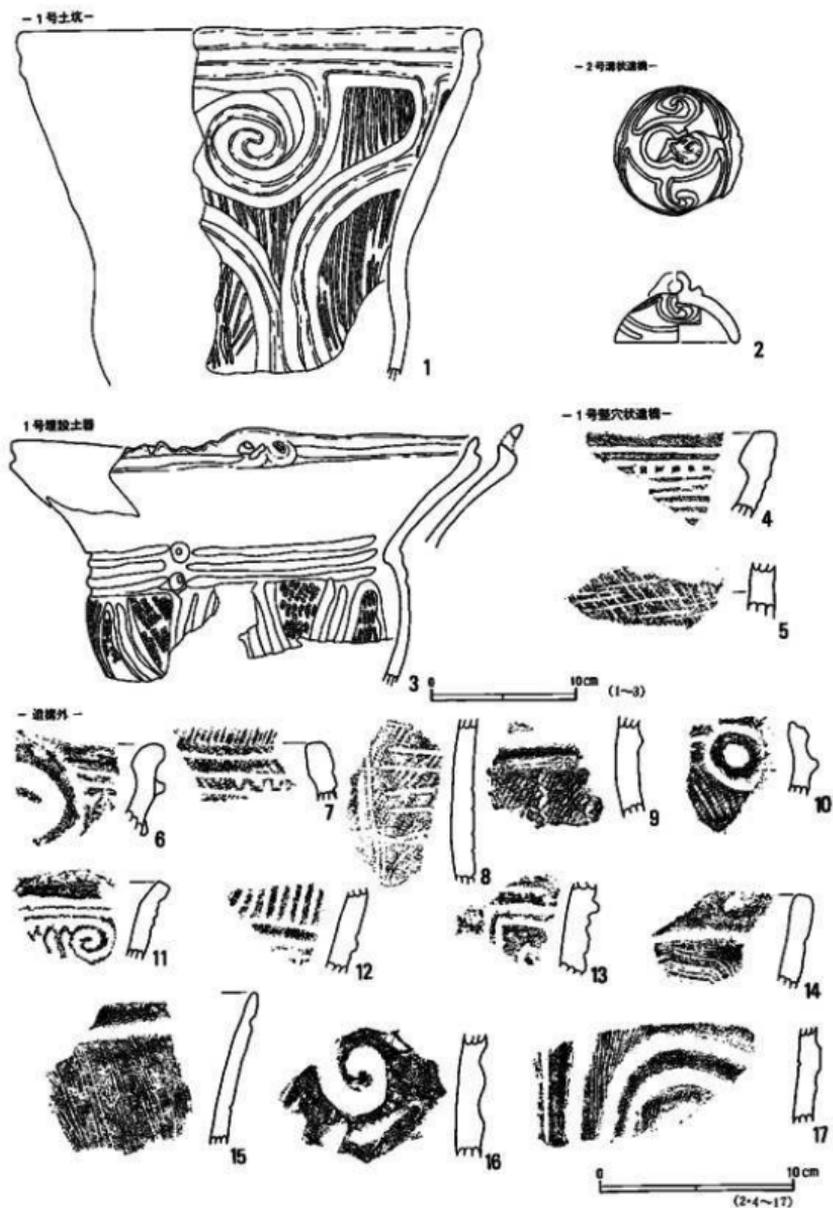
縄文時代の中期土器(第I群)は五領ケ台式~中期末葉の土器が出土し、調査区内全体に分布しているが、出土量は後期に比して少ない。該期の遺構は1号土坑、1号竪穴状遺構がある。No4~9は口縁部に沈線に沿った交互の鋸歯状刺突文や胴部に結節縄文が縦位施文され五領ケ台Ⅱ式新相に、No10~13は角押文が主体であり猪沢式に、No14~19は低い隆線や櫛歯状工具による縦位、縞杉状条線が施文それ曾Ⅳ式に、No20~22は沈線によるモチーフ内を縄文が充填され中期末葉に、No23は縦位沈線間をL R縄文を縦位に施文され加曾ⅤⅢ式にそれぞれ属すると思われる。その他、有孔鈎付土器(No24)も出土している。

後期土器(第Ⅱ群)は称名寺式~堀之内式が出土し、本遺跡において最も該期の遺物が集中して分布している。量的には堀之内Ⅰ式が中心である。該期の遺構は2号土坑、1号埋設土器があり、後者からは堀之内Ⅰ式の好資料(No3)が出土している。No25~30は渦巻文やJ字文のモチーフが沈線により施文され、内部に縄文が充填され称名寺Ⅰ式に、No32~34はJ字文のモチーフが描かれ、内部に円形や列点状の刺突が多用され、口唇部の一部に貼付文や沈線文があり称名寺Ⅱ式に属すると思われる。僅かであるが中津系土器(No25)もみられる。No3・31・35~47は口唇部に沈線文または刺突文が施文され、頸部に強いくびれをもつ鉢や直線的に立ち上がる深鉢であり堀之内Ⅰ式に属するものと考えられる。No44~46は下北原系土器であろう。その他、後期に属すると思われる蓋(No2)も出土している。

晩期土器(第Ⅲ群)は水式が出土しているが、量的に極めて少ない。No49~52はいずれも口縁部破片で器種は不明確であるが口縁内外に数条の平行沈線をめぐらすものや口縁端部が外反し、口縁直下から浮線文による網状文を施すものなどがあり、水Ⅰ式の最新相段階に比定されると考えられる。

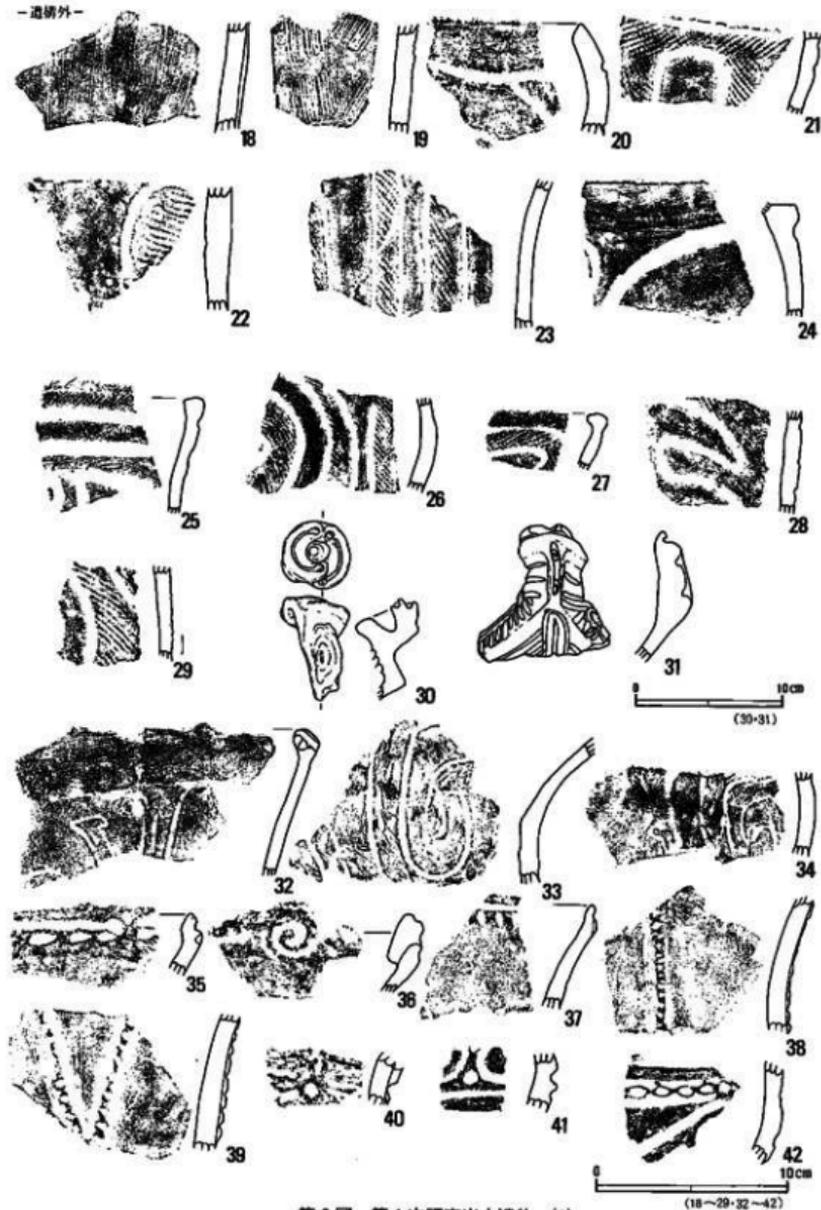


第1図 第1次調査遺構配置図

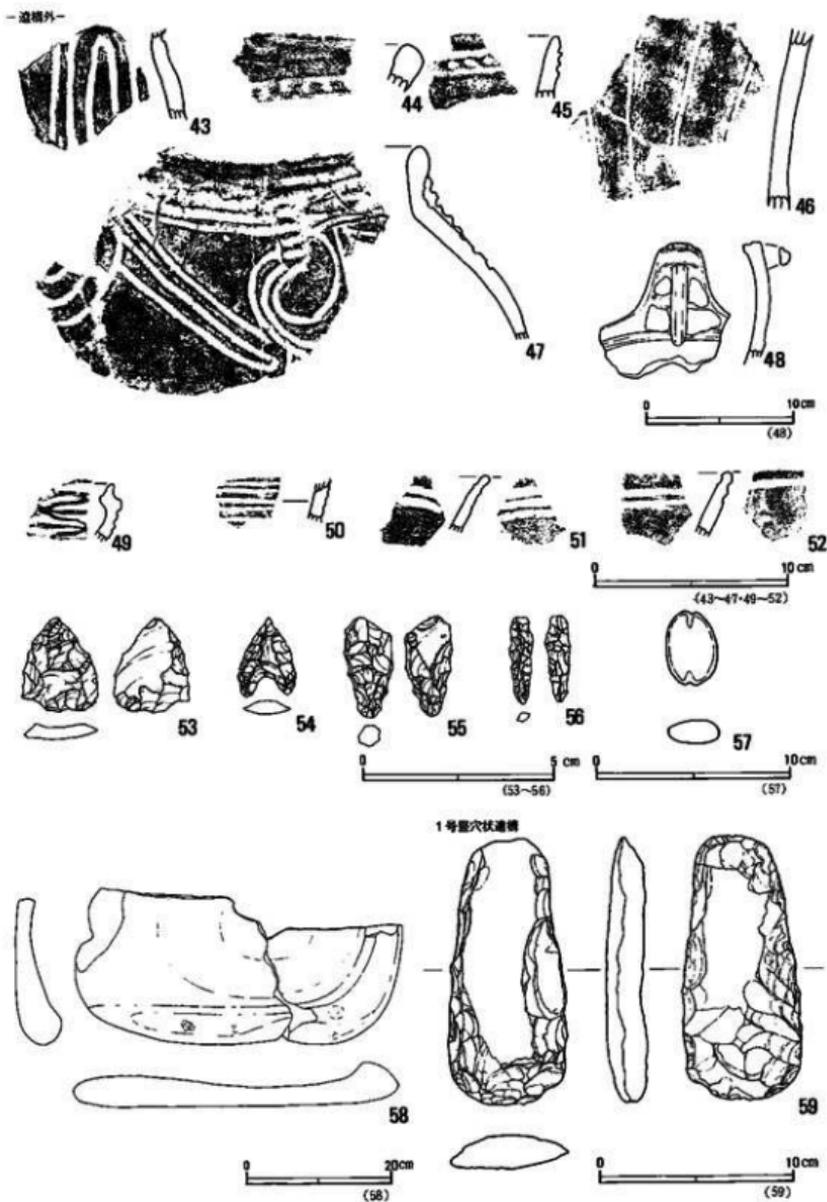


第1圖 第1次調査出土遺物 (1)

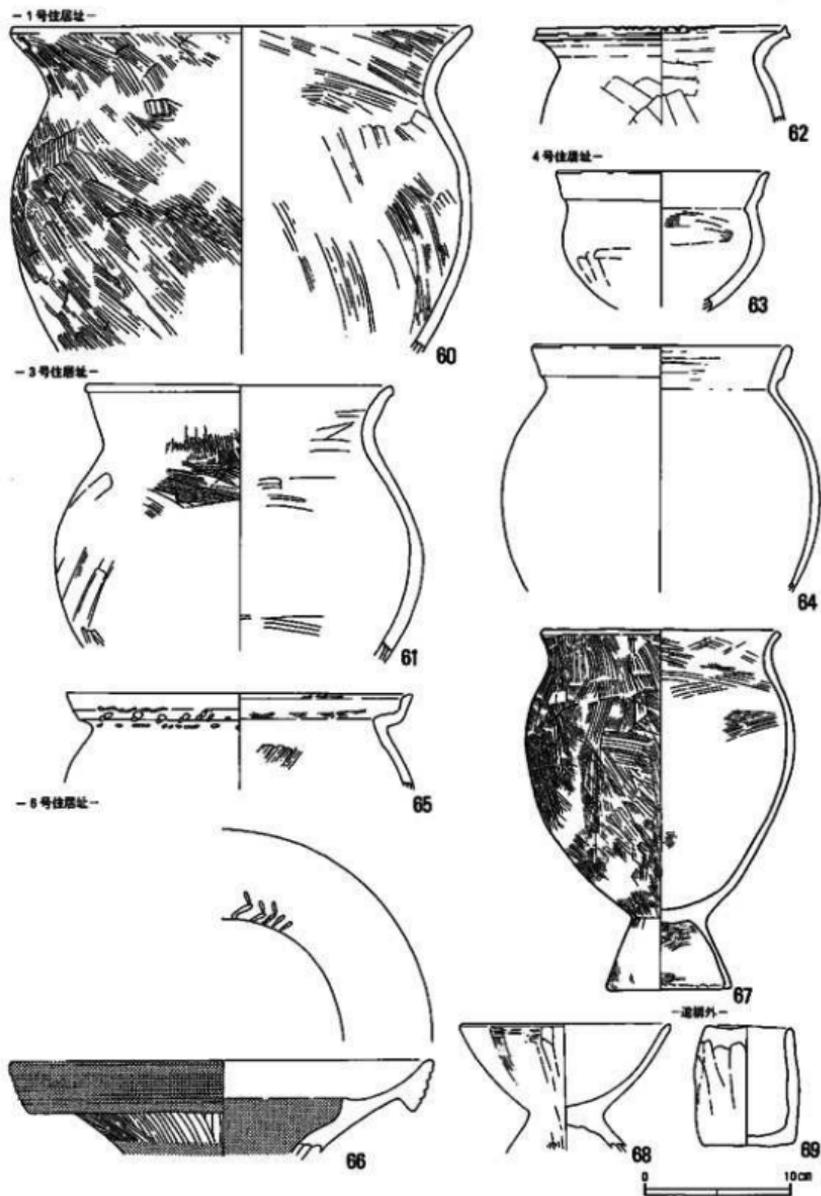
—透視外—



第2圖 第1次調査出土遺物 (2)



第3圖 第1次調査出土遺物 (3)



第4図 第1次調査出土遺物 (4)

付篇 2 山梨県長田口遺跡から出土した銅製品の自然科学的調査

東京国立文化財研究所
保存科学部
平尾良光
瀬川富美子

1. はじめに

山梨県埋蔵文化財センターの依頼により、山梨県長田口遺跡出土の銅製品1点について科学的調査を行う機会を得た。そこで化学組成と鉛同位体比を測定し、この資料に関する自然科学的な考察の一助とした。

2. 資料

長田口遺跡出土の銅製品(図版16-31)は漢式鏡の破片を利用した垂飾品である。重さは約34.6g、黒色で光沢をもち、表面はなめらかである。もとの鏡の直径は約106mmと推定される。

3. 分析方法

本資料の化学組成を蛍光X線分析法で測定した。これは資料を破壊することなく、迅速に分析できるからである。また銅材料の特徴を明らかにするため鉛同位体比も測定した。

4. 蛍光X線分析

4-1 測定条件

蛍光X線分析法は試料にX線を照射するだけで、非破壊的に分析できるので文化財の調査には好都合である。測定にはフィリップス社製 波長分散型 蛍光X線分析装置 PW1404LS を用いた。機器にはスカンジウム管球を用い、60kV・50mA の出力で一次X線を発生させた。この一次X線を試料に照射し、試料を構成する元素から二次X線を放出させた。二次X線のエネルギーとその強度は元素の種類と含有量によって異なるので、フッ化リチウムの結晶でこれを回折させ、X線強度のスペクトルを得た。分散角度から元素の種類、X線強度から元素量に関する知見を得た。¹⁾

4-2 結果

蛍光X線分析法で測定されるのは表面の化学組成であり、表面の状態(形、錆の状態)などによって同じ化学組成でも放出されるX線の強度に違いが出ることがある。また金属の表面と内部とで化学組成が異なる場合があるという条件を考慮しながら分析結果を以下にまとめた。

測定された蛍光X線スペクトル図を図1で示した。これらは全体像のa図と、縦軸を拡大したb図で表した。これらのスペクトル強度を表1としてまとめた。いずれも元素から放出されるX線強度を銅を100とした相対強度で表した。

表1 長田口遺跡出土の銅製品が示す蛍光X線スペクトル強度

資料名(分析番号)	元 素								
	銅	亜鉛	マンガン	銀	スズ	鉄	鉛	ビスマス	ヒ素
銅製垂飾品 (FL 127)	100	3.1	-	2.9	410	1.4	34	-	-

- 1) XFL、FLは東京国立文化財研究所の分析番号
- 2) 銅K α (角度で45°)のX線強度を100とする
- 3) 「+」はわずかではあるが元素の存在が確認されたピーク
- 4) 「-」は検出限界以下のピーク

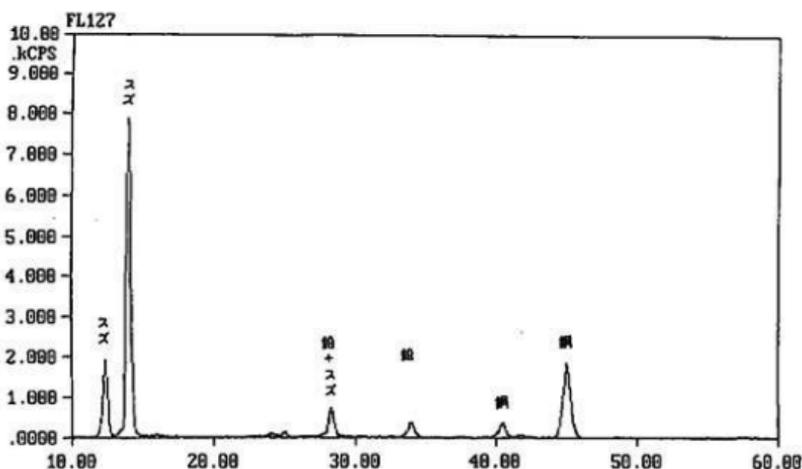


図1a 長田口遺跡出土銅製品の蛍光X線スペクトル図

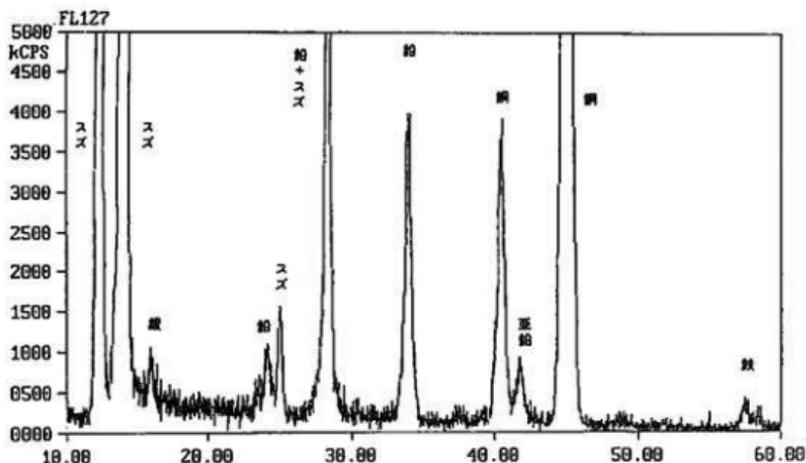


図1b 長田口遺跡出土銅製品の蛍光X線スペクトル図 (aの拡大図)

4-3 所見

本試料は銅、スズ、鉛を主成分とする鉛入り青銅であり、銀、亜鉛、鉄が不純物として微量ではあるが含まれていた。ここで注目されるのはスズが銅に対して4倍もの強度を示したという点である。これはなんらかの理由でスズが表面に濃縮したためか、あるいは銅が失われたためと考えられる。そしてそのスズが酸化し、二酸化スズとなったためにこの資料に特有の黒となり、磨かれて光沢のある表面になったと考えれば説明がつくかもしれない。

5. 鉛同位体比分析

5-1 鉛同位体比の測定法

測定に必要な資料は約1mg程度で充分である。この資料を石英製のピーカーに入れ、硝酸で溶解し、蒸留水で希釈した。この溶液を白金電極を用いて2ボルトで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。これを硝酸と過酸化水素水で溶解し、希釈した。0.2μgの鉛をリン酸-シリカゲル法で、レニウムフィラメントに載せ、VG社製の全自動表面電離型質量分析計、Sector-Jに装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛 NBS-SRM-981 で規格化し、測定値とした。"

5-2 結果

得られた結果を表2で示した。これらの鉛同位体比の値を図2 (横軸を $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、縦軸を $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ としたA式図)と図3 (横軸を $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、縦軸を $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ としたB式図)で示

表2 長田口遺跡出土の銅製品が示す鉛同位体比

	$\frac{^{204}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{208}\text{Pb}}$	$\frac{^{204}\text{Pb}}{^{208}\text{Pb}}$
銅製垂飾品 (CP-457)	18.237	15.688	38.775	0.8602	2.1261
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

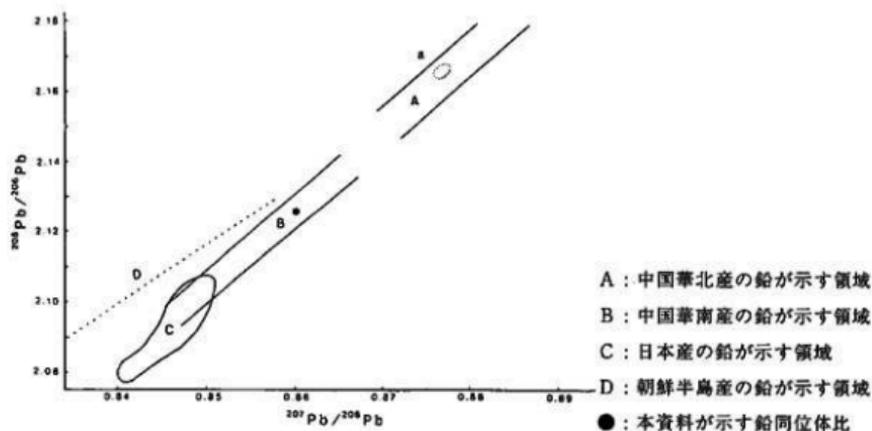


図2 長田口遺跡出土銅製品の鉛同位体比 (A式図)

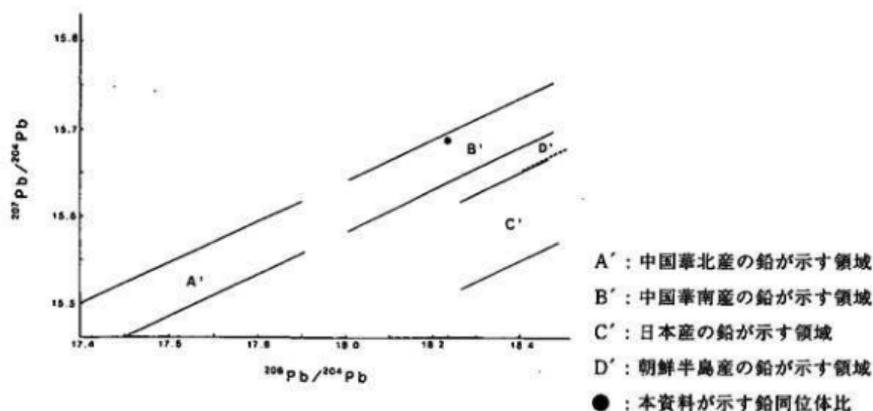


図3 長田口遺跡出土銅製品の鉛同位体比 (B式図)

した。図2では今までの測定から東アジアにおける鉛同位体比の値は地域ごとにそれぞれ特徴的な値を示し、A、B、C、Dのように区分できる。すなわちAは中国華北産、Bは華南産、Cは日本産、Dは朝鮮半島産の鉛領域である。ただし、朝鮮半島産の鉛の領域は一本の直線上に全ての測定値がくるわけではなく、上下にばらつく。またaは古代の遺物のなかでも弥生時代後期の銅鐻が集中する領域である（おおまかな時代とすれば、A領域には日本の弥生時代の、B領域には古墳時代の遺物が含まれることが分かっている）。図3ではA'、B'、C'、D'領域が、それぞれ華北、華南、日本、朝鮮半島の鉛である。

5-3 所見

測定は図2と図3の中で(●)で示した。いずれの図も資料がB(B')領域に含まれるということ、つまり華南産の鉛であり、後漢・三国鏡と同一であるということを意味している(前漢鏡の場合は領域Aに含まれる)。

6. 考察

今回の化学組成の調査から材料は鉛入り青銅製であるということが分かった。また鉛同位体比の測定では華南産の材料が利用されていることが分かった。漢式鏡の中で獸首鏡、位至三公鏡などの夔鳳鏡系統の鏡は後漢後期に作られたとされており、B領域に分布することが知られている。それ故、この鏡も後漢時代に製作されたこれら鏡と考えられる。

いずれにせよ、今回の資料は弥生時代の遺跡の少ない山梨県にあって弥生時代の銅製遺物が自然科学的な方法によって確認された点で重要であるといえよう。

引用文献

- 1) 平尾良光・榎本淳子(1993)、文化庁への報告、第27号
- 2) 馬淵久夫・平尾良光(1982)、鉛同位体比からみた銅鐻の原料；考古学雑誌、68、42-62
- 3) 馬淵久夫・平尾良光(1983)、鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)；Museum, No.382,

16-26

付篇3 櫛形町長田口遺跡のテラフ分析

山梨文化財研究所

河 西 学

1. はじめに

長田口遺跡は甲府盆地西縁の市之瀬台地上に位置する。フッサマグナ西縁の市之瀬台地は活断層が盆地側と山地側に分布する構造地形である。(活断層研究会,1980; 沢,1981)。市之瀬台地の地形については崎田(1961)・甲府盆地第四紀研究グループ(1969)・沢(1981)などの研究がある。この地域は御岳火山の東方にあたり、御岳第一軽石Pm-I(小林ほか,1967)が厚さ1m以上で分布し良好な鍵層となっているが、風化火山灰層の保存があまり良好ではなくその他のテフラは肉眼ではほとんど認め見られない。

本遺跡は甲府盆地第四紀研究グループ(1969)の伝嗣院面、沢(1981)のII面にのる。この地形面は深沢川礫層(甲府盆地第四紀研究グループ,1969)によって構成されており、本礫層下部には厚さ約10mmの砂礫混じりPm-Iが挟在される。

本遺跡断面において顕著なテフラ層は肉眼で認められない。断面は、最大粒径90cmで一般には拳大~人頭大の緑色に変質した火山岩礫からなる礫層が最下部にあり、その上位に褐色の砂質の風化火山灰質土層が約1.5mの厚さで重なり、上位に厚さ約90cmの暗褐~黒褐色土が堆積している。この褐色風化火山灰質土層中からは黒曜石製ナイフ形石器が出土している。以下に本遺跡断面でのテフラ分析結果について報告する。

2. 試料・分析法

試料は、A・B地点の断面において高さ5cmおきに高さ5cm、幅10cm、奥行5cmの直立体部から試料を採取した(第1図)。A地点では、地表から褐色ローム層上面までの土層を削りとった後1.5mを越える深さの深掘りをして礫層に達している。本遺跡では暗色帯は明瞭ではない。B地点では、地表から褐色ローム層最上部までの断面が露出する。

分析法は従来(河西,1990a・1990b)と同様である。また屈折率の測定は新井(1972)の方法にしたがった。

3. 分析結果

偏光顕微鏡下での計数結果を第1表に示す。これをもとに粒径組成、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成、形態別の火山ガラス含有量および重鉱物組成を第1図に示す。なお形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの1/4~1/16mm粒径の火山ガラスの割合で表示した(注1)。また屈折率測定値を第2表に示す。

A地点

上部のNo 7-1では平均19%前後(15-21%)の安定した値を示す。カンラン石は風化粒子も含まれるが新鮮な結晶は透明で自形を示しテフラ起源と考えられる。赤色風化カンラン石はNo 4付近から上方に増加する傾向がある。斜方輝石は11-19%と比較的安定した値を示す。単斜輝石はNo 13の20%を最大にNo 14-10では10%以上を占めるが、より上位では数%以下に減少する。不透明鉱物は、下部で10%台と低率でありNo 11の10%を最小値として上方に漸増し、最上部のNo 1では31%を占める。角閃石は緑褐色普通角閃石がほとんどで5-11%含有される。そのほか緑簾石・ジルコンなどが検出された。

B地点

粒径組成における1/4-1/16mm砂分は4-8%、>1/4mm砂分はNo 4で13%とやや多いが他は2-6%である。

火山ガラス、軽・重鉱物組成では、火山ガラスがNo 7の23%を最大に上方に緩やかに減少する。軽鉱物は55-66%の値を示す。重鉱物はNo 7で17%を示し、上方にやや増加してNo 1では30%を占める。

形態別の火山ガラス含有率は、No 7でA・A'型無色火山ガラスがそれぞれ最大値0.20%、0.64%を示し上方に漸減する。No 7での火山ガラスの屈折率は1.498-1.501(主要レンジ1.499-1.500)であり、これらの火山ガラスはATに対比される。B・C・F型火山ガラスは微量ながら連続的に検出される。特にF型火山ガラスは、No 3において0.11%の小ピークを示し上方に漸減するが、発泡の良好なものや不良のものが混在しており複数のテラフに由来する火山ガラスの混在が考えられる。発泡良好な火山ガラスの一部はカワゴ平軽石に由来する可能性があるかもしれない。

重鉱物組成では、下位のA地点より組成変化は緩やかである。不透明鉱物が31-40%ともっとも多く、ついで雲母が8-25%含有される。緑泥石は1-11%とA地点より減少する。カンラン石は急減してNo 7-6では1%にすぎず、No 5-3で5-8%と若干増加するがNo 2-1では1-3%と再び減少する。斜方輝石はNo 4の25%を最大に10-19%の値を示す。単斜輝石は4-18%、角閃石は3-11%それぞれ含まれる。緑簾石は1-5%と少量ながら連続して検出される。

ATの降灰層準

ATの火山ガラスが褐色ローム層最上部のA地点No 1およびB地点No 7-1(最下部のNo 7に濃集)で検出されている。前述したカンラン石の含有率の変化からA地点No 1のほうがB地点No 7よりも下位に推定され、両者間には層位の重複はない。ただ発掘現場の観察から両者の層位はほとんど同一と考えられる。A地点No 1とB地点No 7の間にそれ以上の火山ガラスの濃集が存在する可能性はあるが、その場合でもA地点No 1とB地点No 7間の層位的な差は後述するカンラン石の含有率変化とAT層準との関係から僅少であると考えられる。これらのことから本遺跡におけるAT降灰層準はA地点No 1とB地点No 7の中間付近、あるいはよりA地点No 1に近い層準に推定することができる。

鉱物組成からみた風化火山灰層の起源

カンラン石が下位から上部にかけて連続的に検出された。御岳テラフの厚く分布する伊那谷地域や八ヶ岳南麓地域ではカンラン石の含有はきわめてまれであり、本遺跡のようなカンラン石含有傾向は報告されていない。これに対し曾根丘陵のPm-I以上の褐色風化火山灰層では重鉱物組成中20~30%のカンラン石が含まれている。さらにその含有はAT直下の黒色土層中で最大になり、南関東地域の立川ローム層中の変化傾向と類似している(河西,1990a)。本遺跡A地点No.1付近でカンラン石が多産し直上にAT層準が推定されることは曾根丘陵でのそれと対比し得る。曾根丘陵・南関東地域との鉱物組成の類似から、本地域のカンラン石は富士火山からのテフラによってもたらされたと推定される。従来富士テフラの影響が北側あるいは西側にどれほど及んでいたかについて不明瞭の部分も多かったが、今回の分析によって富士火山テフラの降灰が連続的に甲府盆地西縁部までにおよんでいたことが明らかになった。

さて、本地点での堆積物は、 $>1/4\text{mm}$ 、 $1/4\sim 1/16\text{mm}$ において緑色変質した火山岩類が多く含有されることが特徴である。これは試料採取断面で褐色ローム層中に点在する細礫のほとんどが緑色に変質した火山岩類であることも対応する。これらの変質火山岩類は、顕微鏡下で「その他」に分類されている。現在の深沢川・市之瀬川の河川堆積物の岩石鉱物組成は、変質火山岩類が極めて多く両輝石・緑簾石・不透明鉱物を伴う点で今回の結果と類似性が高い(河西,1989)。両河川上流域の巨摩山地には、緑色変質した火山岩類を主体とする新第三系が広く分布している。したがって本地点堆積物のうち「その他」・緑簾石・緑泥石のかなりの部分、および両輝石・不透明鉱物の一部は新第三系からの碎屑物に由来する可能性が高い。河川堆積物中では検出がまれであったこれら以外の鉱物のうちカンラン石・火山ガラスの大部分、および両輝石・角閃石・雲母・長石の一部は、再堆積の場合もあるがテフラの降灰によるものと推定される。カリ長石や波動消光を示す石英が比較的多くどの試料にも含まれ、まれに花崗岩類が微量検出される。近傍には花崗岩体の分布はないが、上記河川堆積物中にもわずかに石英・カリ長石・花崗岩類が検出されている。これら粒子の給源を巨摩山地の新第三系だけに求めるかは不明である。

市之瀬台地では、Pm-I以前から巨摩山地前縁の扇状地として深沢川礫層が堆積し、伝副院面の離水後も新第三系から供給された碎屑物と降下テフラとの混交によって褐色ローム層が形成されている。ただし離水後の新第三系からの堆積物供給量は、堆積物の上方への細粒化傾向、および重鉱物組成における緑泥石の上方漸減傾向などから、時代とともに漸減している可能性が考えられる。

注1 形態x型の火山ガラスの含有率 A_x は、

$$A_x (\%) = (C/B) \times (Ex/D) \times 100$$

で算出される。ただし、

B: 試料の乾燥重量 (g) C: $1/4\sim 1/16\text{mm}$ 粒径砂分の重量 (g)

D: 計数した $1/4\sim 1/16\text{mm}$ 粒径粒子の総数 Ex: 計数したx型火山ガラスの粒数

文献

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフクロロジーの基礎的研究—。第四紀研究、11、254—269。

河西学 (1990a) 立石遺跡での先土器遺物を包含する地層。山梨県立考古博物館研究紀要、6、47—58。

河西学 (1990b) 長坂町中込遺跡試料のテラフ分析。『中込遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告、52、36—40。

活断層研究会 (1980) 『日本の活断層—分布図と試料』。東京大学出版会、363p。

小林国男・清水英樹・北沢和男・小林武彦 (1967) 御嶽火山第一浮石層の研究その1—。地質学雑誌、73、291—308。

甲府盆地第四紀研究グループ (1969) 甲府盆地の第四系。地団研専報、15、254—258。

町田洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—。科学、46、339—347。

崎田竜二 (1961) 市之瀬台地。『辻村太郎先生古稀記念地理学論集』古今書院、100—106。

沢洋 (1981) 甲府盆地西縁・南縁の活断層。地理学評論、54—9、473—492。

別表1 土器分類表

第1表 長田口遺跡出土の縄文土器分類表

分類(群-類-種)		分類(群-類-種)		
第1群 中層	1類 五稜ケ台式	第1群 後期	1類 標名寺式	
	2類 釜沢式		a: 標名寺Ⅰ式	
	3類 新近式		b: 標名寺Ⅱ式	
	4類 藤内式		2類 藤内Ⅰ式	
	5類 井戸沢式		3類 中層系	
	6類 曹利式		4類 下北原系	
	a: 曹利Ⅰ式	第2群 晩期	1類 水式	
	b: 曹利Ⅱ式		第3群 晩期	各群に分類できない時期不明土器
	c: 曹利Ⅲ式			
	d: 曹利Ⅳ式			
	e: 曹利Ⅴ式			
	7類 加賀利Ⅲ式			
a: 加賀利ⅢⅠ式				
b: 加賀利ⅢⅡ式				
8類 中層系				

分類には、上位の基準から下位に向かって、「群」、「類」、「種」として表す。群は時期、類は大別形式、種は細別形式を示す。

別表2 遺物観察表

① 土器

(1) 縄文時代

第2表 7号住居址出土 土器観察表

群	類	分類	文	備
9-1	10-2	1-1	内坪式による文様彫刻。砂粒多い。	
9-2	10-2	1-2	口縁部彫刻。砂土砂粒多い。	
9-3	10-2	1-2	口縁部による文様彫刻。	
9-4	10-2	1-2		
9-5	10-2	1-6-d	口縁部一帯の縁部のみをなす。	
9-6	10-2	1-6-d	手取竹管内面による条線。	
9-7	10-2	1-6-d	磨製工具による条線。	
9-8	10-2	1-6-g		
9-9	10-2	1-6-g	磨製工具によるハの字文。	
9-10	10-2	1-6-g	磨製工具によるハの字文。	
9-11	10-2	1-6-g		
9-12	10-2	1-6-c		
9-13	10-2	1-7-a	口縁部彫刻式。	
9-14	10-2	1-8	口縁部彫刻式。	
9-15	10-2	1-8	口縁部彫刻式。	
9-16	10-2	1-8	口縁部彫刻式。	
9-17	10-2	1-8	磨製条線。	
9-18	10-2	8-1-a	口縁部彫刻式。	
9-19	10-2	8-1-a	口縁部彫刻式。	
9-20	10-2	8-1-a	口縁部彫刻式。	
9-21	10-2	8-1-a	口縁部彫刻式。	
9-22	10-2	8-1-a	口縁部彫刻式。	
9-23	10-2	8-1-b	口縁部彫刻式。	
9-24	N			
9-25	N			
9-26	I		口縁部彫刻式。	

第3表 8号住居址出土 土器観察表

群	類	分類	文	備
12-1	10-5	1-2	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式。	
12-2	10-5	1-1	口縁部彫刻式。口縁部彫刻式。	
12-3	10-3	1-3	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式。	
12-4	10-3	1-3	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式。	
12-5	10-2	1-1	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式。	
12-6	10-3	1-3	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式。	
12-7	10-3	1-3	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式。	
12-8	10-3	1-3	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式。	
12-9	10-3	1-3	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式。	
12-10				
12-11	10-3	1-1	口縁部彫刻式。	
12-12	10-3	1-2	口縁部彫刻式。	
12-13	10-3	1-2	口縁部彫刻式。	
12-14	10-3	1-2	口縁部彫刻式。	
12-15	10-2	1-2	口縁部彫刻式。	
12-16	10-2	1-2	口縁部彫刻式。	
12-17	10-2	1-2	口縁部彫刻式。	
12-18	10-3	1-2	口縁部彫刻式。	
12-19	10-3	1-2	口縁部彫刻式。	
12-20	10-3	1-2	口縁部彫刻式。	
12-21	10-3	1-2	口縁部彫刻式。	
12-22	10-3	1-2	口縁部彫刻式。	
12-23	10-2	1-2	口縁部彫刻式。	
12-24	10-3	1-2	口縁部彫刻式。	
12-25	10-2	1-2	口縁部彫刻式。	
12-26				
12-27	10-3	1-7-a	口縁部彫刻式。	
12-28	10-3	1-6-g	口縁部彫刻式。	
12-29	10-3	1-6-g	口縁部彫刻式。	
12-30	10-3	1	口縁部彫刻式。	
12-31	10-3	8-1-b	口縁部彫刻式。	
12-32	10-3	8-2	口縁部彫刻式。	
12-33	10-3	N	口縁部彫刻式。	

第4表 9号住居址出土 土器観察表

群	類	分類	文	備
15-1	10-4	1-2	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-2	10-4	1-2	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-3	10-4	1-1	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-4	10-4	1-1	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-5	10-4	1-1	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-6	10-4	1-1	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-7	10-4	1-2	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-8	10-4	1-2	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-9	10-4	1-2	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-10	10-4	1-2	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-11	10-4	1-2	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-12	10-4	1-2	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-13	10-4	1-2	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-14	10-4	1-8	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-15	10-4	8-1-a	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	
15-16	10-4	8-1-a	口縁部彫刻式による文様彫刻。口縁部彫刻式による。	

第5表 14号住居址出土 土器観察表

群	類	分類	文	備
16-1		1-8	口縁部彫刻式。	
16-2		1	口縁部彫刻式。	
16-3		1-7-a	口縁部彫刻式。	
16-4		1	口縁部彫刻式。	
16-5		1-6-d	口縁部彫刻式による条線。	
16-6		1-6-g	口縁部彫刻式による条線。	

第6表 3号土坑出土 土器観察表

群	類	分類	文	備
17-1	11-7	1-2	口縁部彫刻式。	
17-2	11-7	1-4	口縁部彫刻式。	
17-3	11-7	1-6-g	口縁部彫刻式による文様彫刻。	
17-4	11-7	1-6-g	口縁部彫刻式による文様彫刻。	
17-5	11-7	8-1-b	口縁部彫刻式による文様彫刻。	
17-6	11-7	8-1-b	口縁部彫刻式による文様彫刻。	
17-7	11-8	8	口縁部彫刻式による文様彫刻。	

第7表 7号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
40-1			1-6-a		

第8表 8号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
19-1			1-1	耳土器文様貼付文。	
19-2			1-6-a		
19-3			耳	部分破損に破断。	

第9表 10号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
20-1	11-8		1-6-c		
20-2	11-8		1-6-a	磨面状工具による磨面。	
20-3	11-8		1-6-c		
20-4	11-8		1-6-a		
20-5	11-8		1-6-a		

第10表 12号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
21-1	11-10		1-6-a	同層位の層分層区画。磨面は二次磨面を受ける。	
21-2	11-9		1-6-a		
21-3	11-9		1-6-a		
21-4	11-9		1-7-b	耳土器文様貼付文。内側に磨面。	
21-5	11-9		1-7-b	磨面区による文様貼付文耳土器文。	
21-6	11-9		1-7-b	磨面区による文様貼付文耳土器文。	
21-7			1-7-b	磨面区による文様貼付文耳土器文。	
21-8	11-9	8-2	1-7-b	1-7-b区画内。	
21-9	11-9	耳	耳	耳土器文様貼付文手取管による磨面区画。	

第11表 13号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
22-1	11-11		1-2	磨面区画より内側文様貼付文。磨面の内側文様。	
22-2	11-11		1-2	磨面区画内。	
22-3	11-11		1-2	1-2区画より磨面区画に磨面。	

第12表 15号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
23-1	11-12		1-6-c		
23-2	11-12		1-6-a	磨面状工具による内側の磨面。	
23-3	11-12		1-6-d	耳土器文様貼付文。	

第13表 16号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
24-1			1-2	磨面なし。	
24-2			耳		

第14表 17号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
25-1			1-1	耳土器文様貼付文。	
25-2	11-13		1-6-a	磨面状工具による内側の磨面。二層区画の磨面区画より手取管。	

第15表 19号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
26-1	11-14		1-6-d	磨面状工具による内側の磨面。	
26-2	11-14		1-7-b	耳土器文様貼付文。	
26-3	11-14		1-8		

第16表 22号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
27-1	11-9		1-4	磨面区画より内側の磨面区画。	
27-2	11-9		1-4	磨面状工具による内側の磨面区画。P4a区画。	
27-3	11-9		1-4	磨面に交互磨面。磨面区画。	

第17表 23号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
28-1			1-6-a		
28-2			1-6-a	手取管に磨面によるP4の磨面。	

第18表 24号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
27-1			1-8	磨面区画より内側文様貼付文。	
27-2			1-6-a	内側磨面。	

第19表 25号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
27-1			1-6-a	内側磨面。	
27-2			耳	内側。	
27-3			1-6-a		

第20表 35号土坑出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
33-1			1-6-d	磨面状工具による磨面。	

第21表 1号集石出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
29-1	12-15		1-1	磨面。内側に耳土器文様貼付文。	
29-2	12-15		1-1	磨面に耳土器文。	
29-3	12-15		1-1	磨面に耳土器文。	
29-4	12-15		1-1	磨面に耳土器文。	
29-5			1-1	磨面。	
29-6			1-1	磨面。	

第22表 2号整穴状遺構出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
21-1			1-1		
21-2			1-7-b		

第23表 2号埋設土器出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
22-1			1-6-d	埋設区画内より磨面状工具による磨面。	

第24表 5号溝状遺構出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
35-1			1-5	磨面区画の磨面に埋設区画を貼付。	
35-2			1-2	磨面に磨面区画より内側文様貼付文。	
35-3			1-6-a		
35-4			1-7-b	耳土器文様貼付文。	

第25表 6号溝状遺構出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
37-1			1-4	磨面区画の磨面。	
37-2			1-6-a	磨面区画の磨面。	
37-3			1-7-b	耳土器文様貼付文。	

第26表 7号溝状遺構出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
119-13			1-6-a		
119-14			1-6-a		
119-15			1-6-a	手取管による磨面区画。	
119-16			1-6-a		

第27表 8号溝状遺構出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
129-1			1-5		

第28表 22号溝状遺構出土 土器観察表

群	坑	層	分類	文	備
125-1			1-6-a	磨面状工具による磨面。	

第29表 第2次調査 遺構外出土 縄文時代 土器観察表

群	層	出土地点	分類	文	備
59-1	12-16	C-13	1-2	腹面に沿って縦に細い条状文。腹面直上。	
59-2	12-16	B-12	1-2	腹面に沿って縦に細い条状文。	
59-3	12-16	B-12	1-2	腹面の中央2/3を占める区画。1条の縦文が約1/3。	
59-4	12-16	A-13	1-2	腹面に沿って連続的縦文と三角文が施される。	
59-5	12-16	伊賀神社	1-4	腹面に沿って連続的縦文と縦線が施される。	
59-6	12-16	B-20	1-6-a	平面的な帯による縦線が施される。	
59-7	12-16	伊賀神社	1-6-d	腹面に沿って連続的縦文と縦線が施される。	
59-8	12-16	伊賀神社	1-6-d	此類による区画に連続的縦文による条状文。	
59-9	12-16	伊賀神社	1-6-d	内・腹面の縦文が区画し、また腹面による縦線が施される。	
59-10	12-16	伊賀神社	1-6-d	腹面に沿って連続的縦文による縦線が施される。	
59-11	12-16	伊賀神社	1-6-a		
59-12	12-16	伊賀神社	B-2	内・腹面に沿って連続的縦文と縦線が施される。	
59-13	12-16	B-12	B-2	腹面に沿って連続的縦文による条状文。	
59-14	12-16	伊賀神社	B-1		
59-15	12-16	伊賀神社	B-1		

第30表 第3・4次調査 遺構外出土 縄文時代 土器観察表

群	層	出土地点	分類	文	備
130-1	12-17	C-3	1-6-a	物土面に沿って連続的縦文を施す。条状文は腹面直上による。	
130-2	12-17	C-4	1-6-a	4.8cmの帯による連続的縦文。条状文は腹面直上による。	
130-3	12-17	B-7	1-6-a	腹面に沿って連続的縦文による縦線が施される。	
130-4	12-17	A-10	1-6-a	腹面に沿って連続的縦文による縦線が施される。	
130-5	12-17	C-4	1-6-d	腹面に沿って連続的縦文による縦線が施される。区画による縦線が施される。	
130-6	12-17	B-3	1-6-a	口縁部直上。	
130-7	12-17	C-4	1-6-a	2本1組の垂下する内・腹面に沿って区画。	
130-8	12-17	C-4	1-6-a	垂下する條状文によって区画。区画内への字文。	
130-9	12-17	B-6	1-6-a		
130-10	12-17	B-1	1-6-a		
130-11	12-17	B-6	1-6-a	[30]に似た形状の中から確認。L形縦文と縦線が施される。	
130-12	12-17	A-7	1	L形縦文が施される。	
130-13	12-17	伊賀神社	E-1-3		
130-14	12-17	B-2	E-1-3		
130-15	12-17	A-8	E-4	下地部分。	
130-16	12-17	C-2	E-2		
130-17	12-17	A-8	E-2	帯状に施される。縦線が施される。	
130-18	12-17	B-2	E		

(2) 弥生時代～古墳時代

第31表 10号住居址出土 土器観察表

群	層	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
34	13-21	壺	口縁部 ～ 胴部	① 20.0 ② - ③ (14.3)	2/3	外面→口縁部から胴部ハケ、肩部結節のしり縄文 内面→口縁部結節のしり縄文 筋より逆し口縁	①明褐色 ②金雲母・石英・長石を含みややむい	
34	13-21	台付甕	口縁部 ～ 台部	① 14.2 ② 7.8 ③ 17.2	ほぼ 完全	外面→ハケ（不明） 内面→口縁部・台部ハケ、胴部ナデ 草履口縁。窪付蓋	①褐色（外面）、明褐色（内面） ②赤色粒子・砂粒子を多量に含む	

第32表 11号住居址出土 土器観察表

群	層	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
36	13-22	壺	口縁部 ～ 底部	① 9.0 ② 7.4 ③ 11.5	2/3	外面→ハケ（不明） 内面→ハケ後ナデ（不明） 底部木炭痕あり	①淡褐色 ②金雲母を含みややむい	
36	13-22	壺	口縁部	① (11.0) ② - ③ (4.5)	破片	外面→内面→ナデ 有段口縁	①明褐色 ②石英・長石を含み特異	
36		台付甕	接合部 ～ 台部	① - ② (11.6) ③ (7.6)	1/5	外面→台部ハケ、 内面→台部ハケ、底部ヘラケズリ	①明褐色 ②赤色粒子・金雲母・長石を多量に含む むい	
36	13-22	壺	口縁部 ～ 胴部上	① (16.0) ② - ③ (12.8)	1/5	外面→ハケ 内面→口縁部ヘラミガキ（不明） 底部ナデ	①明褐色 ②赤色粒子・石英・長石を多量に含む むい	
36	13-22	台付甕	口縁部 ～ 台部	① 15.6 ② - ③ (21.6)	1/2	外面→ハケ 内面→口縁部ハケ後ナデ、胴部ナデ	①褐色 ②金雲母・長石を含みややむい	
36	16-28	台付甕	口縁部 ～ 胴部	① 19.0 ② - ③ (4.3)	破片	外面→ナデ、肩部ハケ（面線により 不明） 内面→ナデ	①明褐色 ②赤色粒子・金雲母・長石を多量に含む むい	
36		高坏	坏部	① 24.0 ② - ③ (7.5)	1/2	内・外面→ハケ後ヘラミガキ、外面 は黒く焼けている	①褐色 ②石英を含み特異	

第33表 12号住居址出土 土器観察表

群	層	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
39	16-29	壺	口縁部	① 17.6 ② - ③ (6.7)	破片	内・外面→ハケ（不明） 有段口縁	①褐色 ②灰石・小石を含みややむい	
39	14-23	壺	胴部 下平 ～ 底部	① - ② 7.2 ③ (10.0)	1/2	外面→ヘラミガキ（不明） 内面→ハケ後ナデ 底部木炭痕（ヘラケズリのため不明）	①褐色（外面）、明褐色（内面） ②赤色粒子・砂粒子を多量に含む	
39	14-23	台付甕	口縁部 ～ 台部	① - ② 12.0 ③ (8.3)	2/3	外面→胴線により確認不可 内面→底部・台部ハケ（面線により 不明）	①明褐色 ②金雲母・長石・砂粒子を多量に含む	

第34表 13号住居址出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
41		台付甕	接合部 - 台部 - 上半	① - ② - ③ (3.9)	破片	外面-台部ハケ 内面-台部ハケ、接合部ハケ	①黄褐色 ②φ3~6mmの赤色粒子・長石を含み粗い	
41		台付甕	接合部 - 台部	① - ② (10.4) ③ (5.8)	1/3	外面-磨滅により確認不可 内面-接合部、台部ナデ	①赤褐色 ②赤色粒子・金雲母・石英を含みや粗い	
41		台付甕	接合部 - 台部	① - ② (10.0) ③ (6.9)	2/3	内・外面-ハケ(磨滅により不明)	①黄褐色 ②赤色粒子・金雲母・石英・長石を多量に含み粗い	

第35表 15号住居址出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
42		台付甕	口縁部	① (23.0) ② - ③ (4.9)	1/4	外面-ハケ、口唇部ハケ状工具による割み 内面-ハケ後ヘラミガキ	①明褐色 ②赤色粒子・金雲母・長石を多量に含み粗い	

第36表 16号住居址出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
44		甕	口縁部	① 13.0 ② - ③ (5.8)	破片	内・外面-磨滅により確認不可 単純口縁	①黒褐色 ②金雲母・石英・長石を多量に含み粗い	
44		甕	胴部 下半- 底部	① - ② 8.0 ③ (5.3)	破片	内・外面-磨滅により確認不可 底部木炭痕あり	①褐色(外面)、明褐色(内面) ②赤色粒子・砂粒子を多量に含み粗い	
44		甕	口縁部	① (18.0) ② (2.9)	破片	外面-ナデ、口唇部棒状工具による割み 内面-ナデ	①褐色 ②赤色粒子・金雲母・石英・長石を多量に含み粗い	

第37表 19号住居址出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
65		甕	口縁部	① - ② (10.2) ③ (4.0)	破片	外面-ナデ 内面-ヘラミガキ後ナデ	①赤褐色 ②赤色粒子・φ1~4mmの小石を多量に含み粗い	
65		高甕	口縁部	① (11.6) ② - ③ (2.5)	破片	外面-ヘラミガキ(不明)後ナデ 内面-ナデ 内・外面赤色塗彩	①赤褐色 ②赤色粒子・小石を含みや粗い	
65		甕	底部	① - ② 3.8 ③ (2.0)	破片	内・外面-ナデ 割れ口が隠れており、二次的に利用されたと思われる	①明褐色(外面)、明赤褐色(内面) ②砂粒子を多量に含みや粗い	
65		甕	胴部 下半- 底部	① - ② 5.0 ③ (3.7)	破片	外面-ヘラミガキ後ナデ 内面-ハケ後ナデ(不明)	①明褐色 ②赤色粒子・φ2~5mmの小石を含み粗い	
65		台付甕	接合部 - 台部 - 上半	① - ② - ③ (3.1)	破片	外面-ハケ 内面-ハケ後ナデ	①黄褐色 ②石英・長石・小石を多量に含みや粗い	

第38表 21号住居址出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
67	14-24	台付甕	口縁部 - 胎部	① (24.8) ② - ③ (7.3)	破片	外面-ハケ(磨滅により、不明)、 口唇部ハケ状工具による割み 内面-ハケ(磨滅により、不明)	①明黄褐色 ②赤色粒子・石英・長石・小石を多量に含み粗い	
67		甕	口縁部 - 胎部	① (8.4) ② - ③ (4.0)	破片	内・外面-ヘラミガキ	①明黄褐色 ②石英・長石を含み精良	

第39表 22号住居址出土 土器観察表

神田	図番	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
69	1	壺	口縁部 ～ 腹部	①21.8 ②— ③(10.2)	1/4	内・外面—ハケ(ミガキが行われたと考えられるが、磨滅により確認不可)	①黄褐色 ②赤色粒子・砂粒子を多量に含み混む	
69	2	壺	底部	①— ②(6.8) ③—	破片	磨滅により確認不可	①明褐色 ②金雲母・石英・長石・砂粒子を多量に含み混む	

第40表 24号住居址出土 土器観察表

神田	図番	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考	
73	1	15-25	壺	口縁部 ～ 底部	①19.2 ②10.0 ③33.7	1/2	外面—ヘラミガキ(磨滅により不明) 内面—腹部ハケ、底部ナデ 二重口縁部隆状突起付	①明褐色 ②赤色粒子を多量に含み混む	
73	2	14-25	壺	口縁部	①(21.8) ②— ③(3.8)	破片	外面—口縁部折り返し後棒状工具によるオサエ 内面—口縁部隆状突起付	①明褐色 ②石英・長石を多量に含み混む	
73	3	15-26	壺	口縁部 ～ 腹部	①(23.2) ②— ③(7.3)	1/5	外面—ハケ、口縁部折り返し棒状突起付 内面—磨滅により不詳明	①明褐色 ②φ1~4mmの小石を多量に含みややねい	
73	4	15-26	壺	口縁部 ～ 胴部 上半	①(13.8) ②— ③(9.4)	1/4	外面—磨滅により確認不可、肩部に 模範文・点文 内面—ナデ	①明褐色 ②石英・長石・砂粒を多量に含み混む	
74	5	15-26	壺	口縁部 ～ 底部	①28.4 ②14.0 ③41.2	ほぼ 完形	外面—ハケ(磨滅により不詳明)口縁部 ハケ後ミガキ 底部本葉あり	①明褐色 ②赤色粒子・φ2~3mmの小石を多量に 含みややねい	
75	6	15-26	壺	胴部 ～ 腹部	①— ②(17.9)	1/3	外面—ハケ、胴部上半円形突起付 内面—ハケ	①明褐色 ②赤色粒子・石英・砂粒子を多量に含み 混む	
75	7		壺	胴部 ～ 腹部	①— ②— ③(7.7)	1/5	外面—ヘラミガキ(不詳明)、肩部 に長し模範文 内面—ヘラミガキ(不詳明)	①明褐色(外面)、黒色(内面) ②砂粒子を多量に含みややねい	
75	8		壺	胴部 下半 ～ 底部	①— ②7.6 ③(6.1)	破片	外面—ヘラミガキ、底部ヘラクスリ 内面—ヘラクスリ後ナデ	①明褐色 ②砂粒子を多量に含みややねい	
75	9		壺	胴部 下半 ～ 底部	①— ②8.6 ③(5.6)	破片	外面—ヘラミガキ、底部ナデ 内面—ナデ	①明褐色 ②赤色粒子・φ2~5mmの小石を多量に含 み混む	
75	10		壺	胴部 下半 ～ 底部	①— ②9.7 ③(3.5)	破片	外面—ヘラミガキ(ハケがわずかに 残る) 内面—ナデ 底部隆状工具あり	①赤褐色 ②赤色粒子・砂粒子を含みややねい	
75	11	15-26	台付甕	台部	①23.5 ②10.4 ③32.9	ほぼ 完形	外面—ハケ、口縁部ハケ工具による割目 内面—口縁部、台部ハケ、胴部ナデ (一部ハケ)	①明褐色 ②赤色粒子を含みややねい	
75	12	15-26	台付甕	口縁部 ～ 台部	①(12.6) ②(6.4) ③(15.7)	1/2	外面—ハケ、口縁部ヨコナデ 内面—口縁部ナデ後ナデ、胴部・ 台部ナデ(一部ハケ)	①暗赤褐色 ②赤色粒子を含み精良	
75	13		台付甕	接合部 ～ 台部	①— ②(9.2) ③(6.2)	破片	内・外面—ハケ	①黄褐色 ②赤色粒子・小石を含みややねい	底部内面 底付着
75	14		台付甕	接合部 ～ 台部	①— ②9.0 ③(5.3)	1/6	外面—ヘラミガキ後ナデ、一部ハケ 内面—接合部ハケ、台部ヘラナデ	①明褐色 ②金雲母・石英・砂粒子を大量に含み混 む	
76	15		壺	口縁部 ～ 腹部	①(19.6) ②— ③(10.0)	1/6	外面—ハケ後ナデ 内面—ヘラミガキ(磨滅により不詳 明)	①明褐色 ②赤色粒子・砂粒子を多量に含み混む	
76	16	15-26	壺	口縁部 ～ 胴部 上半	①15.0 ②— ③(12.6)	1/3	外面—ナデ、頸部隆状文、口縁部に 面とり(4ヶ所) 内面—口縁部ハケ	①黄褐色(外面)、黒色(内面) ②砂粒子を含み精良	
76	17		台付甕	口縁部 ～ 胴部 上半	①(17.8) ②— ③(8.0)	破片	内・外面—ハケ後ナデ(磨滅により 不詳明)、口唇部ハケ状 工具による割目	①明褐色 ②金雲母・石英・砂粒子を多量に含み混 む	
76	18		台付甕	口縁部 ～ 胴部 上半	①(17.2) ②— ③(8.9)	破片	磨滅により確認不可 単純口縁	①明褐色 ②赤色粒子・小石を多量に含み混む	
76	19		台付甕	口縁部 ～ 腹部	①(19.8) ②— ③(4.5)	破片	外面—口縁部ハケ後ナデ、胴部ハケ 内面—ナデ 単純口縁	①明褐色 ②金雲母・砂粒子を含み混む	

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
76 20		壺	口縁部 -胴部 -上半	①(11.6) ②- ③(6.3)		破片 内・外面-ハケ後ナデ(一部ハケが 残る)	①明褐色 ②φ3-5mmの小石を含みややむい	
76 21	15-26	壺	口縁部 -胴部	①9.6 ②- ③(8.0)	1/2	外面-ナデ 内面-口縁部ヘラムミガキ(磨滅により 不明)	①明赤褐色(外面)、褐色(内面) ②赤色粒子・砂粒子をわずかに含み微塵	
76 22	15-26	壺	胴部 -下半 -底部	①- ②13.4 ③(6.6)		外面-胴下半部ヘラムミガキ、底部ヘ ラケズリ 内面-磨滅・欠損により確認不可	①明褐色 ②赤色粒子・長石・小石を多量に含み粗い	
76 23		壺	口縁部 -底部	①16.8 ②6.4 ③12.1	3/4	内・外面-ナデ 外面胴下半部-底部にかけて黒斑あ り	①黄褐色 ②砂粒子・小石を多量に含み粗い	
76 24		高坏	口縁部	①(15.8) ②- ③(6.0)	1/5	内・外面-磨滅により確認不可	①明黄褐色 ②赤色粒子・小石を含みややむい	

第41表 26号住居址出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
80 1		壺	底部	①- ②11.6 ③-	1/2	磨滅により確認不可	①黄褐色 ②赤色粒子・石英・長石・砂粒子を多量 に含み粗い	

第42表 27号住居址出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
83 1	15-27	壺	口縁部 -胴部	①25.4 ②- ③(11.6)	1/4	外面-ハケ後ヘラムミガキ、胴部にR L織文、折り返し口縁部ハケ 状工具による刮み 内面-一部ヘラムミガキ、口縁部磨滅の RL織文、2個1組の穿孔2ヶ所	①明褐色 ②赤色粒子・小石を多量に含み粗い	
83 2		壺	口縁部	①28.2 ②- ③(6.1)		外面-磨滅により確認不可 内面-口縁部RL織文 折り返し口縁	①明黄褐色 ②石英・長石を多量に含み粗い	
84 3	15-27	壺	胴部 -底部	①- ②16.8 ③(21.5)	1/2	外面-ナデ、胴下半部ヘラムミガキ 内面-ハケ 外面胴下半部-赤色塗彩	①明褐色-赤褐色 ②赤色粒子・小石・砂粒子を含み粗い	
84 4		壺	胴部 -下半 -底部	①- ②15.0 ③(6.8)		内・外面-磨滅により確認不可(内 面僅かにハケ残る)	①暗褐色(外面)、黒褐色(内面) ②赤色粒子・金雲母・石英・長石・小石 粒を多量に含み粗い	
84 5		壺	底部	①- ②9.2 ③(2.0)		外面-ハケ後ミガキ(磨滅により僅 かにハケが残る) 内面-ハケ後ナデ	①明赤褐色 ②石英・長石・φ2-4mmの小石を多量 に含み粗い	
84 6		壺	胴部 -胴部 -底部	①- ②10.0 ③(5.7)		外面-ハケ後ヘラムミガキ、底部ヘラ ケズリ 内面-ハケ(磨滅・欠損により不明)	①明褐色 ②赤色粒子・φ2-5mmの小石を含みや やむい	
84 7		壺	胴部 -下半 -底部	①- ②9.8 ③(6.2)		外面-磨滅により確認不可 内面-ナデ 底部木腐痕あり	①明黄褐色 ②金雲母・長石・砂粒子を含みややむい	
84 8		台付甕	口縁部 -胴部 -上半	①(23.6) ②- ③(10.5)	1/6	外面-ナデ、口唇部棒状工具による 刮み 内面-口縁部ヘラケズリ後ナデ	①明黄褐色-褐色 ②石英・長石・砂粒子を多量に含み粗い	
84 9		台付甕	接合部 -台部 -上半	①- ②- ③(13.3)		外面-ハケ後ナデ 内面-接合部・台部ハケ	①明黄褐色 ②金雲母・長石・小石を含み粗い	

第43表 29号住居址出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
88 1		壺	胴部 -下半 -底部	①- ②(6.5) ③(8.0)	1/5	内・外面-ナデ	①明褐色 ②砂粒子・小石を多量に含み粗い	
88 2		壺	胴部 -下半 -底部	①- ②(5.6) ③(13.7)		外面-ナデ 内面-ハケ(磨滅により不明)	①暗褐色(外面)、明褐色(内面) ②白色粒子を多量に含む	

神田	国産	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
88		壺	胴部 下半～ 底 部	① - ② (6.3) ③ (3.2)	破片	外面-ハケ、底部ナデ 内面-ヘラナデ	①明褐色 ②石英・白色粒子を多量に含む	
88		壺	胴部 下半～ 底 部	① - ② 9.5 ③ (2.8)	破片	外面-ハケ後ヘラミガキ 内面-ハケ	①明褐色 ②燧石・石英・白色粒子を多量に含む	
88		壺	胴部 下半～ 底 部	① - ② (7.8) ③ (1.4)	破片	外面-ナデ (磨滅により不詳明) 内面-ナデ	①茶褐色 ②石英・白色粒子を多量に含む	
88		壺	胴部 下半～ 底 部	① - ② (6.8) ③ (1.8)	破片	外面-ハケ、底部ナデ 内面-ナデ (不詳明)	①褐色 (外面)、茶褐色 (内面) ②石英・白砂粒子を含みやや粗い	
88		台付壺	接合部 ～ 台 部	① - ② - ③ (3.9)	破片	外面-ヘラケズリ 内面-ヘラケズリ後ナデ	①暗褐色 ②小石・白色粒子を多量に含む	
88		台付壺	接合部 ～ 台 部	① - ② (6.6) ③ (4.6)	破片	外面-ナデ 内面-ハケ後ナデ、接合部ナデ	①暗茶褐色 ②白色粒子を多量に含む	
88		壺	胴部 下半～ 底 部	① - ② (5.4) ③ (2.1)	破片	外面-ヘラケズリ後ナデ 内面-ハケ後ナデ 底部本葉痕あり	①明褐色 ②石英・燧石・白色粒子を多量に含む	
88		台付壺	台 部	① - ② (12.6) ③ (6.4)	破片	外面-ハケ 内面-ハケ、最下部折り返しにより 厚層している	①暗褐色 ②燧石・石英・白色粒子を多量に含む	
88		台付壺	台 部	① - ② (11.8) ③ (5.4)	破片	内・外面-ハケ	①暗褐色 ②白色粒子を多量に含む	
88		台付壺	台 部	① - ② (10.8) ③ (2.3)	破片	内・外面-ナデ	①暗褐色 ②小石・白色粒子を多量に含む	

第44表 11号土坑出土 土器観察表

神田	国産	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
48		壺	口縁部 ～ 肩 部	① 20.8 ② - ③ (11.3)	1/3	外面-ハケ後ミガキ (磨滅により不 詳明) 内面-ハケ (不詳明) 折り返し口縁	①黄褐色 ②燧石・黒褐色・石英・長石を多量に 含む粗い	
48		台付壺	台 部	① - ② (11.0) ③ (6.8)	破片	外面 (磨滅により不詳明) 内面-ナデ	①淡褐色 ②金燧石・長石を含みやや粗い	
48		壺	底 部	① - ② 11.0 ③ -	破片	内・外面-磨滅・欠損により確認不 可	①明黄褐色 ②燧石・長石・砂粒子を多量に含む粗い	
48		壺	胴部 下半～ 底 部	① - ② 7.9 ③ -	破片	外面-ヘラミガキ (不詳明) 内面-ナデ 底部本葉痕あり	①赤褐色 ②長石・砂粒子を含みやや粗い	

第45表 21号土坑出土 土器観察表

神田	国産	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
50		台付壺	口縁部 ～ 肩 部	① (30.8) ② - ③ (6.8)	破片	外面-ハケ、口唇部に筋みあり 内面-ハケ後ナデ	①明黄褐色 ②赤色粒子・石英・長石・φ5mmの小石 を含み粗い	
50		台付壺	接合部 ～ 台部 上半	① - ② - ③ (3.9)	破片	外面-ハケ 内面-接合部・台部ナデ	①明黄褐色 ②赤色粒子をわずかに含む粗い	
50		台付壺	口縁部 ～ 肩 部	① (26.4) ② - ③ (12.1)	1/5	内・外面-ハケ (磨滅により不詳明)、 口唇部筋みあり	①明黄褐色 ②赤色粒子・金燧石・石英・長石・φ5 mmの小石を含み粗い	

第46表 31号土坑出土 土器観察表

神田	国産	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
89		甕	胴部	① - ② - ③ (16.5)	1/3	外面-ハケ 内面-ヘラナデ	①明黄褐色 ②赤色・白色粒子・燧石・小石を多量に 含む粗い	

第47表 7号溝状遺構出土 土器観察表

神田	図	版	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
118	1		壺	口縁部 - 胴部 - 上半	① (8.2) ② - ③ (8.0)	1/5	外面-ハケ後ヘラミガキ 内面-口縁から胴部ハケ後ヘラミガキ、肩腰ハケ、胴部ナデ	①明褐色(外面)、暗灰色(内面) ②赤色粒子、砂粒子を含みやや粗い	
118	2		壺	胴部 下半- 底 部	① - ② (7.0) ③ (8.3)	1/4	外面-磨滅により確認不可 内面-ナデ	①明褐色 ②赤色粒子、小石、石英を多量に含み粗い	
118	3		壺	胴部	① - ② - ③ (15.7)	1/3	外面-ヘラミガキ 内面-ハケ	①明褐色 ②赤色、白色粒子、石英、雲母を多量に含み粗い	
118	4		壺	底 部	① - ② 9.2 ③ (1.7)	破片	磨滅により確認不可	①明褐色 ②赤色、白色粒子、石英、雲母を多量に含み粗い	
118	5		台付壺	接合部 - 台 部	① - ② (7.6) ③ (4.8)	破片	外面-ハケ 内面-ナデ	①黄褐色 ②白色粒子、雲母、石英、小石を多量に含み粗い	
118	6		高 杯	口縁部	① (13.0) ② - ③ (2.5)	破片	内・外面-ヘラミガキ(不鮮明) 外面赤色塗彩	①赤褐色 ②赤色粒子、白色粒子、石英を多量に含み粗い	
118	7		器台	器受部 - 脚部 - 上半	① 9.0 ② - ③ (4.7)	2/3	外面-ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ 内面-脚部ナデ、器受部ヘラミガキ 穿孔3方向あり	①赤褐色 ②白色粒子、長石、石英を含む	
118	8		器台	脚部	① - ② - ③ (4.4)	1/3	磨滅により確認不可 穿孔3方向あり	①明褐色 ②白色粒子、長石、雲母を多量に含む	
118	9		高 杯	口縁部	① (15.0) ② - ③ (1.0)	破片	内・外面-ヘラミガキ(不鮮明) 内・外面赤色塗彩	①赤褐色 ②白色粒子、石英を含み精良	
118	10		高 杯	口縁部	① (17.4) ② - ③ (2.1)	破片	内・外面-ヘラミガキ(内面不鮮明) 内・外面赤色塗彩	①赤褐色 ②白色粒子、白色粒子を含み緻密	
118	11		器台	脚部	① - ② - ③ (6.7)	2/3	内・外面-ハケ 穿孔3方向にあり	①明褐色 ②白色粒子、雲母、石英を多量に含み精良	
118	12		器台	脚部	① - ② (12.1) ③ (6.2)	1/4	内・外面-ハケ 穿孔3方向にあり	①暗赤褐色 ②雲母、白色粒子を多量に含み精良	

第48表 8号溝状遺構出土 土器観察表

神田	図	版	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
120	1		壺	胴部 下半- 底 部	① - ② (8.8) ③ (3.8)	破片	外面-ナデ 内面-ヘラミガキ 底部本蓋あり	①明黄褐色 ②白色粒子、雲母、石英、長石を含みやや粗い	

第49表 25号溝状遺構出土 土器観察表

神田	図	版	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
128	1		杯	口縁部 - 底 部	① (11.3) ② (8.6) ③ 2.3	破片	外面-胴部下半ヘラケズリ 内面-ナデ	①赤褐色 ②白色粒子、雲母を多量に含み緻密	
128	2		壺	底 部	① - ② (9.4) ③ (1.7)	破片	外面-ナデ 内面-ハケ 底部本蓋あり	①暗褐色 ②白色粒子、雲母、石英を多量に含む	

第50表 35号溝状遺構出土 土器観察表

神田	図	版	器形	部位	法量	残存率	特 徴	観 察	備 考
132	1		壺	底 部	① - ② (8.5) ③ (1.2)	破片	外面-ナデ 内面-ハケ(磨滅により不鮮明)	①赤褐色 ②赤色粒子、白色粒子、石英を多量に含む	

第51表 第2次調査 遺構外出土 弥生時代～古墳時代 土器観察表

検出	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
60 1	16-30	壺	胴部	①- ②- ③(3.9)	破片	外面-磨状工具による条痕文 内面-ナデ	①暗褐色(外面)、暗灰褐色(内面) ②白色粒子を多量に含む	1号住居址 覆土内出土
60 2	16-30	壺	胴部	①- ②- ③(5.1)	破片	外面-磨滅により確認不可 内面-ナデ	①暗褐色 ②炭灰・石英を多量に含む	8号土坑 覆土内出土

第52表 第3・4次調査 遺構外出土 弥生時代～古墳時代 土器観察表

検出	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
140 1		壺	胴部 - 肩部	①- ②- ③(9.1)	破片	外面-ハケ(磨滅により不鮮明) 内面-ハケ後ナデ	①明褐色 ②白色粒子・砂粒子を多量に含む	A-6 グリット 出土
140 2		壺	胴部 - 肩部	①- ②- ③(6.9)	破片	外面-ハケ(磨滅により不鮮明) 内面-ナデ(磨滅に指痕残存)	①明褐色(外面)、暗灰色(内面) ②石英・砂粒子を多量に含む	A-8 グリット 出土
140 3		壺	胴部 - 肩部	①- ②- ③(17.3)	1/4	外面-胴部ハケ、胴部ヘラミガキ 内面-ハケ(磨滅に指痕残存) 底部円形浮文3ヶ1組(4方あり)	①明褐色 ②石英・長石・砂粒子を多量に含む	A-8 グリット 出土
140 4		壺	肩部 - 胴部	①- ②- ③(14.9)	1/5	外面-磨滅により不鮮明 内面-ハケ(磨滅により不鮮明)	①明褐色 ②石英・砂粒子を含む	A-8 グリット 出土
140 5		壺	胴部 下半- 底部	①- ②(9.0) ③(11.6)	1/6	外面-胴部ハケ(磨滅により不鮮明) 内面-ヘラナデ	①明褐色 ②石英・砂粒子を多量に含む	A-8 グリット 出土
140 6		壺	胴部 下半- 底部	①- ②(7.4) ③(6.9)	1/5	外面-ヘラミガキ、胴部ハケ状工具 によるケズリ 内面-ヘラミガキ	①暗灰褐色 ②石英・長石・白色粒子を多量に含む	A-8 グリット 出土
140 7		台付甕	台部	①- ②11.4 ③(5.6)	破片	外面-ハケ 内面-ナデ	①褐色 ②石英・長石・白色粒子を多量に含む	A-7 グリット 出土
140 8		台付甕	台部	①- ②(12.6) ③(7.5)	破片	内・外面-ハケ	①暗灰褐色 ②白色粒子・砂粒子を多量に含む	A-8 グリット 出土
140 9		台付甕	台部	①- ②(3.6) ③(7.5)	破片	外面-ハケ(磨滅により不鮮明) 内面-ハケ	①明褐色 ②白色粒子・砂粒子を多量に含む	B-8 グリット 出土
140 10		器	台脚部	①- ②- ③(3.9)	破片	内・外面-ヘラミガキ 穿孔(3方向?)あり	①淡褐色 ②長石・赤色粒子・砂粒子を多量に含む	B-4 グリット 出土

(3) 中世

第53表 39号土坑出土 土器観察表

検出	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
92 1		甕	口縁部	①(8.8) ②- ③(2.0)	破片	ロクロ整形	①明黄褐色 ②赤色粒子・炭灰・石英を含みやや粗い	
92 2		甕	底部	①- ②(6.2) ③(1.5)	1/3	ロクロ整形 底部糸切り	①明褐色 ②赤色粒子・炭灰・石英・長石を多量に 含むやや粗い	

第54表 42号土坑出土 土器観察表

検出	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
92 1		甕	口縁部 - 底部	①(10.1) ②(6.2) ③1.8	1/4	ロクロ整形 底部糸切り	①明褐色 ②赤色粒子・炭灰・石英を含み精良	

第55表 57号土坑出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
94	1	甕	口縁部	①(12.2) ②- ③(2.0)	破片	ロクロ整形	①黄褐色 ②雲母を多量に含み精良	

第56表 60号土坑出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
95	1	甕	口縁部 - 底部	①(9.8) ②(5.6) ③2.1	1/4	ロクロ整形 底部未切り 外面-胴部下半-底部外面へラケズリ	①黄褐色 ②雲母を多量に含み精良	

第57表 71号土坑出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
96	1	杯	底部	①- ②(6.8) ③(1.4)	1/5	ロクロ整形 底部未切り	①黄褐色 ②赤色粒子・白色粒子・石英・長石を多量に含み粗い	
96	2	内耳	柄部 下半- 底部	①- ②(21.4) ③(3.5)	破片	内・外面-ナア	①黄褐色 ②赤色粒子・白色粒子・雲母・石英を多量に含みやや粗い	

第58表 102号土坑出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
102	1	甕	胴部 下半- 底部	①- ②(6.6) ③(1.3)	破片	ロクロ整形 底部未切り	①明白褐色 ②赤色粒子・雲母を多量に含み粗い	

第59表 3号地下式竈(旧74号土坑) 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
104	1	甕	底部	①- ②(9.0) ③(0.9)	破片	ロクロ整形 底部未切り	①明褐色 ②赤色粒子・石英を多量に含み粗い	

第60表 10号地下式竈(旧81号土坑) 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
107	1	17-33 すり鉢	口縁部 - 底部	①(29.6) ②(9.4) ③(10.2)	1/8	内・外面-ナア	①明褐色 ②赤色粒子・白色粒子・石英を多量に含み精良	

第61表 12号地下式竈(旧85号土坑) 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
109	1	内耳	口縁部 - 柄部	①(24.2) ②- ③14.8	1/5	内・外面-ナア	①明褐色 ②赤色粒子・白色粒子・石英を多量に含みやや粗い	

第62表 8号溝状遺構出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
120 2		甗	高台部	① - ② 4.6 ③ (4.8)	破片	内・外面-ナデ 底部回転糸切り	①黒褐色(外面)、赤褐色(内面) ②炭母を多量に含み緻密	

第63表 24号溝状遺構出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
127 1		甗	口縁部 ～ 底部	① 7.8 ② (4.2) ③ 1.6	1/2	ロクロ盤形 底部糸切り	①暗白褐色 ②炭母を多量に含み緻密	
127 2	17-32	甗	口縁部 ～ 底部	① 11.8 ② 4.8 ③ (2.3)	1/2	ロクロ盤形 底部回転糸切り	①明褐色 ②赤色粒子・白色粒子・炭母・石英・長石を多量に含む	
127 3		甗	胴部 下半～ 底部	① - ② 6.4 ③ (2.3)	1/3	ロクロ盤形 底部回転糸切り	①に濃い黄褐色 ②白色粒子・炭母を多量に含む	
127 5		内耳	胴部 下半～ 底部	① - ② (22.2) ③ (3.3)	破片	内・外面-ナデ	①黒褐色(外面)、暗黄褐色(内面) ②赤色粒子・白色粒子・石英・炭母を多量に含む	丸7と同一 器体と見られる
127 6		内耳	胴部 下半～ 底部	① - ② 26.8 ③ (4.8)	破片	内・外面-ナデ 外面篋付着	①暗褐色(外面)、に濃い褐色(内面) ②石英・赤色粒子・白色粒子・小石・炭母を多量に含む	丸7と同一 器体と見られる
127 7	17-34	内耳	口縁部 ～ 底部	① (38.6) ② (31.8) ③ 17.9	1/4	外面-ナデ、口縁部ヘラケズリ後ナデ 内面-ナデ	①黒褐色(外面)、黄褐色(内面) ②砂粒を含み緻密	外面篋付着

第64表 27号溝状遺構出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
129 1	17-32	甗	口縁部 ～ 底部	① (14.2) ② (2.7) ③ 2.3	破片	ロクロ盤形	①暗白褐色 ②炭母を多量に含み緻密	

第65表 29号溝状遺構出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
130 1		甗	底部	① - ② 3.1 ③ (0.8)	1/5	ロクロ盤形 底部糸切り	①茶褐色 ②炭母を多量に含み緻密	

第66表 2号柱穴列出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
152 1	17-32	甗	口縁部 ～ 底部	① 13.3 ② 6.7 ③ 2.5	3/4	ロクロ盤形 底部回転糸切り	①明褐色 ②赤色粒子・白色粒子・石英・炭母を多量に含む	

第67表 第3・4次調査遺構外出土 土器観察表

神田	図版	器形	部位	法量	残存率	特徴	観察	備考
141 1		甗	口縁部 ～ 底部	① 11.2 ② 6.4 ③ 2.3	2/3	ロクロ盤形 底部回転糸切り	①に濃い黄褐色 ②長石・炭母を多量に含む	24号住居 址掘土内 出土。

② 土製・石製品（縄文時代～古墳時代）

第68表 3号土坑出土 土製品観察表

神田	図版	器形	石質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考
				最大軸	最大幅	最大厚				
17-8	13-18	土製円盤	土	3.0	3.2	1.1	17.2	変形	100	

第69表 23号土坑出土 土製品観察表

神田	図版	器形	石質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考
				最大軸	最大幅	最大厚				
26-3	13-18	土製円盤	土	4.4	3.8	1.4	32.2	変形	100	

第70表 第2次調査 遺構外出土 土製・石製品観察表

神田	図版	器形	石質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考
				最大軸	最大幅	最大厚				
59-17	13-18	土製円盤	土	3.0	2.8	0.6	9.1	変形	100	D-2グリップ出土。
59-18	13-18	石製磨鏡車	滑石	3.9	4.1	1.1	0.6	変形	100	7号住居址覆土内出土。

③ 石器（縄文時代）

第71表 8号住居址出土 石器観察表

神田	図版	器形	石質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考
				最大軸	最大幅	最大厚				
13-34	13-20	二次加磨片	頁岩	(8.0)	4.3	1.8	47.9	下部欠損	80	
13-35	13-19	石 磨	黒曜石	1.5	1.1	0.3	0.3	変形	100	
13-36	13-19	石 磨	黒曜石	2.4	(1.2)	0.3	0.4	脚部一部欠損	90	
13-37	13-19	石 磨	黒曜石	(1.7)	1.7	0.3	0.8	光輪部欠損	80	

第72表 13号土坑出土 石器観察表

神田	図版	器形	石質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考
				最大軸	最大幅	最大厚				
22-4	13-20	凹石	輝石安山岩	11.0	8.1	4.1	518.2	変形	100	2面のみ凹みを有する

第73表 22号土坑出土 石器観察表

神田	図版	器形	石質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考
				最大軸	最大幅	最大厚				
26-4	13-19	石 磨	黒曜石	(2.4)	(1.6)	0.5	1.6	脚部一部欠損	90	

第74表 23号土坑出土 石器観察表

神田	図版	器形	石質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考
				最大軸	最大幅	最大厚				
26-4	13-19	石 磨	黒曜石	(1.3)	(1.2)	0.3	0.3	脚部一部欠損	95	
26-5	13-19	石 磨	黒曜石	2.1	1.6	0.3	1.5	変形	100	

第75表 3号集石出土 石器観察表

神岡	図 版	器 種	石 質	法 量 (cm)			重 量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備 考
				最長軸	最大幅	最大厚				
30-1	13-20	凹 石	輝石安山岩	9.5	7.5	3.7	457.1	完形	100	2面にみに凹を有する。

第76表 2号堅穴状遺構出土 石器観察表

神岡	図 版	器 形	石 質	法 量 (cm)			重 量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備 考
				最長軸	最大幅	最大厚				
31-3	13-19	石 鏃	黒 曜 石	2.4	(1.6)	0.2	0.6	脚部一部欠損	95	
31-4	13-19	石 鏃	黒 曜 石	2.0	(1.6)	0.4	0.6	脚部一部欠損	95	

第77表 5号溝状遺構出土 石器観察表

神岡	図 版	器 形	石 質	法 量 (cm)			重 量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備 考
				最長軸	最大幅	最大厚				
55-7	13-20	打製石斧	粘 板 岩	(8.9)	4.6	1.2	81.2	上部一部欠損	80	
55-8	13-20	磨 石	輝石安山岩	10.0	8.5	6.4	794.0	完形	100	磨削痕を有する。使用による磨耗痕を有する。
55-9		凹 石	輝石安山岩	11.7	9.2	4.5	587.7	完形	100	1面に凹みを有する。
55-10	13-19	石 鏃	黒 曜 石	(1.8)	(1.2)	0.4	0.8	脚部欠損	80	

第78表 6号溝状遺構出土 石器観察表

神岡	図 版	器 形	石 質	法 量 (cm)			重 量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備 考
				最長軸	最大幅	最大厚				
57-5	13-20	凹 石	輝石安山岩	10.5	7.2	4.4	376.1		100	2面に凹みを有する。
57-6	13-19	石 鏃	黒 曜 石	(2.1)	(1.4)	0.3	0.7	脚部一部欠損	80	
68-7	17-35	石 臼	玄 武 岩	18.1	(11.9)	11.9	2800		50	

第79表 7号溝状遺構出土 石器観察表

神岡	図 版	器 形	石 質	法 量 (cm)			重 量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備 考
				最長軸	最大幅	最大厚				
119-29	13-20	打製石斧	砂 岩	(10.3)	5.8	1.8	115.5	上部欠損	85	

第80表 8号溝状遺構出土 石器観察表

神岡	図 版	器 形	石 質	法 量 (cm)			重 量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備 考
				最長軸	最大幅	最大厚				
120-7	13-20	打製石斧	粘 板 岩	(7.9)	4.5	0.7	33.2	下部欠損	90	
120-8	13-19	石 鏃	黒 曜 石	(1.6)	(1.5)	0.4	0.6	脚部一部欠損	95	

第81表 24号溝状遺構出土 石器観察表

神岡	図 版	器 形	石 質	法 量 (cm)			重 量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備 考
				最長軸	最大幅	最大厚				
127-8	13-19	石 鏃	黒 曜 石	(1.3)	1.3	0.3	0.4	先端部欠損	90	
127-9	13-19	石 鏃	黒 曜 石	(1.7)	1.6	0.3	0.8	先端部・脚部欠損	80	

第82表 第2次調査 遺構外出土 石器観察表

神田	図版	器形	石質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考
				最長軸	最大幅	最大厚				
59-17	13-20	打製石斧	砂岩	5.8	6.0	1.7	77.5	上部欠損	40	C-20グリット出土。
59-18	13-20	石匙	頁岩	(3.3)	5.4	0.7	12.7	上部欠損	90	10号住居址覆土内出土。
59-19	13-20	石槍	頁岩	6.2	2.9	0.8	12.9	完形	100	14号住居址覆土内出土。
59-20	13-19	石鏃	黒曜石	1.5	(1.1)	0.3	0.3	脚部一部欠損	90	12号住居址覆土内出土。
59-21	13-19	石鏃	黒曜石	1.5	(1.1)	0.3	0.3	脚部欠損	90	A-5グリット出土。
59-22	13-19	石鏃	黒曜石	(1.9)	(1.4)	0.4	5.5	脚部一部欠損	80	13号住居址覆土内出土。
59-23	13-19	石鏃	黒曜石	(2.0)	(1.6)	0.5	1.1	脚部一部欠損	90	13号住居址覆土内出土。
59-24	13-19	石鏃	黒曜石	(1.9)	(1.4)	0.3	0.7	脚部一部欠損	95	15号住居址覆土内出土。

第83表 第3・4次調査 遺構外出土 石器観察表

神田	図版	器形	石質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考
				最長軸	最大幅	最大厚				
139-1	13-20	凹石	輝石安山岩	(7.6)	8.3	8.1	509.0	下部欠損	80	A-8グリット出土。1番のみに凹を穿てる。
139-2	13-20	磨石	花崗岩類	6.5	5.9	3.1	156.6	完形	100	A-6グリット出土。
139-3	13-19	磨石	砂岩	(3.3)	3.5	1.9	33.1	下部欠損	60	A-6グリット出土。

④ 金属品 (中・近世)

第84表 35号溝状遺構出土 金属品観察表

神田	図版	器種	石質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考	
				最長軸	火皿高	火皿径					
132-4	17-35	煙管	銅	6.5	-	-	1.1	11.6	吸口部 (一部欠損)	-	磨手文様の文様がある。

第85表 第2次調査 遺構外出土 金属品観察表

神田	図版	器種	材質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考
				最長軸	最大幅	最大厚				
62-1	17-35	不明	鉄	(3.7)	(2.8)	(1.0)	4.4	下部欠損	-	B-17グリット出土。
62-2	17-35	不明	鉄	(6.2)	(0.8)	(0.7)	17.7	両端部欠損	-	B-20グリット出土。

第86表 第3・4次調査 遺構外出土 金属品観察表

神田	図版	器種	石質	法量 (cm)			重量 (g)	使用状況・破損状況	残存率	備考
				最長軸	最大幅	最大厚				
142-1	17-35	不明	鉄	(7.4)	(4.5)	(0.6)	33.1	一部欠損	-	Z-41グリット出土。
142-2	17-35	不明	鉄	(9.1)	(3.4)	(0.6)	27.6	一部欠損	-	B-8グリット出土。

⑤ 古銭 (中・近世)

第87表 86号土坑出土 古銭観察表

神田	図版	銭名	初铸年	書体	法量 (cm)				重量 (g)	備考
					直径	孔径	径	厚さ		
99-1		開平元寶	1068	篆書	2.42	0.73×0.71	0.10	3.4		
99-2		元豊通寶	1078	篆書	2.48	0.69×0.69	0.10	3.3	No. 2・3・4は鏽により付着している。	
99-3		聖宋元寶	1101	篆書	2.45	0.70×0.70	0.11	2.9	*	
99-4		皇宋元寶	1038	篆書	2.45	0.75×0.74	0.10	2.9	*	
99-5		宣和元寶	1133	篆書	2.55	0.58×0.50	0.11	3.4	No. 5・6は鏽により付着している。	
99-6		元符通寶	1098	篆書	2.40	0.68×0.68	0.10	2.5	*	

第88表 90号土坑出土 古銭観察表

種別	図版	銭名	初録年	書体	法量 (mm)			重量 (g)	備考
					直径	孔径	厚さ		
100-1		淳化元寶	990	真書	2.41	0.65×0.61	0.11	2.8	
100-2		-			2.30	0.71×0.65	0.08	2.4	竊に覆われ銭名不明。
100-3		-			2.20	0.68×0.65	0.10	2.1	*

第89表 3号地下式墳(旧74号土坑)出土 古銭観察表

種別	図版	銭名	初録年	書体	法量 (mm)			重量 (g)	備考
					直径	孔径	厚さ		
104-1		天聖元寶	1023	真書	2.40	0.64×0.64	0.13	2.7	

第90表 13号地下式墳(旧91号土坑)出土 古銭観察表

種別	図版	銭名	初録年	書体	法量 (mm)			重量 (g)	備考
					直径	孔径	厚さ		
110-1		祥符元寶	1009		2.53	0.68×0.64	0.12	3.4	
110-2		天聖元寶	1023	真書	2.48	0.80×0.75	0.10	2.5	
110-3		景德元寶	1004		2.43	0.69×0.69	0.09	2.5	
110-4		景德元寶	1004		2.45	0.65×0.65	0.12	3.3	
110-5		元祐通寶	1086	篆書	2.45	0.72×0.69	0.12	3.2	
110-6		景德元寶	1004		2.39	0.61×0.58	0.12	3.4	
110-7		熙寧元寶	1068	篆書	2.33	0.66×0.65	0.10	2.3	

第91表 5号溝状遺構出土 古銭観察表

種別	図版	銭名	初録年	書体	法量 (mm)			重量 (g)	備考
					直径	孔径	厚さ		
56-1	17-36	熙寧元寶	1068	真書	2.40	0.75×0.71	0.10	2.4	
56-2	17-36	嘉祐通寶	1056	篆書	2.29	0.75×0.71	0.20	4.4	

第92表 6号溝状遺構出土 古銭観察表

種別	図版	銭名	初録年	書体	法量 (mm)			重量 (g)	備考
					直径	孔径	厚さ		
58-1	17-36	開元通寶	960		2.33	0.79×0.75	0.10	2.1	
58-2	17-36	至道元寶	995	真書	2.46	0.65×0.65	0.10	2.7	
58-3	17-36	祥符元寶	1009		2.42	0.63×0.62	0.10	2.4	
58-4	17-36	天禧通寶	1017		2.46	0.72×0.72	0.10	2.6	
58-5	17-36	至和元寶	1054	真書	2.22	0.74×0.71	0.10	2.6	
58-6	17-36	熙寧元寶	1068	篆書	2.39	0.79×0.75	0.10	1.8	
58-7	17-36	元祐通寶	1086	行書	2.38	0.75×0.74	0.12	2.9	
58-8	17-36	聖宋元寶	1101	篆書	2.39	0.67×0.69	0.10	2.2	
58-9	17-36	咸和通寶	1111	篆書	2.43	0.71×0.69	0.10	2.4	
58-10	17-36	永興通寶	1408		2.43	0.62×0.62	0.11	3.1	
58-11	17-36	永興通寶	1408		2.46	0.63×0.62	0.11	2.3	
58-12	17-36	永興通寶	1408		2.50	0.61×0.59	0.12	2.4	
58-13	17-36	永興通寶	1408		2.47	0.60×0.60	0.12	2.5	
58-14	17-36	永興通寶	1408		2.41	0.65×0.59	0.12	2.3	
58-15	17-36	永興通寶	1408		2.42	0.62×0.58	0.11	2.6	

種 別	図 版	銭 名	初鋳年	書 体	法 量 (cm)			重 量 (g)	備 考
					直 径	孔 径	厚 さ		
58-16	17-36	永業通寶	1408		2.50	0.61×0.61	0.10	1.7	
58-17	17-36	永業通寶	1408		2.42	0.61×0.61	0.11	2.6	
58-18	17-36	元龜通寶	1078	行 書	2.33	0.78×0.75	0.10	2.7	
58-19	17-36	紹聖元寶	1094	篆 書	2.30	0.69×0.66	0.11	2.2	
58-20	17-36	—			2.25	0.79×0.73	0.11	2.5	竊に覆われ銭名不明。
58-21	17-36	—			2.37	0.71×0.71	0.10	1.8	竊に覆われ銭名不明。

第93表 37号溝状遺構出土 古銭観察表

種 別	図 版	銭 名	初鋳年	書 体	法 量 (cm)			重 量 (g)	備 考
					直 径	孔 径	厚 さ		
134-1	17-37	咸平元寶	998		2.41	0.62×0.62	0.08	2.1	
134-2	17-37	景德元寶	1004		2.33	0.70×0.70	0.10	1.8	
134-3	17-37	元龜通寶	1078	篆 書	2.31	0.69×0.69	0.08	1.6	

第94表 第3・4次調査 遺構外出土 古銭観察表

種 別	図 版	銭 名	初鋳年	書 体	法 量 (cm)			重 量 (g)	備 考
					直 径	孔 径	厚 さ		
143-1		皇宋通寶	1038	真 書	2.50	0.75×0.72	0.15	3.5	B-44グリット出土。
143-2		元龜通寶	1078	行 書	2.43	0.71×0.70	0.13	3.6	B-44グリット出土。
143-3		寧水通寶	1626		2.26	0.58×0.58	0.08	1.3	C-34グリット出土。
143-4		—			2.42	0.59×0.59	0.08	3.6	B-44グリット出土。竊に覆われ銭名不明。
143-5		—			2.42	0.59×0.62	0.16	3.1	B-44グリット出土。竊に覆われ銭名不明。
143-6		—			2.46	0.68×0.64	0.09	2.6	B-44グリット出土。竊に覆われ銭名不明。
143-7		文久永寶	1863	真 文	2.62	0.69×0.65	0.08	2.7	Z-39グリット出土。

別表3 遺構一覧表

第95表 長田口遺跡住居址一覧表

住居	時代	主軸方位	平面	縦	横	炉	周溝	柱穴	貯蔵穴	掘り方	備	考
1	弥生時代前期 ～古墳時代初期	N-17°-W	隅丸長方形	(7.5)m×(5.8)m=43.5㎡	中央やや南(地床炉)	×	(4)	-	-	-		
2	"	N-21°-W	"	(7.0)m×(5.0)m=35㎡	-	-	-	-	-	-		
3	"	N-51°-E	長方形	(5.0)m×(3.9)m=19.5㎡	中央やや東(地床炉)	-	-	-	-	-		
4	"	N-40°-W	方形	(6.5)m×(6.2)m=40.3㎡	-	-	-	-	-	-		
5	"	N-2°-E	楕円形	(5.0)m×(3.8)m=19㎡	中央やや南(地床炉)	-	-	-	-	-		
6	"	N-20°-W	長方形	(7.5)m×(4.5)m=33.75㎡	-	-	-	-	-	-		
7	縄文時代中期	N-60°-E	楕円形	(5.7)m×(5.0)m=28.5㎡	中央やや南(地床炉)	×	(4)	×	×	-	床直上(6層)に多量の焼土あり	
8	"	N-86°-W	円形	(3.3)m×(3.2)m=10.56㎡	中央南(埋燻炉)(P.S)	×	×	×	×	-	出入口施設、覆土上層に多量の黒曜石の剥片、石礫あり	
9	"	N-13°-W	"	(4.5)m×(4.4)m=19.8㎡	中央やや北(埋燻炉)(S)	×	(8)	×	×	-		
10	弥生時代前期 ～古墳時代初期	ほぼ真北	隅丸長方形	3.2m×2.7m=8.64㎡	-	-	×	2	×	-	床面中央部やや西よりに火を貫いた痕跡あり	
11	"	N-80°-W	"	(4.6)m×3.8m=17.48㎡	-	-	×	4	-	-	覆土(2・3層)に多量の焼土、炭化物あり、床面に炭化材あり	
12	"	N-2°-W	"	(5.0)m×(4.0)m=20㎡	中央やや北(粘土器炉)A,B炉	×	-	南西コーナー寄り、楕円	×	○		
13	"	N-2°-W	"	(8.5)m×(7.0)m=59.5㎡	中央やや北(地床炉)	×	4	×	×	◎		
14	縄文時代中期	-	-	-	-	-	-	南西コーナー、不円	-	-		
15	弥生時代前期 ～古墳時代初期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ビット1つ	
16	"	N-1°-W	楕円形	(4.5)m×(4.0)m=18㎡	中央(地床炉)	-	-	-	-	◎		
17	"	N-21°-W	隅丸長方形	(8.5)m×(7.0)m=59.5㎡	-	-	×	4	×	◎	ビット2つ 床面(北壁側)に焼土あり	
18	"	N-6°-E	楕円形	(5.0)m×(4.0)m=20㎡	-	-	-	-	-	-	床面に焼土あり	
19	"	N-22°-W	隅丸長方形	4.04m×3.43m=13.9㎡	中央やや北(地床炉)	-	(4)	西壁中央寄り、不円	◎	◎	床面直上(6.8層)に焼土、炭化物あり	
20	"	N-67°-E	方形	4.38m×4.32m=18.9㎡	中央()	×	(4)	×	◎	◎	P。は出入口施設?	
21	"	N-70°-E	隅丸長方形	2.92m×2.36m=6.9㎡	中央やや東()	×	(4)	南西コーナー寄り、楕円	◎	◎	床面直上及び壁側に炭化材、焼土あり	
22	"	N-77°-E	"	(9.0)m×(6.5)m=58.5㎡	中央やや西()	×	(4)	×	◎	◎	P。は出入口施設?	
23	"	N-21°-E	"	(4.0)m×(3.3)m=13.2㎡	中央やや東()	-	4	-	-	○		
24	"	N-4°-E	"	(9.5)m×(7.0)m=66.5㎡	調査外?()	○	(4)	南壁コーナー寄り、楕円	◎	◎	床面全体に焼土、炭化物あり	
25	"	N-56°-E	"	(11.0)m×(7.0)m=77㎡	中央やや西()	○	(4)	-	-	◎	長方形ビットあり	
26	"	N-21°-E	"	(12.0)m×(8.0)m=96㎡	中央やや東()	○	(4)	-	-	◎	ベッド状遺構的な床面の盛り上がり北壁側にあり(9.11層) 貼床直下に焼土、炭化物あり	
27	"	N-30°-W	"	(10.0)m×(7.0)m=70㎡	-	-	(4)	-	-	-		
28	"	N-71°-E	"	-	中央やや西(地床炉)	-	-	-	-	◎	床面に焼土塊あり	
29	"	N-86°-W	"	(6.5)m×5.0m=32.5㎡	中央やや東()	○	(4)	南西コーナー寄り、楕円	◎	◎	南西コーナー部 一段高い 北壁側に焼土あり	

()は推定 炉(S)は枕石を有するもの(P)はビットを伴うもの 掘り方の◎は形跡が明確なもの ○は存在するが形跡不明のもの

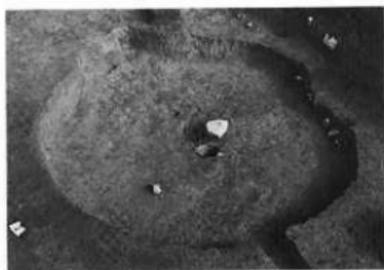
圖 版



1. 長田口遺跡より富士山を望む



2. 長田遺跡遠望（東から）



3. 7号住居址（西から）



4. 8号住居址（南から）



5. 8号住居址埋燬炉



6. 8号住居址遺物出土状況



7. 9号住居址(東から)



10. 10号住居址(南から)



8. 9号住居址埋燵炉



11. 10号住居址遺物出土状況(1)



9. 9号住居址遺物出土状況



12. 10号住居址遺物出土状況(2)



13. 11-17号住居址(東から)



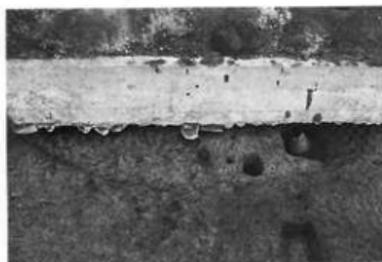
14. 12-13号住居址(南から)



15. 13号住居址 (東から)



16. 14号住居址 (東から)



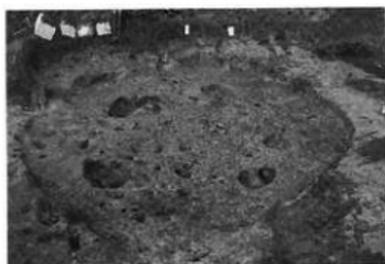
17. 15号住居址 (西から)



18. 16号住居址 (東から)



19. 18号住居址 (東から)



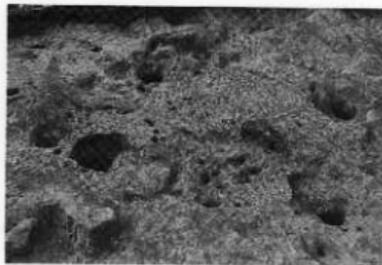
20. 19号住居址 (東から)



21. 20号住居址 (西から)



22. 21号住居址 (南から)



23. 22号住居址 (南から)



24. 23号住居址 (東から)



25. 24号住居址 (東から)



26. 24号住居址遺物出土状況(1)



27. 24号住居址遺物出土状況(2)



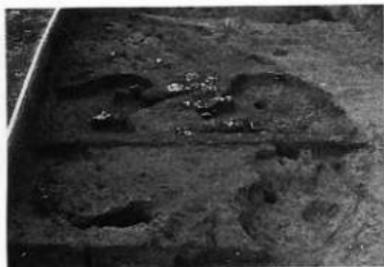
28. 24号住居址貯藏穴内遺物出土状況



29. 25号住居址 (東から)



30. 26号住居址 (北から)



31. 27号住居址（南から）



32. 27号住居址遺物出土状況



33. 28号住居址（西から）



34. 29号住居址（西から）



35. 11号土坑（東から）



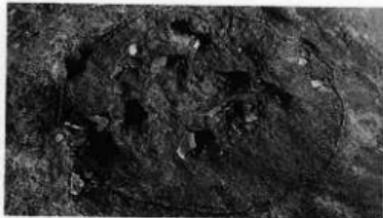
36. 13号土坑（西から）



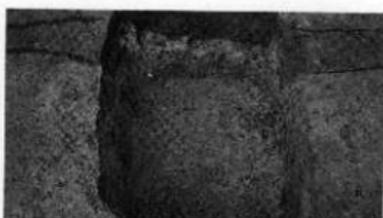
37. 17号土坑（南から）



38. 19号土坑（東から）



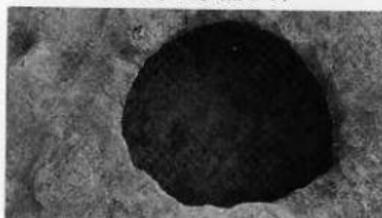
39. 21号土坑 (東から)



40. 30号土坑 (南から)



41. 31号土坑 (東から)



42. 54号土坑 (北から)



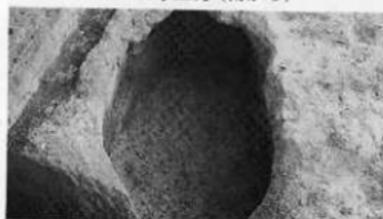
43. 57号土坑 (北から)



44. 60号土坑 (南から)



45. 71号土坑 (北から)



46. 102号土坑 (北から)



47. 5号溝状遺構 (東から)



48. 6号溝状遺構 (東から)



49. 8号溝状遺構 (東から)



50. 13号溝状遺構 (北から)



51. 25・26・27号溝状遺構 (南から)



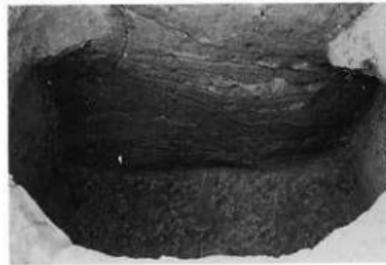
52. 32号溝状遺構 (西から)



53. 37号溝状遺構 (東から)



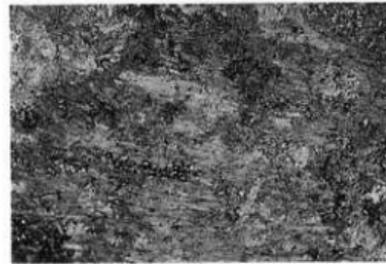
54. 1号地下式壙 (南から)



55. 3号地下式壙 (東から)



56. 5号地下式壙 (南から)



57. 5号地下式壙炭化物出土状況



58. 6号地下式壙（西から）



59. 7号地下式壙（東から）



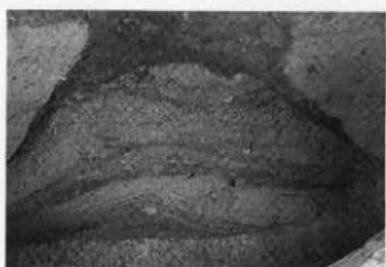
60. 8号地下式壙（西から）



61. 10号地下式壙（東から）



62. 11号地下式壙（北から）



63. 11号地下式壙断面（北から）



64. 12号地下式壙（東から）



65. 13号地下式壙（南から）



66. 1号集石遺構（南から）



67. 2号集石遺構（南から）



68. 3号集石遺構（南から）



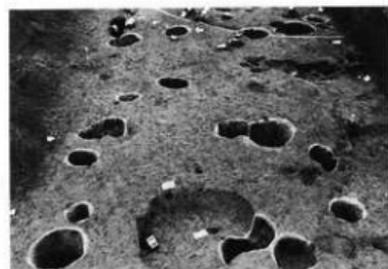
69. 4号集石遺構（西から）



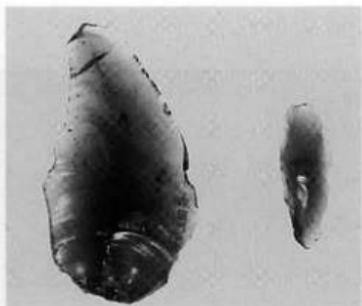
70. 2号埋設土器（北から）



71. 2号竪穴状遺構（西から）



72. 1・2号掘立柱建物址（南から）



1. ナイフ形石器



2. 7号住居址



3. 8号住居址(1)



5. 9号住居址(1)



4. 8号住居址(2)



6. 9号住居址(2)



7. 3号土坑



8. 10号土坑



9. 12号土坑(1)



11. 13号土坑



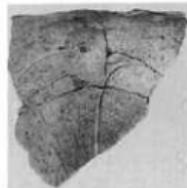
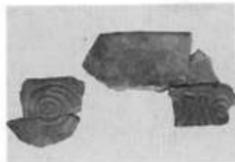
10. 12号土坑(2)



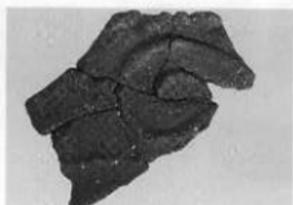
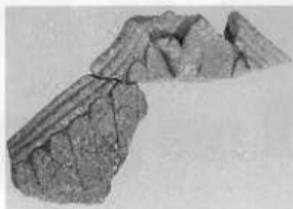
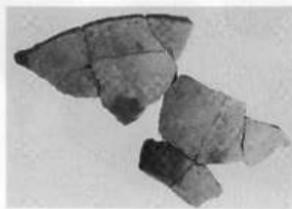
12. 15号土坑



13. 17号土坑



14. 19号土坑



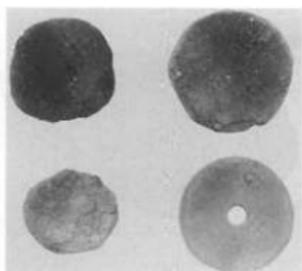
15. 1号集石遺構



16. 第2次調査遺構外出土



17. 第3・4次調査遺構外出土



18. 土製・石製品 (土製円盤・石製紡錘車)



19. 石 鏃



20. 石製品 (凹石、石匙、打製石斧他)



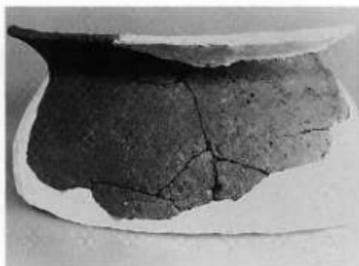
21. 10号住居址



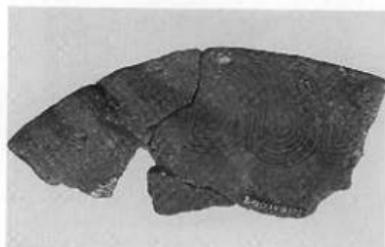
22. 11号住居址



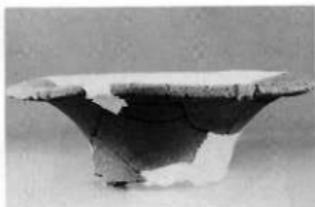
23. 12号住居址



24. 21号住居址

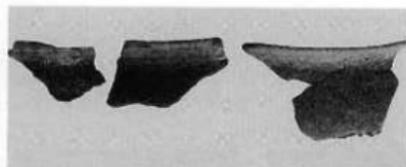


25. 24号住居址(1)

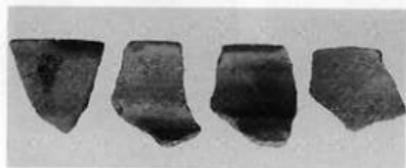


26. 24号住居址(2)

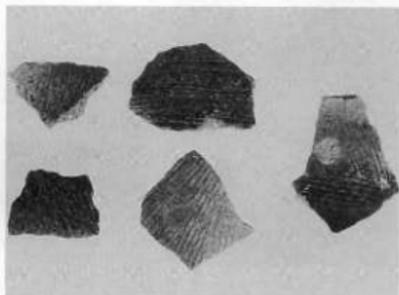
27. 27号住居址



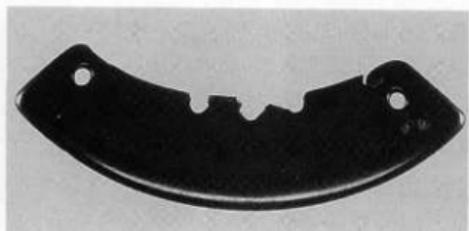
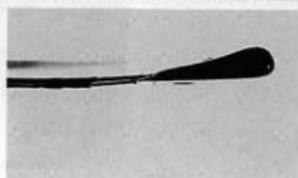
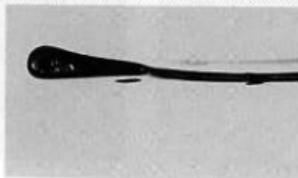
28. S字状口縁台付甕（口縁部）



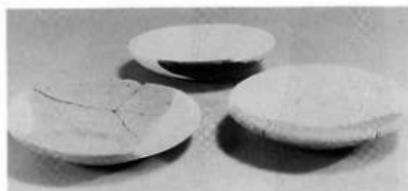
29. 北陸系模倣土器（口縁部）



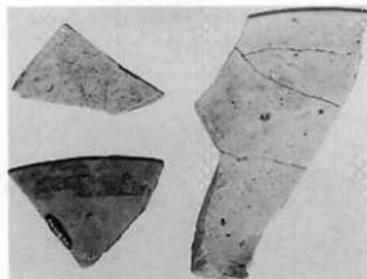
30. 条痕文系土器（胴部）



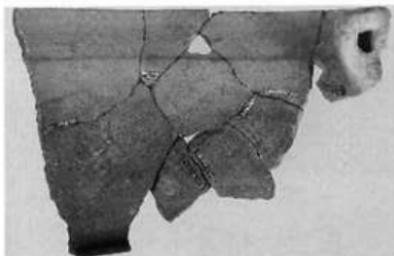
31. 鏡片



32. かわらけ



33. 播り鉢



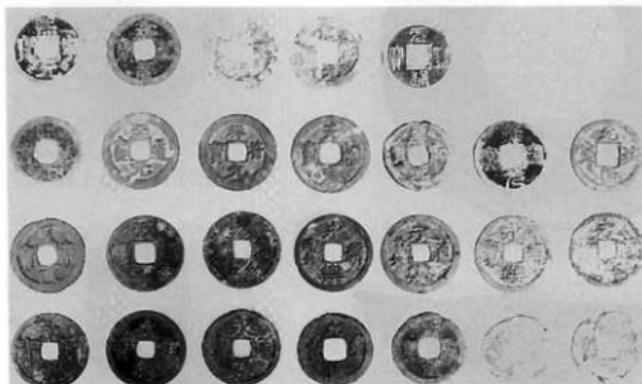
34. 内耳土器



35. 石臼



36. 金属品



37. 古銭



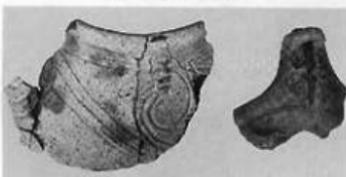
38. 蓋



41. 打製石斧・石錘



39. 縄文土器(1)



40. 縄文土器(2)



42. 石皿



43. パレス式土器(口縁部)



44. 北陸系模倣土器



45. 小型土器

長田口遺跡報告書概要

フリガナ	オサダグチイセキ	
書名	長田口遺跡	
副題	富士川西部広域農道建設に伴う発掘調査報告書	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第82集	
編著者名	浅利 司、保坂和博、松土一志	
発行者	山梨県教育委員会・山梨県農務部	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話番号	山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL. 0522-66-3881	
印刷所	(株) 峽南堂印刷所 山梨県甲府市丸の内1-10-1 Tel. 0552-35-2528	
印刷日・発行日	1993年3月19日・1993年3月31日	
遺跡概要	遺跡所在地	山梨県中巨摩郡構形町平岡字長田口
	1/25000地図名・位置	小笠原・北緯35° 36' 27" 東経138° 26' 40"
	主要な時代	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世
	主な遺構	住居址(縄文・弥生・古墳)、土坑(縄文ほか)、埋設土器(縄文) 竪穴状遺構(縄文)、集石遺構(縄文ほか)、地下式墳(中世)、溝状遺構・掘立柱建物址・柱穴列(時期不明)
	主な遺物	縄文土器・石器・土製円盤、弥生土器・土師器・石製紡錘車、古銭・金属製品(中世)
	特殊遺構	弥生時代終末～古墳時代初頭の住居址(県内最大クラスの規模)
特殊遺物	青銅器(鏡片)	
調査期間	1988年11月7日～12月23日、1989年10月23日～12月27日、1990年9月17日～12月28日、1991年9月26日～12月13日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第82集

山梨県中巨摩郡構形町

長田口遺跡

富士川西部広域農道建設に伴う発掘調査報告書

印刷日 1993年3月19日
 発行日 1993年3月31日
 編集 山梨県埋蔵文化財センター
 印刷所 (株) 峽南堂印刷所

